はじめて彼女を見かけたとき彼の胸のなかに焼きついたほほえみは、その後もずっと彼女の唇のまわりに戯れていた。彼女の目が彼の目をはじめて捉えたまなざしは、決して消え去らなかった。恋人のイメージはまだ彼の心につきまとっていて、自然のなかのどんなものからも甦った。死でさえもそのきれいな幻を消すことができなかった。なぜなら、想像のなかに存在するものだけが不滅だからである。われわれの感動が純粋になればなるほどその瞬間の印象は実際にはそれほど強くはない。衝撃は振り返ってみてはじめてやってくる。運命を左右するのは、その跳ね返りである。

ホールクロフト『回想記』注

注 ホールクロフトの『回想』は、ハズリットの手によって一八一六年ロンドンで出版された。しかしながら、ここでスタンダールによって引用された文章は、『エディンバラ評論』第四十九号（一八一五年六月）所載の、シスモンディ著『ヨーロッパ南部の文学について』に関するハズリットの文章である。その文章で、ハズリットはペトラルカとその恋人ラウラについて語り、詩人がある感情を呼びさますにはただ一度それと類似の感情にぶつかったことがあれば充分だと言っている。それにしても、スタンダールがなぜこれをホールクロフトに結びつけたのかは不明である。彼はこの同じ文章をすでに『イタリア絵画史』第百三十章の注に引用している。

序文

この走り書きは自然の産物である。[1] 毎晩、わたしは自分にとっていちばん印象深かったことを書いていた。しばしばたいへん疲れていて、やっと原稿用紙を広げる元気を出したものだ。以下の雑駁だが、描く対象に触発された文章に、わたしはほとんど何らの改変も加えていない。したがって、おそらく多くの表現が節度を欠いているかもしれない。

音楽はイタリアで今もって盛んな唯一の芸術である。画家や彫刻家は、ただ一人の人物を例外として、[2] パリやロンドンにいるのとかわりない。反対に音楽は、この国で詩や絵画、そしてついにはペルゴレージのような人々[3]やチマローザのような人々に次々と生命を与えたあの創造の火をまだいくらかもっている。この神聖な火は、中世の共和国の自由と崇高な習俗によって、その昔灯されたのだ。

読者は著者の感情の自然な展開を見られるであろう。はじめに著者は音楽を語りたいと思う。音楽は情熱の絵画である。ついで彼はイタリア人の習俗を見る。そこからその習俗を生まれさせた政体に移り、次にイタリアに及ぼした一人物[4]の影響に行く。こうなるのも今世紀の不運な星まわりである。著者は心を楽しませることしか望まなかったが、その絵は政治の暗い色あいで最後には黒くなってしまう。[5]

1　ロンドン版ではこの書き出しの文章は次のようになっている。「この著作のなかに意図的なものを探してはいけない。これは自然さだけにうながされた走り書きである」

2　ただ一人の人物とはカノーヴァのことである。スタンダールは一八一〇年頃から彼を現代でもっとも偉大な彫刻家の一人とみなしていた（書簡、日記参照）。一八一四年には、悪趣味がはびこるなかでカノーヴァは「唯一の生きた」例外だと書いている（『ハイドンに関する手紙』第二十二信）。

3　ペルゴレージやチマローザは、スタンダールがつねに称讃してやまない作曲家である。この文章と類似の発想が『絵画史』序文に見られる。「しかし、ナポリは別の芸術によってぬきでるはずであり、三世紀あとに、イタリアが依然として天才の国であることを示して、イタリアにティツィアーノやパオロ・ヴェロネーゼはいなくなっても、チマローザやペルゴレージといった人々を輩出するはずである」

4　一人物とはナポレオン。

5　スタンダールは一八一一年のイタリア旅行の思い出に一八一七年の政治的考察をまじえながらこの紀行文を書き進めていく。音楽とともに政治は彼の主要な関心事であった。

一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ

ベルリン、一八一六年十月四日

手紙を開封すると、四ヶ月の休暇の許可だ。[1]——喜びのあまりの有頂天、心のときめき。三十才にもなってわたしは何と莫迦なのだろう。でもいよいよあの美しいイタリアが見られる。しかしわたしは気を配って大臣の目から隠れよう。宦官どもは自由気儘な者にいつも腹を立てる。わたしは、帰ってきてから二ヶ月の冷遇を覚悟してさえいる。しかしこの旅行はわたしにとってほんとうに嬉しい。それに世界が三週間続くかどうか誰が知ろう。[2]

ミュンヘン、十月二十五日

心をひくもの皆無。寒さのため楽しめない。＊＊＊伯が今晩わたしをカタラーニ夫人[3]に紹介する。

一八一六年十月二十六日

カタラーニ夫人の宿舎は大使たちやあらゆる色の綬章でいっぱいだった。これほどでなくても目まいが起こるだろう。——変った事件だった。国王はほんとうに紳士だ。偶々、この出来事があの偽善的な『論争新聞』で、嘘偽りなく報じられているのを発見する。[4]

1　一八一一年八月二十五日の日記に次のようにある。「休暇を乞うてナポリやローマを見に行こうという考えが浮んだ。わたしは「ダリュ氏」に申し出、全き好意でそれを受けいれてもらった「……」。わたしは今月二十日頃わたしの申し出の念をおした。それはやはりうまくいった。われわれのコンピエーニュ滞在中であった」　当時のスタンダールは相変らず親戚のダリュ伯爵の庇護のもとに、参事院書記官と帝室調度検査官に就任していた。休暇は帰郷を名目にして申請された。

2　この最後の文章は、ボーマルシェの『セビーリャの理髪師』第三幕第五場で、フィガロがバルトロに答える言葉をもじっている。

3　アンジェリカ・カタラーニは十九世紀の代表的オペラ歌手である。彼女は一八一五年から三年間パリのテアトル・イタリアンを監督した。スタンダールはパリでおこなわれた彼女のコンサートに赴き、日記に「完璧だ」と記した（一八〇六年八月二十日の日付）。

4　一八一六年十一月十三日の『論争新聞』は、ミュンヘンでおこなわれたばかりのババリアのシャルロッテ王女とオーストリア皇帝フランツ一世の結婚式について、特派員の詳細なレポートを伝えている。それによると、カタラーニ夫人はその当日、王宮の礼拝

ミラノ、十一月四日

夕方の七時に疲労でくたくたになって到着する。わたしはスカラ座へ駈けつける。――わたしの旅は報いられた。わたしの疲れきった器官はもう楽しさを感じなかった。したがって今晩わたしが見たのは、建築の美しさが、どんなに東洋的な想像力の持主にも、想像しうるもっとも風変わりな、もっとも感動的な、もっとも豪華なものであるということと、きらびやかな幕布や登場人物もこれ以上は想像できないようなものであり、登場人物については、衣裳ばかりでなく、表情とか身振りまで、筋が展開される土地のものだということだった。

十一月五日

あの世界第一の劇場へ駈けつける。『青銅の頭像』がまだ上演されていた。[5] わたしは感嘆しどおしだった。場面はハンガリーで起こる。ハンガリーの王は、これまでガッリほど堂々として、荒々しく、高潔で、軍人らしい者はいなかった。わたしの出会ったいちばんよい役者の一人である。今までにわたしの聞いたいちばん美しいバスの声だ。それはこの広大な劇場の廊下にまで響いた。

衣裳のそろえ方ではその何という配色法。わたしはそこにパオロ・ヴェロネーゼのもっとも美しい絵を見た。民族衣裳の、白、赤、金の華やかなハンガリー騎兵の服をつけたハンガリー王のガッリの傍で、総理大臣は黒ビロードにつつまれ、自分の位を示す記章以外、華美な飾りをつけていなかった。王の後見する孤児を演じる魅力的なファーブルは、青と銀の外套を着て、その円筒形の帽子には白い羽がついている。この劇場には偉大と豪華が息づいている。そこではつねに、少くとも百人の歌手や端役が、全員、フランスでは主役たちが着るような衣裳をつけて登場する。最近のあるバレーでは、千八十五のビロードとサテンの衣裳がつくられた。出費たるや莫大である。スカラ堂に入るとさっさと公妃たちが坐るはずの席に腰をおろしたため、あとでその席を追われることになった。翌日、王妃の前で歌うことになっていた彼女は、その際王妃にこの仕打ちを訴え、自分はどこへ行っても公妃たちと席を並べて坐ることになっていると不平を言った。王妃は彼女を静めようとしたが、夫人はますます激して、ついには涙にくれて、歌えないと言い出す始末。やってきた王が彼女を帰させ、彼女にミュンヘンで歌うことを禁じた。この事件以来、夫人は何度も王宮に歌う許しを求めたが、拒絶されたのであった。スタンダールはここで実際に事件が報じられた日より二週間も早い日付をつけている。

5 『青銅の頭像』は二幕のオペラ・ブッファ。台本フェリーチェ・ロマーニ。曲はカルロ・ソリーヴァ。初演一八一六年九月三日スカラ座。

座は町のサロンである。そこ以外に社交の場はなく、一軒の開放されている家もない。あらゆる種類の用事に、「スカラ座で会いましょう」と言う。見たときから酔い心地にさせられる。わたしはこれを書きながらすっかり興奮している。

十一月十日

まったく、わたしの称讃は少しも衰えない。わたしはスカラ座を世界一の劇場と呼ぶ。それは、音楽によって最大の喜びを与えるからだ。観客席には一つの灯火もない。舞台装置からやってくる光だけで明るい。この建築の姿以上に、大きく、壮麗で、いかめしく、新奇なものを、想像することさえできない。今晩は十一の舞台装置の転換があった。わたしはわが国の劇場に対して果てしない嫌悪を抱かざるをえない。これはイタリア旅行のまったくの不都合である。

わたしは四階の敷桟席のために、一晩につき一ツェッキーノを払っているが、この席を滞在中ずっと予約した。絶対的に光が足りないにもかかわらず、平土間に入ってくる人々をとてもよく識別できる。桟敷席から桟敷席へと、平土間越しに挨拶がかわされる。わたしは七つ八つの桟敷席を訪問する。自然さにあふれた態度、楽しい快活さに出会う。[1]

われわれの魂をひたす恍惚の度合が、音楽における美の唯一のはかりである。これに対して、グィドの絵については、きわめて冷静に、わたしは「これは最高に美しい」と言える。[2]

十一月十二日

ハンガリーのある公爵――公爵が登場したが、それというのも当地では、王を登場させることを警察がおいそれとは認めないのだ。わたしは奇妙な例を挙げることになるだろう。――プレスブル

1　ブッチ本マルジナリアに次のようにある。「この国には少し陳腐なところがある」

2　『絵画史』第百三十章の注に次のように書いている。「わたしは今晩、音楽のグィドのこの傑作「ロッシーニの『タンクレーディ』」を聞きながら考えた。われわれの魂が奪われる恍惚の度合が音楽の美しさの尺度であると。しかるに、ロドヴィーコ・カッラッチの絵を見せられれば、わたしはきわめて冷静に《これはもっとも美しいものだ》と言うことができよう」

3　のちにスタンダールは『ロッシーニの生涯』で、ソリーヴァの様式の巧みさにだまされたと白状する(第二章)。しかし一八二六年版では、一七年版の判断を取消すようなことはしていない。

ク〔ブラチスラヴァ〕のある公爵は彼が後見している孤児の少女を愛している。しかし彼女は、総理大臣の庇護を受けている一人の若い士官（ボノルディ）とひそかに結婚している。この若い士官は自分の両親を知らない。彼は公爵の息子なのだ。大臣は彼を認知させたいと思っている。青年は、公爵が彼の妻と結婚しようとしているという知らせを聞くと、すぐに駐屯地を離れて、驚く大臣の前に現われた。大臣は彼を城の地下室に隠した。この地下室は、大広間を飾っている青銅の頭像の台座以外に出口がない。この頭像と、それを開けるためにしなければならない合図は、きわめて独創的な、このうえなく予想外な様々な出来事をひき起こす。とりわけ、第一幕の最後の場は、公爵がその後見している少女を祭壇へ連れていくと、はからずも地下室へ放りこまれた一人の下僕が、開けてもらおうとその円天井を叩くのだが、その大きな音ではじまる。

脱走者は、山の中に追いつめられ、捕えられて、死刑を宣告される。大臣は彼の出生を公爵に明かす。この幸福な父親が喜びの頂点に達しているとき、判決を実行する銃声が聞こえる。その忌まわしい音にはじまる四重唱と、喜劇から悲劇への調子の転換は、モツァルトの楽譜のなかにあっても、感動的なものとなるだろう。考えてもみるがいい、一青年の処女作なのだ。ウジェーヌ公によって当地に創設されたコンセルヴァトワール育ちのソリーヴァ氏は、二十五才である。彼の音楽は、これまでにわたしが聞いたもっとも力強い、もっとも熱情的な、もっとも劇的なものである。一瞬のたるみもない。天才なのだろうか。それとも単なる剽窃者なのだろうか。ミラノではモツァルトの二、三のオペラが次々と上演されたばかりであり、ソリーヴァの音楽はたえずモツァルトを思い出させる。うまくつくられたつぎはぎの作品なのか、天才の作品なのか。[3]

十一月十五日

これは天才の作品である。モツァルトの様式ではないことがはっきりしているすべての点に、熱気と劇的生彩と力強さがある。しかしソリーヴァは若い。モツァルトに対する称讃でわれを忘れて、彼はモツァルトの色彩をとり入れた。もし流行の作曲家の代名詞がチマローザだとすれば、彼は新しいチマローザのように思われた。[1]

デュガゾンが、自分のところへやってくるすべての若者は小タルマだと言っていた。彼らから大芸術家の衣を剝ぎ取り、何かしら自分のものをもっているかどうかを見るのに、六ヶ月を要したものだった。

ティントレットは、彼の作中人物の生き生きした動きから見て、最高の画家である。ソリーヴァは劇的生彩から見て卓越している。彼の作品にはほとんど歌唱がない。第一幕のボノルディの詠唱は何の値打もない。性格を表現する合唱曲や省くことのできない叙唱に彼は秀でている。どんな言葉をもってしても、第一幕の大臣と争いながらガッリが登場する場面を描くことはできない。目はこれほどの豪奢に眩惑され、耳はかくも雄々しく、かくも自然なこれらの響きに打たれて、すぐさま魂が舞台にひきつけられる。これには崇高さがある。もろもろの悲劇はこれと並べるとたいへん生気を欠く。ソリーヴァはコッレッジョのように空間の価値を知っている。彼の音楽は二秒もだれたりしない。耳が待ちうけているものを彼は簡潔に与えてくれる。彼は諸観念を圧縮して、積み重ねる。それはハイドンのもっとも生き生きした交響曲のように美しい。

十一月十七日

わたしは『青銅の頭像』が、わが国のメロドラマの一つであることを知る。[2] パリで軽蔑されてい

1 チマローザには感傷的な思い出がつきまとっている。年月がたつとともに、スタンダールはモツァルトの方を自分の魂にいっそう喜びを与えてくれる作曲家としていちばんにあげるようになる。

2 事実『青銅の頭像』ははじめ三幕のメロドラマだった（台詞オーギュスタン、作曲ラニュス、ユランのバレー付）。初演は一八〇八年十月一日パリのゲーテ座。同年パリのバルバ書店で出版。ロマーニの台本はこのメロドラマをなぞり、やはりハッピーエンドにしている。

3 スタンダールがアルフィエーリに近づいたのは、一八〇二年パリで四巻の翻訳が出たときからである。一八〇三年彼はイタリア語版を手に入れる。彼はアルフィエーリに一人の共和主義者を見いだして称讃した。一八〇四年には、彼は怒りをこめずにはチュイルリー宮（ナポレオンの官邸）を見ずにいられなかった。しかし熱はさめはじめる。それは本書でアルフィエーリに向けられる批評に見られるとおりである。★五月十一日付参照。

4 ブッチ本マルジナリアに次のようにある。「ロンバルディーアでは、自由の最悪の敵は、自称自由主義者の貴族である。彼らはもっかの精神の変革を失敗させようとし、少数独裁政治を欲している。これは英国におけるのと同じ傾向だ（ポッロ、コンファロニエーリ）。〔スタンダールはこれを抹消して、横

るこれが、ミラノでは注目の作品である。堕落を誘う君主政体がこれだ。イタリアは二院制になったあとで、はじめて文学を生み出すであろう。それまで、ここでつくり出されるのは、まがいものの文化と御用文学以外のものではない。天才は一般の俗悪さのなかで抜きんでることができる。だがアルフィエーリは盲目的に仕事をしていて、待望しうるようなほんとうの読者が少しもいない。[3] 専制政治を憎む人からは激賞され、専制政治にくみする人からはひどく嫌われ、中傷されている。イタリアの青年たちのあいだでは、無知、怠惰、逸楽があまりに甚だしいので、イタリアが二院制の水準に達するには、長い年月が必要である。[4]

陰気な話題をやめて、音楽を語ろう。これがイタリアでまだ盛んな唯一の芸術である。喜びを得るのに二つの道がある。ハイドンの様式とチマローザの様式である。この後者の様式は阿呆どもには真似できない。これは一七八〇年頃に栄光の頂点にあった。以来、性質が変わり、管絃楽が少しずつ力を伸ばして、歌唱が少なくなっている。絵画は死んで葬り去られてしまった。カノーヴァは、この美しい風土で人間の魂に宿る植物的生命力によって、偶然世に出た。しかしアルフィエーリに似て、怪物である。何ものも彼に似ていないし、何ものも彼に対抗できない。そして彫刻は、イタリアでは、コッレッジョらの芸術と同じくらい滅んでいるのだ。版画はかなりもちこたえているが、手職の域を出ない。

音楽だけがイタリアでは生きている。そしてこの美しい国では恋愛だけをしていればよい。ほかの魂の楽しみはここでは邪魔である。市民であろうとすれば、憂鬱に毒されて死ぬ。ここでは疑心が友情を滅ぼしている。その代わり、恋愛は甘美であり、ここ以外のところには、その真似ごとしかない。感じることは、真実、彼らに適っていた。

に《彼らは囚われ、そして逃走》と書いている」一八一八年七月三日、ナポレオン。ロンバルディーアにおけるナポレオンの影響をよく理解し、よく感得せしめるためには、一七九五年のこの肥沃な地方の状態を見なければならない。マリア・テレジアは最後には寛大であった。しかしこの国はまだフェリペ二世のぞっとする政治に毒されていた。力強い救いの手が必要だった。ヨーゼフ二世が一七八三年頃司祭や貴族たちのうえに降りきたった。しかし救いはまだそんなに強力でなかった。ナポレオンが到来した……。平凡なクストーディ選集のなかでピエトロ・クストーディによって書かれた、優れた人物ピエトロ・ヴェッリの生涯と、ベッカリアの生涯から、一七八〇年のロンバルディーアについてよく知ることができる」

十一月十八日

このソリーヴァ青年は天才につきもののひよわな姿をしている。天才と言いきると批判をあびるかもしれない。彼の第二作を見なければならない。もしモツァルトの模倣が増せば、またもし劇的生彩が減れば、音楽的才能の持主にはたいへんよくある出来事だが、これは一つのオペラしか心のなかにもっていなかった男だ。若い作曲家が二、三のオペラを上演し、そのあとは同じことの繰り返しだとなれば、もはや凡庸でしかない。フランスのベルトンを見よ。

三十才の美青年ガッリはおそらく『青銅の頭像』の最良の大黒柱である。彼よりもレモリーニ（大臣）の方がおしなべて好かれている。これもまた美しいバスで、バスの歌手では稀有の、とてもしなやかな、とても練れた声である。しかしこれはほとんど魂のない一個の美しい楽器でしかない。音楽が二十小節もない「ああ、幸福なる瞬間（フォルトゥナート・イスタンテ）よ」という心から発する叫びが、このオペラで彼を評判にした。自然の響きが音楽家によって把握され、聴衆によって熱狂的に迎えいれられた。

若いフランス娘ファーブルは、ここの王宮に生まれ、副王の妃に庇護されていたが、美しい声をしている。それも有名な去勢歌手（カストラート）ヴェッルーティと一緒に暮らして以来とりわけである。彼女は情熱的ないくつかの曲目で人々の心を魅了している。彼女にはもっと広くない劇場が必要だろう。なおまた、彼女は恋を恋していると言われている。わたしは彼女が「彼を胸に抱きしめて」を歌うのを見てから、もはやそれを疑わない。これは第二幕で、銃殺されたと聞いていた夫が助けられているのを知って歌われる。大臣の腹心の一人が実弾の入っていない薬包を兵士たちに配らせたのであった。今晩の上演は稀に見る感動的な状況であり、劇場全体が関心をもっていた。[1] ファーブルが放心していたり、疲れていると、これ以上に品のないものはない。後宮でのことなら、これはたいへんな才能となるだろう。彼女は二十才である。才能がなくても、たとえばフェスタ夫人のような魂

1　ラヴァーターの主著『人相学断片』をスタンダールが読んだのは、二十一才頃と思われる。

2　ネー元帥の未亡人は一八一六年十月末頃ミラノに滞在した。夫のネー元帥はモスクワ遠征など歴戦の勇士で《勇者のなかの勇者》と呼ばれた。彼はナポレオン譲位後ルイ十八世に忠誠を誓い、ナポレオンがエルバ島を脱出すると逮捕のために進軍したが、ナポレオン側に寝返ったため、ワーテルローで敗れたあと、一八一五年死刑の判決を受け銃殺された。スタンダールは別のところで、元帥未亡人はオペラの筋を知らずに劇場にやってきたが、幸いなことに彼女の来場に気づいた人がいて、彼女を早々に連れ出して、彼女にとってはあまりに恐ろしい場面を見せずにすんだ、と語っている。

のないああした歌手よりも、わたしはずっと彼女の方が好きである。

バッシは見事だ。彼に欠けているのは魂ではない。もう少し声量があったら、どんなにすばらしい喜歌劇歌手(ブッフォ)であろう。何という熱気、何というエネルギー。舞台に注ぐ何という魂。彼は四十日前から毎晩この『青銅の頭像』に出ている。彼が観客席をジロッと見るのを怖がることはない。彼はいつもハンガリーの公爵の臆病で神経質な従者である。しかし美しい声とみずみずしい魅力には、冷たい心が必要だ。これはラヴァーターの学問[1]の大原則の一つである。

わたしは今晩ドイツ人の男爵のうちにしかと観察したのだが、本能的に、阿呆どもは魂そのものこれらの人々に不快感を覚えている。これらの人々には習得した才能が必要である。彼らは霊感から生まれたものに重きを置きすぎる。昨日、この気むずかしい男爵は、彼の高貴な名前を名札に正しく書かなかったことで、レストランのボーイを叱りつけていた。

(一) ネー元帥夫人が劇場にきていた。[2]

十一月十九日

甘美な曲を演奏するときはすばらしいミラノのオーケストラも、激しい曲では活気(ブリオ)に欠けている。楽器がおずおずと譜を奏する。これほど喜びを消してしまうものはない。天に昇るかわりに、学校の生徒を思い浮かべる。このオーケストラはロッラ氏によって指揮されているが、彼は今後ヴィオラを演奏させないよう警察から頼まれていた。婦人たちにヒステリーの発作を起こさせたのだった。これは事実である。もう一人の指揮者カヴィナーティ氏のことが噂にのぼっている。彼はもっとしっかりした効果を出す。

十一月二十日

ガッリが風邪をひいた。『青銅の頭像』の前に上演されていたマイヤーのオペラ『エレナ』[1]を再演する。何て弱々しげな音楽。

第二幕の六重唱（セステット）には何という熱情。[2] あの甘美で心をゆする夜想曲風音楽、わたしがボヘミアでしばしば聞いた、憂愁を湛えたまことの音楽だ。[3] これは霊感にあふれた曲で、老マイヤーが若い頃から心に秘めていたものか、そうでなければ誰かから頂戴したものだ。この曲がオペラ全体をひきたてていた。これぞ美のために生まれた人々である。すなわち、二時間のオペラは六分続くか続かないかの甘美な瞬間によって支えられているのだが、人々は、ファーブル嬢、レモリーニ、バッシ、ボノルディらによって歌われるこの六重唱を聞くために、五マイル離れたところからやってくる。そして四十回の上演のあいだ、六分間が二時間の退屈を忍ばせる。オペラのほかの部分には何ら心にふれるものはない。まったく、何もない。それで、広間に面してカーテン付の窓を備えた、桟敷と呼ばれる二百の小サロンでは、会話がおこなわれる。一つの桟敷は八十ツェッキーニする。四年前のイタリアの幸福な時期には、二百ないし二百五十ツェッキーニした。わたしは八つから十の桟敷を訪れる。ミラノの習俗ほど心地よく、好ましく、愛する値打のあるものはない。これは英国と反対だ。普通、夫人たちはそれぞれ恋人と一緒である。楽しい冗談、激しい論争、気ちがいじみた笑い。しかし勿体ぶった様子は決してない。イタリア人たちがソステヌートと呼ぶわが国の威厳をただす様子、すなわち、これなくしては斟酌の余地のないわが国の体面維持方法は、彼らにとってきわまりない困惑となるだろう。このミラノの心地よい社交界の魅力を理解すると、もはやこの魅力を諦めることはできない。偉大な時代の何人かのフランス人はここへきて虜となり、その足枷を墓場まで引きずって行ったものだ。

1　『エレナ』は一八一四年ナポリでつくられ、一八一六年八月五日スカラ座で初演された。

2　ル・プチ本マルジナリアに次のようにある。「この六重唱を聞くバイロン卿は、世界でもっとも美しい目をしていた」

3　実際にはスタンダールはボヘミアへ行ったことがなかった。したがってそれはボヘミアではなく、ブラウンシュヴァイク近郊のコーヒー・ハウス《緑の狩人》館。そこで彼は《ボヘミアのホルン》を聞いたのであった。『リュシャン・ルーヴァン』には、「今晩、コーヒー・ハウス緑の狩人でボヘミアのホルンの演奏があって、甘やかで、素朴な少しゆっくりとした音楽が、魂を奪うようであった。何ものもこれ以上やさしく、これ以上魂を没入させ、これ以上に森の大樹の彼方に沈んでいく太陽と調和するものはなかった」（第二十三章）とある。

4　一八一一年九月九日の日記にスタンダールはすでにこう記している。「わが国の街が味気ないのと正反対に、ミラノの街は快適である」

5　この文章はレイディ・モーガンの『イタリア』（一八二一年刊）のなかに写されている。この著作はスタンダールのこの本から多くを借りているが、彼女は『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』を刺激的で魅力的と評価している。

ミラノはヨーロッパの都であり、いちばん美しい街路(一)、いちばん美しい庭園がある。[4] 四、五千の御影石の柱が立っている。ここの住民は、明敏さと善良さを二つながら備えているが、わたしはこれまでこの二つが、同時に、同程度で併存しているのを見たことがなかった。彼らが議論するとき、英国人と反対で、タキトゥスのようにてきぱきしている。意味することの半分は動作や目のなかにある。[5] 書くとなると、トスカーナ風の美文を綴ろうとして、キケロよりも多弁である。

カタラーニ夫人が当地にやってきて、[6] 四回のコンサートが予告される。これを読者は信じるだろうか。一つのことがみんなの気にさわる。切符が十フランするのだ。十万とか二十万リーヴルの年金があり、この三倍も家屋に費す人々でいっぱいの一桟敷全体が、この十フランの値段に抗議の叫びをあげるのが見られた。ここでは、芝居はただ同然だ。予約者は三十六サンチームである。それだけ払うと、冬には七時半、夏には八時半にはじまるオペラの第一幕が一時間あり、それから生真面目な大バレーが一時間、次にオペラの第二幕が四十五分、最後に普通とても楽しい喜劇的な小バレーが一時間あり、笑いで死にそうになりながら、零時半頃帰途につく。切符に四十スー支払ったり、予約の三十六サンチームで入場すると、平土間席で、背凭れのついたとてもクッションがよい立派な腰掛に坐ることになる。八、九百の席がある。一方、桟敷席をもっている人々は、そこに友人たちを迎える。ここでは、桟敷は家も同様であり、二万から二万五千フランで売られる。政府は経営者に二十万フラン与えている。経営者は五列目と六列目を自家用に所有していて、これは十万フランに相当するが、その残りが切符になるわけだ。フランス人の支配下にあったとき、経営者は賭博場をもっていて、これによってバレーや声楽を上演するための八十万フランを生み出していた。

上演時間のなかばで、婦人のお供の紳士は、[7] 通常アイスクリームを注文する。いつも何かしらの賭がおこなわれていて、つねにシャーベットが賭けられる。これが素敵にうまい。ジェラーティ、

6　カタラーニ夫人は一八一六年十一月十三日にミラノに着いた。

7　この婦人にかしずく男性は、夫や恋人以外の存在である。こうした習慣をシジスベイスムという。いつ頃どのようにして起こり、男性の具体的な立場はどんなものなのだろうか。★四月三十日付の一節を参照。

クレーペ、ペッツィ＝ドゥーリの三種類がある。これは是非とも味わってみなければならない。わたしはまだ最良の種類を決めかねて、毎晩試している。

わたしは読者にバレーについては話さない。この想像力の楽しみを説明するためには、想像力を殺す長々とした詳細が必要である。たとえばこうだ。今晩の小バレー『自然の弟子』[1]は、広大な大洋を横断して、祖国に向かって航行する船の甲板上で、夜のあいだおこなわれるスコットランド風の舞踊である。

わたしはこのバレーを、一人の今なお美しい夫人の傍で見ていた。この夫人は、数年前に彼女の恋人が病気になったとき、お供の紳士にそば近く付き添われていたが、男装し、窓から出て、やはり窓から恋人の家へ入った。彼女は彼を一晩中看病して、明け方の五時に自宅に戻った。ここの人たちの顔だちには、わが国の美しいパリジェンヌに見られないある種の表情があるのが理解される。

(一) The most comfortable streets.

十一月二十三日

ついに、こんなにも待ち焦がれたカタラーニ夫人のコンサート[2]が、コンセルヴァトワールのホールでおこなわれた。この会場を満員にすることはできなかった。およそ四百人あまりがいた。この国民には何という明敏さがあるのだろう。評価は一致している。これはバンティ、ビリントン、マルケージよりもはるかに優れていて、記憶にあるいちばん美しい声である。どんなに潑剌とした曲においてさえ、彼女はつねに岩壁の下で歌っているようである。彼女はあの銀のような響きをもっている。

1 『自然の弟子』はガエタノ・ジョイアのバレー。一八一五年十二月二十日スカラ座で初演。

2 事実カタラーニ夫人は一八一六年十一月二十三日ミラノで一回目のコンサートをおこなった。二回目以降は十二月に入って四日、八日、十二日、十五日で、そのプログラムはスタンダールが注にあげているとおり。彼はミラノのコンサートに行き、その翌日、『絵画史』の原稿の余白に「岩壁の下の声」と記した。

自然が彼女に魂を与えていたら、彼女はどんな効果を出さないでいようか。彼女はすべての詠唱を同じ風に歌ってくれた。わたしはたいそう感動的な詠唱

「わたしは涙をおさえたいのに」

で彼女に期待をかけていた。彼女はこれを

「もはやわたしの心は感じない」

の詠唱にもとづく変奏曲と同じくらい豊富な、陽気で軽快な小装飾をつけて歌った。カタラーニ夫人は十二の詠唱しか歌わない。これをもってヨーロッパを巡り歩いている。(一)——彼女の歌を一度聞く必要がある。かくも驚くべき楽器に、自然がわずかの魂を付与しなかったことに、永遠の愛惜を覚える。——彼女は「わたしは最愛の息子を失ってしまった」をミラノで歌った十八年前から、少しも進歩していなかった。——作曲家の名前はどうでもいいが、カタラーニ夫人の歌う詠唱はいつも同じだ。それはひと続きの刺繍であり、しかもその大部分は趣味が悪い。彼女はイタリアの外ではよくない作曲家にしか遭遇しなかった。

以上がわたしの周囲で言われていたことである。すべてこれらは真実だが、おそらくわれわれは、生きているあいだにこれに匹敵するものを決して聞かないだろう。彼女は半音で上昇と下降の音階を出すが、これはコンサートで見られるマルケージよりもうまい。マルケージが年をとりすぎているなどということは断じてない。彼はたいへんな金持で、まだ時々親しい友人たちの前で歌ってい

る。それはパドヴァにいる彼の競争相手パッキャロッティも同じだ。

照明をあびて、三十四、五才かもしれないカタラーニ夫人は、まだとても美しい。オペラ・ブッファでは、彼女の高貴な顔だちと崇高な声が、陽気な役柄と対照的に、驚くべき効果をつくり出すにちがいない。オペラ・セリアについては、彼女は今後も何ものみこめないだろう。

総じて、わたしは失望した。それでもわたしは、このコンサートのためには喜んで三十リュー〔約百二十キロ〕をやってきたことだろう。わたしはミラノにいたことを幸福に思っている。外へ出ると、六プース〔約十五センチ〕ほどの雪があった。M＊＊＊夫人の家へ馬を大速歩にしてやってきた。すでにこの家の常連が三、四人いたが、彼らは、十フラン節約することを望んだ彼らの友人たちに、コンサートの情報を伝えようと、やはり走るようにしてコンセルヴァトワールからやってきたのだった。とはいえ四分の三リュー〔約三キロ〕以上もある。会話は感嘆の叫びに尽きた。わたしの時計で確かめた四十五分間に、ただ一つのまとまった文句も口にされなかった。

ナポリはもはや音楽の都ではない。それはミラノだ。

㈠ 今晩われわれが聞いたのは、

「戦いを挑むらっぱの響き」ポルトガッロ作曲

「わたしは涙をおさえたいのに」 同

「もはやわたしの心は感じない」パイジェッロ作曲

ミラノでの第二のコンサート

「後生だから、涙をおさえて下さい」プッチータ作曲

「いとしの魂よ、待って下さい」クレッシェンティーニ作曲

「もはやわたしの心は感じない」パイジェッロ作曲

第三のコンサート

1 これは元ファルネーゼ家の宮殿パラッツォ・デッラ・ピロッタ内の宮廷図書館にある『聖母の戴冠』のこと。

「戦いを挑むらっぱの響き」ポルトガッロ作曲
「この苦き涙ゆえに」　＊＊＊
「おお、こころよい喜び」モツァルト作曲
第四のコンサート
「わたしは王妃」ポルトガッロ作曲
「甘美な静けさ……」
カタラーニ夫人はこの詠唱を、ガッリと彼女の弟子のコッリ嬢と一緒に歌った。
「おお、いとしき人よ」グリェルミ作曲、ガッリと一緒に。
「川のほとりで」ミッリコ作曲
「物思いにふけらないのはどんなとき」プッチータの三重唱曲をガッリ、レモリーニと一緒に。ガッリの声はこの有名な夫人の声を圧倒した。
第五のコンサート
「あのやさしい目」チマローザ作曲
「なんて爽やかなそよ風」モツァルト作曲
「草を食むのに飽きて」ミッリコ作曲
「わたしは涙をおさえたいのに」ポルトガッロ作曲
「そちらで握手をしましょう」モツァルト作曲
「甘美な静けさ」

パルマ、一八一六年十二月一日

わたしはミラノをやっとの思いで離れる。パルマには、コッレッジョの崇高なフレスコ画[1]を見るために、一時間だけ立ち寄る。図書館にあるイエスに祝福されるマドンナは、涙がこぼれるほどわたしを感動させる。

ボローニャ、十二月二日

わたしはここで三十六時間過ごして、十の壮麗なギャラリーを見、二つのコンサートを聞いた。技量は不足しているが、情感は大いにある。十八才の娘がここではフランスのいちばん偉い先生方よりも上手に歌う。そして、フランスのどんなピアニストでも、いちばん有名なイタリア人よりいろいろとよく知っている。芝居は上演されていない。わたしは学者先生たちに紹介された。何という阿呆ども。イタリアには、その深遠さと無教養によって人を驚かす粗製の天才やら、いささかの観念もない衒学者がいる。

フィレンツェ、十二月五日

わたしはホホメーロ劇場へとんで行く。こんな風にココメーロという語が発音される。たいへん誇り高いフィレンツェの言葉に、わたしは激しい衝撃を受けた。[1] はじめ、わたしはアラビア語を聞いたのかと思った。早口では話すことが不可能である。

序曲がはじまる。わたしはわが敬愛するロッシーニに再会する。三小節聞いたときに彼を見つけた。わたしは平土間に降りていって、たずねた。実際、演奏されているのは彼の作品『セビーリャの理髪師』[2]である。彼は真の天才として、パイジェッロにあれほどの栄光をもたらした題材を、思いきって再びとりあげたのだ。ロジーナの役は、フランス支配下で夫が裁判所判事だったジョルジ夫人によって立派に演じられる。ボローニャでは首席喜歌劇歌手（プリモ・ブッフォ）をしているのが騎兵隊の若い大尉だと教えられた。イタリアでは、あたりまえのことをするのに、恥じたりはしない。換言すれば、国が貴族によって毒されていないということだ。

ロッシーニの『セビーリャの理髪師』は、グィドのまずい絵というところだ。巨匠の手ぬかりが

1　一八一一年九月二十九日の日記に次のようにある。「わたしは何度となくフィレンツェ方言のcが非常に強い有音のhなのに気づく。それで、今朝わたしが行った教会はデル・カルミーネというのだが、わたしの召使はデル・ハルミーネと発音している。ハルに極端な力をこめている」

2　ロッシーニの『セビーリャの理髪師』は一八一六年二月二〇日ローマのアルジェンティーナ劇場で初演された。『セビーリャの理髪師』（原作ボーマルシェ）はそれまでも多くの作曲家によってオペラにのせられたが、とりわけ一七八二年のパイジェッロの作品は有名。パイジェッロの名声ゆえに、ロッシーニの『理髪師』は当初さんざんな悪評に浴した。

3　『タンクレーディ』は一八一三年二月六日ヴェネツィアで初演。『アルジェリアのイタリア女』は一八一三年のカーニヴァルの折、やはりヴェネツィアで初演された。

4　ジョルジ夫人はのちに（一八二三）ボローニャで出版した手記のなかで、ロッシーニを説得してロジーナの窓下で自分の国のアリアを歌わせてくれるようにたのんだのは、当のガルシア（アルマヴィーヴァ伯爵役）であると述べている。

ある。疲労や小手先の技巧は感じられない。ロッシーニは手紙のようにオペラを書く。自分の言葉を習得するのに苦労したにしても、何という天分だろう。『セビーリャの理髪師』のなかでは、ロジーナ、アルマヴィーヴァ、フィガロのあいだで歌われる三重唱以外は注目すべきものがない。筋の展開が重視される代わりに、性格や意志をあらわす言葉がひたすら重視されるべきであろう。

危険が急迫しているとき、一分がみんなを破滅させるかみんなを救うかのようなとき、十回も同じ言葉が繰り返されるのを聞くのは不愉快である。(一)音楽のこうした必然的不合理はたやすく解消される。三、四年前から、ロッシーニがつくっているいくつかのオペラには、『タンクレーディ』や『アルジェリアのイタリア女』[3]の作者にふさわしい曲が一つ二つしかない。わたしは今晩これらの輝かしい曲を一つのオペラに集めるよう提案した。わたしだったら、ソリーヴァのあのオペラ全体よりも、『セビーリャの理髪師』の三重唱をつくりたかった。どういうわけかわからないが。

(一) 曲については十の異った楽想がある。

一八一六年十二月七日

わたしは次第次第に『理髪師』に感嘆する。全然無能とも思えるある若いフランスの作曲家が、ロッシーニの図々しさに憤慨していた。パイジェッロの作品に手をつけるなんて！ 彼はわたしに無神経さを証明する逸話を話してくれた。このナポリの作曲家のいちばん有名な曲は「私はリンドーロ」というロマンスである。たしかスペイン人の歌手ガルシアだと思うが、ロッシーニに、スペインの恋する男たちが恋人の窓下で歌う曲を提供したのだ。手間を省こうとするロッシーニは、これを喜んでとりいれた。[4] これ以上月並な曲はない。それは歴史画のなかに置かれた肖像画である。

衣裳、舞台装置、歌手、すべてがフィレンツェの劇場では貧弱である。フランスの三流の町と同じである。ここでは、カーニヴァルの折にしかバレーはない。草木の生えていない山々に囲まれた狭い谷あいに位置するフィレンツェは、概して、名声を不当に得ている。[1] わたしは絵についてさえも、ボローニャの方が百倍も好きだ。それにボローニャには気骨があり精神がある。フィレンツェには美しいお仕着せと長広舌がある。

イタリア青年にいちばん珍らしい性格は、プリムローズ家の性格のようだ。「……彼らはただ一つの性格、皆ひとしく寛容で、信じやすく、純真で、無邪気な性格であった。[2]」詩人たちにこういった性格を付与するには、人身保護令（ハベアス・コルプス）が必要である。当地では、純真で無邪気な人間は、すぐにも殺されてしまうだろう。ところで、フィレンツェの劇場に入る際には、人間の頭部の美しさと気高さ、とりわけ額の美しさに打たれる。

P＊＊＊伯爵夫人が若いメルツィ公爵を指してこう言った。「あの方はあらゆるものの理想美を愛するためだけに生きていらっしゃいます。でも、形に魅せられることがあっても、精神的な完全さが美と切り離せないと考えていらっしゃいますの。」二十万リーヴルの年金がある二十二才のこの青年公爵と、わたしは三時間会話をしたが、彼は自分が公爵であることをわたしにわからせようなどとはしなかった。フランスではわたしが誇張してると言われるだろう。

ヴィテルボ、十二月九日

世界にぞっとするほど嫌な道があるとすれば、フィレンツェからシエーナを経てローマへ行く道である。旅行者たちが美しいイタリアのことを話してくれるとき、彼らはわれわれを大いに莫迦にする。フィレンツェからローマへの道は、わたしにシャンパーニュ地方を強く思い出させた。ただ、

1 フィレンツェに対するスタンダールの偏見は、彼がチヴィタヴェッキア領事となり、フィレンツェに数次に及ぶ長い滞在をするときまで続くことになる。

2 オリヴァー・ゴールドスミスの小説『ウェイクフィールドの牧師』（一七六六）第一章からの引用。

3 一八一一年にはスタンダールはコルソ通りに近いピエトラ通りの宿に泊った。ルスポリ館は、当時町でいちばん豪奢なカフェに模様変えされていて、スタンダールはそこへ頻繁に通った。

4 一八一一年九月二十八日の日記に、「ポポロ門は何ら注目すべきものなし」と書いている。ポポロ門はド・ブロスの『イタリア書簡』のなかで讃美されている。

5 「ローマのイタリア人」という表現はデュクロの『イタリア紀行』（一七九一）で用いられ、シャトーブリヤンがこれを利用したが、この表現を発明したのはスイスの宣教師ジャン＝エリー・ベルトランのようで、ラランドの『イタリア紀行』を模倣した著書（一七六九）にみられる。この表現は、ローマの住人をローマ人と呼ぶと古代ローマ人と混同するところから出ている。

6 マリオネットについては一月六日のところでも触れられている。

7 アルジェンティーナ劇場は一七三二年建築、一七九八年修復。トッレ・アルジェン

不毛の平野が荒涼たる丘陵に代わっているにすぎない。

ローマ、一八一六年十二月十日

わたしはかの有名なポポロ門からローマに入る。コルソのルスポリ館[3]に宿をとる。ああ、何てわれわれは騙されやすいのだ。これはわたしが知っているほとんどすべての大都市の城門よりも劣っている[4]。ベルリンのはるか下位だ。エトワール凱旋門を通ってのパリ入市は言わずもがなである。現代のローマでラテン語を弁じたてる機会を見つけた衒学者どもが、この都市は美しいとわれわれを説きつける。

ローマのイタリア人たち[5]のたいそう純潔な習俗を危険にさらさないために、教皇はカーニヴァルのあいだしか芝居を許可しなかった。一年の残りの日々には、マリオネットがある[6]。

十二月十二日

アルジェンティーナ劇場[7]に桟敷席を得るために、わたしは終日策をめぐらした。そのすべなし。英国人が大挙してやってきていて[8]、すべて買い占めていた。

十二月十三日

わたしは親切にあずかって桟敷の四分の一を得る。どんな風に読者にわたしの幸福を正しく伝えようか。ペルゴレージやチマローザたちによって栄光を与えられた、この有名なアルジェンティーナ劇場とヴァッレ座[9]に比較できるようなぼろ小屋は、久しい以前からもうパリにはない。縦材でできたみすぼらしい劇場を想像されたい。ヴァッレ座は、その材木が壁紙で覆われてさえいない。わ

ティーナ通りにあり、グランド・オペラを上演した。現存。

8　十九世紀前半の英国ではイタリア熱（イタロマニーという）が起こり、多くの英国人がイタリアに渡って、ローマはじめ主要都市を占拠した。スタンダールのこの本が英国でも出版されたり、英訳されたりした背景と考えることもできよう。

9　ヴァッレ座は一七二六年建築。一八二三年になってヴァラディエの設計によって改修される。旧大学の近くに現存。

が国の地方の郡役所もこれよりましだ。幕や天井といった絵が描かれているところはすべて、いい加減に粗悪で下手に描かれていて、こんな例を、わたしはドイツでさえも見たことがない。

十二月十五日

幸か不幸か、わたしはこれ以上元気なことはかつてなかったし、こんなに悲しみの種を抱いてないことはなかった。そのことを読者に誓わねばならない。さもなければ、わたしのローマに関する意地悪な判断を見て、読者はわたしをシャープやスモレットのように[1]病気だと思うだろう。

わたしは有名なシスティナ礼拝堂を出る。教皇のミサに参列したのだ。コンサルヴィ枢機卿の後方、右手のいちばんよい席だった。わたしはかの有名なシスティナの去勢歌手たちが歌うのを聞いた。いや、どんなにやかましい音もこれ以上いやらしくはなかった。これは十年このかた、わたしの聞いたもっとも癪にさわる音だ。ミサの続いた二時間のうち一時間半を、驚いたり、自分のからだを気づかったり、自分が病気ではないかどうかみたり、両隣りの人にものを尋ねたりして過ごした。不幸にして、両隣りは英国人で、彼らにとって音楽は謎である。わたしは彼らの印象をたずねた。彼らはバーニー[2]の引用でわたしに答えた。

音楽についてのわたしの考えははっきり決っていたので、わたしは天井の雄々しくも美しい絵画、そして『最後の審判』を鑑賞した。またわたしは枢機卿たちの人相を調べた。

十二月十六日

わたしは二人のフランス人の芸術家をつかまえて、システィナへ連れていってもらった。是非そうしていただきたいと彼らを説得したのだ。あのしゃがれ声の去勢雛のコンサートに関する印象は

1　スタンダールがシャープの『イタリアからの手紙』（一七六六）やスモレットの『フランス・イタリア横断旅行』（一七六六）を読んだという証拠はない。

2　チャールズ・バーニーは『フランスとイタリアにおける音楽の現状』（一七七一）の著者である。スタンダールはおそらくこの本のフランス語訳（ブラック訳、一八〇九―一〇、ジェノヴァで出版）をもっていた。

変らない。彼らはそれをなかなか認めようとせず、それなら聖週間の儀式に出てみるといいと言った。しかしわたしがその指示に従うことはあまりなさそうだ。生涯に一度でも、歌うことができ、それもきちんと歌うことができるような人々は、自分が声を限りに叫んだり、耳をつんざくような声をあげるのを許せないだろう。まったくおかしな国だ。関心をもつべきものが何もないのに、芸術のなかに党派精神をもちこむ。これをイタリアの全都市にあてはめてみよ。愛国心、しかしたいへん滑稽な愛国心の最後の遺物である。才気あふれる人々が、わが国の三流芸術家以下の者を、ただローマにいるというだけで、優れていると主張する。——どんなに強く口笛でやじってもやりすぎるということはあるまい。凡庸に対しては手加減などいらない。それは芸術に対する感受性を弱める。

十二月二十三日

ついにわたしは良識ある人々を見つけた。しかしこれは大使のなかにである。彼らはわたしとぴったり同じに考える。M＊＊＊がドイツ語でわたしに言った。「莫迦な連中はみんな旅行者たちの蜘蛛の巣からぬけ出すことができません。」彼はわたしを弁護士のN＊＊＊のところへ連れていく。ローマでこれが教育のある階級というものである。彼らの王侯たちのような愚かしいところは少しもない。わたしはとてもよい音楽を聞く。わたしは人々がきわめて博識であり、たいそう道理をわきまえていると思うが、しかしながら、愛国心が彼らの喉元をつかまんばかりだ。ここでは、丁度パリでラシーヌやヴォルテールについて称讃したり評価したりするのと同じく、音楽に関することが人々になじみ深い。片隅にひきさがって、わたしは楽しく一人のふとった男と論じていた。彼はわたしに色々なことを教えてくれたが、これは成金の洋服屋である。

十二月二十五日、クリスマス

このうえもなく美しい太陽。パリなら、九月はじめの爽やかな日というところだ。わたしはサン＝ピエトロ寺院の壮麗な儀式に参列する。音楽を除いて、すべてが堂々としている。あの尊ぶべき教皇は[1]、白絹の衣裳をつけ、ジェノヴァの人たちから贈られた輿（こし）にのって、この崇高な寺院のなかで祝福を与えているが、これはわたしの見た数々の美しい光景の一つとなる。わたしは参観者の右手、板でつくられた階段座席の下にいた。その席には二百人の婦人がいた。二人のローマ女性、五人のドイツ女性、そして百九十人の英国女性であった。教会内のそこ以外には、ひどい姿をした百人ばかりの百姓のほか誰もいない。わたしはイタリアで英国旅行をしている。これらの婦人たちの大部分は儀式の美しさにたいへん感動していたので、その心が、籠のなかに隠れて歌う神聖な去勢雞の滑稽さを感じとるのは、いくらか困難だった。システィナ礼拝堂と同じである。考えるに、彼らは式典司宰者たちのさえずりの伴奏をするにすぎないと見なされている。

十二月二十八日

ある英国婦人のところでの楽しい舞踏会。ローマでもっとも名の知られている自由主義者の一人が、わたしをそっと呼んでこう言う。「崇高な本があります。僕の考えでは、このなかには民衆と王様たちの幸福がある。チャマーズの『事典』です。[2]」ボローニャを過ぎてわたしが出会った人はすべてこんな風だ。しかしアルフィエーリ、カノーヴァといった天才も出ている。とはいえ彼らが偏見に色濃く染っていないというのではない。英国では半莫迦がしばしばよい本を書く。ここでは、フォスコロのような才人は、彼の敵に対してラテン語の諷刺文を書いて喜んでいる。[3](一)

1　ピウス七世のこと。

2　チャマーズの『事典』とは、アレキサンダー・チャマーズ編『大人名事典』全三十二巻（一八一二―一七、ロンドンで刊行）のことである。一八二六年版では「チェンバーズの『事典』」となっている。そうなると『事典』は当然『シクロペディア、別名、芸術科学事典』全二巻（一七二八）を指す。

3　フォスコロはイタリア王国が滅んだあと、英国に亡命していた。スタンダールが『僧侶ディディムスの手紙』と呼んでいるのは、一八一六年チューリッヒで出版された俗ラテン語の諷刺詩『小予言者僧侶ディディムスの一巻本ヒュペルカリプセオス』のことだが、表題の不正確な記憶にみられるとおり、彼の知識は聞きかじりである。

4　ド・ブロスの『イタリア書簡』に次のようにある。「聖イグナチオの肉体が眠る墓をかたどった祭壇は、金泥を塗ったブロンズでできている。その上のオリエント・アラバスターの壁龕（へきがん）のなか、アフリカ大理石の台上に、銀製の聖イグナチオの像が、宝石類で飾られた銀めっきの祭服を着て立っている。支柱の右方には、パロス島産の白大理石でできた群像が信仰を表現していて、それは一人の日本人を改心させている。左方では、キリスト教が邪教を打ち破っている。ずっと奥には、花模様アラバスターの二つの祭器壇、黄や緑の古代アラバスターをまじえた同じ花模

(一)『僧侶ディディムスの手紙』ルガーノ、一八一六。フォスコロはモンティに次ぐイタリアの一流詩人であり、『墳墓』や『アイアス』の作者である。モンティと同じく彼は多くを考えないが、優れた詩をつくっている。半給士官だが、英国に逃れている。

十二月三十一日

わたしはヴェネツィア宮わきのジェズイット教会に連れていかれる。極悪の権力でも、権力が大きなことをおこなったときに覚えさせるあの尊敬を、わたしは少しばかり感じる。――教会はこのうえなく破廉恥な手合でいっぱいだ。われわれはホテルにわれわれの懐中時計を届けさせる。聖イグナチオの祭壇でうっとりするド・ブロス法院長の悪趣味[4]。その彫刻の下劣さ、滑稽さは信じられないくらいで、どの点で下劣かをあえて口にできないほどだ。しかし一七四〇年頃には、フランスにしてもたいそう野蛮であったから、あれほどの才知を考えてみればすべてを許さねばなるまい。いよいよ音楽がはじまる。教会のあちこちに置かれているオルガンによるもので、それが互いに応えあう。これはたいそう快いものだが、どこでも同じように、音楽家はこの楽器の豊かさに甘えている。ドイツでは千倍もうまく聞こえた。しかしわたしはたっぷり二時間を過ごす。驚くべきことだが、わたしはほんとうに感動している二、三の英国人を見かける。ジェズイット教徒は、つつがなく一年を終えたことを神に感謝するために、この音楽を演奏している。枢機卿のなかでジェズイットにくみする者たちが、信徒に会いにやってくる。これらの諸氏に払われる軍人の栄誉礼。ローマの軍隊の美しい礼装。どんな野蛮な奴らを相手にしているかを痛感しているので、礼拝堂の一つ一つが銃の先に銃剣をつけた歩哨で守られている。そのうえ、別の歩哨が跪いている人々のなかを歩きまわっている。精神性によって人々をひきつけようとする宗教の中心地で、結構なおこないだ。しかしながら、ここでは、われわれのような不信心者のいるパリ以上に、銃剣の必要なことを知って様アラバスターでできた、ドアやバルコニーなどのある凹入部の外装、ブロンズの浅浮彫と軒持送、いぶし銀の天使像などがある。その種のものでこの世に比類のないこの見事な作品は、ジェズイットのポッツォ修道士の手になるものである」

ディジョン高等法院院長シャルル・ド・ブロスの『イタリア書簡』は、筆者の死後、『イタリアに関する真実の詳細な書簡』の名で一七九九年に刊行された(全三巻)。★この本の出版経緯については八十六ページの訳注3を参照。スタンダールは『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』で、はじめはここに見られるとおりド・ブロスの意見に批判的だが、先へ行くにつれて同感をあらわすようになる。一八三六年になって、パリのルヴァヴァスール書店がド・ブロスの自筆原稿にもとずく『イタリア書簡』を企画した際、スタンダールは編者のロマン・コロンにド・ブロスに関する原稿を送り、序文に採用してくれるよう依頼したが、不採用になった(これが『一八三六年において喜劇は不可能である』という小論である)。この新版は『百年前のイタリア、別名一七三九年及び四〇年にイタリアから数名の友人に宛てて書かれた手紙』と題されて出版された。

いただきたい。これらの兵士たちは、フランス帰りで、まだあのフランスの気品ある制服につつまれているが、人々と一緒に小さな声で聖詩を和している。多少なりの精神性がありさえすれば、ローマはまだ芸術の都でいられよう。人々のこの朗唱はすばらしい。

一八一七年一月一日

神に年のはじめを感謝するあらたな音楽。

わたしはアルジェンティーナ劇場に桟敷席をとる。それほど策を弄するには及ばなかった。ロッシーニの『タンクレーディ』が上演される。この作品は、ブレッシャないしボローニャだったら、最後までやりとおせなかっただろう。オーケストラが歌手より悪い。しかしバレーを見なければならない。ローマを魅了しているその舞踊団は、六ヶ月前に、ロンバルディーアの小さな町ヴァレーゼでは、辛抱してもらうのがせいいっぱいだった。

ここでは、各人が自分の好みにあわせて、自分の桟敷席を飾っている。パリで窓用にしている天蓋風カーテンや、絹やビロードやモスリンの布の桟敷幕がある。たいへん滑稽なものもあるが、変化があって楽しい。遠くから王冠を連想させる三、四の帳(とばり)に気づく。ローマ在住のかわいそうな王侯たち[1]の虚栄心が、それで慰められているのだ、と説明してくれる人がいる。ここではすべてが退廃であり、すべてが思い出であり、すべてが死である。活気のある生活はロンドンやパリにある。わたしがすっかり共感を覚えるような日には、ローマの方が好きになるだろう。しかしこの滞在は魂を脆弱にしそれを麻痺状態に陥れそうである。少しの努力もなく、少しのエネルギーもない。どんなものも早くは進まない。ローマ最大のニュースは、カムッチーニが絵を一枚描き終えたということである。わたしはあの『シーザーの死[2]』を見に行く。これはまずいダヴィッドというところだ。

1　当時ローマに住んでいたボナパルト家の人たちを指しているようだ。

2　カムッチーニの『シーザーの死』は一七九三年に描かれた。

3　税関で本が没収されるという出来事が実際にスタンダールにあったとは考えられない。ド・ブロスの次のような記述を思い出しているのであろう。「わたしのローマへの凱旋入城のはじめをかざった出来事をご存知ありますまい。わたしは税関で馬車から降りた。それはアントニウスの元老院跡だった。しかるにわたしは、野次馬のように、古代の溝入り柱のあの見事な柱廊を見るのに夢中になっていた[……]、いまいましい税関役人がわたしの衣類をひっかきまわし、そして馬車の座席のクッションの上に、ミッソンの第二巻を見つけた。するとすぐさま取調べのためにと没収した」(『イタリア書簡』)

どうやらわたしは北方の活発な生活や、わが国の粗末な劇場の趣味の悪さの方が好きである。実際、ローマの美しい風土への共感が味わえるような休暇のある活発な生活ほど優れたものはないだろう。

わたしにとうとう腹を立てさせたのは、わたしが行くすべての桟敷で、この恥ずべき芝居がとても美しいと思われていることだ。ローマの人は滑稽な虚栄心をもっている。彼らは今晩こう言っていた。「あの歌手はローマにふさわしい。」これはローマの名を言うための彼らの誇張した言いまわしであり、彼らは決してほかの言いまわしを用いない。わたしはこの果てしない堕落にひどく心を痛めてひきさがる。わたしはモンテスキューの一巻を探す。最後に、昨日税関でこれがもっとも禁じられている作家として没収されたことを思い出す。[3] わたしは自分の書きもの机の片隅に『ローマ人の偉大』三十二折版を見つける。数章読む。わたしをとらえている暗い気分が増大するのを喜ぶ。二時間もたつ頃にはアルフィエーリと同じくらいになっている。わたしは激しい喜びをもって『ドン・ガルツィア』を読みとおす。わたしは年に四回とこの作家を理解することがない。

一八一七年一月二日

わたしはヴァッレ座に早く着きすぎる。でも、すべての平土間席は番号がついている。はじめの方の番号でないと聞こえないのだ。わたしは警察の定めを読んで気を紛らす。政府は国民をよく知っている。したがってそれらは恐るべききまりである。他人の席をとる観客に対して、ナヴォーナ広場に恒久的に設けられている処刑台上で、松明(たいまつ)と歩哨をつけて、百たたきの刑が即座に執行される。席を割当てる劇場の番人(ラ・マースケラ)に抗(あらが)って声をあげる者に対しては、五年のガレー船送り。裁判はゆるやかな訊問形式をとりながら、厳格におこなわれる。観客に礼儀や徳義や敬意が

まったく欠如しているのを観察して、わたしはG＊＊＊妃殿下が昨日わたしに言われたことを納得した。ローマの知事のティベーリオ・パッカ[1]は自分のやることを心得ている有能な男だ、というのである。わたしは彼の警察命令を書き写させる。教会の独裁をあまりに蔑んでいるとわたしを責める人々に対して、わたしの旅行の証拠書類となるだろう。

音楽がいよいよはじまる。それはロマーニ[2]という人のもので、彼はポスターで「この偉大なローマの息子」と銘打たれている。彼は生まれ故郷相応で、彼の音楽はチマローザの剽窃曲でしかない。そのために、いささかの天分もないにもかかわらず、わたしを楽しませる。

ヴァッレ座のプリマ・ドンナはわたしがフィレンツェで見たあの同じジョルジ夫人である。ロッシーニの音楽の方が彼女にぴったりだった。彼女はここではもはやマラノッテの下手な模倣でしかない。訓練を積んだ道化役者がいて、少しも気取らないのだが笑わせる。しかしかなりの年輩である。

作品は『愛と偶然の戯れ』の翻訳である。訳者はそこに棒で叩きあう場面と村の代官をつけ加えた。後者は、押韻辞典のやり方で彼の領主に向かって演説をぶつ。われわれが音楽は精神を描くことができないと決めこんで久しくなる。音楽はゆっくりと発音しなくてはならないし、ほとんどつねに、言い返す速度によって観念のニュアンスが表明される[3]。音楽は情熱を、それも心やさしい情熱しか描かない。

モツァルトとハイドン以後、歌唱が情熱を描く一方で、オーケストラの表現はそのほかの感情のニュアンスを描いている。そのニュアンスは、どんな風にかわからないが、中心となる情熱の描写と一緒になってわれわれの魂のなかで混じりあう。マイヤー、ヴィンター、ヴァイグルは、肝腎かなめのものに達することができないので、付随的なものを濫用している。しかし今日までのところ、

1　ティベーリオ・パッカがローマの知事になるのは、一八一七年四月二十八日のことである。

2　ピエトロ・ロマーニはオペラを一つしか作っていない。それは『クィ・プロ・クォ（人まちがい）』と題され、事実マリヴォーの『愛と偶然の戯れ』と同じ主題であった。

3　一八二六年版では次のように変えている。「言い返しの速度によってほとんどいつも観念にニュアンスが付与される」また『ロッシーニの生涯』第二十章には次のような説明がある。「音楽は早く話すことが不可能である。それはもっともうつろいやすい情熱のニュアンスを描くことができる。どんな大作家のペンからも逃れてしまう様々なニュアンスを。音楽の支配は言葉の支配が終るところからはじまる」

4　ジャン＝ジャック・ルソーのオペラ『村の占者』は、一七五二年十月十八日にフォンテーヌブローの宮中で上演されて成功をおさめ、翌年三月一日にパリで公演された（『告白』第八巻参照）。『新エロイーズ』が出たのは一七六一年になってである。

5　『絵画史』第百二十五章の注にすでにこう書いている。「音楽は心やさしい絵画である。完全に無味乾燥な人は音楽の埒外にある。やさしさが音楽には固有なものなので、音楽は到るところにやさしさをもたらす。そして、この過ちのせいで、音楽が描く世界の絵

こうした発見にもかかわらず、音楽はまだ精神を描くことができない。

一八一七年一月三日

わたしは再びヴァッレ座へ行く。

完全に幸福な人々、あるいは完全に無感覚な人々は音楽を感じようとしても感じることができないだろう。一七七九年のパリのサロンが音楽に反抗的なのは、この二つの理由のためである。モツァルトはうまいことにフランスを去った。そして『新エロイーズ』がなかったらジャン＝ジャックの『占師』は口笛でやじられただろう。[4]

不幸な状態にあるときに、どうして歌を聞いて楽しめようか。この芸術は、おぼろ気に、そして自尊心を怯えさせないようにして、人間の哀れさを覚らせるからだ。それは不幸の味気ない苦悩を哀惜の苦悩に変える。涙を流させ、その慰めはそんなにうまくいかない。いとしい人の死を悼むやさしい魂の持主にとっては、毒となり、胸の病の進行をはやめることしかしない。[5]

ローマ、一月四日

わたしは二十五日間を称讃したり憤慨したりして過ごした。もし、きわまりない冒瀆として、不運にも聖職者たちのローマがこの地に建設されることがなかったとしたら、古代ローマはどんなに安住の地であったことか。アヴェンティーノ、クィリナーレ、パラティーノといったこれらのさびれた丘の中央に誇らかに残っている、コロセウム、パンテオン、アントニウスのバジリカ、そして教会をつくるために壊されたあれほど多くの記念建造物は、どうなっていただろうか。幸福なパルミラよ。[6]

図はやさしい魂の持主を喜ばせ、そのほかのものにはあれほど嫌われるのだ。

「どうして不幸な人にとって音楽はかくも甘美なのだろうか。つまり、おぼろ気に、自尊心を少しも怯えさせないようにして、音楽が控え目なあわれさを覚らせるからだ。この芸術は不幸の味気ない苦しさを愛惜の苦悩に変える。それはより片意地でない人間を描き、人に涙を流させ、不幸な人がありえないものと信じていた過去のしあわせを思い出させる。

「その慰めはそんなにうまくいかない。いとしい恋人の死を嘆く恋に夢中の乙女にとって、それは毒となり、胸の病の進行をはやめることしかしない」★この最初の段落はそのまま一八一七年七月十日付に採り入れられている。

6　パルミラは十七世紀末になって遺跡が発見された古代シリアの都市。

サン＝ピエトロを例外として、近代建築ほどつまらないものはない。彫刻はそうではない。この語は唯一の別格であるカノーヴァを思い出させる。彼は、ラファエッロの墓によってやさしい魂の持主にはたいそうなじみ深い場所であるパンテオンに、偉大な芸術家たちの胸像を設置させた。早晩、かつてはキリスト教の猛威からこの建物を守った教会という名前もとり除かれて、これは崇高な美術館となるだろう。カノーヴァが命じた胸像の大部分は平凡であるが、そのうちのただ一つが彼の作品である。その台の上にはこう書いてある。

ドメニコ・チマローザに
エルコーレ・カルディナーレ・コンサルヴィ、一八一六。

わたしはイタリアのモリエールともいうべきこの人物の顔かたちを、どんなに貪欲に眺めたことか。ふとった男だった。顔の筋肉はもりあがって皺に刻まれていて、ラヴァーターの学問に長く親しんでいない人間には大人物であることがわからない。明朗で快活な顔だちだ。感情は目のまわりに現われている。

ほとんど毎朝、パンテオンの前を通ると、わたしは馬車を止めさせる。心のさめた時間に芸術作品を見ることによって、人はそれを記憶にとどめるに至る。フランスだったら、格式ばった人たちからどんなにかこの胸像の銘が歎き悲しまれるであろう。わたしは自分が心の底でコンサルヴィ枢機卿を好ましく思っていたことにもう驚きはしない。それはヨーロッパの現役の大臣のなかでいちばん立派な人である。なぜなら唯一の清廉の士だからだ。充分お察しのとおり、この旅行記の出る国の大臣方はきっぱり除外しての話である。

1 アウゲイアースはエーリス王。彼は約三千頭の牛をもち、その小屋は三十年間も掃除したことがなかったという。ヘーラクレースは彼に家畜の十分の一を条件に一日で掃除することを申し出て、これをやってのける。「アウゲイアースの家畜小屋を掃除する」という言いまわしは、混乱した無秩序な事態に平滑と組織化をもたらすことを意味する。

2 モンテスキューもすでに同様の指摘をしている。「イタリア人はつねに新しい音楽を欲している。彼らのオペラはいつも新しい」（『グラーツからハーグへの旅』）

3 パエールの『アキレウス』は一八〇一年にパルマで初演された。一八一六年十二月にミラノのスカラ座で再演されたのは事実のようだ。

4 カプラニカ劇場はパンテオンとモンテチトーリオ宮の中間にあった。映画館として現存。

この稀有な人物は三十三人の同僚に毛嫌いされている。あらゆる計画はずたずたにされ、一切の細かいことは愚かな連中の貪るままにしておくことが強要されている。わたしがモンテスキューを没収されたのもそのためだ。彼は理工科学校を設立するという唯一の分別ある方法によってしか、アウゲイアースの家畜小屋に手をつけることはできないであろう。[1]

わたしの日記のなかにはこの偉大な大臣に関する二十以上もの逸話が書いてある。しかもすべてが彼の称讃である。彼は質素で、道理をわきまえ、親切である。そしてフランスではほとんど信じられないくらいの大きな特徴が最後にくる。彼は偽善者ではない。

一月五日

わたしはローマの小劇場を見てまわる。そういったところにしばしばよい音楽がひそんでいる。イタリアの音楽愛好者たちは腹立たしい隘路にはまりこんでいる。彼らは二年以上の日付がたった音楽に我慢できない。[2] すべての死んだ作家は彼らにとって存在していなかったも同然である。他方、彼らはとるに足りない音楽を口笛でやじるので、イタリアの劇場では新作と同じくらいの数の作品が不成功で消えていく。劇場経営者は天才不足の罰を受けている。C＊＊＊侯爵が手紙を見せてくれて、わたしはカーニヴァルのオペラがヴェネツィア以外の到るところで失敗（フィアスコ）したことを知る。トリノでは口笛でやじり倒された。ミラノでもまたパエールの『アキレウス』[3]があくびでもてなされている。パエールとマイヤーは一般に飽きられはじめている。ロッシーニとモツァルトが流行の人である。

わたしはカプラニカ劇場[4]でB＊＊＊侯爵夫人に出会う。彼女の桟敷席でほんの一瞬も退屈しないで一時間を過ごす。上流社会では女性は魅力的であり、男よりもずっと優れている。わたしはいか

なる国でも今夜のあの婦人以上に、洗練され、愛想のよい人に会ったことがなかった。彼女はわたしを明日コンサート（アッカデーミア）に招待してくれる。――何とすばらしい目をわたしはこのコンサートで見かけたことか。目については、ヨーロッパのほかのところは色褪せた絵みたいなものだ。わたしはその目を凝視して、それがあらわす魂しか感じないように、その形とか色とかを忘れられたらと思う。恋を経験した小心な人々は、人が目以外の助けがなくても、きちんと会話ができることを知っている[1]。思想のではなくて、感情のニュアンスで、目だけが表現することのできるものがある。たぶん、このことはイタリア以外では真実ではない[2]。

今晩いくつかの曲が歌われたが、それらはたいへんな喝采を博した。わたしは作曲家の名前をたずねる。ところが誰もそれを知らない。フランス的虚栄心は、作者の名前にもっと重みを置くことであろう。わたしもそれを考慮したうえで数々の判断を下したであろう。クレッシェンティーニの美しい詠唱「いとしの魂よ、待ってください[3]」が、みんなのあの美しい目に涙をあふれさせる。したがって、それはカタラーニ夫人のとは少しちがった風に歌われる。この自然の奇蹟と同時に、悲劇を即興的につくるもう一つの奇蹟であるズグリッチ氏について、大いにわたしは聞かされる。これはギリシャの作家の剽窃であり、衒学者どもを喜ばせているが、わたしを真底からげっそりさせた。ズグリッチ氏はギリシャ風のコーラスを配することが不可能な近代的主題を巧みに避けている。ジャンニよりもずっと劣る。

あのすばらしい歌手のヘイゼル夫人がウィーン会議で大成功をおさめたことを知る。わたしはコンサートで、紹介状をもらっていた三、四人の婦人に会う。主人役の婦人の親切に励まされて自己紹介をする。そこでもよそと同じで、一、政治が会話全体に浸入してきて、二、会話や新聞ほど敵対的なものはない。――ゲラルド・デ・ロッシ[4]はローマの習俗をよく描いているが、びくびくして

1　まなざしについては『恋愛論』第二十七章でとりあげられる。

2　ブッチ本のマルジナリアに次のようにある。「絵画が彫刻にずっと勝っている理由はこれだ」

3　クレッシェンティーニの作曲した「いとしの魂よ、待って下さい」はツィンガレッリのオペラ『ジュリエッタとロメオ』（一七九六）のなかにとり入れられている。

4　スタンダールはデ・ロッシの四巻の喜劇集を一八一一年に買い求めている（十月二十五日の日記参照）。それはおそらく『コリンヌ』のなかでデ・ロッシの独自の諷刺的観察精神について述べているスタール夫人の言葉を信頼してのことだろう。

5　公園の散歩道とはピンチオのことで、『アンリ・ブリュラールの生涯』の冒頭にも「フランス人によって造られた壮大なピンチオの庭園」と出てくる。ヴァラディエの設計により一八〇九年に着工された。テアトロ・ダポッロはトルディノーナ劇場あとに一七九五年に建てられた。これはフランスがローマを占領する前のことである。

いた。イタリアの喜劇作家は死後にしか出版されるべきでない。(一)

ローマでは、ヴァッレ座とアルジェンティーナ劇場の二つの主要な劇場以外に、四つの小劇場がある。フランスのいくつかの小さな町で、今も芝居小屋と呼ばれている屋内庭球場(ジュ・ド・ポーム)のどんなに煤けたものも、ローマを羨ましがることはない。フランス人支配下でローマの人たちは文明を垣間見た。この夷狄は彼らに公園の散歩道と、かなりきれいな一つの劇場(テアトロ・ダポッロ)を与えた。[5]

わたしはこれらのむさくるしい小屋の一つ(テアトロ・デル・モンド)で、イタリア風俗の現状を描いている喜劇で、とても風変りなものを発見した。トスカーナ地方のオルベテッロ沼沢地の君主が、変装して、人口三千人の彼の国第二の町を訪れる。民衆は代官の諸徳をほめたたえることに余念がない。この役人は当地いちばんの金持の男とかたらって、彼の詐欺行為を助けないものは皆罰して徒刑に送っている。善人の居酒屋の主人が、飲んだ折に変装した君主に思いきって真実を告げるが、酔いが覚めると自分の慎しみのなさに怯えて死んでしまう。この役柄は見事で、完全に自然である。これはモリエールに匹敵するよく考えぬかれた役どころである。いやみに陥るはずのときにも、面白いやりとが楽しませる。君主はとても若いが、居酒屋の主人をからかい、あまり不興にもならない。イタリアの驚くべき特色だ。君主は善良なのである。彼の支配のもとで、知らないうちに、またとないおぞましいことがおこなわれているというのに。以上が『シエーナの沼沢地における君主の一日』と題されたり劇である。

この劇場の入場料は八バヨッキ(九スー)であった。民衆のびっくりしたような注意深さは一見に値した。その後何度も行ってみたが無駄だった。そのたびに、フランスとドイツのこのうえなく感傷的な翻訳ものにぶつかった。

(一) 参照、喜劇『オペラの初日』

一月六日

わたしはローマでほんとうに才能のある人物に出会った。マリオネット劇団の主宰者である。[1] マリオネットこそ、良俗を保つために、ウルトラ派〔極右派〕が一年のうち十ヶ月間当地で出演を許している唯一の役者である。総理大臣と知事はこのまったくキリスト教的な決定の変更を最高権力者に求めているが、徒労に終っている。(一)

(一) 彼らは勝った。一八一七年四月。

一月七日

アルジェンティーナ劇場の新しい作品は『クィントゥス・ファビウス』[2]である。そこには、ローマの人間特有の虚栄心が、その滑稽さのありったけを爆発させていた。この賤しい野蛮人は、古代ローマ人について言われることを全部ぬけぬけと自分たちにあてはめている。これは丁度われわれフランス人が、チュレンヌの軍隊やサックス元帥について言われることを、拍手をもって迎えるのと同じだ。

勿論、わたしは嫌悪したりしない。十七才のときにはじめて士官の辞令をもらって以来、馬鹿な暴君どもや、上に立つ者の愚鈍から悪党になった民衆を見慣れている。それでも決意に反して、わたしは腹を立ててローマを出発する。わたしの言うことはあまりあてにならない。

『クィントゥス・ファビウス』の詩と音楽、それに男装して歌う一人のドイツ女性は熱狂的な成

1 スタンダールはここでフィアノ劇場のマリオネットについて語っている。これはカッサンドラーの名で知られるフィリッポ・テディが主宰していた。コルソ通りのルスポリ館の向い側、フィアノ館の地下にあって、スタンダールはよく見に行った。

2 『クィントゥス・ファビウス』はニッコリーニのオペラ。一八一一年ヴェネツィアで初演され、一八一四年スカラ座で再演。

3 ルトゥールヌール訳シェイクスピア著作集第九巻のマルジナリアに次のようにある。「芸術は一民族における全体的醗酵の産物である。人工的方法でこれを真似て、同じ結果が得られると思ってはいけない。ドミニック」

4 ローマを出たド・スタンダール氏はアッピア街道を下っている。カステル・ガンドルフォを過ぎると、その昔ローマと対立したラティウム最古の町アルバ（アルバノ・ラツィアーレ）である。この町のクリアーティイ三兄弟とローマのホラーティイ三兄弟の悲劇的な戦いはローペ・デ・ベーガの詩やダヴィッドの絵画を生んだ。この町を出ると、アリッチアの谷間に入り、ベルニーニの設計になるキージ宮とその庭園にたどり着く。

功をおさめる。コモやクレーマ㈠でならロ笛でやじられるだろう。

大使の＊＊＊氏は昨日わたしに、この国民がどんなに熱烈に祖国という語を讃美しているかを教えてくれた。このジャコバン的感情は、おそらくアルフィエーリやフランス人たちに由来する。われわれフランス人はイタリアの隅々から熱愛されている。民衆は憎しみによってしか愛さない。

ひどい頭痛がするまでカノーヴァ侯爵のアトリエで二日にわたって午前中を過ごしたことを、どう説明しようか。フランスでは芸術や自然における美を表現するのに、小さな水の流れといったものをできるだけうまく利用するが、ここではそれが広大な河である。岸辺に植えられた木が一列に並んでいないのはほんとうだ。――『アドニスとヴィーナスの別離』、これこそ美が崇高であることをやめずに豊かに表現されている彫刻である。

夕方、わたしは美術アカデミーに案内される。退屈に閉口する。美術が国民のなかの広く深い醗酵による麗(うるわ)しい産物であるということを、この間抜けどもはいつになったらわかるのだろうか。[3] この醗酵を包んでいる表面的なあらわれを、人工的に模倣することと、それから同一の結果を期待することが、アカデミーをつくることにほかならない。

㈠ いずれもロンバルディーアの人口六千人の町。

一月八日

とうとうわたしはローマを去る。ホラーティイとクリアーティイの墓を過ぎるとすぐに、……の魅惑的な谷間。[4] ボローニャとわがなつかしのロンバルディーア以来、わたしの見るはじめての美しい景色である。キージ宮の風変りな姿、海の眺め、崇高な景色、ギリシャ建築。

テッラチーナ、一八一七年一月九日

テッラチーナのピウス六世によって建てられた立派な宿で、[1]夜食をナポリから着いた旅行者たちと一緒にとるように言われる。七、八人のなかに三十ないし三十二才の金髪だが少し禿の美男子に気づく。わたしは彼にナポリのニュース、とりわけ音楽のニュースをたずねる。彼は明確で要領のよい概略を伝えてくれる。わたしは彼に、ナポリではまだロッシーニの『オセロ』が見られるだろうかとたずねる。彼は笑って答える。わたしは彼に、わたしの目にはロッシーニがイタリア派の希望に見えるし、天賦の才をもって生まれた唯一の人であり、彼の成功は伴奏の豊かさではなく歌唱の美しさの上に築かれていると言う。わたしはわが親愛なる男のうちに困惑の気色が現われるのを見る。旅行の道づれの人たちが笑っている。何とそれはロッシーニその人だったのである。[2]幸いなことに、しかもまったくの偶然から、わたしはこの優れた天才の怠惰については話してなかった。

彼はわたしにナポリはローマとちがった別な音楽を、そしてローマはミラノとちがった別の音楽を欲していると言う。彼らの報酬は何と少ないことか。たえずイタリアの端から端まで走りまわらねばならない。そしてどんなに美しいオペラも彼らに千フランともたらさない。彼の『オセロ』はなかばしか成功しなかったし、彼は『シンデレラ』を上演しにローマへ、そこからミラノへ行って、スカラ座で『泥棒かささぎ』を上演するのだとわたしに言う。

このかわいそうな天才はわたしの興味をひく。彼がそんなに楽しそうでなく、あまり幸福でないからではない。彼に二千エキュの年金を与えて、霊感の湧く時間を待って書くことができるようにしてやる一人の君主が、この不幸な国にいないのは何と憐れなことだろう。二週間で一つのオペラをつくるといってどうして彼を非難したりできよう。彼は宿のひどいテーブルの上で、台所の騒音を聞きながら、古いポマードの瓶に入れて彼のところへもってこられた汚いインクで書いている。

1　この建物は税関事務所と宿駅を擁する巨大なものだった。第二次大戦で破壊された。

2　スタンダールが一八一六年から一七年にかけての実際の旅行でロッシーニと出会ったというのは信じがたい。確かにナポリで『オセロ』を上演したロッシーニは、一月二十五日からの『シンデレラ』上演のためにこの頃ローマに向っていたかもしれない。しかしスタンダールがローマを立ってナポリへ向うのは一月二十六日である。

3　『秘密結婚』は、これまで何度も名の出てきたチマローザのオペラ・ブッファ。台本はベルターティ。一七九二年二月七日ウィーンで初演された。スタンダールは『アンリ・ブリュラール』第四十六章で、それをはじめて聞いたときの「忘れることのできない感動」を思い出している。

4　引用はフォルスタッフの言葉を見事に換骨奪胎している。原文には次のようにある。「イングランドにはつるされずに済んでいる善人は三人しかいない。そしてその一人は太っちょで年老いている」〔傍点訳者〕

5　ピエトロ・カルロ・グリェルミの『いなかの結婚式』は一八一一年ナポリで初演された。

これが、いちばん才知があるとわたしの思っているイタリア人なのだ。しかも明らかに、彼はそんなことを思ってもみない。というのは、この国ではまだ衒学者どもの支配が続いているからだ。わたしは彼に『アルジェリアのイタリア女』に対するわたしの熱中を告げた。彼に『イタリア女』と『タンクレーディ』のうちどっちが好きかをたずねる。彼はわたしに『秘密結婚』[3]だと答える。味のある答だ。というのは『秘密結婚』は、パリでマルモンテルの悲劇が忘れられているのと同じくらいに、当地では忘れ去られているからだ。彼の三十ものオペラを上演している諸劇団からなぜ上演料を徴収しないのか。彼は現在の混乱のさなかではそれを申し出ることすら不可能だと説明する。

われわれは真夜中すぎまでお茶を飲む。わたしのイタリア滞在中のいちばん楽しい宵である。幸福な人のもつあの陽気さがあった。わたしはついにこの偉大な作曲家と憂愁の気持で別れる。カノーヴァと彼、この二人だけが、為政者たちのおかげで、今日天才の国が所有しているすべてである。わたしは物寂しい喜びを味わいながら、フォルスタッフの嘆息を繰り返す。

イングランドには偉人は三人しかいない。そしてその一人は貧しく年老いている。

『ヘンリー四世』第一部第二幕四場[4]

カプア、一八一七年一月十日

わたしは芝居があるかどうかたずねる。肯定の答えだったので、足をとめる。そうしてよかった。冷静なグリェルミ（大作曲家の息子）の才気にあふれた音楽『いなかの結婚式』[5]が、三、四人の哀れな連中によって、熱心に、かつまとまりよく演じられ、歌われた。彼らは一回の上演で三十フラン稼ぐ。

プリマ・ドンナは大柄な、人目をひく褐色の髪をした、気のおけない美女で、天分豊かに演技し歌う。わたしはローマの人間の賤しさに対する怒りをすっかり忘れる。フィレンツェと『セビーリャの理髪師』以来、わたしを楽しませた久しぶりの音楽である。ある殿様が臣下の娘（ここではこう呼ぶのが適切である）の一人に恋している。娘の方は、ナポリ語を話す平民の男と結婚しようとしている。殿様は自分の恋心を説明しにやってくるたびに、何かしら妨害が突発して、身を隠さなければならない。かわいそうな農夫の嫉妬は、愛情にあふれ、深刻であり、悲壮であるが、見る者をひきつける。すべての方言は自然で、書き言葉よりもずっと心にせまる。わたしはふた言と書き言葉を聞かない。二時間の激しい喜びに、わたしは、＊＊＊[1]の極端な讃美者である隣りの席の男と話しはじめる。

オペラは真夜中に終る。わたしは一時に出発する。オーストリア人たちは四分の一リュー〔約一キロ〕ごとに警備隊詰所を設けていて、泥棒たちをいきりたたせている。泥棒たちは飢えて死ぬ。

ナポリ、一月十一日

堂々たる城門。町が建設されているなだらかな岩山を貫通する広い道を通って、海の方へ一時間下る。――堅固な市壁。――最初の大建築物は孤児院[2]である。これはローマでポポロ門と呼ばれてたいそう自慢されているあのボンボン入れよりも、ずっと印象的である。

パラッツォ・デリ・ストゥディ[3]にぶつかる。左に曲ればトレド街[4]である。これこそわたしの旅の大きな目的の一つで、これは世界一の繁華街である。わたしは五時間もあちこちと宿屋を歩きまわる。ここには七、八百人の英国人がいるにちがいない。わたしはついに八階に巣を定める。しかしサン＝カルロ劇場の正面であり、ヴェスヴィオ火山と海が見える。

1　ナポレオン。

2　孤児院はカルロ八世の発案で一七五一年に建設された。ローマからナポリに到着すると右手に見える大建造物がこれである。

3　パラッツォ・デリ・ストゥーディは十六世紀に建てられ騎兵の兵営に使われたが、一六一六年から一七八〇年まで大学だった。その後王立博物館、図書館、美術アカデミーが集められた。現在は国立博物館。旧ファルネーゼ家所蔵の美術品、ポンペイやヘルクラネウムの出土品で有名。

4　トレド街は現在のローマ通り。サン＝カルロ劇場のあるトレント・エ・トリエステ広場からサン＝テルモ山の下を北へ延びる繁華街。

5　フィオレンティーニ劇場はナポリ最古の劇場。フィレンツェのサン＝ジョヴァンニ教会と似ていることからこの名がついた。

6　ロンドン版では「ルーヴォワ街の劇場」とある。パリのルーヴォワ劇場は一七九一年に建てられた。

7　ピエトロ・カルロ・グリェルミのオペラ『ポールとヴィルジニー』は一八一七年一月十七日フィオレンティーニ劇場で初演された。

サン＝カルロ劇場は開いていない。わたしはフィオレンティーニ劇場[5]へ駈けつける。これは細長い馬蹄形をした小劇場で、ルーヴォワ[6]にほぼ似ていて、音楽を聞くのに最適である。ローマと同様ここでも切符は番号入りだ。良い席は全部ふさがっている。グリェルミの流行の作品『ポールとヴィルジニー[7]』が上演されている。わたしは二倍払って、第二列目の切符を得る。華やかな客席。すべての桟敷席は満員で、それもたいへん着飾った女性たちであふれている。ここではミラノのとはちがうが、大シャンデリアがある。

序曲はきわめて凝っていて、三、四十の主題がぶつかりあい、理解したり感動する暇を与えない。無味乾燥で退屈な、むずかしい作品である。幕があがるときには、すでに音楽にうんざりしている。

ポールとヴィルジニーが出てくる。カブラン嬢とカノニチ嬢である。愛嬌たっぷりの後者がポールを演じている。恋人たちはフランスのオペラにでも迷いこんだようだ。二重唱（デュエット）は気取った優美さにあふれている。善人のドミンゴが登場する。これはナポリのブリュネともいうべき有名なカザッチャが演じていて、庶民の隠語を話す。大男で、そのためいくつかのかなり面白い所作をすることになる。坐って、くつろぐために足を組もうとすると、不可能なのである。一生懸命やろうとすると、隣の男のうえにころがってしまい、二人とも転倒する。俗にカザッチェッロと呼ばれているこの俳優は、観客から熱愛されている。彼はカプチン僧のような鼻声をだす。この劇では、みんなが鼻で歌う。頻繁にやられるように思え、最後にうんざりした。しかしわたしにはどうこう言う資格はない。カザッチェッロのドミンゴはポールとヴィルジニーを住居に連れていく。ヴィルジニーには父親がいる。これが驚くほど背の低いペッレグリーニである。ナポリのマルタンといったところだ。彼にはフランスの俳優がもっているあのしなやかな声とよそよそしさがある。フェスタ夫人とまったく同じ歌い方だ。情熱を必要としないような詠唱で、彼はいつもわたしをたいへん楽しませ

てくれた。巨大な鼻と黒い口ひげをもったイタリアらしい美男子である。浮気な男だということだが、わたしの知っているのは、ひどく愛想がよいということだけだ。

船長役は美青年でとても無愛想なテノール歌手である。ヴェネツィア出身で、そこでは郡長だか助役であった。カブラン嬢はかなり美しい声をしている。しかし彼女はカノニチやペッレグリーニよりももっと冷ややかだ。カブラン嬢はミラノのファーブル嬢よりもずっと劣る。ファーブル嬢はその疲れきった姿が時として感情をあらわしているように見える。――全体は、上流社会の俗人には満足すべきものである。不愉快な点は少しもないが、情熱的な人間の描写を愛するものにはつまらない。

フィオレンティーニ劇場は新しくてきれいだ。舞台前面の間口はあまりに狭すぎる。装飾は音楽と同じでみっともない。もっとも音楽は大成功で、観客はたいそう静粛にしていた。二、三度シーッという合図が繰り返されて、人気のある曲らしいということがわかった。感動をねらう冷たい男のつねに同じ色彩の憐むべき音楽。これほど気のぬけたものはないのだが、莫迦どもはオペラ・セミ＝セリアを愛好する。彼らは不幸を理解するが、コミックを理解しない。カプアのと同じく、ナポリの笑劇のなかにも人間の心の真実を描いたものが沢山ある。[1] 観客はグリェルミをたいそう称讃して、心からのブラボーが湧き起こる。そうだからといって、この音楽が天与のものを気取ろうとする精神であることにかわりない。これは時代色である。どうしてグリェルミ氏はパリに行かないのか。声をそろえて偉人として迎えいれられるだろうに。彼は甦ったグレトリであり、しかも方法はもっと卑小ではない。彼の音楽もまた少しかつら〔時代おくれ〕である。この楽屋用語を許されたい。これはたいそうぴったりしている。時としてグリェルミは、ロッシーニから十ないし十二小節を無造作にとって、新風を吹きこんでいる。(一) 彼は、グィドから生命を得ているナトワールある

1 フィオレンティーニ劇場に関するこのくだりの大要は一八一七年一月二十八日の日記に見られる。

2 ピエトロ・カルロ・グリェルミは一八一七年二月二十八日に死んだ。

3 サン＝カルロ劇場は一七三七年に開場したが、一八一六年二月十三日火災で消失した。しかし建築家ニコリーニによってすみやかに再建され、一八一七年一月十二日に再開場した。スタンダールはこの日ローマにいて、こけら落しに出席できなかった。

いはド・トロワといったところだ。

(一) 一八一七年三月にグリェルミは死んだとのことだ。[2]

一八一七年一月十二日

ついにその日がやってきた。サン＝カルロ劇場開場の日である。[3] 熱狂して押しかける観客。目も眩むような客席。こずいたりこずかれたり。押しあいへしあいしなければならない。わたしは腹を立てないことを心に決めて、それをまもり通した。わたしの燕尾服の二つの裾はちぎれてしまった。平土間席は三十二カルリーニ（十四フラン）した。そして四階の桟敷の十番目の席で五ツェッキーニである。

はじめ、東洋の皇帝の宮殿にでもやってきたように思われた。目は眩み、魂は魅了された。これ以上にさわやかなものはなく、それでいてこれ以上に荘重なものはない。たやすくは結びつかないものが二つながら存在する。わたしには批評する力がない。このサン＝カルロ劇場の初日は、わたしの旅行の大きな目的の一つである。わたしにとってめずらしいことだが、期待を下まわらなかった。しかしこれはいくぶん気力のせいである。わたしは疲れきっている。観客を混乱させたあの滑稽な騒ぎについては、明日記すことにする。

一月十三日

同じく敬虔で楽しい気分を抱いて入場する。ヨーロッパには、似たものと言わないまでも、多少ともこれを想像させうるものはない。わたしはあちこちの桟敷席に、わたしが紹介してもらえるは

ずの婦人たちを認める。わたしは自分の感動の方を大切にしたいので、平土間にとどまる。この劇場は、三百日かかって再建され、クーデタの働きをした。これが最良の律法以上に民衆を国王に結びつけた。ナポリ中が愛国心に酔っている。何かあらを探し出せば、まちがいなく石を投げつけられて放り出されるであろう。フェルディナンド王について話せばすぐに、「彼はサン＝カルロ劇場を再建した」と言う。それくらいに国民から愛されるということはたやすいことなのだ。人間の心には崇拝したくてたまらない一本の琴線がある。わたし自身、目のあたりにしたあちこちの共和国の賤しさや猫っかぶり的貧しさを考えると、自分がまったくの王党派だと思う。

一月二十日

再びサン＝カルロ劇場へ。わたしは劇場にたいそう満足しているので、音楽やバレーに魅了された。客席は金と銀で、桟敷席は濃い空色である。桟敷席の胸壁になっている仕切りは、装飾が浮き出ていて、壮麗である。それは金の松明が組合わされていて、そこに大きなゆりの花が配されている。ところどころでこの非常に見事な装飾が銀の浅浮き彫りで区切られている。数えたが、三十六あったように思う。

桟敷席にはカーテンがなく、それにとても広い。どの席も前列に五、六人の人が見える。燦然ときらめく華麗なシャンデリアが、これらの金と銀の装飾を四方から輝かせている。それらが浮き出ていなかったら生じない効果である。中央入口の上にある国王の大桟敷席くらい壮麗ですばらしいものはない。それは実物大の二本の金の棕櫚に支えられている。幕は白っぽい赤の薄い金属片でできている。時代おくれの装飾である王冠があまり滑稽ではない。一方、大桟敷席の華麗さと対照的に、舞台のすぐわきの三階にあるひっそりした小桟敷席ほど、さわやかで優雅なものはない。

1 バルベリーニ宮殿二階の大サロンの天井は、ピエトロ・ベッレッティーニ・ダ・コルトーナによるフレスコ画が描かれている。

2 有名な歴史画家グロは、一八一一年ナポレオンに、パリのパンテオンの円天井にフレスコ画を描くよう命じられ、そこに『サント＝ジュヌヴィエーヴの礼讃』を描いたが、完成したのは一八二五年である。

3 十九世紀にはまだイタリアの若干の地方で、時間を日暮れ時、つまりアンジェラスの時から数えることがおこなわれていた。したがって時間は季節によってたえず変わらざるをえなかった。

青いサテン、金の装飾、そして鏡が、イタリアのどこにも見たことのない趣向で配されている。場内の隅々までとどいているきらめく光は、どんな細部も見せてくれる。

天井画は完全にフランス派の流儀で、布張りの上に描かれていて、現存する最大の絵画の一つである。幕布についても同じだ。これらの絵ほど冷いものはない。そこにあるのは、わが国の石灰色を帯びた配色、潤いのない輪郭、古代をまねた生硬な図柄、浅浮き彫り風の構成、明暗の欠如、不調和な色彩である。一言で言えば、あらゆる魅力をとり除いた魅力的芸術だ。

その代わり、潤いのなさのおかげで、目がたやすくこれらの巨大な機械を理解できるようになっている。おもわず、わたしはローマのバルベリーニ宮殿の天井画を考える。これほど大きく、これほど照明がよく、そしてこれほど頻繁に人目にふれる画面を、ピエトロ・ダ・コルトーナ的人物なら、さぞかしうまく用いたことであろう。[1] ああ、もはや絵画はない。おそらくパリのグロ氏なら、こんな好機をものにすることができただろう。[2] 太陽の自然の光がないことは幻想芸術にとって無限の利益である。

舞台前面の柱のあいだの拱架に巨大な浅浮き彫りがあり、その中央では、時の神が回転文字板の上で時間を指し示している。フランス的なものに対する政府の熱中がこもっていて、奇妙なものだ。この時計はフランス式に時を告げる町で唯一のものである。[3] イタリア的愛国心がどう言うだろうか。

一月二十三日

十二日夕方の婦人たちの恐怖を書き忘れていた。カンタータの五、六場頃、みんなは劇場が少しずつ黒い煙でいっぱいになっていくのに気づきはじめた。その煙はふえ続けていった。九時頃、われわれの桟敷席の隣りの桟敷席のC＊＊＊公爵夫人にたまたま目をやると、夫人がまっ青になって

いるのに気づいた。彼女はわたしの方に身をかがめて、ひどく怯えた口調で言った。ああ、聖母様。劇場が火事です。はじめに目的を果たせなかった同じ者どもが、やりなおしをはかったのですわ。わたしたちはどうなるのでしょう。」彼女はとても美しかった。とりわけ目は崇高な美しさだった。「奥様、一両日来の友人よりも親しい方がいらっしゃらないなら、わたしの腕をおかししましょう。」わたしにはすぐにシュヴァルツェンベルクの火事[1]が浮んだ。今思うと、わたしは彼女に話しかけながら、深刻に考えはじめていた。といっても実際、自分よりも彼女のためだった。わたしたちは四階にいた。階段はきわめて険しい。みんながそこへ突進することになるだろう。わたしは同行の英国人旅行者たち[2]の方をふりかえった。彼らが木偶のような顔をして煙を眺めているのを見出した。逃げだす算段に夢中になっていたわたしは、二、三秒後にやっとこの煙のにおいを嗅ぎだした。わたしは美しい隣人に言った。「これは靄です。煙ではありませんよ。これだけの人混みのせいで、その熱気からひどく湿っていた劇場内が乾燥したわけです。」みんなの頭に浮んだこの考えも、ひどい恐怖をとり除くことはできず、人の噂というものがなく、宮中の臨席がなければ、桟敷席はたちまち空になってしまったことだろう。真夜中頃、わたしは何軒かの家を訪問した。婦人たちは疲労していて、目には隈ができ、苛立っていた。楽しむことなど及びもつかなかった。――わが親愛なる英国人諸氏は、面白く感じる代わりに、こう言った。「この大きな記念建造物は何なのでしょうか。不幸が恒久的になったということでしょうか。」――いや、これは仕事が恒久的にできたということなのだ。それに、民衆は仕事がないという理由以外では、まず不幸と思わない。

二月六日

1　一八一〇年七月一日、オーストリアの駐仏大使シュヴァルツェンベルクはパリの官邸で夜会を催したが、その最中に出火して多くの負傷者を出した。スタンダールは居あわせたわけではない。

2　これらの「道づれの英国人たち」はこれからもたびたび顔を出す。スタンダールは彼らと一緒に旅行してると設定した様子だがふん切りが悪い。

3　サン＝カルロ劇場のこけら落しに、ランプレーディは寓意的なメロドラマ『パルテノペーの夢』を作った。音楽はマイヤー。パルテノペーはギリシャ神話のセイレーンの一人で、ナポリ建国に関係する。

4　バレッティは一七六三年から六五年まで発行された『フルスタ・レッテラリア』の主宰者。そこで彼は当時の文学的偏見を、理性の名のもとに激しく攻撃した。

5　『ポリグラーフォ』の名で、一八一一年から一三年までミラノでランプレーディが出した新聞は、フランスびいきだった。

わたしはサン＝カルロ劇場に飽きない。建築を楽しむということは滅多にないことだ。音楽の楽しみは、ここでは求めてはいけない。というのも、観客は聞いていないのだ、全然。ナポリの市民に言わせれば、これは別で、自分たちはよく聞いていると主張する。

わたしは桟敷席をまわって歩く。婦人たちはあまりにジロジロ見られると不平を言っていた。わたしはこの前代未聞の非難を何度も聞かされる。まったくほんとうのことだったのだ。彼女らはたえず体裁をとり繕うことを余儀なくさせられる。そのわずらわしさが、宮中の臨席によって四倍にも増大する。R＊＊＊夫人はカーテン付桟敷を心からなつかしがっている。装飾の効果はシャンデリアがすっかり壊している。もっとも、壊すのに大した苦労はいらない。もともとそれらはきわめて悪趣味なものだから。なかんずく、いっさいの夢想を不可能にする欠陥といったものがある。装飾はみな八から十プース〔約二十センチから二十五センチ〕ほどで短かすぎ、柱脚のあいだ、ないしは木部の根元で、たえず足がごそごそと動くのが見えてしまうのだ。そんなことで気が散ることの滑稽さは想像がつくまい。動くのが見えるこれらの足に想像力が集中して、それが誰のか見抜こうと思いたくなる。

初日のカンタータは十六世紀の阿諛追従の類である。詞と音楽、すべてが退屈でたまらない。フランスでは、どんなにうわべだけのお世辞でも、ボードヴィルの天真爛漫な様子をつけ加える。わたしはランプレーディ[3]などこうした考えを理解できるだけの才知があると思っていた。(一) この分野での天才はメタスタージョだ。彼はわたしの知るいちばん大きな困難を打破した。わたしは出版物閲覧所へ行く。『論争新聞』があまりに自由主義的だと押さえられていた。

(一) これは、バレッティ[4]以後唯一の優れた文学新聞『ポリグラーフォ[5]』（ミラノ、一八一一）の創設者であ

る。文学の名のもとに、ほかの者たちは、古文書学ならびに美文学のアカデミーの控え室も通らないような、下手な作文を出版している。ミラノの『ビブリオテカ・イタリアーナ』[1]を見よ。

一八一七年二月八日

公営の事業で一度に二つの対象に注意が向けられると考えたなんて、この年になってお人好しにもほどがある。劇場が立派であれば、音楽は悪いにちがいないのだ。音楽が楽しければ、劇場は目もあてられないだろう。

これくらい当を得ていることはない。この劇場を再建した功績は絶対にバルバーヤ氏[2]にある。カフェのボーイから身を起こし、賭博を開帳して何百万か儲けた。彼は自分の銀行の将来の利益を見越して劇場を建てたのだ。年とった国王はカタラーニ夫人を所望した。よい霊感である。ガッリ、クリヴェッリ、タッキナルディをさらに加える必要があった。だが、バルバーヤ氏はコルブラン嬢を庇護している。誰がノッツァーリのうしろだてをしているのだろう。パリではパオリーノの役がとてもよかったが、十七年前のことだ。息子の方のダヴィデがいちばんよい。この巨大な容れものなかで、声量はないが艶のある声を発するために、このかわいそうな青年が払う努力には胸が痛む。彼は裏声で出すいくつかの顫音（トリル）をノッツァーリから学んで身につけた。彼は小劇場で歌い、よい作曲家につく必要が大いにある。タッキナルディにつぐイタリア最良のテノール歌手だ。

オーケストラはわたしをたいへん楽しませる。堅実に演奏していた。入ってくる楽器が端的に音符を奏しはじめる。それはオデオン座のオーケストラほど手堅く、ウィーンのオーケストラよりも軽快である。そのため、オーケストラのピアノが真価を発揮していた。

舞台装置と衣裳の貧弱さがサン＝カルロをスカラ座以下にしているが、ナポリはオーケストラの

1　『ビブリオテカ・イタリアーナ』はオーストリア政府の援助を受けて、ジュゼッペ・アチェルビがはじめた。フランスの影響や自由主義と戦う目的があった。ミラノにおけるロマン主義論争の口火となった。

2　バルバーヤはカフェのボーイから身をおこし、スカラ座内に賭博場を開き巨富を得るとスカラ座の経営をひきうけ、ついでサン＝カルロ劇場にも手をのばした。この立志伝中の人物には様々な伝説がつきまとっているが、イタリアのオペラ界に貢献するところは大きかった。スタンダールは『ロッシーニの生涯』で彼について叙述している。

華やかさで勝っている。今晩はベッリッシモ・テアトロ、すなわち満員御礼であった。C＊＊＊公爵夫人はわたしにこう指摘して言う。どこを見まわしてもぴかぴか光っているこんな劇場では、女たちはネズミ色の着物を着て鉛色がかった頬をしているように見えてしまう、と。劇場にはぴかぴか光る色ではなく、灰色の色調を使わねばならない。

イタリア人は芝居の第一夜（プリメ・セレ）に変った情熱を抱いている。一年中どんなに倹約している人でも、幕あきの日には一つの桟敷席のためにたっぷり四十ルイもはりこむ。今晩、公爵夫人のところには、ヴェネツィアからきて、明日にはまた出立する愛好家たちがいた。つまらないことにはケチなこれらの人々は、大きなことでは気前がよい。フランスとは反対である。フランスでは情熱より虚栄心が先に立つ。

二月九日

わたしは若い女公爵とシュヴァリエ・ギージの絵を見に行った。このことはたいそう面白い小説のシチュエーションになるが、あまりに微妙すぎて、わが国の習俗のなかでは扱えない。女公爵の母親コンテッシーナ・カロリーナとシュヴァリエ・P＊＊＊の愛情を邪魔できなくて焦立ったノルヴィ公は、二人のことを彼女の夫に暴く。善良な夫はそれを少しも信じない。そこでさらに、母親の愛している十五才と十六才の二人の魅力的で無邪気な娘たちにも暴露する。かわいそうな娘たちは尼になることを計画する。彼女らは母親と一緒にいても気まずくなり、母親に話しかけようともしなくなる。とうとう上の娘が涙にくれながら、母親の足元にくずおれて、ノルヴィ公の告げ口一切と、修道院へ行こうという彼女たちの決心をつつみ隠さずに話す。――恋人を熱愛しながらも、名誉心をもっているこの母親の立場。彼女は否定するだけの才覚がある。

イタリアの金持たちはみんなどこの町へ行っても知りあいである。このことがなければ、わたしは三十もの逸話を語り、習俗に関する一般的見解を削るであろう。このジャンルでは、漠然としているものはすべてまやかしなのだ。自分の国の習俗しか知らない読者は、礼儀、美徳、偽善といった言葉を聞いても、こちらが指し示そうとしたものとは事実上別のものを受けとってしまう。

たとえば、ボローニャでは、わたしはN＊＊＊夫人の家でギータ[1]という若妻に会った。彼女の生涯は、どんなにか面白く、どんなにか品格の高い小説の材料となることだろう。しかしそれには少しも改変されないことが必要だ。この話はわたしの日記のなかで十一ページも占めている。現代ヨーロッパ風俗とイタリア的感受性の何て生き生きした絵画。どんなにそれはつくりものの小説に勝っていることか。出来事の何と予想外で何と自然なことか。性格喜劇の欠点は、主人公が遭遇するどんな事件も予想されるということである。ギータがそれほど愛した、そして今なお愛している主人公は陳腐な男なのだ。嫉妬する夫も同類。母親は、残忍。若妻だけが一人ヒロイックなのだ。とにかく、パリとかロンドンのあらゆる感じやすい女たちをまとめて摺りつぶしてもこんな性格を引きだすことはむりだろう。

イタリアの感じ方は、北方の住人には納得がいかない。わたしは、十五分間それについて夢想したあとも、どんな特徴によれば、どんな言葉によれば、それを彼らに理解させることができるのか見当がつかない。――もっともぬきんでた人々の良識ある努力が、理解できないということを悟ることなのだ。それは所詮、虎が、血を飲むことに見出すこのうえない歓びを、鹿にわからせようとする、といったばかばかしさに帰着する。

わたしはたった今書いたばかりのことが滑稽だと自分で感じている。これは決して伝えてはいけないあの内輪の主義に属する。

1　ギータという名で、スタンダールがフランチェスカ・レーキを思い出していることはまちがいない。彼女はブレッシャのファウスティノ・レーキの娘、ジュゼッペ、テオドーロ、ジャコモの妹あるいは姉。ジャコモは、一八一一年にスタンダールがミラノへ赴いた時の旅の道づれ。スタンダールはその折彼から彼女の死を知らされた。フランチェスカの情事は、ミュラとの派手な関係にはじまり数多く、最後に弁護士フランチェスコ・ギラルディと結婚。スタンダールは彼女をつねにゲラルディ夫人と呼び、『恋愛論』のなかの結晶作用の逸話にも登場させる。

2　バレー『シンデレラ』のほんとうのタイトルは『報われた美徳』。デュポール作、ガレンベルグ音楽。デュポールが王を、デュポール夫人がシンデレラを演じた。

3　『ジョコンド』とはヴェストリス三世の作った『アストルフォとジョコンド』と言われる。

二月十日

デュポールの慈善公演。彼が踊るのも最後である。

わたしは彼のバレー『シンデレラ』[2]の舞台装置を思い出す。それらは恐怖のほんとうの法則を知る画家によって描かれていた。陰気なあかりの灯る妖精の宮殿と、円天井を突き破り、眼を閉じて運命の星を指さすあの巨人の姿は、心にいつまでも消えない思い出を残している。しかしフランスでは、言葉によってこの種の楽しみを理解させることはできない。この美しい舞台装置は色彩に乏しく明暗が欠けていた（影と明るみが不分明である）。

同じ『シンデレラ』のバレーのなかで、ストーンヘンジを真似た森のなかの舞踏場と、妖精の宮殿は、ミラノで上演されても評判になっただろう。ロンバルディーアでは色の魔術はもっとよく理解されるが、時として構想が、新味に欠けて効果を発揮するに至らない。ナポリでは樹木は緑だが、スカラ座では灰青色である。このバレー『シンデレラ』、それとヴェストリスのバレー『ジョコンド』[3]は、ほとんどパリでと同じように踊られている。マリアンナ・コンティとパッレリーニの存在がこのバレーからフランスの舞踊の冷たさをとり除いている。こうした冷たさやわが国の優美さはデュポール夫人、タリョーニ、タリョーニ嬢によってとてもうまく表現されている。デュポールに関しては、その昔称讃を博したもので、わたしもそれに同調したものであった。

観客は拍手喝采を抑えきれなかった。国王が先にたって拍手をした。わたしは自分の桟敷から殿下の声を聞いた。熱中は狂熱にまで達し、それは四十五分間続いた。デュポールは、パリでフィガロの役を演じた際に見せた軽やかさをそのまま保っている。決して懸命さを感じさせないで、踊りは少しづつ活気をおび、ついには彼が表現しようとする情熱の無我の境地と陶酔で終る。これこそ、この芸術が示すことのできる表現の究極的な段階である。ヴェストリス、タリョーニは、第一に、

すべての凡庸な踊り手たちと同じく、懸命さを隠すことができない。第二に彼らの踊りには進展がない。こうして、彼らは芸術の第一目標である逸楽にさえも到達できない。女たちの方が男たちよりもうまく踊る。逸楽の次には、讃美がこのたいそう制約のある芸術のほとんど全領域に関係する。目が、舞台装置の輝きと群舞の新奇さに魅了されると、《パ》の描こうとする情熱に対して、鋭くもやさしい注意を向けるように魂を促すにちがいない。

わたしは二つの流派の対照をはっきりと見た。イタリア人たちはわが国の流儀の優越性を問題なく認め、それでいて、知らないうちに、自分の国の流儀の完全さにいちだんと神経質になっている。デュポールは満足しているにちがいない。今晩はたいへんな喝采を受けた。しかし文字通りの熱狂はマリアンナ・コンティに対してであった。わたしの隣りにフランス人がいたが、彼は熱中して、わたしに言葉をかけたくらいだ。「何たる下品」彼は繰り返し繰り返しこう言っていた。彼がそう言うのもわかるが、観客はなおかつ有頂天になっていた。下品とは大体において習慣的なものでしかないし、舞踊は大方すべてが、わが国の考え方とは衝突する。いちばん生彩のあるパに対して、イタリア人は下品などということを思いもつかない。彼らは芸の完璧さを味わう。それは丁度われわれが、場所の統一の規則を滑稽だと思うこともなく、『シンナ』の美しい詩句を楽しむのと同じである。束の間の印象では、そうした目につかない欠点は、存在しないも同然である。パリで好ましいものがジュネーヴで下品だというが、それは猫っかぶりの度合による。[1]

舞踊の理想美はどこにあるのだろうか。これまでのところは、そんなものは存在しない。それは風土の影響やわれわれの肉体のでき具合とあまりに密着している。

フランス派がやっと完全な出来ばえを示したばかりだ。

今や、誰か天才が現われて、この完全さを利用しなければならない。それはマサッチョが現われ

1　ド・ブロスの『イタリア書簡』はイタリアの社交界に関連して次のように記している。「ひと前での女性たちは自由な様子よりむしろ下品な様子をしている。とは言え、われわれはわれわれの風俗に反するものを下品と呼び、その国の慣わしがわれわれの風俗と一致している場合にはもはや下品なるものではない」

2　ヴィガノはスタンダールの讃美するイタリア人の一人。彼のバレー『ヴィンガリ』はアントニオ・カプッツィ曲の黙劇『サレルノ公妃クロティルデ』に導入された。このバレーはそこに自分たちの習俗が皮肉に描かれていると見たナポリの人から嫌われた。

3　セルバンテスの『模範小説集』（一六一三）のなかにジプシーたちの生活が背景となっている作品『美しいヒターノ娘』がある。

4　正しくは『ベネヴェントのくるみの木』である。一八一一年に作られたヴィガノのバレー。

5　スタンダールはヴィジルの城の所有者ペリエ家とつきあいがあった。B＊＊＊夫人とはその城にやはり迎えられていたスタール夫人のことであろうか。むしろ、これはこの城のすぐ近くの公証人ブーロン氏の家でのことと考えられる。スタンダールの妹ポーリーヌの幼友達ソフィ（結婚してゴーティエ夫人）こそB＊＊＊夫人かもしれない。一八一四年

たときの絵画のようにである。この分野での偉人はナポリにいるが、ナポリでは軽蔑されている。ヴィガノは、『ツィンガリ』[2]、すなわちジプシーを描いたバレーを上演した。ところがナポリの人たちは彼が自分たちを嘲弄しようとしたと思いこんでしまった。このバレーは誰一人と思いもよらなかった奇妙な事実を暴露したのだ。ナポリ地方の民族的な習俗がそのままジプシーの風俗だということなのである。（セルバンテスの『小説集』を参照されたい。[3]）ヴィガノは立法院の議員たちに教訓を与えているわけだが、それくらい芸には利益がある！　同時にまた、こんなにも表現のままならない芸術によって、思いきって情熱でなく風俗を描き、しかもたいそう立派に描いたのは見事な成功である。へぼピアノにあわせておこなわれたある舞踊は、とりわけナポリの住民を憤慨させた。わたしにとって、このバレーの逸話は一条の光明であり、この国民を研究するためにまことの手掛りを与えてくれた。伝え聞くところでは、ノヴェールは逸楽をもたらしたという。ヴィガノはあらゆる点で表現をつき進め、彼の芸術にそなわった勘から、バレーの真髄、すなわち優れてロマンチックなものを発見しさえした。この様式の、会話を伴なう劇で可能なものすべては、シェイクスピアによって生み出された。しかし、『ベネヴェントのかしの木』[4]は、魔法をかけられた想像力にとって、『あらし』とか『ウィンザーの女房たち』の第五幕とはちがった別の喜びである。魂は、新しいものを知る喜びで有頂天になって、一時間十五分を途切れることなく堪能する。そしてこれらの喜びは言葉によって表現することが不可能であるけれども、長年月たってもなお記憶に残る。わずかのせりふでは、こうした効果を描くことはできないし、長々と話し、そして観客の想像力を揺さぶらなければならない。フランスのヴィジルの城[5]で、B＊＊＊夫人は『ベネヴェントのかしの木』のバレーを語り、われわれに夜のひと時を過ごさせたものだった。小説や芝居の思い出を沢山もっているバレーの観客の想像力は、それ自身でどんなシチュエーションでも展開させるにちがいない。

のはじめ彼はブーロン家を訪れているが、短い夜々を彼女にいろいろ語り聞かせたのは彼の方であったろう。

それはまた言葉によって与えられる展開にうんざりしているにちがいない。各人の想像力は思い思いにこれら沈黙の登場人物たちに語らせる。この特異なジャンルはおそらく消滅してしまうだろう。それはイタリア王国の輝かしい時代にミラノで発展した。莫大な金がかかり、貧しいスカラ座はもはや二、三年の命脈しかない。信仰心が賭博を排除させてしまった。その儲けが舞台を潤していたのに。おそらく、この芸術の記憶さえも完全になくなるだろう。ロスキウスやピュラデースのように、その名前しか残らないだろう。

ミラノの人から『プロメテウス』[1]、『ツィンガリ』、『ベネヴェントのかしの木』、『サマンドリア・リベラータ』[2]の話を聞かされる外国人は、少しでも生き生きした想像力をもっていないと、その話相手の熱中がさっぱりのみこめない。[3] 豊かな想像力はフランスにおいてわれわれの得手ではないので、そこではこのジャンルは完全に失敗するかもしれない。わがラ・アルプはメタスタージョさえも理解できない。わたしはヴィガノの三つ四つのバレーしか見ていない。それはシェイクスピア風の想像力であるが、ヴィガノの方はおそらくシェイクスピアの名前さえも知らないだろう。この頭のなかには、画家の天分があり、音楽的な天分がある。しばしば、言いたいことを表現するメロディーが見つからないと、自分でそれをつくる。確かに『プロメテウス』のなかには莫迦げた部分もあるが、十年後にもその思い出は最初の日と同じくらい新鮮である。ヴィガノの天分のたいへん独特なもう一つの美点は、忍耐である。ミラノの舞台では、八十人の踊り手に囲まれ、六十人の音楽家から成るオーケストラを足もとに置いて、午前中ずっと、仮借なく、二小節をやりなおさせる。そこを彼の考えどおりにみんなが踊らないという理由なのだ。

これらのバレーの思い出についてひきずられてしまった。二時が鳴っている。ヴェスヴィオが火を吹いている。[4] 溶岩の流れるのが見える。その赤い塊が、このうえなく美しい暗黒の地平線に浮き出

1 ヴィガノの『プロメテウスの人間たち、別名、音楽と舞踊の力』は一八一三年五月二十二日スカラ座で初演。スタンダールはその年十月十二日の再演に当時の恋人アンジェラ・ピエトラグルアを伴って見に行った。

2 『サマンドリア・リベラータ』は一七九八年ヴェネツィアで初演された。

4 「話相手の熱中がさっぱりのみこめない」外国人とは、スタンダールの友人のマレスト男爵と考えられる。彼は、ヴィガノのバレーをほめそやすスタンダールのミラノからの便りに、聞く耳をもたなかったばかりかそれに嘲笑で答えた。一八一七年十二月一日のマレスト宛の手紙で、ここに述べたヴィガノについての考察の独創性を主張して、これが「わたしの心、わたしの血である」とスタンダールは言っている。

4 ブッチ本のマルジナリアに次のようにある。「一八一七年二月四日にわたしはポッツォーリ〔ナポリの西十五キロ〕にいた。したがって、スタンダール氏と同じ頃、わたしはナポリを見ていたわけだ。わたしは彼をたいへん嘘つきだと思っている。あれはジャコバン的自由主義者だ」

5 一八一七年にヴェスヴィオが噴火したという記録はない。

ている。[5] これもまたヴィガノ風の効果である。わたしは四十五分間もそれを眺めている。

(一) スコットランドにはこの感じ方が残っているのではないかと思う。

一八一七年二月十三日

舞踊の理想美はいずれデュポールの流儀とコンティの流儀の中間に定められよう。どこかの金持で逸楽的な領主の宮廷が必要である。ところが、これこそ今後われわれが見かけることのなくなるものなのだ。誰もが、たとえ失墜しても、せめて金持の一個人として生活できるようにと、何百万かを蓄えておこうとする。そのうえ徹底的に世論に抵抗しようとする領主は、一生涯ずっと不安にさいなまれる。こうした目算ちがいが十九世紀のあいだに芸術を衰退させてしまうだろう。二十世紀には、すべての国の民衆が政治を論じ、マリアンナ・コンティに拍手喝采する代わりに、『モーニング・クロニクル』を読むことだろう。

ガルデル夫人の冷たい才能は、少くともフランス以外では、舞踊の理想美に加えられることは絶対にありえない。正直言って、仮りに理想美のあの両半分で選択をせまられれば、わたしはコンティの生彩に富む輝かしい逸楽を好むだろう。(一) ミリエール嬢は八ないし十年前にパリ風の才能をもってミラノへ踊りにやってきた。彼女は口笛でやじられた。彼女は踊りに熱を加えた。したがって、今日スカラ座で喝采を博しているが、リシュリュー街では徹底的に口笛でやじり倒されることだろう。

(一) ビゴッティーニ嬢はこの理想美のほぼ完璧な見本である。ポールとアルベールがしばしばこれに近づく。

一方ファニー・ビアス嬢はまったく純粋にフランスの流儀である。ガルデルのバレーはヴィガノのバレーと絶対に少しの共通点もない。それはアルフィエーリと比較されたカンピストロンといったところだ。ヴィガノが『プシュケ』[1]を演じれば人々をおののかせたであろう。ガルデルは舞台上で、王座を追われた王の目を焼かせるとき、悪魔たちにプシュケをいたぶらさせ、シェイクスピアと同じ誤りに陥っている。この恐ろしさに釣りあうほど充分に想像力は掻きたてられず、悪魔の醜悪さとかその緑色した爪を面白がるだけである。(『プシュケ』再演、一八一七年六月)

二月十四日

わたしはヴェストリス三世の『ジョコンド』を見た。これは舞踊の神様の孫である。このバレーはたいへんお粗末だ。デュポールのバレーもほぼ似たようなものである。あいかわらず、花飾り、花々、飾り帯。美女がこれで戦士を飾ったり、羊飼いの乙女が恋人とこれをやりとりする。そしてその飾り帯を祝って踊りがある。『サマンドリア・リベラータ』の若い夫は、こういったものとはほど遠いところにいる。彼は自分の宮殿に帰ると、嫉妬にさいなまれながら、それでもわれを忘れて後宮の音楽係の黒人奴隷と、そして自分の妻と一緒に、あの美しいテルツェットを踊る。このパは、なぜかわからないが、すべての人の心をとらえていた。これは恋愛物語の大きな特色の一つで、恋するものの登場はあらゆる非難を忘れさせる。フランス的趣味は、自分の肖像画に黒い色を入れることを望まないあのかわいいご婦人方のようなものである。ブーシェの作品みたいなもので、これはグロの『ヤッファの病院』と対照的である。

今晩、バルバーヤがヴィガノとパッレリーニを十八ケ月間雇うという話を聞いた。ヴィガノが六万フラン、パッレリーニが一万九千フラン獲得する。かわいい踊り子が大舞踊作家のあとを追ってやってきたが、今やその踊り子が大芸術家を悩ましている。彼は逃げ出して再びロンバルディーア

1　一八〇四年七月二十四日(テルミドール五日)の日記に、ガルデル作の『プシュケ』の感想がある。「わたしは夕方オペラ座へ行った。そこへ行くのは十八ヶ月ぶりぐらいだった。[……] わたしはこれもまたはじめて『プシュケ』を見る。このバレーはわたしを魅了。デュポールは優美だが、あまりに旋回をやりすぎる。分別をわきまえてやめてたのに、観客が喝采するのでまたやっている。それをやめれば、彼は魂にえも言われない感情、ウェルギリウスの牧歌が魂に生じさせるものと同じ種類の感情を生じさせるだろう。彼はその魅力的なゼフィール役で何度かこうした効果をわたしにひき起こしたものだった。ヴェストリス夫人がアムール、かなり可愛らしい踊り子[ビゴッティーニ]がプシュケを演じる。ヴェストリス夫人はアムールのパントマイムを短時間しか演じない。アムールは恋人に自分をしあわせにしてくれるよう時間をかけてしむけなければならない。大女優ならこの場で崇高になることもあろう。『プシュケ』はわたしを魅了した。これは楽しい作品である。再見のこと」

2　イタリアに第一歩をしるして以来、スタンダールはフランス音楽を軽蔑しはじめていた。彼はそれが「大嫌い」だと『エゴティスムの回想』第六章で言い、「苛立たせる」と『アンリ・ブリュラール』第三十八章で書いている。

に行こうとうずうずしているのだと思われる。

時としてわたしは自分のもっとも根本的な考え方を疑いたくなる。普通は、フランス音楽に対するわたしの軽蔑につけ加えるべきものは何もない。[2] しかしながら、フランスにいるわたしの友人たちの手紙に、わたしはどうやら唆かされたようだった。陽気で純粋に楽しいメロディがあることを認めようとしていた。『ジョコンド』のバレーが論議にすっかり終止符を打たせる。これまでわたしにこれほどわが国の音楽の貧弱さ、無味乾燥、無力を感じさせたことはなかった。わが国の音楽のうちでもいちばん好ましいメロディー、かつてわたしを感動させたものを集めて対比したにもかかわらずのことだ。ほんとうの美を感じることは青春時代の思い出にさえも勝る。そんなことをわたしが言うのは、まさにきわめて莫迦らしく、そしておそらく真の美を見たことのないものにとって、きわめていやらしくさえ聞こえるだろう。『カレー攻囲』についてチュルゴ氏が言ったように、控え室の愛国心がわたしに対して蜂起することだろう。[3]

サン＝カルロの劇場の広さは、バレーのためには喜ぶべきである。デュポールの『シンデレラ』のなかでは、四十八頭の馬から成る騎兵中隊がやすやすと動きまわるが、これらの馬と様々な種類の戦いがまったく退屈で、まったく蛇足的な一場をつくりだす。これらの馬は階段上まで全速力で走るという大袈裟なことをやる。これに乗っているのはドイツ人である。この国の人たちだったら、そんな曲芸はやってのけられないだろう。サン＝カルロの舞踊学校はまたとない楽しい期待を抱かせる。若い生徒たちのなかでいちばん優秀な連中、とくにペピーナとマーリは、すでにとても楽しみな踊り子である。おそらくペピーナは大舞踊家になるだろう。彼女の踊りには表情がある。

二月十五日

3　一八二六年版の一八一七年一月一日付に次のようにある。「一七六三年頃『カレー攻囲』がこのうえなく気ちがいじみた、このうえなく国民的な成功をかち得たのは人も知るところだ。詩人のド・ベロワは、爾来こぞって利用されるようになったところの、自国民におべっかをつかうという金になる考えを抱いたのだった。デヤン公爵がある日この悲劇を嘲笑すると、ルイ十五世が彼に言った。《貴君はボン・フランセ〔よきフランス人〕ではないのか》――すると《殿、悲劇の韻文がわたくしめほどにもボン・フランセ〔よきフランス語〕であればよいのですが》

「自国を愛し、おべっかのなかに阿呆とペてん師のやりとりしか見なかった賢明なチュルゴは、ベロワの品のないお世辞を讃美する欺されやすい人々の熱狂に、控え室の愛国心と名づけた」

王宮での楽しい舞踏会。喜劇の仮面をつけなければならなかったが、間もなく仮面をはずす。八時から朝の四時まで大いに楽しむ。ロンドン中の貴紳が居並んでいた。英国女性たちがこの夜会の栄冠をさらっていくようにわたしには思われた。しかしながらずいぶん美しいナポリ女性たちもいた。なかでも毎月テッラチーナへ夫に逢いに行く[1]あのかわいそうなN＊＊＊伯爵夫人など。やめよう。金を払わずに入ったところについては、何も喋らないように心に決めていたのだ。さもないと旅行者の身分がスパイの職務になる。

二月十六日

現代建築に対するわたしの心底からの軽蔑にもかかわらず、わたしは今朝、元ブォナパルテ[2]の恩給拝受者、ルガーノのビアンキ氏の設計図を見に連れていってもらった。現代の下劣さをつくり出し、ミケランジェロにおいてさえも非難されうるあの沢山の飾り、角（かど）、張り出しが、彼にはあまりない。わが国の連中は、古代人が飾る目的では何もつくりはしなかったことや、彼らにあっては美は実益からにじみ出したものでしかないことを、理解するには至らない。[3]

ビアンキ氏はナポリで王宮の向かい側に、サン＝フランチェスコ・デ・パウロ教会を建設しようとしている。[4]国王はその進行をバルバーヤ氏に委ねるはずで、二、三年後に完成するのが見られよう。場所はこのうえなくまずいところが選ばれた。そこに教会を建てるかわりに、さらに三十あまりの家をとり壊すべきであろう。教会を建てる場所はむしろ城塞広場（ラルゴ・デイ・カステッロ）[5]にあるのではないか。しかし、ヨーロッパの隅々まで、無味乾燥な虚栄心が人の心をつかんで放さず、美の大原則を見てとれなくなっている。ビアンキは丸い形状を採用した。これは彼が古代芸術を見るすべを心得ていた証拠である。しかし、古代人が彼らの寺院でわれわれと反対の目的を企図していたことは悟れなか

1　テッラチーナはナポリから二十三リュー〔約九十二キロ〕でしかないが、そこは教皇領に属する。ナポリにいることのできない自由主義者たちはそこに避難していた。

2　ボナパルトをイタリア名であるかのようにブォナパルテと綴るのは、ナポレオンを軽蔑したり憎んだりしたもののあいだでおこなわれた。だがまたこう綴ることによって、ブールボン家支配下では、検閲の目をごまかす一手段ともなりえたろう。ストリヤンスキー本の最終頁にスタンダールは次のような書きこみをしている。「印刷屋がブォナパルテと印刷する。当時、一八一七年には、このU〔これが入るだけで読み方がかわる〕はよく考える人の特徴となっていた。わたしはしばしばエグロン夫人〔印刷店主〕の店台のまわりに司祭たちを見かけた」

3　『絵画史』第九十一章に類似の考えが見られる。

4　教会は一八一六年六月に礎石が置かれたが、完成したのはやっと一八四六年であった。王宮と向きあって建っている。

5　城塞広場はカステル・ヌォーヴォわきの現市役所広場。

6　フィランジェリはフランス支配下でミュラの軍隊の将軍となり、王政復古後もフェルディナンド王のもとでその地位にとどまった。彼の自由主義的精神をスタンダールは気にいっていた。クォーコはそのナポリ革命の

った。わたしは彼の家で、王国でいちばん志操堅固な二人の人物、フィランジェリ将軍[6]と参議のクォーコ氏に会う。

二月十七日

わたしはサン＝カルロで聞いた音楽について、言わねばならないことをほんのわずかな言葉で書きとばそう。わたしは希望にみちてナポリにやってきた。ところが今もってわたしがいちばん楽しかったのは、カプアの音楽なのだ。

サン＝カルロで最初に聞いたのが、ロッシーニの『オセロ』[7]だった。これ以上に冷ややかなものはない。あらゆる演劇のなかでもっとも情熱的な悲劇を、これほど気のぬけたものにするには、台本作者は大いに手腕を必要としたものだ。ロッシーニはそれをとても立派に補っている。わたしはあのラプソディを五度も耐え忍んだ。コルブラン嬢のデスデモーナが多分にマイヤール嬢と同じ容姿をしているのに注目。

イタリアに独特なものは、大女優の父親あるいは夫の滑稽さである。この役柄はドン・プロコーロ[8]と呼ばれる。ある日ソマーリャ伯爵がコルブランにスカラ座を見せるために、彼女に腕をかしていた。父親が伯爵におごそかに言った。「あなたはたいへんなしあわせものです、伯爵様。ご承知でしょうが、王様方が私の娘に腕をかす慣わしになっておりまして」――すると伯爵は答えていわく、「お忘れかな、わたしが結婚しているのを。」これはイタリア語で言うとなかなか辛辣なのだ。さる大歌手の夫がミラノでこの逸話を思い出させた。

『オセロ』のあとカラファ家の一青年の音楽『ガブリエーレ・ディ・ヴェルジ』[9]を、わたしは辛抱しなければならなかった。これはロッシーニの様式の俗な模倣である。クーシー役のダヴィデは

著書のため亡命していたが、フランス支配下で帰国してジョゼフ・ボナパルトの参議をつとめ、王政復古後、王室財宝監督官になった。

7 『オセロ』の台本はベリオ侯爵によって書かれた。

8 プロコーロ氏はマルチェッロの『はやりの音楽劇場』の登場人物。大女性歌手をプラトニックな関係で後見している。

9 ミケーレ・パオロ・カラファのオペラ『ガブリエーレ・ディ・ヴェルジ』は一八一六年七月三日初演された。

楽しめた。

パエールの『サルジーノ』[1]を再見した。フィオレンティーニ劇場のカブラン嬢ゆずりの才気をダヴィデが発揮していた。この有名な音楽はドレスデンと同じくここでもわたしを閉口させた。パエールの才能はシャトーブリヤン氏のと似ている。わたしは努力してみたものの、それを理解することができない。このことがいつもわたしには滑稽に思える。

二月十八日

今晩サン＝カルロの一座はフォンド劇場[2]で『オセロ』を歌っていた。わたしは思いもかけないくつかのきれいな主題を認めた。

ここは音楽を公演する劇場の本来の形をしている。円形である。舞台の線は円の直径の先端部、あるいはもっと正確に言えばこの直径の三分の一ぐらいのところを横切る垂線である。

この数学的問題は劇音楽の未来の運命を決するであろう。サン＝カルロやスカラ座のような大劇場は文明の錯誤であり、文明の完成ではない。あらゆるニュアンスを曲げてしまうにちがいないし、そのときからニュアンスというものはなくなる。若い歌手は、最高に完璧な汚れない状態で育成されなければならないだろうが、今後はそれが不可能となるだろう。過去にはそのために大寺院と聖歌隊の子供が必要だった。ところが二十年前からイタリアにはもう声らしい声などありはしない。劇場というあの女たちの踏台で、どうにかこうにか歌う醜女が、たちまちのうちに二十人もの庇護者をつかまえる。フィオレンチーニ、フォンド、ファヴァール、フェドー[3]といった大劇場が絶対に必要なわけである。

二時間の音楽を一時間のバレーで区切るイタリアの習慣は、われわれの器官の貧しい能力に基づ

1 スタンダールが『サルジーノ』を見たのは、一八一三年七月末から八月十四日までのドレスデン滞在中と思われる。

2 フォンド劇場は一七七九年に開場。マルカダンテ劇場と名を変えて市役所広場に現存。

3 ファヴァール、フェドーはいずれもパリの劇場。

いている。二幕の音楽を続けて上演することは不合理なのだ。ところが小劇場はヴィガノ風のバレーを駄目にし滑稽なものにする。そこで音響学の問題が幾何学者たちへ提起されるのだが、これはあまりに難解なので彼らは軽蔑するだろう。同じ劇場に二種類の舞台を設けることはできないだろうか。さもなければ、バレーが終ったら、客席に声を反響させるのに充分な、がっしりした隔壁で舞台を仕切ったり、金属幕といったものを降ろしたり、あるいは観客の側に太鼓の皮を張った木製の函状の壁を設けるのはどうだろう。

パルマの劇場では、舞台の奥で一枚の紙を破る音が、どこにいても聞こえた。

(一) パリのヴァリエテ座。

二月十九日

サン＝カルロはナポリの人にとって断然党派的問題である。国民の傷ついた名誉心がそこに逃げ場を見つけたのだ。ほんとうのところ、サン＝カルロは音楽の装置としてはスカラ座よりもずっと劣っている。乾燥すればもっと音が響くようになる可能性がある。しかし塗ったばかりのモルタルのうえにあまりに早く施された金泥は、輝きをすっかりなくしてしまうだろう。装飾はたいへん平凡で、おまけに実際以上によく見えることはない。シャンデリアがそれらを台なしにしている。同じ原因で俳優の表情も見えない。

二月二十日

今晩、わたしがサン＝カルロに入ると、守衛が追いかけてきてわたしの帽子をとらせた。パリの

オペラ座より十倍も広い劇場内で、わたしはこれまでいずれかの王侯を見かけたことはなかった。

パリは世界一の都会だ。そこでは他人の目を気にしなくていいからだ。宮廷は面白い芝居としかうつらず、慈善によってわずかにその存在を世間に知らせるだけである。[1]

ナポリでは、サン＝カルロは週に三度しか開かない。そうなると、スカラ座のような確実な待ちあわせの場所ではなくなる。諸君が廊下を巡り歩くとする。桟敷席の扉に書かれた大袈裟な称号が、大きな文字で、諸君はケチな小市民でしかないことを教えてくれる。諸君が帽子をかぶって入場する。すると、トレンティーノ[2]の英雄が追いかけてくる。コンティが諸君を魅了して、諸君は拍手喝采しようとする。すると国王の臨席がこれを邪魔する。諸君は平土間の席を出る。諸君の時計の鎖がさる大貴族の侍従の鍵に引っかかったりすると（昨日わたしに起こったことだ）、この勲章をつけた大貴族は無礼だとぼやく。そんな尊大さにうんざりしながら、諸君は外へ出て貸馬車を頼む。すると、どこかの妃殿下の六頭立ての馬車が出口を塞いでいて、待たされ、そのあげくに風邪をひくことになる。

宮廷のない大都会バンザイ。君主ゆえにではない。彼らは一般に尊敬できる。とりわけ、彼らには一私人のことを考える時間がない。大臣や次官ゆえになのである。彼らの一人一人が警察や迫害の元締めである。わたしはこれを真面目に言っている。こういうことはパリでは少しも経験しないことだ。しかしイタリアの小国では年中迫害がある。全部あわせても知事一人ほどの仕事もない八ないし十人の大臣に、何が期待できよう。

ナポリに到着したとき、わたしはある公爵が芝居の監督官であることを知った。わたしはすぐに何かしら窮屈でいささか面倒なものを予期した。コレの『回想録』の侍従官が頭に浮んだ。[3]

平土間の座席の一つ一つには番号が打ってあり、前十一列は赤服衛兵隊、青服、城門守備隊など

1 当時のブールボン家がこのような《象徴》的存在でなかったのは言うまでもない。スタンダールは意図的に書いている。

2 ミュラの率いるナポリ軍はトレンティーノ（★五月三十日付参照）でオーストリア軍に敗れた。ここは皮肉を言っている。

3 コレは『歴史風日記、別名、一七四八年から一七五一年までの劇作品ともっとも記憶すべき出来事に関する批評的文学的回想録』（一八〇七）で、テアトル・フランセの管理が委ねられていた王の侍従官たちの態度について、次のように書いている。「これらは、もっと確実に特権を享受するために、観客のひいきや自由を邪魔するような暴君的な管理体制をしいたおえら方である。これを利用して、彼らは自分たちのお気にいりの俳優や女優をおしつけている」

の士官殿が占領するか、あるいは、やってくる外国人を十二列目に遠ざけるように、予約という形で特別に割りあてられる。これにオーケストラが占める非常に広大な空間を加えると、あわれな外国人は劇場の中央よりもはるか後方、見たり聞いたりするのにまったくふさわしくないところに退けられるのが、読者にはおわかりであろう。ミラノではこういったことは少しもない。すべての席が早いもの勝ちで手に入る。あの幸福な町では、みんなはどんな人に対しても対等である。ナポリでは、千エキュの年金もない某公爵が、八ないし十の綬章のために、わたしを横柄に押しのける。ミラノでは、少しでも急いでいる様子をすると、八百万ないし一千万の年収がある人でも、道をあけるためにわきに寄ってくれる。したがってあの有名な名前の持主たちもそれと認めることがむずかしい。それくらい彼らは飾らないし、丁重である。今晩、わたしは守衛の無礼にうんざりして、自分の桟敷席にあがって行った。するとまた、上る途中で、悲しいことに、権勢の重み一切をひっさげて降りてくる十二人から十五人の大綬章やら将軍やらに、わたしは行手を邪魔された。しかしわたしは、勇敢な軍隊を保持するためには、世襲貴族制や、無礼な特権や、綬章などといったがらくたの山がおそらく必要なのだと考えた。

デュポールのバレーはシンデレラ礼讃で終る。シンデレラは暗い森のなかにいる。一枚の幕が降りると、あの白いライトの魔術的な光に照らされた丘の上に、広大な宮殿が聳えている。この白色の照明はミラノでも用いられているが、ここではもっとうまく使われている。席を立つと、階段はたいへんな群衆でごったがえしている。前を行く人のすぐあとについて、三つの急階段を降りなければならない。ナポリの人はこれを美と呼ぶ。彼らの劇場の平土間は二階になる。これが、現代建築において独創と呼ばれているものなのだ。そして二、三千の観客に対してたった一つの階段しかないし、この階段がいつも従者や靴みがきで混雑しているので、その快適さたるや推測できよう。

要するに、幕が降りるとこの劇場は立派だ。わたしは前言をとり消さない。ひと目で心をうっとりさせる。幕があがる。すると、諸君は失望また失望だ。諸君が平土間へ行くと、衛兵諸氏が十二列目に追いたてる。少しも聞こえないし、彼方ではねまわっている役者が年寄りなのか若いのか見分けることもできない。諸君が桟敷席にあがる。すると、目も眩むような光につきまとわれる。コルブランの金切声を聞く代わりに、バレーがはじまるまで新聞を読もうとする。でも不可能だ。カーテンがない。諸君は風邪をひいていて、帽子をかぶっていたい。でも不可能だ。さる王侯が芝居にご臨席あそばしている。諸君はカフェへ逃がれる。するとそれは殺風景で陰鬱な廊下にある。諸君は休憩室へ行こうとする。険しく不便な階段のために、そこへ着くときには諸君は息切れしている。

(一) 一八一七年、わが国の王侯たちは人民の負担軽減のために五千万以上を出費した。

(二) しかも、一人の立派な男[1]が大臣をしている一八一七年には、今までになく。

二月二十一日

わたしは野心を諦めきれないであの暗い悲しみにとりつかれるのを感じる。二年前からわたしにつきまとっているやつだ。東洋人流に、肉体に働きかけなければならない。わたしは船に乗って四時間航海し、イスキア島に行く。[2] ドン・フェルナンドへの紹介状をたずさえる。

彼は、一八〇六年にイスキアに隠居して、憎悪するフランス軍の侵略以来ナポリを見ていないとわたしに語る。劇場がないのを慰めるために、見事な鳥小屋のなかにたくさんの夜鳴き鶯を飼っている。「音楽！ 鳥の歌以外に自然界に手本をもたないこの芸術は、また鳥の歌のようにひと続き

1 リシュリュー公アルマン＝エマニュエル・デュ・プレシス。参事院議長でウルトラ派的人物。スタンダールの内心は別な方を向いている。

2 スタンダールがイスキア島を訪れるのは十年後のことである。

3 『マンク』はイギリスの怪奇小説作家ルイスの二十二才の時の作品で代表作。一七九七年仏訳が出た。一八一七年当時ルイスは妹とナポリにいたが、スタンダールがその舞踏会に行った証拠はない。

4 チチェスター卿は一八一七年には二十二才のはずである。士官としてナポリの近くで任務についていた。

5 グロヴナー卿とホーランド卿は、反仏的な英国政府に対するリベラル派であった。

6 カニングとカッスルレーは英国の国会議員でフランスに対して鷹派であった。

の間投詞だ。ところが、間投詞は情熱の叫びであって、思想の叫びではない。思想は情熱をつくり出すことができようが、間投詞は情熱以外のものでは決してない。そして音楽は無味乾燥に思想と化しているものを表現できないであろう」

わたしは、フランス人嫌いのドン・フェルナンドやイスキアの善良な住民と、とても楽しい四時間を過ごす。彼らはアフリカの未開人である。彼らの方言の純朴さ。彼らはぶどう畑で生計をたてている。文明のしるしはほとんどない。この光景と海の変化がわたしを常態に戻してくれる。

二月二十二日

『マンク』[3]の作者ルイス氏の妹ルシントン夫人の家で開かれた魅惑的な舞踏会について話すことができないのを、わたしはどんなに残念に思っていることか。ナポリの人の粗野な習俗のまっただなかにいると、あの英国的な清らかさは気分まで清新にする。わたしは十四才のチチェスター卿[4]と同じくスコットランド風にダンスをする。彼は昨日到着したフリゲート艦に乗組む一介の士官候補生である。英国人は教育の奇蹟なるものを知っている。彼らはやがてそれをほんとうに必要とするであろう。わたしがそこにいた何人かのアメリカ人の顔に読みとったのは、今後三十年で英国は幸福でしかない国になりはてるだろうということだ。P＊＊＊卿はそれに同意を示した。「あなた方は到るところでひどく嫌われているが、とくに社会の下層階級から嫌われている。教育のある人々は、グロヴナー卿やホーランド卿[5]、そして大部分の国民を、あなた方の政府とは分けて考えている。でも、ヨーロッパのこの憎しみが二十倍も熾烈だったところで、各国は百年間は何としても憲法を勝ちとるのにじたばたして、どの国も二十世紀になる前に海軍をもつことはないでしょう。カニングとカッスルレー卿[6]が傷ついた名誉心から企てる変革を、仮りにあなた方がまぬがれても、アメリ

カ人はあなた方を嫌悪して、二十年後には五百人の海賊であなた方を待ちます。ご承知のとおり、フランス人はもはやあなた方の生まれながらの敵ではない。ラヴァレット氏の逃亡[1]と借款[2]が和解の糸口となった。われわれに対して善良な人になりたまえ」[3]㈠

P＊＊＊卿は英国でもっとも良識のある人物の一人であるが、ため息をつきながらすべてに同意した。――わたしはテッラチーナへ夫に会いに行く美しい伯爵夫人をまた見かけた。きっと英国女性は美しさで勝る。ダグラス夫人、ランズダウン夫人。[4]

㈠　一八一五年、数人の英国人がトロワにあるテセール氏の立派な工場に気づいた。すると二日後一個連隊の連合軍がきてそれを焼き払った。

二月二十三日

今晩、仮面舞踏会。わたしはフェニーチェ劇場[5]へ行き、それから零時半にサン＝カルロへ赴く。目も眩むばかりと期待していたが、とんでもない。舞台上に設けられたサロンは、スカラ座の舞台装置係がこういった場合に好んで繰り広げる華麗さの代わりに、金紙でできた大きなユリの花を一面につけた美しい白いカーテンで囲われていた。切符はたった六カルリーニ（五十二スー）だ。まったくの下司ども。二十ばかりの金ぴかのテーブルがある休憩所は、それでもよくつくられている。わたしは王宮でおこなわれた夜会で一緒に踊った公爵夫人が、賭博をしているのを楽しく眺める。彼女はテーブルから四歩のところに坐っていて、金を置いたり引っこめたりするのは彼女の恋人である。彼女の美しい顔だちにはばくちを打つ女の醜悪な様子はみじんもない。

1　帝政下の大臣ラヴァレット伯爵は、八一五年十一月二十二日死刑判決を受けたが、三人の英国人の助けを借りて逃走、密かにフランスを脱出した。ルイ十八世政府はこの英国人たちを逮捕させた。

2　フランス政府は一八一七年に英国の銀行からの借款に成功した。

3　以上の英国政府に対する切口上は、当時のフランスの自由主義者たちの考えを反映している。

4　ダグラス夫人とランズダウン夫人は当時ナポリに滞在中だったと言われる。

5　フェニーチェ劇場はカステル・ヌォーヴォ広場に面してあった。そこでは日に二度ナポリ方言のオペラを上演していた。

6　スタンダールは当時はまだペストゥムへ行ったことがなかった。そこへ行くにはナポリから百九十キロの道程を往復しなければならないので、一八一七年には日帰りは無理だったと考えられる。

7　スタンダールは直接中世の作家の書いたものを読んでいたわけでなく、ピニョッティの『トスカーナ史』（一八一三―一六）から知識を得ている。ピニョッティは絶えずカッポーニの歴史的回想録やフィリッポとかヴィッラーニの年代記を参照している。コーラ・ディ・リェンツォについてはその生涯の物語をトンマーソ・フォルティフィオッカによって述べ、チェゼーナの大虐殺をのちの対

二月二十四日

美しいスコットランド女性のC・R＊＊＊夫人が今晩わたしにこう言った。「お国のフランス人ははじめあれほど際立って見えますのに、大情熱を生じさせるすべを少しも心得ていません。はじめの日は注意をよび覚ますことだけが必要です。最初に目を奪うあの輝かしい美しさも、次には色褪せるばかりで、一瞬しか力をもちません」――わたしは言った。「わたしの気持がたいそう冷淡にサン＝カルロから離れていくわけが、それではっきりしました」

いあわせたさるナポリの貴族が、大いに異議を唱える。彼はイタリア風に、すなわち人が答えたばかりの言葉を何度も繰り返し、しかも少し大きい声で叫びながら、異論に答える。聞く者がいなくなれば彼がやめるだろうと思って、わたしは広間のなかを眺めていた。彼がひっきりなしにアガ、ダネカという異様な言葉を連発しているのに気づく。それは大臣の後援を受けて、五ヶ月前から下稽古をしている華麗なオペラで、あらかじめ国王に献呈されていた。みんなは、ついにサン＝カルロにふさわしい芝居が見られると口々に言っている。

二月二十五日

わたしはペストゥムから帰ってきた。[6] 絵のように美しい道。

読者はこのうえなくひどいやり口を見たいとお望みだろうか。それならカラブリア地方の家庭の内部を見たまえ。今朝わたしが話してもらった信じられないような逸話。去年、わたしはカッポーニ、ヴィッラーニ、フォルティフィオッカなどの中世のあらゆる独創的な作家を読んでいた。[7] わたしは対立教皇クレメンス七世の書いたチェゼーナの大虐殺のような逸話を始終見つけたものだ。(一) それでも結局、カストルッチョ、グリエルミーノ、ヴィルトゥ伯爵といったこれら巨大な人物に対し

立教皇クレメンス七世である枢機卿ロベルト・ディ・ジネーヴラによって描いている。また彼はカストルッチョ・カストラカーニ、アレッツォ司教グリエルミーノ・ウベルティーニ、ヴィルトゥ伯爵ジャンガレアッツォ・ヴィスコンティの功業について長々と述べている。

ては、大いに尊敬を抱き、そして親近感に近いものを覚えている。十八世紀の歴史書のなかには、ああした残虐な行為は少しも見られない。そして時がたつにつれ、侮蔑で胸がむかむかしてくるのを感じる。(二)

(一) ポッジョの『歴史』第二巻と『シエーナ年代記』。「それから枢機卿はジョヴァンニ氏に言った。言々」

(二) ラクルテル、デュクロ、ブザンヴァル、サン＝シモン、リュリエール、リーニュ公、マッキントッシュ、ベルシャム、ホッブハウス。

二月二十六日

旅行中にわたしが見ていちばん好奇心をそそられたものといえば、ポンペイである。古代にやってきたような気がする。わたしは今日で六度もそこへ通った。それについて話す必要もあるまい。二つの劇場が発見されている。ヘルクラネウムに三つ目のがある。これらの廃墟くらい昔日の姿を残しているものはない。シュレーゲル氏がわれわれに古代の劇場について語るその神秘めかした調子を、わたしは理解できない。明らかにわたしには内部感覚がない。[1] われわれにとっては、世界は雄々しい共和国からはじまったが、共和国のつくり出したものが、ラシーヌのように君主政治によって萎んだ魂の持主に崇高に思えるのはあたりまえだ。

二月二十七日

わたしはヌォーヴォ劇場[2]で『サウル』を見てきた。この悲劇はイタリア人の内在的な民族意識に影響を及ぼすにちがいない。これは彼らの熱狂を掻きたてる。彼らはミコルのうちに、イモウジェ

1 シュレーゲルについて『絵画史』第九十六章の注に次のようにある。「実際、シュレーゲル氏は文芸批評家というよりも伝道者である。彼ははじめに自分は理性を軽蔑すると述べる。すでにこれは大きな滑り出しである。ついで、やましさを覚えず安心して進んでいくために、彼は付け加えて、ダンテやシェイクスピアやカルデロンはわれらが主イエス・キリストから特別な使命をおびてつかわされた伝道者である、かくして彼らの著作の一音綴でも削除したり傷つけたりするとたちまちに瀆聖に陥る、と言う。この立派な理論は内部感覚によっていともたやすく説明しうる。不幸にして内部感覚を授かっていない人は、使命をおびて地上にやって来た詩人たちを感じることはできないだろう。諸君は内部感覚があるかどうか知りたいと思うだろうか。シュレーゲル氏は諸君に教えてくれよう。氏はそれをたいそう沢山与えられているので、五分も会話すれば、諸君が至福者のなかに数えられるかどうかを氏が知ること受けあいである」

2 ヌォーヴォ劇場と通常呼ばれているテアトロ・ヌォーヴォ・ディ・モンテカルヴァーリョは、一七二四年に建てられた。トレド街の近くにあった。

3 ミコルはアルフィエーリの悲劇『サウル』のヒロイン。イモウジェンはシェイクスピアの『シンベリン』のヒロインで貞節の鑑

ン、風、の愛情あふれるやさしさを見出す。[3] この劇の全体はわたしには把握し難い。それで、わたしは桟敷席を貸してくれた若い鷹揚な公爵とお喋りをした。われわれの傍には、わたしがかつて見たことがないくらいに、目に、やさしい幸福にみちた愛情を湛えている少女がいた。三時間が稲妻の早さで飛び去った。彼女の許婚者が彼女と一緒にいた。そして母親は彼が彼女の手に接吻するのを大目に見ていた。

件の公爵は、当地ではアルフィエーリの悲劇は三つだけお許しが出ているとわたしに語った。ローマでは四つ、ボローニャでは五つ、ミラノでは七つ。したがって、アルフィエーリに拍手喝采をすることが党派的問題であって、彼のあら探しをする者はウルトラである。

アルフィエーリには観客がつかなかった。丁度将軍に兵士が必要なように、偉人には凡人が必要であるのに。アルフィエーリの運命は諸々の偏見に反抗して吼えることであり、最後にはそれに屈服することであった。政治の面では、ヨーロッパやアメリカに二院制をもたらし、厄介者を追い払った革命の広大な恩恵を、少しも理解しなかった。芸術においても、彼はラシーヌがどんな点で過ちを犯しているか見なかった。

アルフィエーリはおそらく偉大な詩人たちのなかでもいちばん情熱的な人である。しかし、第一に彼はあくまでも一つの情熱しかもたなかったし、第二に彼の視野は政治的にはいつもきわめて狭かった。彼は、革命をおこなうためには、新しい利害関係、すなわち新しい所有者を創造しなければならないということを、決して理解しなかった（彼の『自伝』[4]の最後の部分を見られたし）。まず、彼はこの分野では才知がなかった。次に、彼は貴族、それもピエモンテの貴族であった。パンタン税関の下っぱ役人が、彼に無礼な態度で旅券の提示を求め、千二百ないし千五百冊の本を巻きあげた[5]ことから、彼の心のなかのあらゆる貴族的偏見が頭をもたげ、彼は永久にヒュームの『歴史』と言われる。スタンダールは生涯イモウジェンに対して強い称讃を抱き続けた。

4 『アルフィエーリ自伝』は一八〇四年、著者の死の直後出版された。仏訳は一八〇九年刊。

5 『アルフィエーリ自伝』によると、これは一七九二年八月ブランシュ門（パリ市の税関の一つ）でのこと。彼がパリから出ようとしていると、ぼろを着たごろつきが、彼の馬車のために門を開こうとした衛兵の邪魔をした。

や自由のメカニズムを理解できなくなった。この高貴な魂は、政治的に多少ともましなものを書くのに必要不可欠な条件が、自分のさらされたようなつまらぬ個人的不愉快とは一線を画することだということを悟らなかった。晩年になって、彼は天才であるためには貴族に生まれてなければならないと言っていた。要するに、憎悪に近いくらいフランス文学を軽蔑しながら、彼はラシーヌの偏狭なやり方をいっそうひどくすることしかしなかった。

(一) 原書で。というのはブォナパルテの警察が翻訳をずたずたにカットしたので。彼の肖像は、現代イタリアのすべての偉大な魂の持主の肖像でもある。叡知以上に怒りが目立つ。

(二) 彼は尊ぶべきサヴォイア家の君主たちの親切を、決してありがたく思うことができなかった。現にナポリやサルデーニャの王座を占めているような君主たちは、自尊心からひどく血迷った精神の持主を、君主政治と和解させるためにぴったりである。

三月一日

『アガダネカ』[1]。わたしはかつてこれ以上に大仰でその実平凡なものを聴いたことがない。それは一瞬の休みもなく、そして音楽のなかにわずかの歌唱もなく、九時から十二時半まで続いた。宮廷に庇護された作品バンザイだ。そこで最良のものといえば、フィンガル（というのはこれはオシァンの話なのだ）の住処の居間であり、それは十年前からパリでつくられている当世風のあらゆる小家具を備えていた。わたしは特別に舞台裏へ行くことができた。バレー学校のかわいそうな少女たちが言った。「五ヶ月も練習して、こんな風に口笛でやじられるなんて。」　わたしはプリマ・ドンナの歌手におくやみを言った。「お客さんはたいへんやさしいですわ。わたくしは、頭に腰掛を投げつけられるものと予期しておりましたの。」　まったく、わたしが平凡としか思っていなかった

1　『アガダネカ』は、ヴィンチェンツォ・デ・リティスの台本でカルロ・サッチェンテが作った音楽劇。バレー音楽はガレンベルグ。

2　『エジプトのシーザー』はガエタノ・ジョイアのバレー。

3　『聖堂騎士』については未詳。タッソの作品を土台にしたもののようである。

4　ジュゼッペ・マリーニは、はじめミラノでウジェーヌ公の王立劇団に参加していたが、そののち自分の劇団を組織して、一八二三年までナポリで公演した。

作者たちは、そのうえ阿呆である。彼女は台本に印刷された作者たちの国王への献辞を見せてくれた。彼らはただ単にギリシャ悲劇の偉大な成果をむし返しているだけだ。

第三幕の音楽は一種の剣舞入りバレーであるが、ガレンベルグ氏の作品である。この人はナポリに身を落着けているドイツの貴族で、舞踊音楽に天分がある。ただし、今日のはくだらない。しかしわたしは『エジプトのシーザー』[2]とか『聖堂騎士』[3]で彼の音楽を聞いたことがあった。それは踊りによってかもし出されるあの種の陶酔を倍加したものだった。こういった音楽は一枚のまばゆい下絵でなければならない。そこでは節度が非常な重要性を獲得する。それは、ハイドンに凱旋をあげさせたオーケストラの細目を受けいれない。そこではホルンが大きな役割を演じる。シーザーがクレオパトラの寝室に通ることを許される瞬間には、マホメットの美姫たちにふさわしい音楽が奏される。タッソのメランコリックで逸楽的な精神は、『聖堂騎士』における亡霊の出現を非難しはしなかっただろう。騎士は恋人を知らずに殺してしまったのだが、夜、聖地の森で道に迷って、彼女の墓のそばを通りかかる。すると、彼女が目の前に現われる。彼の有頂天に対して彼女は天を指し示して答え、消える。ビアンキの気高く青ざめた姿、モリナーリの情熱にかられた顔、ガレンベルグの音楽。これらは一緒になってわたしの魂にいつまでも記憶されるだろう。ミラノでは、どんなピアノの演奏会でもガレンベルグの音楽が弾かれる。

一八一七年三月二日

わたしはただ一度も音楽の楽しみを味わうことなくナポリを去るのが、どんなに悲しいか口では言うことができない。

わたしはヌォーヴォ劇場へ行く。デ・マリーニ一座[4]が一九七回目の公演をしている。大男のヴェ

ストリスはイタリア最良の役者である。彼は『お人好しのやかまし親爺』[1]や『うろたえた家庭教師』[2]、そのほか彼がひき立たせる数知れないできの悪いラプソディーのなかでは、モレやイフラントにも匹敵する。飽きずに二十回も続けや見ることができる男だ。

ヴェストリスの次に、わたしは歌手のガッリをもってくる。彼は同じ週に『青銅の頭像』のハンガリー王、『テレサとクラウディオ』[3]で不機嫌な貴族に仕えるローマの小詩人レッジェレッツァ、ヴァイグルの『恋に狂った女』[4]の善良なスイス人の百姓をやり、神から劇の才能を授っている。

イタリア人、とくにイタリアの女性は、デ・マリーニを第一位にあげる。わたしは彼をピゴー＝ルブランの翻案作品『フェルスハイムの男爵たち』[5]や、『ふたりの小姓』[6]で見たばかりだ。理由は申しかねるが、イタリアでは本のなかの飾り気ない自然さが好まれない。彼らにはつねに誇張と強調が必要である。トマ[7]の『讃辞』、『キリスト教精髄』、『詩的ガリア』、そのほか十年前からわが国の名誉となっているあのすべての詩的作品は、イタリア人のために特別につくられているように思われる。ヴォルテールやハミルトンやモンテスキューの散文は、彼らの心を動かすことはとてもできないだろう。デ・マリーニの絶大な名声がよって立つ原理はこんな具合である。彼は自然に従っているが、距離をおいていて、誇張がまだ彼の心でいちだんと神聖な権利を占めている。彼は二枚目役でイタリア中をうっとりさせた。今日は厳父役をしていた。この手の役柄は誇張を許すので、その点で彼はしばしばわたしを楽しませてくれた。

素朴さはイタリアでは未知の事柄である。とはいえ、誰も『新エロイーズ』には我慢できない。これまでにわたしが遭遇したなかでいちばん素朴さがないのは、マルキオーニ嬢の場合である。情念を内に秘めた若い娘で、毎日出演し、しばしば二度に及ぶ。四時頃には野天で大衆のために、宵には照明を灯して上流社会のために出演する。彼女はわたしを、四時には『泥棒かささぎ』で、八

1　『お人好しのやかまし親爺』はゴルドーニのフランス語喜劇で、一七七一年パリで上演され、その後イタリア語に訳された。

2　『うろたえた家庭教師』（一八〇七）はジョヴァンニ・ジローの喜劇。

3　音楽喜劇『テレサとクラウディオ』はジュゼッペ・マリア・フォッパ台詞、ジュゼッペ・ファリネッリ音楽。一八〇一年九月九日ヴェネツィアで初演された。

4　『恋に狂った女』とは、一八〇九年三月十四日ウィーンで初演されたヴァイグルのオペラ『スイスの家庭』のことのようだ。

5　『フェルスハイムの男爵たち』はピゴー＝ルブランの四巻の小説（一七九八―九九）を翻案した劇。

6　『ふたりの小姓』とはおそらくマントゥフェルの喜劇『オーギュストとテオドール、別名、ふたりの小姓』（一七八九）。

7　アントワーヌ＝レオナール・トマはサックス元帥とかデカルトといった偉人の讃美を得意とした。

8　『フェルスハイムの男爵たち』のなかのせりふ。

9　ジュゼッペ・バレッティの『イタリアの生活様式と習慣について』（一七六八、ロンドン）を指す。この本はシャープの『イタリアからの手紙』の反論として書かれた。仏訳は一七七三年に出ている。

時にはペッリコ氏の『フランチェスカ・ダ・リーミニ』で、激しい感動に達するほど動かした。デ・マリーニ一座で演じているテッサリ夫人は、この手のもので悪くない。その夫のテッサリは気のいい暴君である。

ブラネスは結婚で金持になる前は、イタリアのタルマであった。彼には自然さも力強さも欠けてはいなかった。彼は『ロズムンダ』のアルマキルデ役では並はずれていた。表題と同名のたいそう不幸でたいそう情熱的な女王はペッランディ夫人によって演じられた。彼女にはわたしはいつもうんざりだが、しかしたいへんな拍手喝采を受けたものだ。

わたしが今晩見たペルティカはよい喜劇役者である。とくにドタバタ役で。のべつ上演されるゴルドーニのいちばん退屈な作品の一つ『狂信的な詩人』では、わたしはやたらとあくびが出た。彼はブラントの役ではとても称讃されたし、とりわけ彼がフリードリヒ二世に次のように言う最後のところでは、彼の成功は当然だった。「わたしはあなたに手紙を書きましょう」[8]

わたしの心を打ったのは観客である。かつてこれ以上に深い注意は払われなかったし、ナポリでは信じられないことだが、かつてこれ以上に完全な静寂はなかった。今朝八時にはもう切符がなかった。それで、わたしは三倍も払わねばならなかった。

フランスにおいては音楽以外でもはや存在しない、チュルゴ氏の言う控え室の愛国心は、イタリアの一大滑稽事である。それぞれの町は自分の町の拙劣な作家たちを夢中になって擁護している。

バレッティはすでに三十年前に彼らに対してこうした弱点をあげつらっていた。[9] わたしは二つの例外を認める。彼らがフランスの舞踊の優越性を認めていることと、ありとあらゆる感傷的な愚劣さをもつドイツ演劇の翻訳を、幼児的好奇心をもって鵜呑みにすることである。

フランスの舞踊を称讃するのは、自分がパリへ旅行したということを知らせることだ。彼らはた

いそう鋭敏でたいそう真正な感受性をもっていて、しかもたいそうわずかしか本を読まないので、何であれ対話体で書かれた小説は、出来事がありさえすれば、彼らの共感を得ることはまちがいない。三十年前からイタリアには恋愛小説が現われていない。情熱に心を奪われている男が、この情熱のもっとも好ましい描写にも心を動かすことがない、ということをわたしは知った。文芸新聞といったものはない。R＊＊＊氏はわたしに言ったものだ。「わたしに要塞をください。そうすれば思いきって著者たちに真相を言いましょう」

小品として『ヘンリ五世の青春』[1]が上演されていた。ペルティカは芝居に臨席されていたドン・レオポルド公[2]を大いに笑わせた。しかし、いやはや、ミショーにも比すべき何たる誇張。わたしの隣に坐っていたイタリア人の司祭は、パリでのこの作品の成功を納得できないでいた。「せりふにまどわされて、役柄にまで行かないのです。ヘンリ五世は愚鈍ですよ。」ローマのジロー伯爵は二、三の喜劇作品をつくっていた。『うろたえた家庭教師』、『親切すぎてのやけっぱち』である。弁護士ノータ、ソグラフィ、フェデリーチはあいかわらずドラマに凝っている。そして滑稽喜劇でさえもが、わが国の社交界よりも進歩していない社交界のためにつくられている。ゴルドーニと比べたピカールとは、ピカールと比べたモリエールのようなものだ。

さらにこの分野では、二院制が施行されるまでは、何もイタリアに生まれないだろう。彼らは自分たちのあるがままを出す勇気がなく、まだR・ル・ボッシュの叙事詩の理論[3]の段階にいる。イタリア的コミックはデグランチーヌの『フィラント』[4]の色彩をおびるだろう。

ナポリ、三月五日

わたしは三十マイルの無駄足を踏んだばかりだ。カゼルタ[5]はヴェルサイユと同じくらい厄介な位

1　『ヘンリ五世の青春』はアレクサンドル・デュヴァルの喜劇で、一八〇六年にテアトル・フランセで上演された。スタンダールは二度見たと日記に書いている。

2　ドン・レオポルドはオーストリアのレオポルド二世のこと。この頃ナポリに来ていた。

3　ルネ・ル・ボッシュ神父著『叙事詩論』（一六七五）。

4　デグランチーヌの『モリエールのフィラント』を、「脚本が最良のフランス喜劇」とスタンダールは日記に書いている（一八〇四年八月二十八日付）。

5　カゼルタはナポリの北二十九キロにある町。一七五二年から二十年あまりかかって建てられた王宮が有名である。

6　ナポリ王ミュラは一八〇七年に王宮の改装をはじめた。

7　ポルティチはヴェスヴィオの麓、ナポリ湾岸の町。カポディモンテはナポリの入口に広がる丘陵。いずれにも王の別邸がある。

8　モンテカヴァッロは今日のクィリナーレの丘。その頂上にクィリナーレ宮があり、ここは一八七〇年まで教皇の夏の宮殿であった。現在は大統領官邸。

9　ポルティチの古代絵画美術館の収蔵品は、今日ではナポリの国立博物館に移されている。

置にある兵舎（カゼルヌ）でしかない。地震に耐えるように壁は五ピエ〔約一メートル五十〕の厚さがある。そのためにサン＝ピエトロと同じで四六時中暖かい。今日は建物内の温度計は十六度だった。ミュラはこの宮殿を完璧なものにしようとした。[6] それでもまだパリより壁画は粗悪だし、装飾は大袈裟だ。

気分なおしに、わたしはポルティチ[7]とカポディモンテへ行った。快適な場所だ。それもこの世のどんな国にも見つけ出すことができないくらいの。ポルティチは、モンテカヴァッロ[8]がローマに対して占めている地位を、ナポリに対してもっている。イタリア人は、われわれフランス人がどんな芸術にも野蛮人であると確信を抱き、そのうえたえずその確信を論証するが、そのイタリア人がわが国の家具調度の新鮮さと優雅さに飽きずに感嘆している。

ポルティチの古代絵画美術館[9]から出るとき、わたしは三人の英国海軍のキャプテンが入ってくるのに出会った。ここには二十二の陳列室がある。わたしはナポリへ向けて駆足（ギャロップ）で出発した。しかしマッダレーナ橋に着く前に、わたしは件の三人のキャプテンに追いつかれてしまった。彼らはわたしに、あそこの絵画は大したものだ、世界でもっとも好奇心をそそるものの一つだと言った。彼らはそこで三、四分過ごしたにすぎない。

博学な人の目から見るとたいへん重要なこれらの絵画は、ポンペイやヘルクラネウムから運んできたフレスコ画である。少しの明暗もなく、ほとんど彩色がなく、それほどしっかりした構図もなく、そんなにうまくもない。『タウリスにおけるオレステスとイピゲネイアの再会』と、『ミノタウロスから解放したことでアテネの青年たちに感謝されているテセウス』はわたしを楽しませてくれた。気高さを感じさせる非常な素朴さがあって、少しも芝居じみたところがない。ドメニキーノのまずい絵に似ている。だがこの偉人には見られない構図の誤りが観察される。目立たないたくさんの小さなフレスコ画のなかに、ラファエッロの『サンタ・チェチリア』と同じくらい優れた、五つ

六つの主要な作品が見出される。これらのフレスコ画はヘルクラネウムの浴場を飾っていたのだ。これが十五世紀よりも優れてると主張するとは、学者なんて阿呆であるにちがいない。それはきわめて好奇心をそそるものでしかない。

一八一七年三月六日

『ナポリ新聞』が『ジェノヴァ新聞』に反駁してサン＝カルロ劇場を弁護している。ギリシャ神話のすべての神々や女神、あらゆるラテン詩人がこの記事に引用され、大成功をおさめている。嘘を塗り固めているのだ。

アーバスノットの『マーティナス・スクリブリーラス』[1]は、彼の嘲笑を殺してしまった喜劇として、ロンドンでは忘れられている。『スクリブリーラス』は一七一四年の作品である。一八一七年のイタリアはこの喜劇が頃合だ。したがってわたしが、芸術以外ではイタリアは英国に一世紀おくれていると言ったとしても、もっともなことなのである。

タッデーイ神父（『両シチリア新聞』編集者）はパリのM＊＊＊とかF＊＊＊[2]よりもずっと滑稽である。が、彼はいやらしくない。オーストリアの将軍は彼が人々を悪しき市民たちと呼ぶのを禁じた。これら実直なオーストリア人のゲルマン的良識が、今度ナポリでのおぞましい出来事を回避した。

一八一七年三月七日

わたしは再びデ・マリーニ一座を見に行った。見事な衣裳で、ナポレオンの元老院議員や侍従の古着ばかりだ。この衣裳はなかば成功していた。わたしのまわりにいた人々は皆称讃の声をあげる。

1　『マーティナス・スクリブリーラス』（一七一四）はアーバスノットの諷刺詩。彼はポープやスウィフトと共に、一七一三年頃スクリブリーラス・クラブをつくり、博学をひけらかすものを次々と嘲笑した。

2　Mは『コティディエンヌ』紙主幹のジョゼフ＝フランソワ・ミショー（一七六七―一八三九）、Fは『論争新聞』編集者のシャルル＝マリ・ドリモン・ド・フェレス（一七六七―一八五〇）を指すと考えられる。

3　ギリシャは十五世紀以来全土がトルコの支配下にあったが、この頃独立の気運が高まっていた。一八二一年に独立戦争が蜂起すると、ヨーロッパ中がこれを支援した。

4　一八二六年版では次のように訂正されている。「すべての高邁な魂の持主は熱烈にギリシャの復活を欲している。しかしペリクレスの世紀ではなく、何かしらアメリカ合衆国に似たものを手に入れることになろう」（一八一七年四月七日付）

わたしは妙なうちあけ話を聞かされた。現在イタリアで最良の保証は、フランス人であること、それも職のないフランス人であることだ。

午前零時、ここで医学を勉強しているギリシャ人たちとお茶を飲みに行く。時間があったら、わたしはコルフへ行っただろう。そこでは抵抗が人の魂を練磨しているように思われる。

芸術が栄えるのに必要なものは、国民が幸福になるのに必要なものとしばしば対立する。そのうえ、芸術の支配は持続しえない。なぜなら多くの無為と情熱が必要であるが、無為は儀礼を生じさせ、儀礼は情熱を滅ぼす。

したがって芸術に向いた民族を創造することは不可能であり、このことがギリシャを再興[3]しようとする人々の問題であると思われる。アテネとスパルタの記憶は、この民族の愚かしい虚栄心に特別な色彩をつけ加えるにすぎないであろう。ギリシャを再び建国しても、ニューヨークとかフィラデルフィアのような芸術と相容れない国を獲得するのがせいぜいである。[4] 誰もこのことを思ってもみない。このギリシャ人たちはすでに虚栄心をもっている。青年たちにあっては、これは成長を妨げる錆である。これら滑稽であわれな野蛮人どもは、機械だけにヨーロッパの優越性を認めている。

三月八日

わたしは出立する。わたしはナポリのあらゆる街路から眺められる景色もトレド街も忘れないだろう。ここは、わたしの目には比類なく、世界中でいちばん美しい町である。あえてジェノヴァを対比させるには、自然の美しい眺めに少しも気持を動かされないことが必要だ。ナポリは三十四万人の人口にもかかわらず、美しい景色のただ中におかれた一軒の別荘のようである。パリでは、世の中に森や山があることは思いもかけない。ナポリでは、通りを曲るたびに、サン＝テルモ山とか

ポジリポとかヴェスヴィオの独特な眺望に驚かされる。旧市街のすべての通りのはずれでは、南にヴェスヴィオ山、北にサン＝テルモ山が見える。

目の保養のために誂えてつくったようなこの美しい湾、全体を樹木に覆われたナポリ後方の丘陵、ジョアシャンの崖道を通ってポジリポの村へ通じるあの散歩道[1]、すべてこれらは忘れることも、うまく表現することもできない。ジョアシャンは彼の愚行にもかかわらず、たいへん惜しまれている(御者との対話)。しかしあの喜劇の結末をつけた大臣の才知も認められている[2]。

ナポリでは、カフェのなかまでつきまとってくるあの半裸の連中の無作法に、わたしは少し気を悪くしていた。野蛮人のなかで暮していることをつくづく感じた。これらの野蛮人はちんぴらいかさま師だ。というのは貧しいが性質は悪くないのだ。イタリアで真に悪辣陰険な人間はピエモンテ人である。彼らは、これまでにわたしが出会ったなかで、その特徴をいちばん強く表わしている。ピエモンテ人は、フランス人でないのと同じくらいにイタリア人でもない。これは別な民族なのだ。わたしはアラビアのベドウィン族の黒い天幕の下に見られる顔だちだと思う。ひとたびピエモンテ人が「われわれは友人だ」と言えば、彼にどんなことでも当てにしてよい。ピエモンテとコルシカはさらに偉人を出すかもしれない。アルフィエーリはピエモンテ人の典型である。彼の部屋つき従僕が彼の髪の毛をカールさせるためにひっぱった。すると彼は従僕にナイフの一突きを食らわした[3]。その晩彼はこの部屋つき従僕につき添って眠ったのだった。

カプア、三月九日

わたしは馬車を売り払った。わたしの部屋つき従僕と頭をつきあわせて旅行しようという誘惑にもう負けないことを確信して。わたしの旅仲間の三人の英国人と、ナポリの真髄のあの手この手の

1　この散歩道はミュラの発案で一八一二年に着工されたが、完成したのはミュラの支配が終ってからである。

2　「喜劇」とは一八一五年のミュラの行動を指す。彼はエルバ島を脱出したナポレオンに呼応して、イタリアからオーストリア人を駆逐しようと軍隊を進めたが、五月二日トレンティーノでオーストリア軍とぶつかり、完敗した。ミュラはフランスへ逃がれ、ナポリをオーストリアの手に委ねた。「大臣」とは、オーストリアによって擁立されたフェルディナンド一世の大蔵大臣兼警察長官ルイジ・メディチ。

3　『アルフィエーリ自伝』によると、アルフィエーリが部屋付き従僕にくらわせたのは、燭台の一撃であった。スタンダールはこうしたアルフィエーリの激しい気質にショックを受けた。

4　モデナについて、スタンダールは一八一一年九月二十四日の日記で、「イタリアでわたしが訪れたいちばん清潔でいちばん陽気な町」と記している。しかし、一八一四年、この町がエステ＝ロートリンゲン家のフランチェスコ四世が支配するモデナ公国となるや、その反動的な施政のために、町の様相は一変する。スタンダールはこの町の政治的動揺を観察して、のちに『パルムの僧院』でこれを結晶化する。暴君は一八三一年反乱によって追い出された。

いかさまに降参して、貸馬車に乗る。

ヴェッレトリ、三月十二日

自称才人の男との会話。これはまさにわれわれがフランスで時としてぶつかるあの貴族階級の滑稽さそのままである。現在のことをたずねると、過去のことを答える。すなわち、ヴェッレトリがローマの支配下にあった頃のことを話して、彼はわたしを閉口させた。

ローマ、三月十三日夕

ローマに到着して確信したのは、ヨーロッパの某大国の権力者が、実行すれば彼を充分に満足させたはずのある犯罪を、世の中には回想録を書く莫迦どもがあふれていると考えて思いとどまったということだ。

わたしはこの日記を印刷しようと思いついた。わたしはモデナの独裁的なへぼ大臣どもが、通りがかりの英国人の目に自分たちが正しく見えるよう努めているのを見た。[4] 誰がナポレオンとその廷臣たちに、『ブォナパルテ、その宮廷とその家族』[5]という優れた逸話集で生き生きと記述されるでしょうなどと言えただろうか。一八一七年のどんな大臣も一八二七年になって本に書かれるということの方が、大いにありうることだ。

三月十四日

ローマでいちばん博識の文学者の一人が、アルフィエーリが自伝を書いたことを知らなかった。これは確かに、わたしがかつてロンドンないしはパリの書店で翻訳を見かけた唯一の現代イタリア

5　一八一六年六月十五日号の『フランス新刊目録』に予告された『ボナパルト、彼の家族と彼の宮廷。十九世紀初頭に足跡を残した何人かの人物に関する秘密の逸話』二巻を指す。

の本だ。ある地位の高い人物が画家のカムッチーニに一枚の絵を描くようにすすめた。「ローマの芸術家たちのために、パリではわたしの予算に二十万フランの計上が認められている。わたしが君にたのむ絵には三万フランが支払われるだろう」――「カムッチーニが三万フランのために一枚の絵を制作することを知ったら、ヨーロッパ中はどんな風に言うでしょうか」

三月十五日

C＊＊＊夫人が、午前零時を一時間もまわってから、急遽わたしを呼びよせる。わたしは警察が光栄にもわたしに目をつけたのだと考える。ローマはどの方向も四リュー〔約十六キロ〕の荒地に囲まれていて、逃れることは困難に思われる。C＊＊＊夫人がわたしにマシロン[1]を読ませようと言ったときには、喜ばしい驚きを味わった。それは二百フランで発売されている小説だが、むしろどんなに金を出しても手に入れることができないものだ。二百フランで売られているのは、ナンセンスでいっぱいの手書きの粗悪な複製である。われわれは原本を読んでその晩を過ごした。それはロンドンで印刷された百三十六ページのフランス語本だ。英国に生まれ、ミュラの副官を務めたマシロンは、彼の上官の最後に至る六ヶ月を語っている。(一)わたしはそれが真実であるかどうか知らない。しかしこの話はどんな小説よりも面白い。マルセイユ近くの小さな町での偵察行動は、未来のシェイクスピアたちのテーマとして役立つだろうし、白髪になる頃にはそれが舞台で見られよう。

どうしてわれわれは父親に似ることが望めようか。三十年前だったら、真夜中にきれいな女性に呼ばれた男は、偽の旅券や金やピストルや短剣を入手しようなどとは少しも考えず、別の考えを抱いたであろう。そして三十年前だったら、美しいローマの婦人は家中の知らぬ間に、政治諷刺書を読むために三人の青年を集めたりしなかったろう。われわれ四人で、あわせて百才になっていなか

1　ミュラの元副官フランシス・マシロンの著書『ジョアシャン・ミュラの没落と死に関する興味ある諸事実』（一八一六年ロンドン刊）のこと。スタンダールは『エディンバラ評論』第五十五号（一八一七年三月）の書評でこの本について知り、そこから引用している。

2　パッカ枢機卿は一八一四年から一五年にかけて教皇の国務大臣をつとめた。反動の中心人物。コンサルヴィの権力の増大につれて、あらゆる自由主義的あり方に対立しつつ地位を退いた。「徳高き」は皮肉で言われている。

った。

(一) すべての王位簒奪者が同じ罰を受けますように。

三月十六日

四旬節のあいだローマでは音楽に聞くべきものがない。新聞には、喜劇とか風俗についての政治とあまりに密着した考察しか見あたらない。わたしのコンサルヴィ枢機卿に対する敬意と称讃は、彼がどんなに賤しい連中に囲まれているかをよく知るにつれて増大する。神よ、なぜ英国にはこのような大臣がいないのでしょう。

教皇は自分の救霊をしたいと思っている。そしてコンサルヴィ枢機卿には自分より統治能力があると率直に信じて、彼に俗界の独裁権を委ねている。宗教界の独裁権はウルトラ派の手中にあり、こちらは指導者に徳高きパッカ枢機卿[2]をいただいている。この派は月に二、三度、宗教上の事柄で教皇と仕事をするが、その際教皇に、コンサルヴィ枢機卿のやり方が教会のしもべたちのあいだに地獄堕ちの者の数をふやす傾向にあると述べる。すると教皇は、目に涙を浮べて、彼の大臣と話しあいをおこなう。

大臣の方は次のような手短な言葉で答える。「わたしが隠れた犯罪だと審判するのは、それがいずれは法廷の関知するところとなるものだからでして、聴罪司祭の報告を受けてのことではございません。神のお目には、神の法を破るにまかせるあらゆる犯罪の責任は、支配者にあるとうつります。犯罪と全般的ないかさま精神は、フランス支配下では三分の二に減少しておりました。それがわたしに先だつウルトラ派の支配下で、悪徳は復活しました。わたしはフランス人のやり方に戻し

ました。すでに殺人は年に三百件少なくなっていますし、合計するとおそらく地獄堕ちの者は六百人少なくなっています」

このえらい大臣の慎しさと清廉さに勝るものはないので、敬うべき教皇は普通最後には涙にくれて彼をかき抱き、しもべの魂を彼に委ねることになる。

枢機卿の四分の三はとても敬虔である。しかしわが国の大政治家のように、彼らには孤独の体験しかない。彼らが人間について知っていることといえば、十六世紀の歴史で学んだことだ。彼らは自分たちの生きている世紀のことを思ってもみない。ローマで若い者は皆、宗教の原理に別の形式を付与しなければならないと感じている。もし形式が内容を損い続ければ、源泉は涸れ、湧水は隠れた水路を通って現われ、このうえなく突飛な迷信をつくるに至るだろう。旅をしている若い司祭たちは、この世界でまだ宗教がある唯一の国は英国であるということで、わたしと意見の一致を見た。

わたしはコンサルヴィ枢機卿がこの問題を同じくらいに展望しているかどうか知らない。確かなことは、彼が教皇になれば、宗教はあらたな力強さを取戻すのが見られるだろうということである。もしそれがフォンターナ神父とかパッカ枢機卿であれば、敬虔な魂の持主たちはそのもっとも誤ったやり方に悲鳴をあげねばならないだろう。コンサルヴィ枢機卿は、俗人を当局に入れたことと、それ以上に彼の定めた法令の有名な前文[1]のために、同僚みんなから憎しみをかっている。おまけに、彼はいわば一軒の茅屋へ通じる見事な柱廊なのである。

はじめさもしい野心家と思いちがいをしたある司祭に説明されて、わたしは最後に、ローマが自由主義政体になればそれはきわめて血みどろな無政府状態のはじまりであるということを納得した。彼とわたしは、もしあの徳高き人に非難の余地があるとすれば、三ヶ条から成る憲法を試みないこ

1　行政機構についてのピウス七世の教書のこと。これは一八一六年七月六日付で発せられた。

2　ブッチ本のマルジナリアに次のようにある。「ローマのブルジョワ階級の低級さ、狡猾さを想像するのはむずかしい。この恥ずべき色あいは芸術家の性格のなかにまで見られる。イタリアでわたしはたびたび若いローマの芸術家に会ったが、彼らは女たちに養われていた。神権政治の習俗とはこうだ。名誉は罪過にすぎない」

3　ブッチ本のマルジナリアに「十二月十日から一八一七年一月二十二日まで」とある。この記事は『ローマ日々新聞』第百二号（一八一六年十二月二十一日付）に掲載されている。

とだ、ということで意見があう。すなわち

「十七の地方はそれぞれ十名の議員候補者を選出して、このなかから政府は下院を構成するために五名ずつを選ぶ」

「上院は毎年政府によって任命され、三分の二の枢機卿と十名の有産階級の者によって構成される」

「この両院が租税を議決する」

しかし知識階級では無知が手の施しようもないほどであり、[2] 庶民にあっては悪辣さが深く根をはっているので、こうした憲法でさえもおそらく無謀なことなのだ。彼らにはドゥロルムを読んだことのあるティトゥスといった人物が必要であろう。

低俗な本に印刷されていることしか知らない阿呆どもは、フランスとイタリアを支配しているのが同じキリスト教だと思っている。

ヨーロッパには国家と同じ数の宗教がある。ローマとナポリでは、効力のある唯一の法律が宗教なのである。公明正大な連中だ。ローマとナポリを見てキリスト教の精髄を判断されたい。

フランス、英国、プロイセンの文明の二十分の十九は出版の自由のおかげであり、一方当地では出版物は嘘しか言わない。わたしはローマの社交界全体が新しい奇蹟に心を奪われているのを見た。神の使いが金曜日にある宿屋に現われた。人々は彼に鳥の焼肉をそなえた。彼が祈禱をはじめ、十字を切ると、鳥は鯉に変わった。(『ローマ日々新聞』第……号参照。)[3] 教皇聖下はこうした神の御心のあらわれに感動して、鯉を食べてその後亡くなったその聖なる人物を、至福聖者の列に加えた。有名な画家ランディは、教皇のためにその奇蹟を絵に描く務を負わされた。わたしはその絵をヴァチカンで見た。

わたしは社交界で誰かが鳥の件を否定してくれることを期待している。そしてわたしは大きな賭に勝つつもりだ。

考えることは苦痛だ。社交界からは称讃によって報いてもらわねばなるまい。ここでは、考えることは一つの危険だ。そして、わが国の地方の町と同じく、ひとたび才知ある男ということになると、あらたな骨折りなど何になろう。欲するように女と関係を結ぶことができる。だが不信心をあらわす冗談を引き出してきたりしてはいけない。宗教がなかったらローマはどうなるだろう。

同じ理由によって、ローマの労働者からは、労働を除いてすべてが手に入るだろう。彼らは施しもので生活するのに慣れ、また陰謀が大きな富を生むことを知っている。彼らにとって大切なのは、有益な工場を建ててこれを繁栄させることではなく、教皇とか大臣を務める枢機卿とかの下僕のいとこになることである。一八一七年にはこれらの希望はあまり現実的ではないだろう。わたしはそれがわかっている。しかしこうした忌まわしい行動原理を非常に狡猾な庶民に授けたのが、最近二世紀の政治なのだ。ローマで財をなす職人は皆よそ者である。

ルスポリ館のカフェでは、行くたびに充分に金を払っても、席のテーブルを拭いてもらえない。ボーイは仕方なしに給仕する。彼らは動きまわらなければならないことで、自分たちがいちばん不幸な人間であるかのように思っている。このことは、ローマの人がこの穴ぐらをヨーロッパ第一のカフェとして引きあいに出すのを少しも妨げない。なぜなら、このカフェは大きな館の一階全部にあたる十九の煤けた部屋を占めているからである。パリの人間には決してローマの不潔さを想像できないだろう。そこには胸像や大理石像があり、格子窓で接する庭園には実をつけたオレンジの樹が林立している（一八一七年二月）。蜘蛛の巣やほこりにまみれたこの壮大な全体は、人の魂を悲劇のなかへと投げこむ。

1　『絵画史』第百二十九章の注に次のようにある。「それ〔フランスにおける世論〕は多くをダヴィッド氏に負っている。わが国の印紙、わが国の十サンチームの貨幣は、美の雛形であり、しかもこれはおそらくもっとも人の目にふれるものだ」

2　ボルジア室はヴァチカンのニコラス五世宮の二階、つまり有名なラファエッロ室の下を占めている。一八一六年、それまでフランスに没収されていた教皇所有の絵画が返還されるや、ピウス七世はそれらをこの部屋に一堂に陳列して、一般の鑑賞に便宜を計った。

3　コルヌミューズ吹き（ピッフェラーリ）は毎年クリスマスにアブルッツォの山地から降りてきて、三月中頃までローマに滞在する。

すべてのローマの館邸は同じ外観をしていて、その結果、フランス人によって整備修復されたモンテカヴァッロと完全な対照をなしている。わたしはローマの人に言ったものだ。「お国の絵がわれわれにとって何の役に立っているかをお見せしましょう。ごらんなさい。わが国の貨幣を、わが国の印紙を。[1] 決してお国の人たちは、それらの傑作を何か新しいものに利用できないでしょう。バイオリンの弓のよさはどうでもよく、改革しなければならないのは楽器本体です。」パリから取ってきたすべての絵はヴァチカン宮殿のボルジア室にある。[2]

三月十七日

わたしは毎朝三時のコルヌミューズとピッコロのいまいましいコンサートにも目が覚めきらないのにまったく驚いている。聞くところによると、それはクリスマスの二週間前からアブルッツォを出てきている農民たちだそうだ。[3] キリストの生まれた馬小屋に同様の音楽演奏者たちがいたので、信者が町中を起こすために金を出して雇っている。実際、彼らの変化に乏しい音楽はとても独創的で、とても調子がそろっている。しかし目を覚まされるのはやりきれない。再び眠りにつくと、そのとたんにブランデー売りが、特異な短いちょっとした音を鳴らして、前にもましてはっきりと諸君を目覚めさせる。ある枢機卿がわたしに言うには、これは寓話滑稽劇でローマ人を魅了したのと同じメロディ、同じ楽器である可能性が強いということであった。アルレッキーノやパンタローネといった役柄についても、事情は同じである。わが国中世の腿甲や腕あてのようなものでも、エトルリアの壺と並んでカラブリアのギリシャ人の墓のなかに見られるのだ。

エトルリアの壺については、わたしはナポリのストゥーディでミュラ夫人のコレクションを見た。壺がうまい形にできているからには、これは近代の贋作である。——新聞のいつもながらの嘘っぱ

ち。二年前に、これらの壺を収める戸棚に千ドゥカーティの金が割当てられた。管理者はまだ六百ドゥカーティしか引き出すことができない。しかしタッデーイはこれらの数字にやたらに零をつけている。タッデーイごときがどうして嘘を言わないだろうか。わたしはナポリのところでストゥーディにある『アリステイデス』の着衣像[1]について話さないという誤りを犯してしまった。しかし、好奇心がもとで感動に精根を使い果たすという事態が生じる。帰国したら死んでしまう。

まことに称讃に価するこの『アリステイデス』は、ジェノヴァにある『ウィテリウス』の胸像と同じで、反理想的な様式をしている。少し腹が出ていて、着衣である。そのうえ、このかわいそうな貴人はヘルクラネウムの熔岩でたいそう焼けただれていて、ただの石灰岩も同然である。それは石の台の上に載っている。英国人たちが食後はねまわり、その台に飛びつく。一歩まちがえば、像に触れることになり、像は灰塵に帰するだろう。わたしはこうした困った事態が管理人たちをたいへん悩ましているのを知った。どうしてこの種の心配をはっきりと口に出すことができようか。結局、これらの紳士方の食事時間を照会しようというう まい考えが浮んだ。そして彼らが二時前には決して酒を飲まないことを知ったので、ストゥーディの閉館は、四時から二時に変更された。わたしは以上の事実をしっかりと確かめた。何人かの守衛が、台の縁三ピエ〔約九十センチ〕の高さのところにできた長靴による損傷をわたしに示した。

ここローマでは、ヴィッラ・マッテイにある平和公所有の『セネカ像』を見た。わたしがかなり軽蔑しているこの有名な哲人は、世に知られているぞっとするような顔つきをしていなかった。とても礼儀正しい人といった顔をしていて、それに美しくさえあった。わが国の昔の宮廷人がもっていた殿様ぶりが見られる。

わたしはトルヴァルセンに会った。彼はデンマーク人で、カノーヴァのライヴァルと見なされて

1　このアリステイデスの着衣像はアトラスの群像の一つである。ストゥーディ、すなわちナポリの国立博物館所蔵。

2　トルヴァルセンのフリーズは『アレキサンダー大王のバビロン凱旋』（一八一二）。

3　この絵は『十字架降下』（一七九七）である。

4　『半獣神と若いフルート吹き』はヴァチカンにある『パンとアポロン』と考えられている。これは獣姦を、そして『半獣神とカペラ』は男色を表現している。スタンダールも読んで知っていたアルノー師の著作では、後者について次のように解説している。「山羊の態度は自分が受けている愛撫にかすかな抵抗を示している。あたかも半獣神の欲望に腹を立てようとしているかのように、またさもなければ、自分がもっと立派なものの寵愛にふさわしいと信じているかのように」

いた。今は亡きショデの影響を受けた人である。クィリナーレ宮にはなかなかのフリーズ[2]が、彼の家にはいくつかの浅浮き彫り、なかんずく『眠り』がある。カノーヴァ侯爵には百三十の像があるが、それは美の新しい様式の創造である。彼は美しい鼻のために上唇を犠牲にする。これをとても小さくつくっている。そうすることによって容貌が台なしになるので、これを額の美しさとか、子供の頭部を大きくすることによって補っている。

しかしカノーヴァはあまりに偉大なために反対派もなくはない。たとえば、不幸なことにフランスのすべての若い芸術家には嫌われている。彼はわたしに自分の生まれた村（ポッサーニョ、一七五七）の教会のために描いた絵[3]の複製画を見せてくれた。彼は、もはや一介の老人ではない至高者の姿のために新しい理想美を創造しただけでなく、その広大さを表現する独特で適切な方法を発見した。この方法はどうしても述べにくい。わたしは寝る。複製画を買いたまえ。

もう一つ、久しい以前から書かずにいて気が咎めている考えがある。われわれはうぬぼれているが、古代人を少しも知らない。ストゥーディの中庭にある墓石の無類の卑猥さ。墓石に刻まれたプリアーポスにお供えを！　別の例、『半獣神と若いフルート吹き』、『半獣神とカペラ』[4]。後者はパレルモから戻ってきたが、そこでは十六年前からコッレッジョの絵と一緒に荷造りされて眠っていた。古代人やその芸術についてのわれわれの論議くらい面白いものはない。われわれは検閲で削除された平凡な翻訳しか読まないから、古代人のなかでヌードが崇拝されていたことがわからない。われわれのあいだでは、これは反撥を招く。フランスにおける俗悪さは、女性的なものにしか美という名を与えない。ギリシャ人には少しの気取りも見られず、近代人にとっては嫌悪すべき愛がしょっちゅう見られる。オタイチ〔タヒチ〕の住民はわが国の芸術からどんな考えを抱くだろうか。わが国で気取りに起因するもの一切は、彼らの目には見てとれないであろう。

古代芸術を知るためには、たくさんの平凡な像を見たり研究したりしなければならない。ローマやナポリ以外ではどんなところでも、この研究は絶対的に空しい。プラトンとプルータルク全部を同時に読まなければならない。

笑止なことにわれわれは芸術面でギリシャ的趣味をもっていると主張する。ギリシャ人たちの芸術に対する感受性を鋭くしていた肝腎の情熱がないというのに。

ローマ、一八一七年三月十八日

ローマの社交界の楽しみについて、ド・ブロス(一)やデュクロで読んだ[1]ことはどれもさっぱり理解できない。今や社交界の名残りもない。今晩、わたしは英国人たちとホイストをするはめになった。社交界で各人のもつ権利が、時の経過にしたがって確保されるなら、それをもてあそぶのも趣味のよいことになるにちがいない。退屈がそうすることをやむなくする。今日、全体的な大混乱のあとでは、自分の権利維持に気をつかうのはたいへん手間のかかることである。

枢機卿は、二頭の痩せ馬にひかせた赤い車体受けの古い四輪馬車でやってきて、ベルニやアクァヴィーヴァといった人たちに払われたような敬意を社交界で得ようと欲している。六十万リーヴルの年金がある王侯が彼を嘲笑する。しかし彼は教皇の軍隊の連隊長を見つける。その男は昔は従者みたいなことをしていたが、今ではモジャイスクおよびモンミラーユ[2]連隊長である。二人は眺めあう。誰もこの男が今の地位を保持するとは確信していない。ヨーロッパの隅から隅まで不満が蔓延している(二)。わたしはバタヴィア人とローマの人の口に同じ話題がのぼるのを知った。どこでも議論は次のような言葉で終る。「誰が二十年先に起こることを予言できましょうか。」　社交界はベネディクトゥス十四世治下のローマの社交界そのままであり、暇人の慰さみである。庶民は、要求して

1　ド・ブロスの『イタリア書簡』と、デュクロの『イタリア紀行』（一七九一）を指す。

2　モジャイスク（ロシア）をミュラが陥落したのは一八一二年九月九日、モスクワ入城の一週間前。ナポレオンがロシアとプロイセンの連合軍をモンミラーユ（フランス、シャンパーニュ地方）に迎えて戦ったのは一八一四年二月十一日。この日から五十日もたたないでパリ開城になる。

3　スタンダールはアントワーヌ・セリエ（一七五五―一八二九）がド・ブロスの『イタリア書簡』の原稿（コピー）を入手した方法を言っている。セリエは亡命しようとしていた一貴族の荷物のなかにこのコピーを見つけて、これをちょろまかしたと言われている。これを譲り受けたポンチュー書店が、セリエの付注で一七九九年出版した。

4　一八一七年六月二十一日号（十五日号というのはない）の『メルキュール・ド・フランス』に、ベナバンという署名入りの「政治」と題する記事があり、そのなかに次のような一節がある。「ヨーロッパのいくつかの国に不安と焦慮があり、それらがある点では頂点にまで達しさえしていることを、一人一人が認めねばならない」

5　教皇はピウス七世。

いる自由が手に入って二十年してからはじめて暇になるだろう。

フランスは多くを失い、イタリアはほとんど何も失っていない。ここではあいかわらず恋愛をしている。それも三十年前よりいちだんと情熱的に。

(一) 八折本三巻。ポンチュー、マチュラン街三三〇、第七年、(原稿が盗難にあった)[3]

(二) 『メルキュール』一八一七年六月十五日号。[4]

三月二十日、日曜日

女性は公式には教皇[5]に会うことができない。しかし毎日曜の一時に教皇聖下はヴァチカンの庭園を散歩して、その通りすがりに外国の婦人たちに会う。今日は六十人もの英国人女性がいて、そのうち三、四人はこのうえない美人だったが、みんな堅苦しい様子をしていた。すべてはとても滞りなく運んだ。わたしはといえば、教皇に愛情を覚える。そしてコンサルヴィ枢機卿の政治に対するわたしの敬意とは別に、わたしは教皇が一世紀も生きてくれることを願った。

昨日、わたしは友人の司祭とヴァチカンの同じ庭を散歩した。われわれは教皇聖下にばったり出会い、わたしは少しもいやな気持をもたないで地面に跪いた。われわれから二十歩のところで、一人の偽善者づらをしたのが教皇の膝もとに駆け寄るのを見た。わたしは誰か罪人の恩赦を求めているのだと思った。全然そうではなく、その黒い顔は祝福を求めているのであった。こういったことはもはや効き目がないのだ。わたしの友人の司祭がすぐにこう言った。「あれは昔の慣わしです。それに、誰かが教皇聖下に紹介されると、教皇の従者たちが翌日この名誉を受けた人物と浮かれ興じるということが、教皇聖下にもやっとわかりました。この儀式はある国民にはたいへんいやがら

れていました。予約制だったのです。紹介された人はそれぞれ従者たち用に定まった額をあげるのですが、この報酬は紹介する人の手に委ねられますし……。」 わたしはローマでは何事も秘密にしておけないことがわかった。

わたしはパリでとても細心な男を知っているが、彼は何か情報を求められるとそれを口頭で伝えるために一リュー〔約四キロ〕の道をやってくる。人がこれにびっくりすると、その男はそっけなくこう答える。「決して手紙を書いてはいけません。」 これはローマの人からの受け売りである。わたしの友人の司祭は、ある出来事が起こると、第一の問題、しかもなかなか決し難い問題は「それが手紙に書くべき事件であるかどうか」であるとわたしに言ったものだ。

わたしの日記のなかの政治的なものは公表できないと諦めている。わたしは今日英国議会の議員M・H＊＊＊に会った。[1] 彼はわたしとちがってこの方面を扱うのにとても好都合な立場にある。六万リーヴルの年金があり、それがどんなものであれ、真実を知る情熱に時間や財産を犠牲にするような好青年は、英国以外では見られない。われわれはある古書店で知りあった。われわれは共に公刊されたミョリス将軍の政策記録を探求していた。同じ考えが多くの人に浮んだと見える。われわれはこれをとても高く買わされた。問題はこうだ。イタリアにおけるブォナパルテの影響はどうであったか。われわれ、M・H＊＊＊とわたしは、彼がローマの美化に当てた金額について一千二百万で一致する。同時に、彼の財政局の下っぱ役人どもは三、四百万を市民からまきあげていた。このことが市民をやけっぱちにしたのだった。ブォナパルテは誰とも話をしなかったので、彼が雇っている人間たちを知ることができなかった。フィレンツェには偶然好ましい行政官がいた。ハンブルグとかローマの行政官はティトゥスをもぞっとさせたことだろう。

わたしは今しがた、白い衣裳をつけ三本の角のついた帽子をかぶったプレモントレ会の少年たち

1　M・Hとはホッブハウスだろうかブルームだろうか。仮定は分かれている。

2　ベファナは一月五日の夜にやって来て子供たちに贈物を与えると信じられている老婆。ローマではベファナとルー・ガルー（狼の姿をした魔法使い）が混同されているのだろうか。

3　一八一二年十一月九日、スタンダールはスモレンスクから友人のフェリックス・フォールに宛てた手紙でこう書いている。「僕はこの絵のような町にまたやって来た。しかもこの町はこの点であい変らず独特に思えるんだ」

4　ブッチ本マルジナリアに次のようにある。「ローマの地形的様相――ローマ建設の百三十八年後には、丘々のあいだにまだ溜池があった。ヴェイィ〔ローマ近くのエトルリアの都市〕占領後は人々は不健康な土地を去ってヴェイィに行こうとした。ところがヴェイィでは土地を略奪することができないと見た貴族たちが、これを邪魔した。かくも積極的でかくも質実な人民のなかに出た多くの犠牲者から見て、この頃から悪い空気があったということが推則される。ローマはまずい土地が選ばれて建設されたのだ。隣接する山々が今日ではとても好ましい状況を与えている。ロムルスの時代にはおそらく唯一の空いた土地であったか、それとも、迷信から、自分が危険にさらされた土地をロムルスが選ん

六十二人の長い行列にぶつかった。いちばん年長でも十五才になっていないし、大部分がやっと十才で、何人かが七、八才である。若者をひき入れるこうした手だてがないと、修道者の団体は消滅してしまうだろう。

今日の日曜日、わたしは飢えで死ぬところだった。わたしはコロセウムの附近でサン＝グレゴリオの礼拝堂やグィドの感動的なフレスコ画、とりわけ『天使の合唱』を、われを忘れて眺めていた。わたしは飢えで死にそうになりながらローマの町なかへ戻った。ルスポリの大カフェにくるが閉っている。晩課の時間なのである。「何時に開くだろうか」――「五時だ。」危険が急迫していた。わたしは飢えで倒れそうだった。すべてのパン屋、すべての飲食店が閉っていた。幸いにも、わたしの御者が彼の家に連れていってくれると言う。そこでイナゴマメ、これは馬にやる実なのだが、それと湿ったパンにありついた。このパンがわたしには上等に思われた。わたしはこの御者のところで、ローマではベファナ[2]が狼の姿をした魔法使いに変っているのを知った。子供たちはこの名前を聞いただけでふるえあがる。元日に子供たちへ贈りものをするとされているのがベファナなのだが。

三月二十二日

スモレンスク[3]の次に、海辺にない町でわたしの見たいちばんきれいなたたずまいはローマである。[4]それと同時に、民衆はいちばん文明化されていない。わけあって書き写さないが、二百もの逸話から、サン＝ピエトロの遺産の住人よりも、エリー湖の未開人を文明人にするための努力の方が少なくてすむ、とわたしは堅く信じている。

今晩、銀行家のトルローニャ公爵の家で会った＊＊＊の大使に以上の思いやりのある考えを伝えたところ、彼はわたしがスペインにはもっとうんざりするだろうと言った。しかしながらスペインだのか、それとも、ヴェネツィア人のように、敵を近ずけないために、近寄り難い土地を選んだのかである。それがどんなであるにしても、不健康で司祭たちによって汚された精神をもつ町は、この一千八百万イタリア国民の首都にふさわしくないだろう。この国は、フランスが助産婦として四個連隊を彼らに送れば、すぐにも誕生しよう……」

はアウグスト・アルグエリェスのような人物を生んでいる。勇気については、ネーリ大佐やパロンビーニ将軍といったファビウスやスケヴォラにも匹敵する百人ものローマの将校に、フランス軍は遭遇したものだった。

ローマ、一八一七年三月二十六日

封建制度擁護のために、自由思想擁護のブルーム氏と同じくらい力強い人物がいれば、その人に会いにわたしは喜んで五十リュー〔約二百キロ〕の道を行くであろう。あの偉大な政治家との会話はわたしを幸福にするが、彼はあまり話さない。ローマの人の聡明さはこの人物に敬意を払うことを心得ていた。英国の優れた人々は態度に飾り気がなく、称讃すべき自然さがある。わが国では、戦争で手柄をたてた人はすぐに、一つの役割を演じなければならないと思いこむ。わたしは＊＊＊元帥に紹介される。わたしは彼のたてた勝利のことで頭がいっぱいだった。彼の方は政治と役職のことを考えていてわたしをうんざりさせる。大臣にしてもらっている連中のなかでも、背丈で人目を引こうとしてつま先で立つ小人物がいることを考えながら、その場を離れた。

チヴィタ・カステッラーナ[1]、三月二十七日

自由がなければローマは滅びるだろう。空気汚染（アリア・カッティヴァ）が毎年進行している。ヴィッラ・ボルゲーゼ、マリオ山頂、ヴィッラ・パンフィリといった三十年前にいちばん健全と見なされていた場所が、冒されはじめている。一七九一年に十六万六千人の人口だったローマは、一八一三年にはもう十万人しかいない。この差をピウス六世の施政に帰したがっている人がいる。わたしは少しもそんな風に思わない。この教皇はルイ十四世のような君主であった。華美に属するものはすべてうまく運んだ

1　スタンダール氏は往きにはシエーナ経由でフィレンツェからローマへ直行する道を選んだが、帰りはペルージャ、アレッツォを経由する道をとっている。

2　残忍な男とはナポレオンを指す。但し、この表現にスタンダールの感情がそのままあらわれているとはとるべきではない。

3　ポープは『人間論』のエピグラフに「人類の学ぶべき正しい対象は人間である」*The proper study of mankind is man.* と述べ、個人を知ることによって人間全体を知るという考えを述べているが、スタンダールはポープの文章のなかの二つの言葉を入れ換える。彼にとっては、人間全体を見わたすことによって個々の人間を知ることになる。

4　この原注はディヴァン評釈版では三月二十九日の最後におかれているが、理由は不明。

5　ブッチ本マルジナリアに次のようにある。「わたしはトルコ人たちを観察するのが好きだ。なぜならそれが文学をもたない民族だからだ。

「……イタリアはわたしが人間についてめぐらす夢想のなかのあの空白をほぼ埋めてくれる。そこでは人はあまり読書をしないので、機会あるごとに繰り返される約二十あまりの名前を除いて、大多数の人々は文学に少しも影響されないと言うことができる。彼らの言葉、彼らの行動は情熱の純然たる結果で

が、正義が、この民族のいちばん必要とするものが、おこなわれなかった。どうかマシロン事件を研究されたい。空気汚染（アリア・カッティヴァ）については、自由かそれとも優れた独裁者が必要である。一八一三年に、プロニー氏はポンティーニの沼沢地をローマ人支配下の状態に復元しようとし、またローマの野に植林をしようとした。これは、あの残忍な男[2]についてイタリア人たちに錯覚を起こさせるあの手のおこないに属している。(一)

(一) ある男がポープにならってこう考える。「人間の学ぶべき正しい対象は人類である。[3]」彼は諸国民の道徳上の様々なあり方を記す。しばしば彼の目には、こうしたあり方は道徳上の病気の症状である。医者が観察のために病気に近ずくからといって非難されようか。もし偶然から彼がジャコバンと会ったら、マラのように考えるからといって彼は非難されようか。というのは彼は、そこにはジャコバンがいるか、と言うからである。[4]

ペルージャ、一八一七年三月二十九日

われわれがペルージャを出立するにあたって、英国人の福音派牧師が、敬虔に天を仰いで、ナポリとローマの住民を呑みこむために大地が裂けるようお祈りをする。これはとても真剣であった。なぜフィレンツェには文明が定着しないのだろう。ローマとナポリはヨーロッパ風に衣をつけた野蛮国である。ギリシャや小アジアへ行くのと同じで、ただそれ以上の警戒心をもって旅をしなければならない。トルコ人はナポリのヨーロッパ人よりもずっと正直である。[5]

フィレンツェ、一八一七年三月三十日

わたしはモンベッリ一族によって歌われた『エヴェリーナ』[6]を聞いた。この神々しい音楽は旅の

ある。彼らは、月に一、二度、たまたま文学に話が及び、彼らがアリオスト、タッソ、アルフィエーリなどの名を出す時以外には、決して本を読まない。新聞は二十年前から少し例外になっている」

6 『エヴェリーナ』はカルロ・コッチャのオペラで、一八一四年ミラノのレー劇場で初演。

道づれの英国人や政治がわたしに与えた暗い気分をすっかり追い払った。わたしは疲れていたが、楽しい夕べだった。

三月三十一日

通常、崇高な音楽をまずく歌うのが聞かれるものだ。『エヴェリーナ』はオシァンの逸話であり、これにロッシーニの模倣をしたかなり平凡な音楽（コッチャ作曲）がまとわされている。しかしこれはたいへん神々しく歌われたので、この芸術が生じさせることのできる最大の効果に達している。

エステル・モンベッリはスコットランドのある島の王様の娘だ。王様は彼女を、残忍で勢力家の武将である隣島のあるじに嫁がせ、彼女にシヴァール青年を忘れるように命じる。恋人の青年をつとめるアンナ・モンベッリが島に上陸すると、彼の恋仇きに急襲され、死刑を宣告される。恋人たちに会う機会が訪れる。アンナ・モンベッリは恋しい女に向かって歌う。

もしもわたしがおまえの胸のうちで甦るなら、
わたしが死ぬというのはほんとうではないのではなかろうか。

これは死に赴く高潔な魂のもっとも美しくもっとも愛情深い心の動きであり、忠実に、そしてわたしの想像もしてなかったことだがあえて言うなら、明晰に描かれていた。これだけがイタリア旅行をする値打である。わたしは自分が浸った激しい幸福感をどう描いたらよいのかわからない。

わが英国人の例から察するに、イタリア以外では二人のモンベッリ嬢を見て、「それだけのことなの」と言われるだろうと、わたしは心の底から確信した。観客に不信を抱くようになったら、こ

1　『デメトリオとポリビオ』はヴィンチェンツィーナ・モンベッリの台本によるロッシーニの処女オペラ。一八一二年五月十八日ローマのヴァッレ座で初演された。ロッシーニは十七才であった。

のかわいそうな少女たちはもはや卓抜な躍進をなくすだろう。わたしは二人を社交界で見た。モツァルトのように、たいそう弱々しそうで、痩せていて、沈黙と謙遜しかもっていなかった。

四月七日

一週間前からわたしの夕べは『エヴェリーナ』と『デメトリオとポリビオ』[1]だけに占領されている。後者ではアンナ・モンベッリは次の崇高な詠唱を歌う。

「心は喜びでいっぱい」

「この心は君に愛を誓う」

彼女の妹のエステルは情熱の大きな動きに適役である。音楽は五回目か六回目の上演ではじめてその魅力をすべて発揮したように思える。わたしは音楽の力を理解しようとする。

これらの声は、人生におけるすべての平凡なものの彼方へわたしを運んでいく。それはまさに、ラファエッロが彼の最高の手法で聖母のなかに描きこんだ純粋さである。しばしばそれは彼の弱さにもなっている。二人の少女の声はそれほど大きくないが、発声の方法によって、ありったけの奇蹟を生み出している。

現代の女流声楽家と較べれば、彼女らはフェヌロンの様式とドゥムスティエの文章である。わたしがそれは三十年前にはやった方法だったと思うのも無理からぬことだ。当時は音楽が万人の心を専制的に支配していた。わたしは比類なきパッキャロッティが歌うのを聞いたことがあったが、そこにモンベッリ一族の様式を認めたものだ。姉妹の先生は父親であり、その父親は、われわれがひ

と昔前にイタリア旅行をした頃に見かけたあの有名なモンベッリである。彼は歌うのが苦手である。『デメトリオとポリビオ』の音楽はロッシーニと彼の作品である。

四月八日

ギータ、こんな風にイタリアでは貴婦人たちを洗礼名で呼ぶのだが、彼女の桟敷席でのロドヴィーコ・ディ・ブレーメ[1]氏との会話。

不幸にして人間というものを知った哲学者は、彼が人間を知ることを学んだ土地をいつもひときわ軽蔑する。わたしの故郷の方言はわたしにあらゆる下劣な観念を提供する。知らない方言はわたしにとって一外国語にすぎない。この第二の原理から、多くのイタリア人、とくに高邁な魂の持主は、彼らの祖国に対して不当に厳しくなる。一見すると、外国人は彼らが憎しみを抱いていると思うかもしれないが、こうした魂の持主たちは愛すればこそ憎しみを抱くのだ。彼らの熱愛しているものの堕落が、彼らに悲鳴をあげさせる。

四月十日

わたしはたった今、才知ある人々とカッシーネ[2]を三時間散歩した。わたしは自分の考えたことを失念しないように、彼らから逃れてきた[3]。

十四世紀には、ヴェネツィア、フィレンツェ、ローマ、ナポリ、ミラノ、ピエモンテといったイタリアのいくつかの地方は、ちがった言葉を話していた。自由のあった地方はいちばん美しい観念をもち、それはまったく当然のことながら、その地方の言葉が他の言葉を制した。不幸なことに、この勝利した言葉は張りあった他の言葉を根絶やしにしなかった。したがってイタリアの書き言葉

1　ミラノのロドヴィーコ・ディ・ブレーメはスタンダールを自分の館や劇場の桟敷席へ招いたことで有名だが、イタリアにおけるロマン主義運動の立役者であった。

2　カッシーネはアルノ河右岸にあるフィレンツェの散歩場。

3　ブッチ本のマルジナリアに次のようにある。「わたしは一人の学者に会う。彼はそうとは知らずに、イタリア語に関してわたしの喋ったことに証明を与えてくれる。

「わたしは数人のかわいらしい女性たちとの会話よりもわが衒学者氏との会話の方が好きであった。そして彼はといえば、同じ長椅子にわたしを引き留めたことにすっかり得々として、わたしのために彼の博識の宝物を浪費してくれた……。歴史がはじまった頃にイタリアは今日と同じく当時も外国の蛮族に侵略されていたことは知られている……。ローマ人以前には、要約すると六つの古代イタリア語があった。すなわち、エトルリア語、エウガネイ語、ヴォルサイ語、オスク語、サムニウム語、オンブリア語である。言語は非常に根深い習慣であり、また人間は習慣を変えない……。イタリア語は、ラテン語が長い使用によって変質し磨かれたものでしかない。それにいくつかのギリシャ語、スラヴォニア語が加わった」

4　スタンダールのイタリア語に関する見解は、ミラノのロマン派に属する人たちとの

は、フィレンツェやローマ以外では、同時に話し言葉になっていない。そのほかのすべての土地ではつねにその地方古来の地方語が用いられる。そして会話のなかでトスカーナ語〔共通語で、いわゆるイタリア語〕を話すことは滑稽である。[4]

手紙を書く人が辞書を開く。すると単語は決してそんなに仰々しくもなく充分に力強くもない。その結果としてまた、素朴、簡素、自然さのニュアンスは、イタリア語においては未知のものである。(一) この種の感情を抱くや、ヴェネツィア語やミラノ語で書く。外国人にはつねにトスカーナ語で話しかけるが、諸君の話し相手が力のこもった考えを表現したくなると、自分の地方語の単語によよる。イタリアの作家の注意の四分の三は、言葉の体裁に向けられる。クルスカ[5]によって引用される作家たちに見られないような単語を少しも用いないことだ。そのために、十五世紀のフィレンツェ人には未知だった観念を表現しなければならないときに、厄介なことが生じる。イタリアの作家はそうしたとき、もっとも度はずれた滑稽に陥る。『アメリカ史』でボッタ氏はたえずこう言っている。*il convento de'Dominicani* これはドミニコ会修道院の意味だが、彼はドミニカ島住民議会と言いたいのだ。

恋人や恋仇きに向かって話す言葉を書く場合にしか文章に決して熱がこもらない。これに加えて悪いことに、トスカーナ語が土着になっている二つの地方のうちの一つ（ローマ）は、三世紀前から永久の幼年期が運命づけられている。哲学書に関しても、話される言葉が書かれないということで、非常な不利益を生じている。もはや明晰さはない。

イタリア語で早く話すことはできない。とりかえしのつかない欠点だ。第二にこの言葉は本質的に不明瞭である。その理由はまず、三世紀前から誰もむずかしい問題について明瞭に書くことを肝要だと思わないことと、次に、敗北した言葉のそれぞれが勝利した言葉に類語を加えたことによっ

交際やボルジェリ（一七八六―一八五二）の読書によって形成されたようだ。

5 クルスカ学院は一五八二年フィレンツェに創設され、イタリア語の純化につとめた。ロマン主義運動が起こると、ここは古典派の砦となった。

ている。しかもどんな類語かは神のみぞ知るだ。それらはしばしば反対の意味をもっている。イタリア語を話していると信じながら、地方の人はまだ彼らの地方語を話している。もっとも簡単な事柄でも異なった名詞をもっている。通りは、ローマでは *via* と呼ばれ、フィレンツェでは *strada* ミラノでは *contrada* である。ローマの *villa* は別荘を意味する。ナポリでは町だ。それどころか感情のニュアンスを表現する言いまわしが反対である。ある友人がミラノでわたしに *ti* と言った。ローマでは *voi* と言い、フィレンツェでは *lei* と言う。もしミラノの友人がわたしに *voi* と言ったとすれば、それでわたしは、彼がわたしと齟齬を生じたと結論したことであろう。

アルフィエーリも（彼にとって）(二) 死語である言葉で書いた。そのために、彼の最上級を連ねる書き方が生じ、誇張をさらに強めることになったのであり、その原因はすでに見たとおりである。ヴェネツィア人、ボローニャ人、ピエモンテ人は、トスカーナ語をきちんと書くことに並々ならぬ自尊心を掻きたてることをつけ加えねばならない。滑稽なことに、まじめな作家が『カーニヴァルの歌』[1] やブォナロッティの『タンチャ』[2]、そしてその他のフィレンツェ共和国のもっとも下賤な連中を楽しませていた本で、トスカーナ語を学んでいる。それはあたかもモンテスキューがパリのかつら師の言葉を借りたようなものである。(三)

ヴェネツィア人、ボローニャ人はイタリア語の単語を書く。しかしその表現は自分たちの地方のものだ。このことは今晩二、三人のクルスカンティ（国語純化主義者）がわたしに明らかにした。いちばん思慮のある人はフランス語から明晰さを借りてきている。こういう人たちはもっとも軽蔑されている。たとえば、ピニョッティの『トスカーナ史』。この本はアルフィエーリ以後翻訳するに足る唯一の本である。逆に、彼らはイタリアのシャトーブリヤンともいうべきヴェッリ伯爵の『ローマの夜』と『ヘロストラトスの生涯』を激賞している。

1 『カーニヴァルの歌』はイタリア中に存在し数多くの選集が刊行されていた。もっとも有名なのは十五世紀にフィレンツェで印刷されたものである。

2 『タンチャ』は十六世紀末にミケランジェロ・ブォナロッティ（有名なミケランジェロの甥）によってトスカーナ方言で書かれた喜劇である。

3 シャトーブリヤンをはじめとする初期ロマン主義の詩人、小説家の作品を指す。このあとマルシャンジーの名や、年代をさかのぼってベルナルダン・ド・サン＝ピエールの名が出てくる。

なぜアカデミックな冷たさが世界でもっとも情熱的な民族の本を凍らせているのかがわかる。この民族はフランス人と機知で競うことができるが、その印刷された機知の方は場末でさえもやじられるだろう。イタリア的機知に較べれば、スカロンは高貴さにあふれている。フェヌロンの対話はトスカーナ語には翻訳し難いが、ヴェネツィア語やミラノ語に移すことくらい簡単なことはない。わが国の今日の詩的散文[3]は、反対に純然たるイタリア語になる。

フィレンツェでこうした一切を喋るのは、まさに絞首人の出た家で縄について話すのにひとしい。フィレンツェはロンバルディーアに遅れていると思う。まず、散歩のあいだ中みんなが言っていたように、プレティズモ〔僧侶による支配〕が、プラート、ピストイア、アレッツォ、シエーナのような小さな町に暴政をおこなっている。ロンバルディーアはヨーゼフ二世の抑圧やフィルミアン伯によって土台が築かれた。すでにフィレンツェの同時代人よりもずっと優れたベッカリアやパリーニがいる。第二に、フランスの属領であったフィレンツェは、当然住民を反抗的にした。言葉の自慢が会話の半分を占める。フランス語の掲示くらい不愉快なものはないのだ。

フィレンツェはしたがってブォナパルテの施策のうちの自由主義的な面を吸収しなかった。ロンバルディーアは反対である。この瞬間にも、ピサには一種の出版の自由がある。物語る犯罪に心を奪われて、教皇たちを侮辱するまでになるピニョッティの印刷は、トリーノで、そしてたぶんミラノでも許可にならなかったろう。しかし決してボローニャ人は、アングィッレージ氏のトスカーナの宮殿の歴史といったものを書かなかっただろう。[四]

イタリア語はどうなるだろうか。たいへんむずかしい問題だ。もしこの国民が即座に二院をもてば、議会の討論でイタリア語は救われるだろうし、首都の文学は支援に立ちあがるだろう。さもなければ、日々フランス語の明晰さと十三世紀の言葉のあいだで憎しみが激化する。出版される大部

分の本が、ロンサールによって発掘されたガリアの詩句をばらまいた、ベルナルダン・ド・サン＝ピエールとかマルシャンジー氏の詩的散文に似ている。わたしがアルバニー夫人のところで会った好感のもてるミラノの紳士は、ミラノではフランス書を翻訳するのは無益なことだときっぱりと言った。『ウィーン会議』が翻訳されたが、二十部も売れなかった。みんなはルガーノで出たフランス語海賊版を買っていた。(五) これがロンバルディーアを侵略している呪うべきフランス的明晰である。

この地方はローマやナポリの一世紀先を進んでいる。フィレンツェに対しては少くとも三十年先を行っている。二十年後、ジェズイットに教育された老人たちがもはやいなくなったとき、そのニュアンスは一段と際だつだろう。一方、ミラノ人のなかでは一級の価値をもつ著作が出版されよう。(六) では、ダンテと十三世紀の模倣、フランス的明晰の愛好、土着語の自然さと生気が与える快さ、これら三つの衝動によって引き裂かれるあわれなイタリア語はどうなるだろう。少くとも（一八一七年に）イタリアには二十の方言がある。ナポリでは町の角ごとに特有の土地言葉をもつまでになっている。それくらい感性に幅がある。王はナポリ語しか話さない。わたしは彼が正しいと思う。どうしてありのままでいられないだろうか。

わたしには、以上の考察について意見を求めるほど親しくしているイタリア人はまったくいない。これはことさらに微妙な問題なのである。わたしは＊＊＊夫人のところで、夜の十二時半に、もう七、八人の客しかいなくなった頃、問題を文学的方面へ向けようとした。そして以下のようなことを主張した。新しいダンテを生み出すほどになるには、まずドゥロルムとかバンジャマン・コンスタンの類を広めることからはじめなければならない。どんな人もダンテ以上には自分の生地（きじ）の姿ではなかった。アルフィエーリは言葉については彼本来のものではなかったし。観念についても、彼が信じているよりもずっともちまえのものではなかった。以上のような主張に対して、人々は声を

1　スタンダールはカルロ・ボッタに対してその清廉さと誠実さのために好意を抱いていたが、その『一七八九年から一八一四年までのイタリア史』については観念が乏しいと非難し、ついで『アメリカ独立戦争史』については古風な文体を嘲笑した。

そろえてわたしを非難した。七人中四人がわたしをやっつけようと同時に話しはじめた。実験が不可能なことを確かめてから、すぐにわたしはまちがいを認めた。

恐るべきことは、こうした言葉の欠点がコミックを不可能にすることだ。どこかに自然なところのないような気取った言いまわしというものはない。(七) 哀れなコンメディア・デッラルテ、アルレッキーノ、パンタローネが残っていたものだった。お上品がそれらを追放させてしまった。(八)

(一) 以下の昔のトスカーナの歴史家を除外する。『ピストイア史』、『カストルッチョの生涯』。アンミラート、『シエーナ年代記』、『ピサ年代記』。三人のヴィッラーニ、カッポーニ、ブォニンセーニ、フォルティフィオッカ。

(二) 「そして動詞《泣く》がクルスカに認められていない、とわたしは諸君に言おう。サルヴィーノは《泣声》を用いたが、《泣く》はどうしても言うことができない」――諷刺詩『衒学者』

(三) ボッタ氏はヨーロッパの考察に適任の行政官であり、しかも任を終えたのちには千エキュの年金もないのだが、その彼が *predare*〔略奪する〕の代わりに *imbeccare*〔ついばむ〕とか *dare la spogliazza*〔身ぐるみ剝ぐ〕と書いている。

彼は *Gluribizzatori che vanno girandolando arzigogoli per trar la pecunia dalla borsa del popolo*〔散歩しながら、町の人々の財布から金を引き出すために奇抜な策を弄するペてん師〕について語っている。

彼は *ostinazione*〔執拗〕の代わりに *conficcare e ribadire*〔釘をさらに打ちこむ〕と言い、*moneta*〔お金〕の代わりに *pecunia*〔金銭〕、*il cortigano*〔宮廷人〕の代わりに *il moiniere*〔ご機嫌とり〕、*parlamentari*〔軍使〕の代わりに *tamburini*〔鼓手〕、*scritti sediziosi*〔不穏な文書〕の代わりに *petizioni infiammative*〔煽動的な請願文〕、*benevolo*〔慈悲深い人〕の代わりに *il ben voglionte*〔憐憫の情を抱く人〕、*inasprire*〔激化する〕の代わりに *rinfuocolare*〔火をつける〕、*confortarsi con baje*〔冗談で慰められる〕の代わりに *confortarsi cogli aglietti*〔にんにくを食べて慰められる〕、島の北方の代わりに *le parti deretane dell'isola*〔島のうしろ側〕と言っている。たえず、思想を壮重にしようとして、もっとも低級な語句をまとわせている。これは十九世紀ではあまりに滑稽すぎるのではある

まいか。わたしは三十行にも及ぶ文句を書きつらねないよう配慮している。とはいえ、ボッタ氏はわたしに、あなたがたが外国人であるのは周知のことで、イタリア人はあなた方とは別な肺をもっている、と答えるであろう。わたしはわがフランスの大作家たちにも次のように言おう。単に約束ごととしてあるようなものを刷新しようとすること以上に莫迦げたことがあるだろうか。

(四) 『世界叢書』収録の抜粋を参照のこと。奴隷根性の奇妙な例だ。この著者は百年も前に消滅したメディチ家にお世辞を言っている。

(五) 才知ある支配者をいただく利益を、通りがかりでも認めることができる。ド・プラット氏の本がイタリアやオーストリアに関して述べていることを思い出す。フォン・ザウラウ氏[1]はその販売と翻訳をためらうことなく許可した。この国には正義がないのがよくわかる。

(六) きょうという日[2]

幻

その夜はこのうえなく恐ろしい夜だった。
狼の口のなかのように暗く、何の跫音も
聞かれなかった……
……
殿様ではない貧乏人には相応に
暗がりの片隅へと追いやられてしまう

ルメルシエ氏の『メタモルフォーズ』以来フランスで刊行されたどんなものよりも、この著作にいちだんとまことの詩情がある。政治に対するどんな諷刺も、これ以上痛烈で、これ以上にまとを射た、さらに言うならばこれ以上に危険なものはなかった。この詩は警句のもつ辛辣さと同時に、フィクションの絵画性によって感動的なものとなっていて（プリーナの亡霊は、自分の眠る墓地を通りかかった町民の前に現われて、ミラノが自分を暗殺して何を手に入れたかを彼にたずねる）、一週間で二千部が出た。「もし警察が不幸な詩人に不利な何らかの証拠をあげれば、彼は残りの生涯をマントヴァの牢獄で朽ち果てさせることになる」と言われていた。著者はたいそう若く、したい放題の愚行をしていた。ある日彼の二人の友人が捕えられると彼は安堵しはじめた。その友人たちは本の初版を配布したことが証明され、著者として罰せられようとする。その時、総督がかわいそうな詩人を呼び、彼の友人たちが牢獄につながれるのを見ないふりしていると、彼は恥辱にまみれるだろうということを巧妙ににおわせる。彼

1　フランツ・フォン・ザウラウは一八一五年から一八一七年までオーストリアのロンバルド＝ヴェーネト王国総督。スタンダールはこの人物の人格に敬意を払っていた。『パルムの僧院』のモスカ伯爵のなかにこの人物が反映していると見なされる。

2　これはトンマーソ・グロッシの『プリーナ、別名、幻』の最初と最後の引用である。この詩は一八一六年のはじめにミラノで内密に頒布されていた。オーストリア警察は作者をつきとめ、グロッシを訊問した。その際、ザウラウ総督の介入によって彼が救われたのは事実である。

3　ボルジェリの『今日の文学的冒険』第四章からの引用。ボルジェリのこの文章は、ある作家たちが濫用している古風な言葉や表現をここに集めてそれらを嘲笑しているのであって、翻訳は不可能であるが、米川良夫氏は次のような試訳を考えて下さった。

「かってに癇癪玉を破裂させているがいい、目糞が目をひらかせてくれたのさ、とうの昔にその手は桑名の焼き蛤、もう今はお爺さんが柴刈りに行ったり小僧が釈迦に説法していた頃とは違うのさ」

4　十二世紀にはまだ文学作品は誕生していない。感ちがいか誤植か。

はためらわずに白状する。その出来事があった当日、彼はわたしの前で次のように言っていた。「わたしは一生牢獄につながれると思ってました。閣下がわたしにこうおっしゃられるのを聞いて、その驚きはどんなだったでしょう。《政治は貴君が思っているほど邪(よこしま)ではない。貴君は牢獄でなく、町へ戻るのだ。そして余みずから最高法院に貴君の恩赦を求めよう。》」二ヶ月後、若い詩人は再び呼びよせられた。彼はもう戻れまいと思って身のまわりを整理する。彼が蒼白になって総督のところへ出頭すると、総督はこう言った。「陛下は貴君の若気のあやまちを許される。そして貴君の才能を今後もっと上手に用いるべく、貴君をお召しかかえになる」

(七)

ラ・モットの調子はわが国では一世紀古びているが、イタリアより五十年進んでいよう。阿呆とか莫迦という言葉や金銭の諸観念にかかわる冗談がしょっちゅう繰り返される。一八一六年と一八一七年の文学新聞や政治諷刺の小冊子類を参照のこと。わたしはフィレンツェで、ジェノヴェージや、ヴィーコや、ロンガーノ著『倫理的人間』や、その意見のために死んだマリオ・パガーノの『政治論文集』、クォーコ氏の『イタリアにおけるプラトン』、ミラノの大学教授の『立憲君主制』などを買わされた。これらが面白く思えたらうれしかったのだが。

いつも繰り返される一ダースあまりのラテン語の引用文がある。*Quandoque bonus dormitat Homerus*〔優れたホメーロスも時には坐眠す〕*Quousque tandem*〔そもそもいつまで〕等々である。以下に、ジョフロワのように、薬味をきかせたもので、十四世紀フィレンツェの姿がすっかり写されている文章をあげよう。[3]

Ei roda pure i chiavistelli che i muccini hanno aperto gli occhi, e i cordovani sono rimasi in Lavente, anzi non è più tempo che Berta filava, e i paperi menavan l'oche a bere

ここには十二世紀[4]の小説が流行させた諸観念が暗示されている。博識が感じられる。

一つの本棚に、一七七〇年以後、英国、ドイツ、フランス、イタリアで現われた最良の著作が集められるなら、方程式を立てればそれを解いたことになるということがわかるだろう。イタリア文学はもっとも愚劣であるが、しかしながら

イタリアではどんなほかの土地よりも強い植物的人間が生まれる。そこで犯される残忍な犯罪の数々がその証拠である。　アルフィエーリ

ここ五、六年で恋人を殺したうえ自殺した上流社会の人たちの十一の逸話が、わたしの日記のなかに数えられる。そしてイタリアには一つの小説もない。『ヤコポ・オルティスの手紙』は『ヴェルテル』の

模倣にすぎない。『ウェイヴァリー』や『わが宿屋主人の物語』が現われるのは、寒いスコットランドであって、美しいロンベルディーアではない。

(六) トスカーナ大公レオポルドの布告[1]。スケドーニの『道徳的影響』でほめたたえられているあの節度を参照のこと。イタリア文学が陥っている愚劣さの程度が測られよう。

ボローニャ、四月十二日

文明に戻る喜び、地方からパリへ戻るみたいだ。ボローニャに着いてわたしの最初の質問は「オペラがありますか」――「ええ、『ティトゥスの仁慈[2]』を上演してます。」わたしは劇場にとんで行く。入場すると丁度序曲がはじまる。

ティトゥス役のロンコーニはすばらしい歌手だが、モンベッリ一族やパッキャロッティと同じ流派だ。心に滲み入る響きがある。彼が二十才若かったら！ 小さな劇場で彼はなおさらとても感じがよい。ティトゥスの善良さは、涙が出るほどわたしを感激させる。ラシーヌによって描かれた『仁慈』は何たる悲劇か。わたしはロンコーニの抑揚が、ラシーヌの韻文の調べよりももっと強さに結びついた善良さをあらわしているように思えた。とくに次のような一節に。

おおローマ人たちよ、余のために神殿をつくることこそがとるべき態度である。

もしこういった言葉が、テノールの美しい声によって歌われる代わりにバスの声で歌われたなら、それがもつ天上的なものを失ってしまうことは何人かの人が感じるところであろう。非常に上手にフランス語の韻文をつくり、それでいて悲劇を創造することのできない詩人がいるとすれば、この題材にとびつくにちがいない。彼は大成功を勝ち得るだろう。というのは、われわれはみんなアウ

1 トスカーナ大公レオポルド二世は良俗を乱すおそれのある即興演戯とコンメディア・デッラルテを禁止した。スケドーニはその著『道徳的影響』で演劇とそれが民衆に及ぼす影響を考察して、トスカーナで確立した検閲をイタリアのすべての国に広めるよう要求した。

2 『ティトゥスの仁慈』はメタスタージョの台本をもとに、多くの音楽家によって作曲されているが、ここではモツァルトの作品。台本はカテリーノ・マッツォーラによって書きなおされている。

グストゥスが下賤なやくざ者だったことを知っているからだ。悲劇での気のぬけたアニオの役を、トラセアスとかコルブロといったような誰か白髪の老将軍に代えることができよう。それは、ティトゥスを皇帝であるがゆえに愛することができないが、その偉大な行動を立派だと認める人物になるであろう。彼は共和国の実現が不可能だと悟るくらいの思慮があり、そしてそれを実現させるような地盤をつくり出す方法も彼の才知では考えつかず、自分をむしばむ自由の希求を神々のせいにすることになる。メタスタージョのティトゥスは『オプティミスト』のうまい芝居と同じ効果をわたしにひき起こした。それは気分を一新する。

コルネイユのエミリーにあたるヴィテリアに扮するのは、ミラノのコンセルヴァトワールの若い生徒、ボニーニである。彼女には演技とか方法らしいものがあり、かなりきれいな高い声を出す（プリモ・ソプラノ）。これを彼女はもち続けよう、まずい顔をしているので。

ついにシンナ（セスト）が登場する。これはロンドンであれほど噂を聞いていたが見ることができなかったあのトラメッツァーニである。英国女性はこの美男子のことを話しながらすっかり淑女の作法を忘れたものだった。ここでは、「彼は大流行している」というこの言葉はもの足りない。これ以上に多大な好評を博することはありえない。彼はたえず動きまわり、たえず気取って、たえず愛想よくして、それは度はずれたいやみになるほどである。彼はこのうえなくやさしい目を、きょろきょろさせることによって、もっとも激しい憎悪を表現する。わたしはといえば、彼を眺めるのが好きだし、ことに桟敷席の婦人たちの反応を眺めるのが好きだ。彼は四十才の非常な好男子で、まだ多少の声量がある。彼は熱気をこめる必要がある。第二幕の最後の詠唱を大変うまく歌った。婦人たちは彼の声をすばらしいと思っている。彼女らは善良である。

トラメッツァーニはすべてを、憎しみさえも忘れさせる。美男歌手の生き方は飾られた生き方で

ある。彼は今晩、演じることは会話をすることほどには疲れないと言っていた。単に必要に迫られて彼の歌を聞くのでは拍手喝采は出ない。一方、何人かのやきもちやきがいるので、彼にとっては毎晩がドラマと同じ刺激的興味となる。わたしは彼に、もしわたしが選ばねばならないとしたら、彼の演じる主人公たちよりも彼の方になりたいものだと答えた。これは決してお世辞ではない。

四月二十日

わたしはとうとういくらか独創的な才能をもっている一人のイタリア人を発見した。真似るという語はこの国のためにつくられたようだ。彼らが胸のなかに抱いていた火は、十四世紀の自由によって、あの十世紀にわたる蛮風のあとに出現した美を感じる魂の持主たちの若々しさによって、すなわち特異な、もはや出現しないような状況によって灯されたのだが、それを彼らが冷やしてしまって以来、彼らは決定的な不振に陥っている。詩人はダンテを、散文家はボッカッチョの華麗な文体を、歴史家はマキアヴェッリの文体を真似ている。(一) 件の男は一介の芝居の台本作者(リベレッティ)である。(二) 普通、彼の作品は二度の上演しかない。というのは再演で警察が禁じてしまうからだ。彼は三十年来、イタリアで起こったあらゆる滑稽事を用いて笑わせてきた。彼はまず彫像を盗んでいくフランス人を嘲笑することからはじめたのだった。彼はほとんど評判にならない。彼の書くジャンルはペダンティスムを受けつけないからだ。わたしは今述べたことの半分を思いきって言おうとして、今晩M＊＊＊夫人の家であやうく石を投げつけられるところだった。このことについてはさらにもっと多くを考えている。この知られざる天才はデゼンツァーノのアネッリ弁護士である。彼の手法にはダンクール、ゴッツィ、そして少しシェイクスピア的なものがある。フランス人、とくにラ・アルプの鋳型にはまった人たちには、このうえなく低俗なおどけしか見つからないだろう。わが国の虚栄

1　ブッチ本マルジナリアに次のようにある。『『エディンバラ評論』第二十三号七十四ページのすばらしい一行。これはひとたび聞くともはや頭からぬけないあの部類のものだ。これこそわたしにとって『エディンバラ評論』のよい影響である。一節一節読んでいくにつれて、わたしは、メチルドのことや、わたしの彼女との立場や、七時に到着するまでわたしが夢中になって読みかじっていた作家たちのことを考える。

「一八一八年十一月五日」

スタンダールが指摘するページはドライデンの詩に関する記事で、そこには次のような一行がある。「彼には天才の主要な特徴の一つであるやさしくパセティックな心が欠けている……」

2　パパタッチの場面は『アルジェリアのイタリア女』の評判の場面である。イタリア娘イザベッラは外国で捕われの身となった恋人のリンドーロを救わんと、タッデーオと共に出発する。二人は辛うじて目的地に漂着する。その国のパシャのムスタファはイザベッラを見るとぞっこん惚れこんでしまう。そんなムスタファに、イザベッラはイタリアの礼法を身につけてパパタッチにならなければならないと教える。パパタッチとは、食べたり眠ったりを専一として妻や情人が何をしようと気にかけない寛大な者に与えられる称号だと説明して、イザベッラは彼にパパタッチの

心の極端さときたら以下のような具合だ。[1] つまり、面白い表現を笑う前に、お上品な人たちがそれをかくかくに思うかどうかわれわれは知ろうとする。しかし予期しないことがコミックの基本条件なのである。どうするか。煩わしいことなく笑える劇場で以外はもう笑わないことだ。これがヴァリエテ座盛況の秘密のすべてである。フランスではまだ日陰にある喜劇のほんの少数がその劇場に逃げこんでいるが、そこでは年に三百六十五の新作がある。青年たちがフランス人に見かけるのは、演劇の楽しみではなく、それはうまくできた文学講義の楽しみ、古典を思い出す楽しみである。これらの青年たちは年老いた衒学者たちの享楽に服従させられている。

決して俗なフランス人はアネッリの才能を理解しないだろう。それは疑心暗鬼の君主政治に逆って迂回前進するコミックの詩神である。

彼はブォナパルテ支配下で、大胆にもイタリア元老院の無能さを嘲笑しはしなかったか。それこそ『アルジェリアのイタリア女』のパパタッチの長い場面[2]が秘めている意味なのだ。(三)

今日彼は、成功の絶頂にあるトラメッツァーニを茶化した。この国ではこれは機知に富む行為なのだが、またそれ以上に勇気あるおこないでもある。某女なら十年たってもまだ彼を憎むだろう。

道づれの英国人から判断すると、外国人はこの国の習俗を思ってもみず、イタリアを離れて行く。これからそれらを垣間見ようとする人は、『芝居の才人たち』[3]と題される一幕のオペラ・ブッファの本を読まねばならない。イタリアの楽屋裏風俗が描かれている。それはわが国の劇場とはまったく異なっている。当地では劇団は三ヶ月で解散するからである。アネッリの笑劇では、プリマ・バレリーナの兄がプリマ・ドンナの父親と言い争う。彼はプリマと二人きりになると、彼女がかわいらしいのに気づく。近づきに、彼は彼女に有名なオペラ『しかめ面の英雄』[4]の二重唱「やさしげな英雄」を歌おうと申しいれる。ここで人気者トラメッツァーニのこのうえなく奇妙な批判がはじま

手ほどきをおこなう。「木の葉のように薄っぺらな」パシャに対するパパタッチの手ほどきの場は、見方によっては意味深長なものとなろう。

3　『芝居の才人たち』とはマイヤーの笑劇『才人たち』のこと。初演は一八〇一年ヴェネツィアのサン＝ルカ劇場。

4　『しかめ面の英雄』とスタンダールが呼んでいる歌劇は、メタスタージョによって書かれたオペラ・ブッファ『支那の英雄』ではないかと推測されている。これは多くの作曲家によって取りあげられているが、チマローザのものが一七八二年サン＝カルロで初演された。

る。彼は今晩桟敷席にいたが、悪ふざけに対して涼しい顔をしていた。女流歌手の恋人役をするパチーニは、この人気者の微細な動作まで真似する。たいそうパセティックな個所で、中断して彼の恋人にこう言う。「ここでおまえにわたしの歯を見せよう。わたしの魂を見せることができないから。」よく言われるトラメッツァーニの魅力の一つは、その立派な歯をのぞかせることだ。わたしは生涯でこんなに笑ったことはなかったと思う。音楽はマイヤーの作曲である。『芝居の才人たち』は『ティトゥスの仁慈』と交互の上演である。女性たちは怒っている。そしておそらく彼女らはその怒りを警察に伝えるだろう。パリでは冗談は冗談にすぎない。絶対君主制によって凋んでしまった国民では、冗談を大目に見る人間はパシャが見捨てる人間であり、駄目な人間である。

(一) モンティ、ヴェッリ、ボッタ。
(二) この言葉はそれらを詩と呼ぶよりよい。
(三) 「食べ、飲み、そしてしたい放題」
パリではこれらの場面は省かれていて、しかもそのうえ、このあわれなオペラはあらゆるやり方で台なしにされている。一八一六年に、東方的な華やかさをもってミラノで上演された。ベイ〔トルコの長官のことを言う〕役のガッリを見るべきだった。それにパチーニ演じるカイマカン〔長官の補佐役〕、イタリア女のマルコリーニも。

四月二十一日

『ティトゥスの仁慈』は今日を最後とする。結局、モツァルトの天分の力ない写し絵であった。わたしはこの偉人が、わが国の退屈な悲劇作家たちのような張りつめた様式を必ずしももっていないことを心楽しく再見する。いくつかの愉快な主題(モチーフ)がある。――わずかのわざとらしい美々しさにも我慢できず、オペラ・セリアを悲しむ魂の持主がいる。彼らがやさしさと共鳴するのは、それが

コミックのあとにやってくるときだけである。ミショーは『ヘンリ五世』であいかわらずこういった人々に涙を流させている。

四月二十二日

どうして自分の感激のことを話さずに音楽が語れようか。わたしの感激は反駁されるだろう。だが思うに、わたしに敵対する者たちもしばしば素直になることがあろう。彼らにとってはお気の毒さまだ。

四月二十三日

ボローニャの上流社会は少しパリの上流社会の色彩をおびている。あの魅力的な人たちの幾人かが活気をもたらし、才知と美と楽しさのあるたいへん珍らしい集まりにしている。マルティネッティ夫人はパリでもセンセーションを起こすことだろう。

四月二十四日

フランスでは、地方の人々は土地の精神的価値に(一)関してまるでわかっていない。イタリアはその点でもっと愚かしくはない。というのは、町の栄光こそが少しでも批判して傷つけると瀆聖になるものだからだ。わたしは自称哲学者たちと一緒に、M＊＊＊夫人のサロンで、こうした考えを理解しようとした。そして諸国民はお互いに育ちの悪い金持青年に似てるとわかった。そのうえイタリア人はベロワ流の愛国者たちのお追従で堕落させられている。（ミラノの『ビブリオテカ・イタリアーナ』を見られたし。）五十年のあいだはこの国民は真実を認めないだろう。わたしはイタリア

がわたしと同じくらいイタリア好きのたくさんの旅行者にめぐりあうとは思わない。今晩はどの顔もわたしを敵のように見なしていた。

㈠ 『メルキュール』に対するボルドーのアニシュ嬢の訴訟。[1] 一八一七年六月。

ボローニャ、一八一七年四月三十日

わたしはV＊＊＊公のところで四日間の別荘生活（ヴィレッジアトウーリ）を送った。

イタリアでは、夫たちはフランスの亭主族の百分の一の嫉妬ももっていない。[2] わたしはシジスベイスム[3]の原因を、自然以外の別のところに探し出すことができなかった。われわれといた何人かの哲学者はわたしにこう言った。中世末期、イタリアにはたくさんの専制君主がいて、彼らはスペインの礼法を真似て自分たちの宮廷に威厳をつけようとしていたが、そんなとき、金持の連中が自分の妻に小姓をつける習慣をとり入れたのだ、と。

わたしは思いきって習俗の根本を語ろうか。仲間の話から考えて、不幸な夫はパリではボローニャと同じくらい、ベルリンではローマと同じくらいいると思う。ちがいといえば、パリでは虚栄心から過ちを犯すが、ボローニャでは太陽のせいだ。わたしには英国の中産階級とジュネーヴの全階級以外に過ちを犯さない例は見あたらない。しかしまったく、それらの町に対する嫌悪は償いきれないものだ。わたしはパリの方がまだよい。楽しきかな。[4]

ボローニャ、五月一日

わたしは馬を降りた。この国ではとてもよい馬が借りられる。小さくて元気のない顔をしている

1　エティエンヌ・ジュウイは、「ギュイエンヌの行者」という匿名で、一八一七年一月十一日から『メルキュール・ド・フランス』に地方行脚の記事を連載した。そのボルドーに関する記事の二月八日付で、貸椅子屋をやっているアニシュ嬢という人物にふれてこう書いた。「彼女と同じくらい、策略を用いたり、秘かに手紙を渡したり、母親や夫の監視を逃れたりするのにたけている婦人衣料品売子はパリにいない。アニシュ嬢は彼女の知る唯一の言葉であるガスコーニュ方言で機知を言うことから、また有名である」ジュウイに言わせれば、実はこれは創作なのだが、彼はアンヌ・デュラントン、通称アニシュ嬢という人物が侮辱されたとボルドーの地方紙で述べているのを知って驚く。そして『メルキュール』の編集者がボルドー裁判所に喚問された。結局調停が成立して、訴えは取り下げられたが、当時たいへん評判になった事件だった。

2　ブッチ本のマルジナリアに次のようにある。「ここでもまたわたしがしばしば語ったあの同じ滑稽な愛国心である。これはとてつもない富をもっていた人々のおちぶれた子孫をたいへんうまく特徴づけている。これは、イタリア人が邪で卑劣なものに対抗する大同団結に素直に加わることを妨げている」

3　モンテスキューは『ジェノヴァに関する手紙』で書いている。「私は読者にシジス

が、いたずらで意地悪であり、快適な速度で走る。わたしはサン＝ミケーレ・イン・ボスコから帰ってきた。これはイタリアのすべての修道院がそうであるように、絵のような位置に建っている。この巨大な建造物はボローニャの背後に広がる森に覆われた美しい丘の上に聳えている。それは平野に突き出た岬のようであり、大木がうっ蒼としている。そこへ友人たちが昔のボローニャ派の絵を見にわたしを連れていってくれたのだ。彼らは芸術に頭から大きな価値を認めている。彼らはフィレンツェ派最古のへぼ絵かきチマブエをこきおろそうとしたがっているようだった。チマブエの作品を諸君が見ることのないように！[5]

われわれはこの丘の上で、あの涼しい風、プロクリスのそよ風（アウラ）[6]に出会う。南の国々以外ではこの快さを知ることができない。樫の大木の下に横たわり、われわれは黙ったまま世界でもっとも広々とした眺めの一つを味わっていた。都会のすべての虚しい利害が足もとで消えていくようだ。肉体と同じように魂が生長していくみたいだ。何かしら晴々とした混じり気のないものが心のなかに広がって行く。

北方には、眼前にパドヴァの長い山なみがあり、その上にスイスとチロルのアルプス山脈の尖った頂がのぞいている。西には広大な大洋の水平線があり、さえぎるものといえばモデナのいくつかの塔だけである。東には果てしない平野が見渡すかぎり広がり、それはアドリア海まで続いているが、夏の晴れた日には日の出時にこの海を見ることができる。南には、われわれのまわりにある丘陵が、アペニン山脈のとりつきへと伸びている。樹木の茂みや教会や別荘（ヴィッラ）や館のあるその峰々は、壮麗な自然の美を繰り広げているが、その自然は、イタリアの芸術のもっているもっと人の心をひきつける要素にひきたてられている。大気の深い青は、地平線を除いて、目の覚めるような白さの幾片かの軽やかな雲のためにも色褪せることがなかった。[7]

べについて話してなかった。それは馬鹿な民族がつくり出したもっとも滑稽なものである。すなわち、それは希望なき恋人、自分の選んだ夫人のために自分の自由を犠牲にする生贄である」またデュパティ（一七四六―一七八八）は『一七八五年のイタリアに関する手紙』で自問している。「どうして夫たちはそれを苦にしないのだろう。それは夫の代理なのか。どの点まで夫の役をするのか。解き難い問題だ。ひと言で言えば、シジスベは、ジェノヴァでは、ほぼパリにおける家の友を思い出させる」

4　モリエールの『人間嫌い』第一幕二場で主人公アルセストが歌うシャンソンのリフレインの句をもじったもの。

5　『絵画史』第六章に次のようにある。「今日わたしは充分な数のチマブエの絵を見てきたが、それらを再び見るために足を運ぶことはもうなかろう。わたしにはそれらが気に入らない……」

6　「プロクリスのそよ風（アウラ）」はオウィディウスの『メタモルフォーシス』（邦訳『変身物語』）に出てくる（第七巻八一五行から八二一行参照）。

7　ゲーテの『イタリア紀行』に次のようにある。「……それから私は塔に昇って、戸外の空気に親しんだ。眺望はすばらしい。北の方にはパドヴァの山と、それからスイス、チロール、フリアウルのアルプス連峰、つま

われわれの心は感動にあふれ、沈黙のうちに数々の美しい眺めを味わっていた。そのとき、突然仲間の一人が立ちあがって、厳かな調子で次のようなソネットをそらんじた。これは予備軍がサン＝ベルナール峠を通過したという第一報に、ボローニャの一住民がつくったものであった。

わたしは髪を乱したイタリアを見ていた
ドーラ河がポー河へと合流するところを。
彼女は悲歎にくれて坐っていた、彼女の目には
迫りくる隷従の恐怖に似たものがあった。

昂然として　彼女は泣きはしなかった、たしかに
苦しげであったが、女王の顔だけは失わずに、
おそらく往時もこんな風だった、自由な足を
ラテンの自由を足枷に差し出したときも。

ついでわたしは稲妻のなかに　彼女が嬉しげに
立ちあがり、誇らかに過去の栄光を再びまとい、
そこかしこの岸辺をこれまでにもまして脅かすのを　見た。

そしてアペニン山脈の方々で
称讃や祝福の叫びが響くのが聞こえた、

り北方の全山系が見えるのであるが、ちょうどその時は霧がかかっていた。西は果てしない地平線であって、そこからモデナの塔だけが聳えている。東に当っては、同じような平地がつづき、アドリア海に至っているが、それは日の出ごろに眺められる。南にはアペニン山脈の前端の丘陵があり、ヴィチェンツァの丘陵と同じく頂上まで樹木が生い茂り、そこには寺院や邸宅や別荘が建てられている。空は晴れわたって、一片の雲もなく、ただ地平線のあたりに靄のようなものがかかっていた。……」（相良守峯訳、岩波文庫版上巻一四〇ページ）★一三〇ページ訳注2を参照。

1　もう一つの戦争とはワーテルローの戦いのこと。

2　一八一五年にミュラの呼びかけで志願した兵は、ボローニャでは二百人足らずだった。彼らはアストッレ・ヘルコラーニ公（一七七九―一八二八）の指揮下でナポリ王の軍と合流した。

3　★七月十八日付で、チザルピーナ共和国が拒絶したこの法律についてふれられる。

4　ここに引用された詩はマンフレーディが一六九九年につくったもの。チェーヴァの『ソネット撰』（一七三六）にも収められた。

イタリア、イタリア、おまえの解放者が生まれた。(一)

そして叫び声はアペニンのこの先端の支脈でも聞かれた。しかし一八〇〇年の叫び声とはどんなにちがうことだろう。イタリア人にはもっともなことである。マレンゴの戦いは彼らの祖国の文明を一世紀も進めたが、もう一つの戦争[1]がその文明を一世紀にわたって停滞させるのである。――ボローニャのある王侯はミュラによるイタリア解放と思い[2]、二十四時間で千五百人の軽騎兵からなる一連隊を召集して、二十万フランを費し、三日間配備したが、四日目には戦線で彼の部隊の先頭に立っていた。

このことと、権力の絶頂にあるブォナパルテに対する印紙税法の拒否[3]は、フランスが決して比肩できないおこないである。

(一) P・チェーヴァの詩文選、二六四ページ、マンフレーディ。[4]

ボローニャ、五月二日

今夜、ヴェッルーティが歌ったグラッシーニ夫人のコンサートからの帰りみち、わたしの新しい友人の一人からうちあけ話を聞かされた。彼は午前二時まで、あの劇場へと続いている美しい柱廊の下に、わたしを引き留めたのだった。彼は恋人と別れて一年になる。彼は苦しい思いをしていて、彼女を忘れることができない。彼は自分から二人の恋の仔細をあまさず語ってくれた。金持で男まえの三十五才の軍人が、これほど弱気になって、これほど恋焦がれているのにわたしは感心していた。イタリアではこのくらいありふれたことはないのだ。少くともわがフランスの観念では、女と

復縁すれば滑稽にまみれるだろうが、彼は女と縒を戻すか、さもなければ狂い死にするだろう。女は、彼が明らかに正しかったのに、仲たがいの勢いにわれを忘れてしまっているので、彼にもっとも苛酷な条件を呑ませるだろう。わたしはすでにこうした絶望の七つや八つにぶつかっている。それはイタリアの恋に品位を与えているように思われる。

小説は、細部にまでわたって語る時間があり、なおかつ眠くてたまらない場合以外には興味をひかないので、わたしは哲学的観察にあたるものだけを書くことにする。

一、わたしに話しかけたこの男の、冷静で素直な態度に匹敵するものはない。彼は恋愛においても戦争においても前代未聞の気ちがい沙汰をやってのけたのである。パリでは、イタリアの社交界の率直さ、そしてとくに軍人の素直な態度は決して想像できないだろう。連隊の下士官のあいだでだぼらと呼ばれていたあの自分勝手で野卑な自慢話は、多くの利点もあったが、ここでは絶対に経験できない。

二、イタリアの大都市を通ると、本人の名前よりも、仕えている婦人の名前によって外国人は記憶される。「奴隷状態にあること」とは、恋愛の代わりに「好意」、女に言い寄ることの代わりに「女に近ずくこと」と言うのにも似た語法である。

三、友人をあまりに歴然たる不幸に陥れたのはフィレンツェの男である。彼がその男と言い争ったところで、かつての恋人は決して彼と再び会おうとはしないだろう。わがボローニャの男はわたしに言った。「あなたはフィレンツェのオニッサンティ小劇場へいらっしゃったことがありますか」――「ええ」――「ステンテレッロ[1]が演じられている日にそこへいらっしゃいましたか」――「勿論ですとも」――「あなたはあの登場人物に気づきましたか。あれはあなたがこれまでにごらんになったうちで、いちばんほっそりしていて、いちばん無表情な顔をした人間でしょう。彼は穴のあ

1　ステンテレッロは十八世紀末に俳優ルイジ・デル・ブォノ（一七五一―一八三二）が演じたコンメディア・デッラルテの登場人物。フィレンツェ的性格の化身。

2　この騎馬像はコジモ一世の像であり大公広場、現シニョーリア広場（ヴェッキオ宮、ウフィッツィ美術館前）にある。

いた服を可能なかぎり上手に繕っています。彼の料理の主食は幾切れかの砂糖漬けきゅうりです。おまけにカスティーリャ人のように虚栄が強く、人に知られさえしなければ、彼には飢えて死ぬことなどあまり重要ではありません。もし彼に *ella*〔あなた様〕(一)が向けられなければ絶望してしまいます。とくに、彼は口が達者で、もっともトスカーナ的な用語でしか表現しないことを誇りにしています。あなたに何時かをたずねるのに、彼は長ったらしい文句を連ねるにちがいありません。

「フィレンツェの人はあなたに、それが自分の地方の民衆の性質だと言ったことでしょう。真相は民族全体の性質なのです。たとえばＭ＊＊＊など」

わが不幸な恋する男の憤慨がもとで、わたしはフィレンツェでのいくつかの観察を集めてみた。すべてのフィレンツェ人は痩せている。彼らがカフェで一杯のミルク・コーヒーとこのうえなくちびたプチ・パンで、朝食を兼ねた昼食をしているのが見られる。これは三クラツィエ（二十一サンチーム）する。夕方ヴィーニェの店で彼らは二パオリ半ないし三パオリ（パオロは五十五サンチームに値する）の食事をする。洋服の着用にも何かしら変ったところがある。新しい服よりもむしろよくブラシをかけた服を着ている。彼らにあっては、きわめて厳しい倹約が要求されないものはない。あらゆる面でミラノと反対である。決してあの喜びにあふれた幸福そうな顔は見られない。ミラノでは主要な関心事はうまい食事である。フィレンツェでは食事をしたように思いこませることである。宮廷に出入りし、家庭では二皿もの夕食をとる多くの人々が、町中の話題になる。しかしパリでは、どんな大国の大使も、召使の衣裳にそんなに多くの飾り紐をつけさせない。

フィレンツェにいたフランス人が、騎馬像[2]と向かいあったカフェ・ミリターレの店主に、ビステカ（ビーフステーキ）のつくり方を教えたのだった。彼らはそこへ食事に行った。民衆は彼らが朝から肉を食べ、ぱっぱっと二十三スーも使うのを見ていた。フランス人を尊敬させるのに、たぶん

これ以上の貢献はなかった。わたしはさらにフィレンツェで「偉大なフランス人、あらゆる点で偉大な」という格言を知った。フィレンツェの人は、諸君が一杯のチョコレートをおごったことを一年後にも感謝の気持をこめて記憶している。この極端な倹約は歴史によって充分に説明される。中世にはフィレンツェは通商のおかげで非常に裕福であった。共和国が揺らいでのち、絶対君主政治になり、その通商を失って、通商の第一の特性である倹約が残った。

今日のフィレンツェは落ちぶれた人たちに開放されている港である。ヴェネツィアはずっと陽気でずっと楽しい。しかし散歩道として、四ピエ〔約一メートル二十センチ〕の幅の道と、チュイルリイの三分の二の大きさのたった一つの公園しかないことに慣れなければならない。

(一) イタリア語では言葉をかける四つの方法、つまり *tu, voi, lei* そしてフィレンツェで *ella* があるが、これは四つのうちでもっともうやうやしいものだ。

一八一七年五月三日

わたしは大きな誤りを白状しなければならない。はじめに文学者や才知があると見なされている人々にしか会わない外国人は、この国民の愚かさにびっくりする。ところが、世界でもこれほど繊細でこれほど気のきいた国民はいないのである。才知ある人というのはそれを売りものにしていない人々である。その才知ある人が教養を身につけたいと思うや、たちまち衒学者になる。才知の軽妙さと明敏さで驚くべき青年たちが、古典派の作家たち、すなわちクルスカによって引きあいに出される作家たちの本を集めると、彼らの大問題は、『カーニヴァルの歌』やその他の十五世紀に刊行された俗悪なもののなかに見あたらないような言葉を、もはや会話において使用しないことなの

1 ここでデンマーク人の講義と称するものは、残らず一八一七年の『エディンバラ評論』から引用されている。

2 一八一一年九月二十四日付の日記に次のようにある。「パリからかなりありふれた家具を自邸に送っているマレスカルキ氏のところに、羨望に値する一つの部屋がある。その部屋はグィド、グェルチーノ、カッラッチ一族の選ばれた絵画であふれている」

だ。とにかくはじめに、諸君はこういった知識一切を拭いとらなければならない。それこそ前述の一節でわたしが勇気に見捨てられた点である。その後わたしは、人々が自然でもはや才気を衒わないときには、崇高であることを発見した。

パリでは、才知は明敏さを欠き、人生の大問題についてはやじ馬根性と結託する。才知はあまりにひけらかされる。わが国の群小作家の一人は、はじめ魅力的だが、次から底がわれる。晩餐会で彼は誰でも喋ることができるようなことを諸君に話す。当地では、優れた一青年がはじめ衒学的だが、自分が優れていると思わなくなるや、人の心を魅了する。最近ボローニャやヴェネツィアやミラノではやっている小諷刺詩にくらべれば、ヴォルテールの諷刺は平板である。この諷刺詩はモンテーニュの天真爛漫と力がアリオストの想像力に結びついている。

ボローニャ、一八一七年五月四日

ここには七、八人の魅力的なポーランド女性がいる。わたしにとって、これは女性の理想である。彼女らは一日中絵を見てまわっている。彼女らはあるデンマーク人に絵の講義[1]をしてもらっていたが、まずいことに、彼はそのなかでいちばん美しい女性にあまりに親切にしすぎているようだ。勉強の場所はあの好人物のマレスカルキ伯爵のギャラリーである。伯爵はシャンゼリゼの彼の家でわれわれにたいへん楽しい宴を開いてくれたことがあった。わたしは今日この講義に出かけた。それは先生ゆえにではない。だが、彼と仲よくなろうと、わたしは彼に授業のテキストを求めた。彼は五、六ページの文章を読んだあとで、われわれにマレスカルキ氏所蔵のたいへん美しい絵[2]を説明しはじめた。ギャラリーになっているアパルトマンはパリの家具を備えている。傑作だけが置いてある一部屋がある。

「周知のとおりフィレンツェ派は大胆な構図で知られています。それで、ミケランジェロの歩きぶりでは、筋肉のもりあがった部分が少し誇張されているのです。

「ラファエッロは表現と構図と古代芸術の模倣を身につけました。彼の完成された美しさは使徒と聖処女の顔に見られます。師のペルジーノと同じく、はじめのうちは少し冷たく、少しそっ気ない感じがありました。フラーテが明暗法を教えたのですが、彼はこれがずっと苦手でした。彼は偉大な魂でした。

「コッレッジョには魅力的な優美さと、明暗法と、遠近法が見られます。彼の魂は古代芸術を再創造するのに適っていました。しかし彼はあまり古代芸術を模倣しなかった。逸楽の傑作ともいえる彼の絵は、ドレスデンとパルマにあります。

「ティツィアーノとすべてのヴェネツィア派は色彩に迫真性があります。ジョルジョーネは画家としての出発点ですでに成功を勝ちえた偉人ですが、この点での理想にまで到達しました。

「ボローニャ派はあらゆる点でほぼ絵画の完成となっています。

「ドメニキーノは表現、とくにためらいがちな愛情の表現、彩色、明暗、構図を獲得しました。表現については、ラファエッロと彼のあとにプッサンがきます。

「グィドはフランス的な魂をもち、女性の顔に天上的な美を与えた。あまり強くない影、優にやさしいタッチ、軽やかな衣裳の襞、繊細な輪郭は、ミケランジェロ・ダ・カラヴァッジョの様式と完全な対照をなしています。

「グェルチーノは明暗を表現するために独特な視線を恵まれた労働者でした。彼はトワーズ〔約二メートル〕幾らで彼が働いていたチェントの村の百姓たちを、至って単純に写生しました。彼の絵はカンヴァスから浮き出ているようで、絵画のなかの幻想を讃美する人の好みにあいます。

1　一八一四年四月二十六日連合軍の先頭に立ってジェノヴァ入りした英国のベンティンク卿は、ジェノヴァの独立と一七九七年にジェノヴァに対して約束された体制の復活を保証する宣言をおこなった。しかしながら外務大臣カッスルレーはベンティンクの発言を否定し、ウィーン会議の少しあとでジェノヴァをサルデーニャ王国に併合することを決定した。この背信を一八一七年三月の『エディンバラ評論』でも非難している。

「ローマのファルネーゼ・ギャラリーは、もっとも偉大な画家の列にアンニーバレ・カッラッチを加えています。多くの人はラファエッロ。コッレッジョ、ティツィアーノ、そしてアンニーバレの名をあげる。ボローニャでは彼よりロドヴィーコ・カッラッチが好かれています。

「アルバーニは冷静な男で、子供や女体をうまく描いたが、彼らの魂を描いていない。彼には魂がありませんでした。羨望が彼をとらえていたのです」

ボローニャ、一八一七年五月六日

われわれは三台の馬車で、偉人の里を訪れるためにコッレッジョに行った。彼の絵のなかに見られたものといえば、あんなにもやさしい目をしたマドンナたちだけで、彼女らは百姓娘に姿を変えて通りを歩いていた。――わたしは自分がボローニャではおよそ非自由主義的だと見なされているのに気づいた。暴君の失墜はイタリアにわが国の称讃すべき一八一四年の憲法、すなわち、諸外国の人たちが作者をほめたたえるような天分と慈愛あふれる傑作をもたらさなかった。しかし、あらゆる廃品の再生をおこなった。だからこそ、自由が唯一の救いの道であったときにも、その色彩をとり入れて装うことができなかったほど自由を毛嫌いしていた陰険な男が、イタリアでこの自由を熱烈に愛する者たちのなかに、なお支持者を求めるようなことをしている。かなり影響力のあるイタリア人たちが、いちばん下等な人間は文士どもだとよくわたしに言っていた。(一) 彼らはそんなだからあらゆる書物や、自由のメカニズムの勉強をなおざりにする。彼らは天使がある朝それを運んできてくれるものと思っている。

多くの青年は、ジェノヴァで自分たちを嘲笑した大臣[1]たちを英国上院が盲目的に支持しているのを見ても、まだ共和政体を夢見ている。これこそ、わたしが彼らと言い争った点である。軍事独裁

へのもっとも確実な道は共和制である。共和制を手に入れるためには、まず自分用の島をもつことからはじめなければならない。かくも堕落した現代人のなかで、自由に必要な仕掛、それは国王である。ベルンを見られたし。

一七七〇年と同じくらいに政治の話が出てこないような土地があれば、それがアルミダの園ほどに遠くても、わたしはそこに飛んで行くだろう。若い女性と軍人によって全体が構成されているわれわれの社会は、政治に向かって方向転換した。すなわち笑ったり、われわれの楽しい日々を有効に過ごす代わりに、腹を立てる楽しみを手に入れた。

(一) これは正確ではない。彼らは自由の軽騎兵である。彼らは毎日戦闘していて、時として退かねばならない。

ボローニャ、一八一七年五月八日

さる大家の手になる美しい貴婦人たちの肖像画がここにあるが、これを欲しがる人がいるだろうか。

「R＊＊＊夫人は二十六才である。彼女は品性が賤しくない。たいへんやさしく、かなり教養がある。そしてさほど面白味がないのは彼女のせいではない。何も見なかったためだ。というのは、彼女は良識があり、少しのうぬぼれもなく、まったく自然だからである。彼女の声の調子はやさしく、素直で、少し愚かしいほどだ。フランスで生活したことがあったら、人好きのする女性となったであろう。わたしは彼女にその生活を語ってもらう、彼女は気楽に、衒わず、夫と子供たちにかかずらっている。もし彼女がわたしを退屈させなければ、わたしは彼女をかなり気に入ったのだが」

1　ネーリ伯爵は想像上の人物。スタンダールは以下のアルフィエーリに関する記事を『エディンバラ評論』第十五号（一八一〇年一月）から借用するにあたって、語り手として設定した。

ボローニャ、五月九日

パラージ氏の感嘆すべき肖像画の数々。イタリア王の扈従だった百万長者の銀行家が、扈従姿で肖像を描いてもらった。知事は彼を呼びよせ、こっぴどく叱りつけた。それに対して、彼は、望んだ服装で自分の自由に描いてもらったし、そのうえ自分の肖像画から思い出される衣裳を決して恥かしいと思わないだろうと答えた。

ボローニャ、五月十日

アルフィエーリ以外にたけり狂う政治からイタリア人、とりわけボローニャ市民の気持を紛らせるものは何もない。わたしは夕べを二人の人物と共に過ごしたが、彼らは晩年のアルフィエーリと親しくつきあったのだった。というよりむしろ、アルフィエーリの偉さが決して親しみを起こさせないから、とてもしばしば会ったと言った方がよい。これらの紳士の一人はアルフィエーリに似ている。そして彼はからだの具合が悪かったのにたいへん親切にも、われわれに十五分間アルフィエーリの姿を描写してくれた。アルフィエーリは赤毛の痩せた大男であった。彼の顔だち、とくに彼の目は古代ローマのある独裁者のものだ。サロンに入ってくると彼は、自分に向けられる言葉に口笛を吹いてしか答えなかった。みんなはその驚くべき類似を非難したものだった。

ネーリ伯爵[1]は中座したあとで、われわれに、奇抜と尊大といやらしさをあらわす数々のおこないのなかから、次のようなことを語ってくれた。アルフィエーリ伯爵がフィレンツェのギャラリーでアルバニー夫人に紹介されたあと、彼は彼女がカール十二世の肖像画の前でうれしそうに足を止めているのに気づいた。彼女はこの国王の変った軍服がきわめてよく見えるのだと言った。二日後、アルフィエーリは平和な住民が仰天するなかを、スウェーデンの君主とぴったり同じ服装と髪型で

フィレンツェの街に現われた。

ネーリ伯爵は一見イタリア風俗のすべての弱点に屈服しているけれど、すなわちはっきり言うと（というのは一体どうしてわたしが気兼ねをする必要があろうか）婦人のお供の紳士のなかでも最たる奴隷で、それも応々にして婦人に欺かれているが、なかなかの哲学者である。おそらく彼はわれわれと同じくらい恋人のことを色々と知っている。しかしあらゆる欠点をそなえたあるがままの彼女が、彼にとってまた地上でいちばん愛すべき女性であり、毎日八時間彼女と過ごす幸福に代わるものはありえない。そのうえ、その夫は、善良な性質の人々であふれている町のなかでも、いちばん善良な男である。わたしにはネーリ伯爵の幸福がよくわかる。そしてフランス的虚栄心に反して、できるならよろこんでわたしの運命を彼の運命ととり代えるだろう。彼の恋人はイタリアでいちばん美しい女性の一人であり、そしてたいそう気まぐれで、たいそう変ったとても楽しいとりとめなさがあり、彼女の傍にいて退屈するとしたら阿呆であるにちがいない。

ネーリ伯爵はわたしを別に庭の奥へ連れていった。わたしは地図を広げて、彼にモスクワ戦役の話をした。そこにいた二人の士官も仲間に加えた。わたしは彼に、何でもないことだったし、パリに着いてはじめて自分は危険を免がれたのだと思いはじめた、と言った。ベレジナ河まで空腹で死にそうだったが、あまり寒くなかった。石が割れんばかりの厳寒になってから、われわれはポーランドの村々で食糧を探した。それに、ベルティエ元帥が少しでも秩序精神をもち、ブォナパルテが毎日二人の兵士を銃殺に処すだけの勇気をもっていたら、退脚中に六千人の兵士を失わなかったろう。わたしは二時間話す。

こうした親切心がわたしにつらい記憶を呼び戻させたが、この償いにと、伯爵はわたしにこう言った。「あなたはアルフィエーリの悲劇がイタリア人の心にひき起こす効果を知りたいと思ってい

1　ジーナは、ミラノでスタンダールの恋人だったアンジェラ・ピエトラグルアの愛称。

2　『ティラーンニデ（僭主論）』（一七七七）は二十才頃のスタンダールの愛読書。スタンダールの精神形成に大きな影響を与えたと考えられる。

らっしゃるようですね。明日あなたにこれまで誰にも、ジーナ[1]にさえも見せたことのないちょっとしたコンペンディオ（要約）をもってきてあげましょう」

ボローニャ、五月十一日

伯爵のノートの翻訳。

「アルフィエーリは若いとき自分が国王でないからと王を憎んでいた。本を読み教育を身につけはじめると、彼は自分の憎しみをもち続けながら彼の家柄について幻想をつくりあげた。

「彼は自分を共和主義者と思いこんでいるが、実際は、古代ローマの共和国を模範とする共和国しか望んだことがなかった。貴族と平民のいる古代ローマ、才能ある男はつねに独裁者となることを望むことができた古代ローマ。彼は王たちに我慢ならなかった。というのは彼より生まれのよい唯一の存在だからである。しかし彼は貴族に対してきわめて度を過ごした崇拝をもっていた。というのはまず彼が貴族の生まれだからであり、ピエモンテではこの階級につきものの下層階級者への絶対の権力が、彼に非常に気に入っていたからである。彼が思想らしいものを抱くようになると、つけ加えて言った。この権力は偉大な魂の持主によってこれら下層階級者に有益になるように発揮されるからだ、と。

「プルータルクを読んで青春の陰気な苛立ちから目覚め、サヴォイア家の王たちの穏健な政体をこのうえなくひどい憎しみの狂熱にかられて語り、こんな暴君の支配下では結婚したりうっかり子供をもったりするのは自由人にふさわしくないと公言し、様々なかたちで、賤しい民衆のなかに生まれたために怒りの涙を流していると言い、こうした奴隷たちのなかで生きることのないように家族に財産を分与したあとで、要するに『ティラーンニデ』[2]という気ちがいじみた本を書いたのちに、

民衆が高貴な感情にあふれありとあらゆる徳に鼓舞されて自由を奪取しようとする戦場に、彼は偶然からまぎれこむ。(一) 彼がすべての高邁な魂の持主と陶酔を共にすることが期待される。ところが全然そうならないのだ。彼の人格にとってのこの決定的瞬間には、もう王座の威厳に気を悪くすることもなく、貴族が優勢となって、アルフィエーリはウルトラ以外のものではない。彼の心をあばいた英雄的国民に対する彼の侮蔑、あるいはむしろ侮蔑の仮面をかぶった憎悪から、それほど力強い言葉づかいが出なくなる。この瞬間から彼は王たちよりもフランスとフランス人をさらにいっそう憎悪する。この国が自由を手に入れることに成功したとしても、彼はそれでも『フランス人嫌い』を書いたことであろう。

「幸福なものたちに対する憎しみとつながるものでもあるが、苛立ちが、アルフィエーリの生涯のいちばん大きな特徴である。そして王座についたら彼はネロになったことだろう。残忍さを別にすれば、エッジワース嬢は彼女の作品『グレンソーン伯爵』のなかで、前もってアルフィエーリの似顔絵を描き出している。それにこの奇人は彼の性癖に絶対的に支配されていたので、彼の全生涯は二言で要約することができる。つまり彼は馬に対する情熱と文学的栄誉に対する情熱、それに彼が自由に対する愛と呼んでいる王侯に対するすさまじい憎悪のいけにえであった。彼はこういったもの一切を、中世の狂熱からこっち、おそらく人間の心に現われたことがなかったくらいのエネルギーで抱いていた。

『『アルフィエーリの回想記』について、わたしはこう言おう。《ブォナパルテの報告書はおもしろい。なぜなら彼は少し勿体ぶった調子を出したから》

「フィレンツェで過ごした晩年のアルフィエーリの逸話は、彼と結婚しようとしたさる高貴の生まれの婦人の名がたびたび出てくるので、公けにすることはあまり品のよいことではないだろう。

同じ家に住んでいたフランスの若い画家ファーブル氏による見事なアルフィエーリの肖像画がある。

文学的評価

「筋立ての単純さ、少数の登場人物、話の直線的な進行、構成の統一性と彫琢がアルフィエーリの悲劇を、近代人がつくったもののうちでももっとも古代芸術に似たものにしている。フランスの悲劇よりもずっと演説口調ではないので、華々しさや変化がいっそう少ない。しかし反対に、壮厳さや自然さの色あいはそれよりも濃い。われわれがコーラスと呼んでいるギリシャ劇の崇高なオッドを、アルフィエーリはとり入れなかったので、総じて彼の悲劇はギリシャ劇よりも詩的ではない。しかしながらどんな細部にも手慣れた手つきの仕事が感じられる。彼はしばしばあまりに格言的な言いまわしに引きこまれていると言えようが、これは、単に顔見世的な登場人物をなくそうという著者の熱烈な欲求と、主張のための長台詞に対する極度の憎悪のせいである。こうした長台詞は、強い関心がたえず注がれ燃えたつような情熱の響にあふれる会話の価値を、下落させるように彼には思えたのだ。いつでも、重々しく、努力のあとが感じられる方法で書かれた部分にぶつかる。彼は劇作家の第一の課題が、登場人物をその関係する事件や関心の方へつなぎとめることだということを、あまりにひっきりなしに思い起こしていた。隣国では、登場人物を動かす感動の精神的ないし詩的な描写をするために、もっともさし迫った彼らの関心を放棄させる様が見られるが、彼はその国民を憎むことに分別をなくして、時々ある情熱、たとえば恋愛などが、芝居でのように自然においても誇張的であることを忘れている。それらが必ずしも簡潔かつ細心正確な文句で発せられる必要はなく、時には冷静な哲学者の目に大袈裟で誤ってさえいるように思われる話し方で吐露され

ねばならないことを忘れている。

「アルフィエーリの会話の主要な美しさであり、また大きな欠点となっているのは、一語一語が、理路整然とした議論、不可欠な叙述、自然な感動の正確かつ幾何学的な表現をとおして、作品の筋を進行させるのに意識して使われていることである。ここには称讃すべき簡潔さ以外に、少しの脱線、少しの挿話的会話、少しの箴言もない。極端にまで押し進められたこれらの特質は、悲劇の構造全体にいくらか堅実な様子を与えている。だが、これは一般読者を飽きさせ、そしてまた才知ある読者には先で言われることがあまりにわかりすぎる。輝かしいものは何もなく、魅力的なものは何もない。こうした悲劇の三つ四つも読むと、たちまちにその他のものはもはや驚くにあたらなくなる。ミルトンの本と同じで、義務として手にとり、たやすく放り出す。

「わたしは事情通の文学者として以上の指摘をしておく。個人的印象については、わたしはこう考えている。シェイクスピアを理解することができた人は、他のどんな劇作家の構成にも、ある点までは決して心を動かされないだろう、と。シェイクスピアはアルフィエーリにもそれ以外の詩人にも似ていない。アルフィエーリ、コルネイユ、そしてその他のすべてのものたちも、悲劇を詩と見なした。シェイクスピアは悲劇を人間の性格や情熱の表現と考えた。そうしたものは、詩人の才能に対する無益な称讃によってではなく、共感によって観客を感動させるにちがいない。一般の悲劇では、会話の綾とその全体的色彩、作品各部の配置と運びが主要なねらいである。シェイクスピアにとって、目指すところは、真実であり模倣の力である。古典詩人たちは自分たちの作品に、構成が弛緩しないだけの、そして構成の基礎となる優雅な会話をほぼきちんと運ぶだけの筋と性格描写があれば満足する。シェイクスピアは、観客が劇場に抱いてくるあの幻想志向を、あまり強く傷つけないように、自分の主題をとり扱うことができれば満足した。彼は、滑稽になるかもしれない

1　ルメルシエの五幕の悲劇『アガメムノン』（一七九七）は初演で大成功を収めたが、これはアイスキュロスやソポクレスよりもアルフィエーリから借りるところが多かった。

ものすべてを避けたときに、自分の文体に対して充分に手を尽したと考えた。世間では競走相手や友人と話す際に、彼らの喋る様子とか、彼らのわずかに優雅な身づくろいから、心を動かすだろうか。

「アルフィエーリはそんな高みからは少しもものごとを見なかった。彼は人間の行動について考えなかったし、のちに様々な演劇流派を生み出したその人間の行動を描く種々の方法も考えなかった。彼は自分の知る唯一のものであるフランスの様式から出発した。彼は自分の記憶を観察結果と思いちがいした。もう少し才知があったら、彼は少しも観察しなかったことを自分の美点と認めたであろう。彼が信奉した流派は、あの英国の詩人のなかでわたしを魅了した、あれらの自然からとり入れた事柄をほとんど認めない。この偏狭な様式のなかではアルフィエーリは優れている。彼のつくり話は見事に着想され、天分を傾けて発展される。すべての登場人物はとても美しく、しばしばとても力強い表現で自然な感情を吐露する。わたしにはつくり話があまりに単純であり、出来事があまりに少なすぎるのが欠点に思われる。すべての登場人物が彼らの感情を同じ力と同じ優雅さで表現するのも、みんなが自分たちの関心や自分たちの相対立する主張を同程度の策略であやつるのも欠点に思われる。わたしの魂は、創意にあふれた作家がこれらのこんなにも完璧な会話、これらのタキトゥスにも匹敵する長台詞を、韻文にしたことを見逃すことができない。わたしには、実際の人物がもっとも身近な関心と考えているものを論じあっているのだ、と錯覚することは一瞬たりとない。アルフィエーリの方法には、人並以上の唯弁と威厳があるようだ。これに対してシェイクピアの方法には、幻想のもつあらゆる魅力がそなわっている。わたしはシェイクスピアを読んで幾晩も過ごした。暴君どもに対して怒りを感じるとき以外は、夜アルフィエーリを読まない。

「わたしにはどうしてパリの詩人たちがルメルシエの例[1]にならわなかったのかわからない。アル

フィエーリの悲劇を薄めても、まだ第一級のフランス悲劇が残る。たとえば彼の『メロペ』はヴォルテールのよりもずっと優れている。

「文体については、それが大天才に多大の努力を払わせたのが感じられる。つねに簡潔であると同時に絢爛たる言いまわしを用いることによって、作者は彼の詩句に一種の人工的な力とエネルギーをつけ加えようと努力している。わずかの言葉に多くの意味を内包させるために、彼は疑問、対句、そして言語のなかに突飛な倒置法で表現される短い箴言を積みあげる。

「以上のどこから見ても、感情にかけられる正確な比重やすべての情熱描写の完全な適確さと賢明な節度によって、これらの悲劇は、著者を高名にした熱烈で独立不覇の性格から期待しえたものとは反対である。わたしの見た、彼がその生涯にしたことや、彼がその良心的な告白で言っていることによれば、彼の悲劇においては、筋は非常な激しさ、会話は奔放で崇高な唯弁、そして、大袈裟だがそのエネルギーとその新しさによって心を奪う感情、狂熱にまで達する情熱、東洋の燦然たる誇張に近い詩を観客は見ることになるはずだった。

「この魅力的な新しさの代わりに、――十九世紀が特に芸術に求めているものは新しい感動である。――われわれは、物語の有名な大団円とかエネルギーあふれる演説とか輝きはないが深遠な情熱とかの、正確で簡潔な表現と、どんなに注意深くない読者でも著者の要したこのうえない努力に気づかずにいられないほど、たいそう厳密に正確な、たいそう細かいところで観念に照応する文体にぶつかる。自分の特権階級者的性格に固執するアルフィエーリは、この党派につくことによってもっと尊敬されることを想像した。彼がありのままの彼であったら、おそらくもっと偉大であり、きっといっそう独創的であったことだろう。しかしこれこれの選択を誤り、なおあらゆる古典詩人のうえに立つことができた人とは、何という人であろう」

1　アローナからアンコーナへ行く道はほぼエミーリャ街道の道筋にあたる。

2　ヴォーヴナルグ『省察と箴言』（一七四六）一二七からの引用。

3　フェッラーラが教皇領に併合されたのは一五九八年、クレメンス八世が教皇の時代で、そのやり方を横取りと見る人もいた。

(一) 一七八九年。
(二) 付録のアルフィエーリの悲劇リストを参照。

イーモラ、五月十五日

わたしは月の光のなかをセディオラで旅した。わたしは月光をあびたアペニン山脈の眺めが好きだ。セディオラはその名が示すように、非常に大きな二つの車輪のあいだに小さな椅子を固定した馬車である。自分で馬を御し、ずっと大速歩で走らせると一時間に三リュー〔約十二キロ〕進む。アローナからアンコーナへ行く道[1]のような立派な道が必要である。昨日わたしは三度ひっくりかえった。しかしそれはわたしのせいであり、道のせいではない。わたしの馬は一時間に四リュー〔約十六キロ〕近く進んだ。注意は否応なく景色の方に向くので、二輪馬車（セディオラ）に乗って歩いた土地をもう忘れることができない。わたしの馬はパドヴァ産である。

フェッラーラ、一八一七年五月十七日

ボローニャを去らねばならなかった。そこで計算していたよりも二週間も余分に過ごしてしまった。パチーニは情熱あふれる立派な喜歌劇歌手である。毎晩彼は自分の役柄で何かしらを変える。かくしてボローニャは、精神的にはイタリアでもっとも注目すべき町である。偉大な思想は心から生じる。[2]

今はフェッラーラだ。町の自決を守りえたあいだは大きな町だった。教皇領になってからは、[3]教皇領州知事は街路に生える草で騎兵半個連隊を養うこともできるだろう。金のある人々は土地を売って、ミラノに行って住んでいる。ここでは十万フランで年に十二万リーヴルの収益をあげる土地

を買うことができる。とにかく、男が美しい女性のいる家へ多少頻繁に行くと、州知事は彼を呼びつけて神の第九番目の律法を思い出させる。下男が主人に不満を覚えたら金曜日に州知事のところへ若鶏の骨を持っていけば、すぐさま主人は不信心者として呼び出される。(一)そのうえ、この町には少しも演劇がない。わたしは急いでこの愛すべき町を立ち去る。[1]あやうくアリオストの墓を忘れるところだった。そこへ二輪馬車で行く。[2]この偉人が王宮でジョコンドの物語を朗読[3]したのはここなのだろうか。

(一) 史実。

チェゼーナ、五月二十日

わたしはイタリア旅行から幸福感を味わっている。野心を抱いていたいちばん幸福な日々にも、こんな気持には少しもぶつからなかった。辞職してこの国に定住しようという漠然とした考えに、わたしは日に五、六度とりつかれる。[4]はじめの何ヶ月かはあらためて見るもののどれもこれもに少し驚いていたが、今ではわたしの魂はいちだんと平静になっている。イタリアの習俗の全体をはっきりと見てとっている。それはわが国の習俗よりも幸福を生み出しやすいようだ。わたしを感動させるのは行きわたっている善良な気質と自然さである。

以下はわたしがボローニャで書き忘れていた取るに足りない些事だ。町でいちばん気まぐれでいちばん美しい女性が、十八フランの英国製のつまらないドレスを着て、しばしば流行の散歩道のモンタニョーラにやってきた。彼女はいちばん高価なのを二十着も箪笥のなかにしまっている。毎月彼女は二、三着つくるが、それを決して着ない。「着るって何て面倒なのかしら」

1 ブッチ本マルジナリアに次のようにある。「これが一七九〇年頃のフェッラーラの風俗だ。父のダヴィデがそこで歌っていた。ベルモンテ枢機卿が治め、民衆は口々にこう言っていた。

ゴリアテの額をぶちわった人の
尻をベルモンテ枢機卿は引裂く」

2 アリオストの墓は町の中心にあるエステ家の宮殿内にある。スタンダールはフェッラーラに行ったことがなかった。

3 『狂えるオルランド』(一五一六)のなかの一章。

4 スタンダールがミラノに住もうと考え、もしイタリアにポストがなければ職を辞そうと考えたのは、一八一一年、アンジェラ・ピエトラグルアとの恋愛の最中であった。

ボローニャでいちばん有名なきざ男のP＊＊＊氏がわたしに言ったものだ。

「まったく、ぼくも朝ネクタイをしめたらもう着けかえません。ぼくをけしからんと思う人にはお気の毒様なことです」

リーミニ、一八一七年五月二十一日

ナポリで街ごとにそれぞれの言葉があるように、ここでは近隣の小さな町、ラヴェンナ、イーモラ、ファエンツァ、フォルリー、リーミニのそれぞれに異った習俗がある。ある町の人たちは敏捷で、荒々しく、執念深く、自由奔放である。またある町の人たちは堅実で、静かで、ドイツ人的である。わたしは、わが国の地方人が恋愛の醜聞や忠実な使用人を探すむずかしさを歎く、あの勿体ぶった会話を見かけなかった。ここでは必ずしも金もうけの話ばかりではない。恋愛と音楽が地方のああした変りばえのしない話の内容に何かしらの変化を与えている。さらに、わが国と同じで、ブルジョワたちはお互いに念のいった治安維持をおこなっている。こうした悲しむべき手段のせいで、おそらく大都市におけるよりも少し余計に様々の習俗がある。――充分な気骨がある。昔、司祭たちの支配下では、法は阿呆向きの悪い冗談でしかなかったので、ここの人たちは自分たち自身で裁きを代行した。それゆえ彼らはわが国の小さな町のブルジョワよりも無味乾燥ではない。それに若者たちのあいだでは、肉体的な力が美点として非常に重んじられている。

サン＝マリノ共和国、一八一七年五月二十二日

イタリア旅行をしたゲーテは、この山中で、まったく飾り気のない一人の教皇軍士官に会った。会話のなかで士官は彼にこう言った。「あなた方のあいだでみんなが異端者と見なしているお国の

フリードリッヒ大王は、実際には立派なカトリックであることを、われわれは確かな筋から聞いて知っています。大王はわれわれが教皇様より特別の許可を受けて、密かな信仰を守っているのです。大王は決してお国の異端的教会のどれにも入りません。地下の礼拝堂をもっていて、そこで毎日ミサを聞き、われらが聖なる信仰を告白できない苦しみに心傷ついています。もし大王がご自分の熱心さにのみ動かされたなら、プロイセン人たちはたいそう気ちがいじみた異端人種ですから、時を移さず大王を虐殺してしまいましょう」[1]㈠

このイタリア人聖職者の明敏さはまだ存在する。わたしはサン＝マリノで、三、四の逸話からその証拠を得たが、これは言わないでおこう。

㈠ 『わが生涯より』第四巻、一八一六。[2]

ペーザロ、一八一七年五月二十四日

ここでは人々は自分たちが幸福であるかどうかを考えて生涯を送ることはない。「好き（ミ・ピアーチェ）」あるいは「好きじゃない（ノン・ミ・ピアーチェ）」が、すべてを決める当のやり方である。ほんとうの祖国は自分に似ている人にいちばん多く出会う国である。わたしはフランスにいるといつも、どんな社交界でも、冷ややかな調子にぶつかるのではないかと心配している。この国にいて、わたしはある魅力を感じるが、これを具体的に自分にわからせることができない。それは恋愛のもつ魅力に似ている。しかしながらわたしは誰にも恋していない。美しい樹々の影、夜空の美しさ、海の眺望、すべてがわたしにとって魅力であり、感銘深く、これはすっかり忘れていた感動、十六才のはじめての遠征のとき[3]にわたしが感じたものを、わたしに思い出させてくれる。わたしは自分の考えを表現できないことがわか

1 ゲーテの『イタリア紀行』には次のようにある。「聞くところによると、幾度かの戦争に信徒をさえ打ち負かし、令名を天下に轟かせたフリードリヒ大王は、一般には異教徒と考えられているけれど、実はカトリック信者で、法王から許可を得てそれを秘めているということです。彼は皆が知っているようにあなたの国の教会にはどこにも足を踏み入れません。しかし、聖なる宗教を公然と信奉し得ないのに胸をいためて、地下の聖堂で礼拝を行うんだと聞いています。もっとも彼がそんな事を公けに行おうものなら、残忍な国民であり、狂暴な異教徒であるプロイセン人は、たちどころに彼を殺してしまうでしょう。そうなったらしかし手のつけようがなくなります。それなればこそ法王は彼にああいう許可を与えたのですが、その代り彼はこの唯一の有難い宗教をばひそかに、力の及ぶかぎり広め、保護しているのです。――私は別に反対もしなかったが、それは大変な秘話であるから、誰もその証拠を挙げることはできない、とだけ答えた」（相良訳、岩波文庫版上巻一五五ページ）

2 ゲーテの『イタリア紀行』（一八一六）は『わが生涯より、詩と真実』（当時既刊三巻）の続編（すなわち第四巻）というかたちで出版されたが、スタンダールはドイツ語が読めなかったので原書を読んではいない。彼は『エディンバラ評論』第五十五号（一八一七年三月）の書評でこれを知り、本書でおこ

っている。それを描くのにわたしが用いる設定はどれもこれも弱々しい。

ここでは自然はすべてわたしにひときわ感動を起こさせる。自然は新しく思える。わたしにはもはや何ら平板で無味乾燥なものは見あたらない。ボローニャでは、しばしば午前二時に部屋を出て、あの広大な柱廊を通り、見たばかりのあの美しい目に魂はとりつかれて、月光にその全体が大きな影となって描き出されているあの宮殿の前にさしかかると、幸福に胸苦しくなってふと立ちどまり、つぶやいた。「何て美しいのだろう。」町のなかにまで張り出しているあの樹木の生い茂った丘陵、あの星のまたたく空のなかであの静かな光をあびている丘々を想って、わたしは身ぶるいした。目に涙が浮んでいた。――わけもなくわたしはこう考えている。「ああ、イタリアへやってきて何てよかったことだろう」

ウルビーノ、五月二十五日

この山中の小さな町の住人の異様な活気。町にあふれている大記念建造物。この町はメディチ家のライヴァルのグィドバルド公爵が領主だった。

フランスのお上品は、一見自然に、何ものにも関心をもっておりませんということを、たえず喚起することだ。かわいそうなイタリア人は虚栄心の享受を考えるどころではない。一切の法と一切の正義が不在（昔存在したものについては人の語るところだが）のまっただなかで、彼らは確固とした法と正義を求めている。彼らが残忍なのは彼らのせいだろうか。いつも怯えているためにしばしば残酷な政府、狡猾さを働かせることによってしか力をもてないくらいに弱い政府の支配下で、もし彼らが残忍でなかったとしたら、彼らはパシャでなくても、少なくともパシャの副官とかカディ〔イスラムの裁判官のこと〕に滅ぼされたろう。

なわれている引用もすべてそこから採られている。

3 スタンダールは一八〇〇年、十七才の時、ナポレオンのイタリア遠征軍に従ってはじめてこの国に入った。

低地エジプトの不幸な農夫（フェラー）に見られるように、不信はいつでももっとも激しくもっとも熱烈な共感をも抑えつけてしまう。それゆえに、苦しみや不正を目の前にして、表面の冷ややかさをかなぐり捨てると、ただちに狂暴な熱をおびた行動に出ることになる。(一)

(一) 忠実な画家であろうとして仕方なく思い出している悪弊は、おそらくもう存在していない。しかしそれらの結果は習俗のなかにまだ一世紀にわたって存続する。

アンコーナ、一八一七年五月二十六日

この地方全体はフランスの統治下で文明を垣間見たのだが、ロンバルディーア地方にずっと遅れている。彼らは司祭たちの政治以上に悪いものはないと言っている。ボローニャとフェッラーラの地主たちは、ザウラウ伯爵を知事にするためなら二千万も金を出すだろう。G＊＊＊氏[1]はこのうえなく立派な人だったし、彼の治政下では、首尾よく運んだ卑劣な陰謀はなかった。憎むべき暴君の時代は過ぎた。もはや悪をおこなって利する者に悪をおこなわせるような莫迦は存在しない。――残忍の風潮がラヴェンナからこっちに急にふえている。この政府とか知事の交替の最中（さなか）で、あのイタリア的性格の不変的根源である不信が倍加するのが見られる。しかも彼らは正しい。ここではどんなに疑っても疑い過ぎるということはないのだ。こうした状況は音楽にとって幸いしている。イタリア人は快楽も気晴らしも会話に求めることができない。今日のつまらぬひと言が、十年後に彼を破滅させるかもしれない。ここに事の深層を照らす光明がある。

アンコーナ五月二十七日

1　G＊＊＊氏とはイタリア王国警視総監ディエゴ・グィッチャルディ（一七五六―一八三九）ととられている。

2　エアフルトはドイツの町（現在は東ドイツ領）。一八〇八年、ここでナポレオンはロシアの皇帝アレクサンドル一世と会談をおこなった。比喩として引用されている。

3　ブッチ本マルジナリアに次のようにある。「美は眠りのあいだに判断されるにちがいない。さもなければ、美はあまりにたやすく外見や瞬間的なあらわれとさえも混同されてしまう。外見、様々な表徴への情熱の習慣的な働きかけ、すなわち恋愛のような情熱あるいは熱、または吝嗇のような魂の習慣。」「ドミニック、一八一八年十一月四日」

古代のヴィーナスの神殿である大聖堂サン＝チリヤコから、海辺の美しい眺めをわたしは嘆賞していた。そこでわたしはパリからきていたエアフルト[2]の旧友のロシアの将軍に会う。――フランスでは、大臣たるものは数々の訪問をして、儀礼としてあらゆる鄭重な言葉を述べるので、その哀れな人は精魂をつかい果たしてしまう。彼は四百もの手紙に機械的に署名する。したがってそれらの内容を検討したり、さらに内容を把握することについては、彼が天使だとしても不可能である。

わたしと知りあいになったロシア人がフランス人の身体的特徴にたいそう不快感をもったのは、オペラ座の踊り子の大多数が驚くほど痩せていることからである。実際、このことを考えてみると、わたしはわが国の当世風の女性たちが、多くはきわめてほっそりしているのに気づく。彼女らはこういうのを美の観念に容れているのだ。[3] 痩せていることは、フランスでは優雅の風に不可欠である。イタリアでは美の第一条件は健康に見えることだと考えられているが、もっともなことであり、それなくして逸楽はない。

わがモスクワっ子は、フランスの婦人のあいだには美は滅多にないものと考えている。パリで見たいちばん美しい容姿の女性は英国人だったと彼は断言する。

ブーローニュの森で百人のフランス女性を数えてみれば、八十人は感じがよいが、美しいのはせいぜい一人だ。百人の英国女性のなかでは、三十人はグロテスク、四十人はどう考えても醜いし、二十人は無愛想だがまあまあで、十人がその美しさのみずみずしさと純潔さで地上の女神である。

百人のイタリア女性のうち三十人は顔と喉に白粉をはたいて口紅をひいた漫画である。五十人は美人であるが逸楽的な様子以外の魅力はない。残りの二十人はうっとりさせるような古代風の美しさをもち、われわれの意見では、もっとも美しい英国女性にさえも勝っている。英国女性の美は、神がイタリアに与えた目にくらべれば、見すぼらしく、魂がなく、生命がないように思える。

頭蓋骨の形はパリでは醜い。それは猿に似ている。[1] そして、そのために女性は年とともにたちまちに老けるのが抗い難い。ローマでいちばん美しい三人の女性はまぎれもなく四十五才を出ている。パリはずっと北にあるが、しかしながら決してこんな奇蹟は観察されない。——わたしはフランスでパリとシャンパーニュ地方が頭骨の恰好のいちばん美しくない地方だと、ロシアの将軍に反論をとなえる。コー地方の女性とアルルの女性はイタリアの美しい形にいちだんと近い。イタリアでは決定的に醜い頭でも、つねに何かしら崇高な点がある。それはレオナルド・ダ・ヴィンチやラファエッロの描く老婦人の頭から想像できる。しかしフランスはそれでもましな女性がいちばん多くいる国である。彼女らはその着物の着方からも予期される繊細な快感で人の心をひきつける。そしてこれらの快感はもっとも情熱を欠いた魂によって尊重されるようだ。潤いのない魂の持主はイタリアの美を恐れている。

男性の美については、イタリア人についで、愚鈍な様子がないときのイギリスの青年が優れているとわれわれは認める。

若いイタリアの百姓は醜く、ぞっとさせる。フランスの百姓は愚かで、イギリスのは粗野である。

ロレート、一八一七年五月三十日

おととい、磁石をつかってトレンティーノ[2]の戦いの跡をざっとたどっていたとき、わたしは同じく馬に乗ってあとをやってくる一人の軍人の姿に気づいた。その晩われわれはマチェラータの宿で再び会った。フォーサイト大佐[3]がわたしに言葉をかけたのは、才知ある人々のあの大きな原動力となっている退屈からであった。年配の人だったので、わたしは地図の写しを提供しようと申し出て、彼は受けてくれた。わたしは部屋にあがって行き、彼のためにそれを作製した。参謀本部でこうし

1 ここでスタンダールがラヴァーターを思い出していることは明らかである。ラヴァーターにとって頭蓋の研究は最重要であった。また当代ではゲーテを筆頭に知識人がみんな人相学に夢中になった。

2 トレンティーノはアンコーナから七十二キロ。一七九七年イタリア遠征軍司令官ナポレオンと教皇とのあいだで講和条約が結ばれた土地。一八一五年五月にはここでナポリ王ミュラの軍隊とオーストリア軍が会戦した。

3 フォーサイト大佐はスタンダールの創作した人物。大佐の語る革命以前の社交界の模様は、『エディンバラ評論』第十五号（一八一〇年一月）のデュ・デファン夫人とレスピナス嬢の手紙に関するジェフリーの記事から適当に引きうつしている。

4 ここで言われているように一七七五年にフォーサイト大佐がパリに来ても、フラマラン夫人、エノー院長、ポン・ド・ヴェールには会えなかった。彼らはすでにこの世の人ではなかった。

た仕事に慣れていたので、間もなく急ごしらえの小さい地図ができあがった。部屋までついてきた大佐は、こうした親切に感動して、わたしに好意を示そうとほとんどフランス人と同じくらいに喋った。彼は今朝アブルッツォを経由してナポリへ、わたしはフェッラーラへ出発するはずであった。われわれはアドリア海の湾沿いに、草木が生い繁ったあの変った形をした丘の上を散歩する。この丘は見たこともないような地形の変化によって、いきなり海に突っこんでいる。ある時は道は深い谷間に沈み、海から百リューものところにいるような気がする。それというのもここでは、海岸が少しも北の地方のあの荒涼とした姿をしていないからである。明日は、おそらく永久に別れ別れになることを確信して、われわれ、大佐とわたしは、急いで、わずかの言葉で、われわれのいちばん興味があることを話しあったのだった。

わたしは彼に昔のパリと革命前のフランスの社交界について話した。彼はわたしに言った。「あなたはそれを好ましいものと考えていらっしゃいませんね。あなたのお手もちの例は少し魅力の失せてからのものだということを認めねばなりません。私に関しては、フランスには革命前に七回参りましたが、はじめて行ったのは一七七五年で二十才の折でした。私の家庭はホレース・ウォルポールと親交があり、私はデュ・デファン夫人に宛てた彼の手紙を一通入手しました。私はショワズール公爵夫人の家へも参りました。そこでバルテルミー師、エノー院長、ポン・ド・ヴェールに会ったものでした。私はあの知恵の鑑(かがみ)ダランベール、あの優美の鑑フラマラン夫人に紹介されました。[4] そしてワーテルローで戦ったあと、私は兵役を去り、一八一五年にパリにきて十五ヶ月過ごしました。今後どんな国民の歴史もこれほど面白い対照を示すことはないでしょう。かつて父親たちは、自分たちとこんなに異なった子供たちにあとを譲ったことはありませんでした。」大佐が完全に公

平なのを知り、そして彼の年令の人々のあいだでは稀なことだが、彼が現在のフランスの方を好いているのを知りもして、わたしは彼に対し、そのかくも好ましく、爾後見られない社交界をわたしに描写してくれるように促した。こうして、春の甘やかなそよ風を快く感じながら、アドリア海のほとりを馬を並足で進め、時にはその特異な眺めのために話を途切らせもして、馬上で、そして一七七五年のサロンで、われわれは六時間を過ごした。

三つの状況

「あなた方フランス人が神様から授っている非常な陽気さとは無関係に、お国の社交界は、英国における私たちの社交界とは三つの状況によって異なっていたように見受けられます。すなわち、生まれの賤しいすべての人を締出すこと、女子教育の粋なことおよび女性の才知を養うこと、仕事と政治的反感とをもたないことです。

第一の原理

「以上の状況の第一番目の結果から、私の青春時代のパリの社交界は、これまで英国にあったものよりもずっと多くの優雅と安楽と自然さを醸し出していました。全体的にブルジョワたちを排除していたことによって、おそらく生活のなかの俗なもの一切が遠ざけられていました。しかしそのことにはもう一つの利点がありました。それは相互の嫉妬や侮蔑といったあの種の感情、生まれの誇りと、労働によって蓄積された富のあいだにあるあの絶えざる戦争状態を、不可能なものにして

いました。今日ではこうした戦争状態から生じることごとは、普通控え目な態度をとったり沈黙という手を用いることによってしか回避することができませんけれど。

「みんなが貴族であるところでは、万人は平等です。

「自負はありえないことになりましょう。各人はどんなところでも水を得た魚のようであり、子供の頃から、お定まりの挙措振舞が社交界の成員各人になじみとなっているので、挙措振舞が注意の対象にならなくなります。誰も俗な態度に陥る滑稽さを恐れませんし、そうした欠点がないことによって誰も虚栄心を起こしません。個々人の差をつける細かな特性は、よい習慣を知らないことや才知を欠いているせいではなく、気まぐれや体質のせいにされます。行動を起こす前に、一つ一つの行動を規正する規則のことを、必ずしも考慮しないのです。(一) 一瞬一瞬に恐ろしい滑稽の責苦を蒙ることもないので、社交界では少しの堅苦しさもありません。各人は自分の気分まかせです。こうして世界でもっとも礼儀正しい人々の上流社会は、同じ原因で、百姓の社会の自由と酷似していました。

「英国では、ブルジョワを締出すといったこうしたきまりは決してありませんでした。商人階級の大きな富と、各人が抱くあらゆる地位を渇望する権利は、どんなに内輪の社交界でも、高貴な生まれの者とブルジョワとのあいだの離反をつねに予告していました。何百万という金とか非常な才能は、一人の人間を第一等の地位へもちあげるのに充分なものですが、こうした利点はその人にとって上流社会に入るためのパスポートとして役立たねばなりません。したがって、上流社会はたいそう不調和な、時としてたいそうおかしな性格が入り混じり、安楽が、そしてしばしば平穏さえもがそこでは維持し難くなるほどなのです。金力の誇り、生まれの誇り、挙措振舞の誇りがそこではたえずぶつかりあう。こうして諸々の虚栄心は、それらが相互に共通なものである限り目立たない

のですが、やがてあらわになってきて、対立する虚栄心と遭遇するや、全面的に広がります。ロンドンでは、社交界は、あらかじめ討論され投票で決定されてできたいくつかの協会によってクラブに編成されないと、たちまちくだらない嫉妬によって分裂しますし、存続しても窮屈や無味乾燥や遠慮といった状態をたえずつくり出すことになります。人々が偶然に出会い、しかも正反対の暮らしをしていたとなれば、互いに通じあえない恐れがあり、理解してもらえないことに絶望します。会話はいくつかの職業上のお喋りにのめりこみます。残りの者はみな黙りこみ、隣人を軽蔑する。こういったことが、ブォナパルテ支配下のお国の社交界にもありました。そこから私たちの国の七、八百人を集める大夜会の慣わしがやむなく生じたのです。そこではカフェと同じ世間の習慣が必要です。

第二の原理

「お国の第二の利点である女性の才知を大いに養うことにかけては、これにあなた方はさらにいっそうのおかげを蒙っています。ヨーロッパが中世から脱け出て、通商と騎士道によって文明開化して以来、フランスの婦人たちはいつもほかのいかなる国の婦人たちよりもずっと、男とほぼ同じくらいの知的水準にありました。二世紀以上も前から、彼女らは文学における趣味の審判者であり、またお国においては、ショワズール公爵やデュ・バリー夫人の地位にはじまって、いちばん低い銃士の位に至るまで、あらゆる地位があのちょっとした策略で按配されていたわけですが、彼女らはその首謀者だったのです。パリの女性は男たちが話したがるようなこと一切について話すことができました。こうしてあなた方の会話は私たちのに較べてもっと軽薄でなく、同時にもっと平板でな

い色彩をおびたのでした。

第三の原理

「しかしフランスの上流社会と英国のそれとの相異の根本は、お国では男は社交界に登場して名声を獲得する以外に仕様がないということにあります。英国では、身分とか才能で人目をひく人は皆政治的な問題に忙殺されています。したがって社交界に出る暇はありません。あるいは、知名の士が社交界に現われるとすれば、それはそこで気晴らしをするためであり、成功を博するためではありません。そのうえ彼らは、サロンで快適な一時間を過ごすよりも、下院の討論とか何かの委員会で様々な問題について推論するのにふさわしい、話したり考えたりする習慣をめぐまれています。私たちのあいだでは、もっとも生まれの高貴な人々は、もっとも大変な務めを果たさねばなりません。もし信望、すなわち尊敬を望むなら、身分がどうであろうと、昼も夜も諸問題の研究と実行に身を献げなければなりません。上品な言葉だけでは充分でなく、人々を指導する方法を学ばねばなりませんし、共に行動しかつ行動するのに支持を仰がなければならない人々への影響力を獲得しなければなりません。失敗すれば蔑まれることを条件に、あの大胆で応々にして危険な討論のなかで頭角をあらわさねばなりません。こうした討論を通じて、自由な国民の政府は絶え間なく行き詰まり、そして存続するのです。フランスでは反対に、私が父の家を出て一七七五年にそこに到着したとき、すなわち、父は必ず午前三時になってやっと議会から帰り、午前中は新聞用の演説の校正刷を訂正するのに忙しく、気もそぞろに急いで私に接吻したあと、六時に政界の会食に駈けつけて行ったものでした。そんなときフランスでは、私は高貴な生まれの人々が快適な余暇を楽しんでいる

のを見かけました。彼らは大臣に会ったりしていましたが、それはご機嫌をうかがい、顧慮してもらうためでした。そのうえ、フランスの諸問題には日本のこと程にも無関心な大多数の人々が、自分たちの余暇をたいそう品のよい社交界の楽しみに費していました。五十才ぐらいで、浮わついたことにうんざりして、野心の想念が多少頭をかすめれば、彼らに開けている唯一の道は、いささかなりとお国のためになることによってよりも、たわいない会話でひきつけたり四六時中足を運ぶことによってご厚情賜われる人物たち、すなわちお偉方の寵愛を受けている者や愛人たちの好意でした。地位を手に入れるために地位にふさわしいものになろうと思った人々は、恐るべき滑稽に見舞われ、さらに言うならば、賤しく思われたことでもありましょう。(二)

「私ははじめ、お国のサロンが私たちの国のよりも立派に運営されているのを見ました。というのもあなた方は下院を運営する必要がなかったからです。私はロンドンのよりはるかに絢爛としたお国の夜会や、熱気と軽妙さにあふれたお国の夜の会食を嫉んだりしませんでした。様々の才能や才知のはけ口がほかにないことを私は知っていました。それは私たちの国の崇拝すべき自由に些細な不都合が見られるのと何らかわりない心痛を私に与えたものでした。私たちの国では、会話はカレッジ出身の青年とか旧弊な青年たちが主導権をとっています。あなた方フランスの方たちはいつも私たちの国には才能のある人や洗練された趣味の持主がいないと言われますが、勿論彼らはそういった類の人物ではありません。(三) 私たちは議会を閉鎖しさえすればよいのです。そうすれば二十年後には私たちはお国と同じ社交界をもつでしょう。私にはあらゆる耕作可能地が英国式庭園のために犠牲にされる際には、美しい英国式庭園をそんなに自慢すべきではないように思われます。

「私がフランスに参りましたとき、フランス人たちは彼らの居心地のよい社交界に、自由政府がないことに対する埋めあわせを求めていました。(四) 当時私にはそれがとても強いように思われました。

1　オーストリア継承戦争後のオーストリアとプロイセンの対立は、フランスとイギリスの植民地抗争がからんで、七年戦争へと発展することになる（一七五六―一七六三）が、この時オーストリアは二百年来の宿敵であるフランスと同盟を結ぶべく奔走した。カウニッツはポンパドゥール夫人を通じて直接ルイ十五世と交渉し、一七五六年第一回ヴェルサイユ条約へとこぎつけた。第二回は一七五七年五月、第三回は一七五八年十二月で、三回目にはフランスの外相ショワズールが、兵力と資金提供を削減したいと申し出た。

私はヴェネツィアでも同じ感じを受けました。しかしそうした状態はずっと続かねばなりませんでした。当時パリでは、ルイ十五世の「それは余以上に生きながらえよう」という気のきいた文句が引用されたものでした。彼はまったく正しかったのです。

「私たちの国においては、ロッテン・バルー（弱小選挙区）を買ってやっと昨日下院入りしたふとっちょのビール商人、ないしはロンドン市長といった人は、上院議員とか大臣たちのどんな陰謀にも、彼の声や彼の影響力を及ぼすことを期待してはいけないのです、彼らが内輪の社交界に彼とそのブルジョワ的家庭を迎えいれることに同意し、彼をあらゆる点で平等に扱うということがないならば。ゴチック様式の城館に住む誇り高き公爵夫人の眉をひそめさせるような場面は、貧者の荒屋においても同じことになります。こうして、下院から暇をとりあげたり、私たちの国の歴代の王がナントの勅令廃止に反対したりする原因の直接的結果によって、フランス的安逸と陽気は英国の社交界から遠ざけられています。

「私は私たちの国の女性の不自然な冷淡さや無知を、同じ高尚な原因によるものと考えています。はばからずに言えば、婦人は世界のどんな国でもいかなる政治的働きももたない、ということを私はよく知っています。しかし実際、一七七五年には、女性は男よりもずっとヨーロッパを牛耳っていました。オーストリアをフランスと結ばせた一七五八年の信じ難い条約を見さえすればよろしい。これはパリで財界の婦人たちの尽力を得て、カウニッツ公がお膳立てしたものです。[1](五) 男が大臣になるや、もう二つのことしか考えません。自分の地位を守ることと楽しむことです。お国の大臣たちは、この二つの関心事がただ一つのものになるようあらかじめ選ばれた人々ではなかったでしょうか。女性たちが老人や聖職者の目にさえ重要性をもっているように見えました。彼女らは驚くほど諸問題の進展に通暁していました。大臣たちや王の友人たちの性格や習慣をそらんじて覚えていま

した。

「あなた方が立憲的になるにつれて、お国の女性たちは愛想がなくなるでしょう。私はすでにこうした気配を感じてさえいたように思います。お国には今では一七七五年よりもずっと多くのよき母親がいます。そして家庭のよき母親ほど世の中でうんざりさせるものはないのです。何ごとも大臣によってひっそりとおこなわれることなく、すべてが徹底的に、しばしばあまりに徹底的に議論しつくされる私たちの国において、女性たちが総理大臣を虜にしようとはまず考えないのはおわかりでしょう。そんなことをしたって何になりましょう。私がフランスに到着したときは、まさにショワズール氏の支配が終ったばかりでした。彼に好ましくみえたり、彼の妹のグラモン公爵夫人にただ気に入られることのできた女性は、自分が望むすべての人を大佐や収税長官にできることが確かでした。

「自由の取返しのつかない結果は、したがって女性をいちだんと高邁でない精神の存在と見なさせることです。そしてさらに悪いことには、この偏見に何かしらの拠り所を与えることです。ある公爵はヴェルサイユから自分の館に帰ると、自分がたずさわったこと一切を妻に話したものでした。ところが、私たちの国では、夫は妻に彼女の水彩画の下書きに関してちょっとした言葉を向けるか、さもなければ黙りこくったり考えこんで、彼がたった今議会で聞いたことに思いをめぐらします。私たちの国のかわいそうなレイディたちは、あれらの浅はかな男たち、才知の欠如からどんな野心にも、つまりどんな仕事にも力を発揮できなかった男たち（ダンディー）の社交界にあずけられています。

「お国のサロンの卓越しているもう一つの源は、お国の文人たちのよそと異なる地位にあります。私はパリの公爵夫人たちのところで、ダランベールやマルモンテルやバイイのような人物に出会い

ました。彼らにとって、そしてまた彼女らにとっても、これは測りしれない利益でした。英国の作家たちは、書斉の埃にまみれたり、教養のある何人かの友人とか彼らの躍進に期待を寄せる何人かの若手教授たちと交際して生活しています。こうして彼らは暗く、さみしく、骨のおれる不粋な人生を終えています。これ以上に魅力のないことはありません。私たちの国では、本を出そうとすれば、その人は国を動かす人々の社交界も、生活を楽しむ人々の社交界も捨てたものと見なされます。その結果、陽気な人々の社交界はきわめて軽薄なものとなり、活動的な人々の社交界は非常な重苦しさをもつことになります。私たちの国の天才たちは後世の人から称讃されるでしょうが、しかし彼らは、世間に作家たちや本屋さんたちやジャーナリスト以外の人たちを知ることなく、非常にさみしく彼らの日々を終えています。(六) 文学的な虚栄心を別にして、お国のダランベールやバイイといったような人物の生活は、お国の殿様方の生活と同じくらい陽気なものでした。

「これは私たちの国の自由の悪い結果の一つでもあります。私たちの政治家はあまりに多忙で、文人たちに会うことができませんし、暇人はあまりに莫迦であまりに軽薄です。傷ついた虚栄心というこの学者たちを蝕む病はそのために増大しています。そして私たちの議会でおこなわれる演説は、お国のよりもずっと道理をわきまえているものの、はるかに退屈で重苦しいものです。お国の議場で笑いが生じるのはたいへん結構なことです。

「才能と暇との出会いは両者いずれにとってもつねに有益です。文学者が社交人士に諸々の観念を授け、逆に彼らが知る処生術は、彼らをもっと理性的に、もっと愛想よく、もっと幸福にします。文人たちは学問と知恵のほんとうの値打を知り、こうしたことが政治や、人生を美しくすることにどんなに貢献しうるかをしっかりと知ります。彼らはそれが読んだり、考えたり、書いたりする仕事以上に、もっと重要な、とりわけもっとゆたかな、幸福と誇りの源であることを発見します。ア

ディソンの人生よりもフォックスの人生を好まないような人とはどんな人間でしょうか。さらにお国では、文人は書く暇がないくらいの社交人でもあります。私たちの国では、彼らはギリシャ語やラテン語やらを知っていますが、それは第一条件が読んでもらうことだということを忘れてしまうくらいなのです。

結論

「私は一七七五年およびその後の何度かのフランス旅行で、たくさんの驚くべきこと、たくさんの讃嘆すべきことを見ましたが、しかし白状しますと、羨むべきことはほとんどありませんでした。こんなにも華やかな社交界が今後再現されて人々を瞠目させることはないでしょう。しかしこうした社交界のもっとも品のよいメンバーたちが、あなたの思っていらっしゃるほど幸福ではなさそうに思われたことを、あなたに断言することができます。娯楽は幸福を生み出しません。それに、もし人がアイスクリームとかビスケットだけを常食とする羽目になったら、生活していくのがとてもいやになることでしょう。心底からの没頭や関心がいつも不足していました。これは、お国の行政官が殿様たちより幸福だったり、ヴェルサイユではつねに戦争が望まれていた原因にあたるものです。私には人々があまりに外向きに生きていたように思われます。死ぬのにさえも、サロンを閉めることが許されなかった。家庭の楽しみは考えられませんでした。今日では逆です。共感の不足が倦怠の渦へまっすぐ続く道だということがあまりに忘れられていました。何人かの阿呆な英国人たちが言うように、フランス人には感受性が欠けている、というのではありません。大情熱はいざしらず、あなた方はヨーロッパでいちばん感じやすい国民です。しかし当時は各人の感受性が無駄使

1　ブッチ本マルジナリアに次のようにある。「昔のパリについては『エディンバラ評論』第二十三号八十ページの二行を利用すること」

2　『英国と英国人』（一八一七年パリ刊）はロバート・サウジー（一七七四―一八四三）の著書。その序文にディッキンソンの署名があり、この本が英国ではドン・マヌエル・アルヴァレス・エスプリエリャ著『英国からの手紙』として出版されたと書かれている。スタンダールの指摘している部分は第三巻に見られる。

いされ、あえて言えば、毎日多くの人と会うことによって小出しにして消費されていました。共感の方はといえばそれはまったく別もののようです。こちらはすり減るのです。百人の友人がいる人は、その友人たちを二人の友人しかいない場合のようには愛することができません。当時のフランス人は友情に非常な率直さと申し分のない心安さを注いでいました。その百人の友人たちを彼らは心から愛していました。しかし百人の友人をもつ人は、毎日二人や三人の友人が非常な不幸に沈んでいるのを見ることになるにちがいありません。ものごとを悲劇的にとらねばなりませんでした。けれどそうすれば九十五人の幸福な友人に対して礼儀を欠くことになったことでしょう。もしフランス人のなかに、それも彼らの終生の友の愚行や不幸によって、ある愉快な哲学が一様に喚起されたとしても、それは立派な心がないためではありませんでした。いくつかの少し唐突な慇懃ぶりを除いて、いちばんの親友の不幸に対してさえも同情らしいものはほとんど見られませんでした。何でも娯楽や警句を引き出すことが問題で、友人の不幸についてうまい言葉を言えない人は、そうした言葉の発せられる集まりで、少くともその不幸が忘れられることを喜ばしく思ったのでした。そうしたことから、理性の体系が悲嘆のなかにもちこまれたのです。そして、マルシェ夫人のところへ大勢の仲間と連れだって夜食にやってきたデュ・デファン夫人が、彼女のいちばん古い友人のエノー院長の死について話を向けられると、こう答えたのも善意からなのです。《惜しいことに、今晩六時に亡くなりました。そうでなければ、あなた方はここでわたくしに会えなかったでしょう》[1]」

(一) ディッキンソン氏の『英国と英国人』[2]第二巻における流行を追う人の一日を参照。
(二) ド・ブロイ伯爵。
(三) 一七六三年『ニヴェルノワ公爵書簡集』
(四) 一七八一年、ルイ十六世治下の財政監督長官ジョリ・ド・フルーリーはフランス国民をこう定義してい

る。「意のままに租税や夫役を課すことのできる奴隷的国民である」[1]

(五) リュリエール、マッキントッシュ、『十八世紀の歴史』

(六) 私たちの国の社交界の魅力の欠如は、私たちの旅行好きを説明している。

ペーザロ、六月二日

わたしはB＊＊＊侯爵の息子たちと一緒にモスカ伯爵[2]の庭園を訪れる。――パリの最良の学舎で教育されるフランス青年は、よい先生にめぐりあう。先生方は世界でも一級のパリやロンドンの学者の後塵を拝しつつ、青年を学問へと導いていく。彼はディヴィーの化学を、セーの政治経済学を、トラシーの思考法を勉強する。しかし彼は自分のネクタイのことも大いに考える。ついに社交界に出ると、彼の大問題は才知をもつことであり、彼は万巻の書物を読んでは忘れる。そして二、三年後にはある地位につく。イタリアの青年は、どこかの迷信的な学校で十六世紀の書物を用いて教育される。彼は野蛮で無口でおそろしく疑り深い司祭たちの社会から出る。二、三年のあいだたいへん勉強するが、ドゥロルムとかモンテスキューを読む代わりに、ヴィーコや何がしの時代おくれの作家を読む。政治経済学ではまだコンディヤックどまりである。すべてにおいてこんな具合である。二、三年後、彼は婦人のお供の紳士になる。恋、嫉妬、情熱が彼の心をとらえ、生涯にわたって一巻の本を開くこともない。――ペルティカリ伯爵夫人[3]の楽しい社交界。有名なモンティの娘である。彼女はわたしよりラテン語を知っている。

ロヴィーゴ、一八一七年六月四日

ついに教皇領から出た。ボローニャでは、住民たちはしっかりした性格をもっているので、そう

1 ジョリ・ド・フルーリーの言葉としてここに引用されているものは、シャンフォールの『人物と逸話』(一八〇三)に伝えられているが、そこでは「わが国のもっとも古い政治評論家の格言」とある。

2 ペーザロから十キロほどのカプリーレにあるベネデット・モスカ侯爵の別荘のこと。

3 ペルティカリ伯爵夫人は美貌と知性と恋愛で有名だった。一八二六年版では彼女の名が消え、その夫ペルティカリ伯のことが述べられている。

4 ゴラーニの三巻の書物とは『イタリアの主要国家における宮廷、政府、風俗に関する批判的秘録』(一七九三年パリ刊)のこと。ゴラーニは諸国で波乱に富んだ生活を送った。

5 『日陰の丘の伯爵夫人』の正しい題名は『草の茂った丘の伯爵夫人』。ジェネラーリの作曲で一八一四年トリーノで上演された。

そう自分たちの従者や司祭の意のままになっていない。そのうえランテ枢機卿は、彼が告解で知ったことを全然知らないふりをするような才知のある人である。彼の下にいる司教の一人がわたしに言った。「いちばん見識のある人がいちばん幸福とはかぎりません。国の不幸があらかたの原因で、市民のなかに相対立する欲望が播き散らされたばかりであるような、そういう国については別です。」ヴォワイエ・ダルジャンソンでもこれ以上うまくは言えなかったろう。(一)

(一) 一八一七年に、フランス以外では、人に読まれる十ページのうち、五ページが買収された作家によって、三ページが地位や十字架にあこがれる人々によって、約二ページが節操を守ろうとする人々によってつくられるので、好奇心の強い人は、あらゆる対立的な文章を探し出すにちがいないし、新聞法違反の判決が下ったにしても、誇張のために否応なく忘却してしまうような文章を探し出すにちがいない。わたしが、一七九八年に出たゴラーニ氏のイタリアに関する三巻の書物[4]をすすめるには、以上のような文句が必要であった。何が印刷できるか知るのに、ロンドンでは毎木曜日、マレー氏のところで弁護士の助言がある。

六月五日、午前零時

わたしは二時間のあいだ涙が出るほど笑った。マルス嬢以来わたしの見たいちばん気をそそる女優が、ジェネラーリの魅惑的なオペラ『日陰の丘の伯爵夫人』[5]を歌っていた。何という顔だち。何という演技。何という目。恋を知ったものにとって何という夕べ。わたしはカテリーナ・リッパリーニを忘れないだろう。彼女が舞台から去るや、わたしは理想美についての高尚な観念を抱懐し、この魅力的な例からその原理を確立したり壊したりした。グィドは美しい女性に天を見させるのに数々の方法があると言っていた。わたしは今晩、恋とうらみと嫉妬と愛する幸福が、数々の異なった方法で表現されるのを見た。

このうえなく激しい感情や、このうえなく気ちがいじみた陽気さのこのような花火は、まもなく消えるにちがいない。リッパリーニは繊細な目鼻だちの美しいブロンドである。彼女は今後三年間は醜いか冷淡でなければならない。何というドタバタ、何という見事な喜劇場面だろう、『捨てられたディド』[1]の三重唱（テルツェット）は！　これを彼女は二人の恋する男に、彼らのうちの一人が彼女に言う『ディド』のなかのうらみの言葉をもじって、歌わせようと考えつくのだ。そこに若気の過ちがある。フランスの喜劇に欠けているのがこれだ。

ロヴィーゴ、一八一七年六月六日

わたしはあの美しい女性に夢中になるかもしれないと思う。彼女の背丈はすらりとしていて、目が神々しい。彼女はミラノで最良の教育を受けた。わたしはたった今彼女が演じるのを見、彼女にひきあわせてくれるというのを断った。そして、すばらしい喝采の嵐のなかを、午前零時が告げられるとただちに出発する。良識あるわたしの観念、イタリアに関するわたしの根本的な考えは、どれもがかすみはじめる。

パドヴァ、一八一七年六月十八日[2]

教皇領とヴェネツィアの国家の対照以上に甚だしいものはない。ここでは、逸楽が高く評価されている。みんなの顔は晴れ晴れしている。みんなは笑い、冗談を言い、大声で話している。わたしが昨日紹介状をもってたずねた人々は、今は古くからの友人みたいだ。イタリアではこうした率直さがたいへん著しい。わたしは、八時から九時まで、カフェ・デル・プリンチペ・カルロに集まるすべての婦人に紹介される。この自然で陽気な楽しい集まり、しかも世界でいちばん貧しい町での

1　『捨てられたディド』はおそらくメタスタージョの台本にドメニコ・モンベッリが曲をつけた作品（一七七五）。

2　この日付は誤植ではなかろうか。それとも次のアルクァと前後して挿入されたのだろうか。アルクァのあとにパドヴァ六月十九日が続いている。

3　ペドロッキは有名な文学カフェ。スタンダールはここでの楽しい思い出を一生忘れなかった。現存するが何度もの改築で往時とは変ってしまった。一九五六年十一月、スタンダールを記念するプラックが掲げられた。

4　パッキャロッティの住居をベンボ枢機卿の館と同一のものと誤解させたのは、コシャンの『イタリア紀行』と言われている。実際には彼はファルゼッティ邸にいた。

5　ブラガディン伯爵がパドヴァで彼に語った逸話は、一八一五年七月十七日付の日記で詳しく述べられている。

集まりを見て、わたしはジュネーヴのおつにすました様子を思い出す。それにあそこの連中ときたら自分たちが賢いと思っている。

ここへきて以来、わたしは毎晩、午前三時に、たいへんすばらしいレストラン、ペドロッキ[3]で夜食をさせてもらっている。わたしの時間は過ぎゆく。一週間前には顔も知らなかった二、三十人の親しい友人たちと快適に暮らしている。夕方、わたしはパッキャロッティの桟敷席へ行って、音楽のよき時代を話す。彼はわたしに、ミラノでは同じ曲を五回もアンコールさせられたものだったと語る。彼にはまだ青年の熱気がそのまま残っている。恋愛はなかったと考えられている。それに人も知る去勢歌手である。彼は当地にロンドンの最高に美しい家具類を運んでこさせた。町の中心の、サンタ＝ジュスティナ教会とサントのあいだにある彼の英国式庭園には、ベンボ枢機卿がその生涯で最良の年々を、恋人の膝の上で歴史を書いて過ごした塔がある。[4] パッキャロッティのあらゆる表現のなかで躍動しているこの魂、七十才という年で、彼がいとわずに叙唱を歌おうとするとき、彼をまだ崇高なものにするこの魂を前にしては、理屈は少し後退する。わたしはこの偉大な芸術家との六回の会話で、どんな本で学ぶよりも音楽について学んだ。それは魂に語りかける魂である。

アルクァ、六月十日

わたしは四日間をエウガネイ山中のペトラルカ終焉の地アルクァと、有名な温泉地バッターリャで過ごした。温泉でこそ、ヴェネツィア的性格の幸福が発揮される。わたしはそこで、わたしが今までに会ったいちばん好ましい人物の一人ブラガディン伯爵に会った。[5] あのヴェネツィア人の熱烈な親切心には、おこないすましたところが少しもなく、衒学的なところもなく、潤いを奪う虚栄心の息吹きに動じるところが少しもない。それは幸福の迸出であり、その幸福たるや人生のありふれ

た状況のなかに存在する。たとえば、ブラガディン伯爵はヨーロッパでもっとも高貴な四つの家柄の一つに属するが、祖国の没落以来、ヴェネツィアに足を踏み入れてはいない。あのいつもぶつぶつ言い、応々にして意地悪で、古めかしい一人よがりを絵に描いたみたいな精鋭隊士[1]どもから想像できるだろうか。愛すべきヴェネツィア人の生き方とはほど遠い。

ヴェネツィア人とミラノ人は、非常に陽気な人と非常に善良な人が憎しみを覚えるかもしれない程度に、憎みあっている。こうした全体的相互的な憎しみはイタリアの町々の著しい特色であり、中世の専制政治の結果で、自由にとって大きな障害である。これが町々の独自性を相殺している。フランスにはパリしか存在しない。パリが全部のよいところを掬いとっている。アラスがリールを憎まないのは、生活がないからであり、そしてまた、それらの町が二十五年前から享受している正しい政治のおかげである。わたしについては、パリを離れた今、ヴァランスやリヨンが好きである。イタリアでは、ブレッシャで激賞される俳優や書物や勢力家が、ヴェローナで非難される。ミラノから三十マイルの小さな町コモは、町の費用で八十万フランかけて、パリのどの劇場よりも美しい劇場を建てたばかりだが、ここへきて歌ったミラノの名優たちはさんざんにやっつけられた。「ここではよそよりも強い植物的人間が生まれる」がつねに繰り返して言われねばならない。

イタリア王国以外では冗談は出ない。よそではどんなところでも、とりわけローマでは、パシャのとりまきが口に出すまじめで、正確で、猜疑的な言葉づかいがある。どこかに到着すると、わたしがいつも実行するのは、芝居に行き、音楽家たちの会話が聞こえるようにオーケストラの近くに席をとることだ。トリーノでは、彼らは陰険な様子で眺めあい、あまり話さず、しばしば微苦笑を洩らす。ミラノでは、善良そのものの口調で、たえず冗談をたたきあう。二週間前オステリアでした食事、その際病気の友人の運命を不憫に思ったことを、仔細に語りあっている。この全体には、

1　この精鋭隊士という言葉は亡命貴族のことを皮肉に指し示している。これは、ルイ十八世の身を守っていた六百人の貴族のことで、時代遅れの滑稽な衣裳をつけていたので、パリ市民から「ルイ十四世の精鋭隊士」と呼ばれていた。『ナポレオン伝』第七十九章でスタンダールはこれにふれている。

平静で、幸福そうな、落着いた様子があり、述べられる考えのなかにはいささかの言外に匂わせるところもない。ミラノ人は、一人の友人と語りあうあいだにも、通りかかる別の友人たちに手で数々の愛情のこもった合図を送る。ヴェネツィアでは、これが数々の面白い合図である。すべて言わず語らずであり、活発で、楽しげで、快活である。総督の息子もゴンドラ漕ぎと同じくらい陽気だ。彼の色事も大っぴらである。誰それの情報を知らされるときには、その男が仕えている婦人の名前も必ず出てくる。フジーナとかムラーノ島で十年前におこなわれたピクニックが引きあいに出されると、夫たちの前であろうと、当時はペピーナが誰それに仕えられていたとか、あの頃はマリエッタがプリウリにやきもちをやいていた、などなどが必ず思い出される。ヴェネツィアやボストンでは、陽気と幸福が政治体制の悪さと釣りあいをとっている。(一)

幸福を見ると微笑が浮ぶ。笑が浮ぶのは、隣人に対する自分たちの優越を急いで見てとってのことだ。わたしがたいそう驚いたことには、ミラノ人のなかで支配的なのは微笑である。フランスでは、笑である。虚栄心は一般に冗談の傾向をつくり出す。フランスの百姓は、一人でいても、戯事を言って楽しんでいる。しかし羨望はすべてを台なしにする。

それにしても、フランスはヨーロッパでいちばん幸福な国だと思う。すなわちそこには幸福の材料がそろっている。ところが、各党派の支配が、おそらくそれを感じるのを少しばかり邪魔している。わたしはフランス人にロンバルディーア人の善良な気質を願っている。

フランスの幸福の大きな特徴は、産業が充分かつ確実に報いられることである。イタリアでは、工場主は建物を建て、道具を購い、相当の資本を外側のことにかける。それは工場主が近隣のパシャにそれだけ手がかりを与えることだ。したがって工場主はいっそう奴隷になる。是が非でも彼はパシャと仲良くしなければならない。イタリアにはほとんど国民の土地がなかったので、フランス

のように、小地主であるがためにしあわせな一千万百姓の幸福を自慢するわけにいかない。フランス国民はすでに一つの結果に達している。人が地位を得ると、第一の疑問は、彼はそれ相当の何をしたかである。選挙法は、国境線で囲まれた一国が理想の姿へ向かう大きな一歩ともいうべき卓抜な法律であるが、私有財産に比例した特権というこのおめでたい法律[1]は、少しでも存続すれば、所有の自尊心とその自尊心に起因するあらゆる力を増大させるだろう。

一千万百姓小地主というフランスでもっとも尊敬できる階級は、イタリアではいちばん悪辣な階級にあたる。パルマで、わたしの二輪馬車の御者は、泥棒稼業でいかにして二十七枚のナポレオン金貨をせしめ、馬と馬車を買ったかを、破廉恥にもわたしに語ってくれた。彼が旅人を襲ったという場所を三ヶ所通り、それをきわめて率直に教えてくれた。反対に、フランスの百姓たちのあいだでは、盗みを恐れる気持が甚だしい。彼らの徳は何のせいだろう。わが国の軽蔑すべき新聞が毎朝呪っているためだ。

フランスの百姓の著しい特徴、それは幸福である。(二) イタリアの百姓のは、美である。フランスにあるわずかの美は、気取りで台なしになっている。素朴で、冷静で、そして情熱的な様子は、事情が許せば、イタリアの百姓にとって自然なものである。このことは、彼らには専制政治下の人民につきものの残忍性がほとんどないということを意味しない。P＊＊＊[2]についてはまったく例外で、そこでは、百姓が一七八七年のわが国と同程度に道徳的に堕落している。道徳的堕落とはつねに不幸と悪辣と解されたい。人殺しという諸君に戦慄を覚えさせる悪党も、一家の父親としては諸君に哀れみを催させよう。

フランスでは同情がたやすく掻きたてられるが、これは別の言い方をすれば、滅多に深くは呼びさまされないということである。ローマやナポリの諸国における同情については、

1　一八一四年のルイ十八世が制定した憲法で、下院の選挙については、選挙権が三百フラン以上の直接税を納入する三十才以上の男子、被選挙権が千フラン以上を納税する四十才以上の男子と定められた。これは一八一七年二月の選挙法に受けつがれたが、この当時選挙資格のあったものは十一万人と言われる。

2　P＊＊＊とは「教皇領」を意味すると考えられる。

最初の思いやりは自分からはじまる。

イタリアの先端のカラブリア地方のはずれでは、未開の人のいくつかの美徳にぶつかるが、彼らはそこで実施されている唯一の法律である迷信に毒されている。

どんなにわたしはこれらの漠然とした結論を除去して、わたしがそれを引き出してきた逸話を記したいことか。最近わたしの日記を飾ったもののなかでは、ラ・フォンテーヌ氏の話がかなり罪のないもののようだ。

「一八一〇年に、これ以上ないというくらいに面白い顔をした若いフランス人の大尉、ラ・フォンテーヌ氏が、フィレンツェのわれわれのところへやってきた」とバッターリャのカフェで語るのはあるフィレンツェ人である。「大尉はシュナイダーに滞在して、馬を買い、大金を使った。彼は社交界に行き、エリザ夫人の宮廷をかなり軽々しく扱い、仮面舞踏会ではモンテカティーニ夫人を、夫人の才能にもとづく最近の発見に関してからかうということをしでかした。その翌日彼は出発命令を受取った。すると彼はデュテルトル氏に、自分は釘をこめたピストルで撃たれてひどく怪我をしているとうちあけた。ウーディネの連中を怒らせ、彼は暗殺されようとしたのだった。大公夫人は自分の命令を忘れ、若い大尉は再び社交界に受けいれられた。ある朝、彼はまっ青になってデュテルトル氏の前に現われた。《ウーディネでわたしの暗殺を計った連中をたった今見かけました》――《心配ご無用です》と賢明な警察署長は言って、《なぜあなたが恨まれているかわかりませんが、あなたをお助けしましょう。》大尉はブォナパルテに対するちょっとした陰謀に荷担したことがあった。滑稽な陰謀家たちの策略を見て、彼はこのことを彼らに言ったうえ、自分はもう何事にも加わらないと宣言したのだった。ラ・フォンテーヌ氏はさらに数ヶ月をフィレンツェで楽しみ、

彼の傷は癒えた。彼はナポリに向け出発し、ずっと王の副官たちと一緒に、用心して行動していた。ある朝、彼は兵隊たちと狩をしていたが、森の中のかなり離れたところで、彼の助けを求める声が聞かれた。みんなが駈けつけると、彼は二発の弾丸に撃ちぬかれて倒れていた。一発は腕を砕き、もう一発は腿だった。暗殺者たちを追跡したが無駄で、彼らがこう言い残すのだけが聞かれた。《あばよ》」

(一) 政治体制は百年後になってはじめて習俗のなかに浸透すると言える。ボストンはまだ見苦しい党派精神の諸結果を匂わせている。党派精神がアメリカの最初の法律であった。

(二) 英国民の三分の一は施物を受けている。これは出版の自由を相殺する。

パドヴァ、六月十九日

わたしはドイツ人の、金持で、ブロンドで、大貴族の、立派な美青年に会った。彼は夢中になって……彼らがドイツに定着させたがっている幅広のズボンのことを話した。民族衣裳をうまく復興させることができれば、ヨーロッパは彼らが一民族であると認めるにちがいない、と彼らは信じている。この哀れな伯爵。彼はこのズボンをたいへん重要と考えている。彼はホーヘンリンデンとかマレンゴ[1]の日以上にそれを大切と思っている。

これらのかわいそうなドイツ人たちは、死にそうなまでに精神力をもつことにあこがれている。[2] 世間では、そのことがそれを少しももっていない人々を識別するしるしである。(一)

彼は博識である。わたしが短いフロックコート、長髪、幅広のズボンといったものの崇高さを理解するのに必要な内部感覚を欠いているのを見て、彼はわたしに彼らの文学の数々の美点を長々と証明する。わたしは誇り高いゲルマン人が、成りあがりもののように激しやすいのを知る。

1 マレンゴの戦いは一八〇〇年六月十四日、ホーヘンリンデンの戦いは同年十二月三日。いずれもフランス軍がオーストリア軍を打ち破った。

2 『恋愛論』第四十八章で同じ考えを繰り返している。「ドイツ人と他のすべての国民のちがい、彼らは冥想によって静まるかわりに興奮する。第二のニュアンス、彼らは死ぬほど精神力をもちたがっている」

3 ゲーテの自伝『わが生涯より、詩と真実』の書評が、『エディンバラ評論』第五十二号（一八一六年六月）に出ている。ゲーテが恋したフランクフルトの宿の娘アニヒェンを、スタンダールは大伯母と混同している。

4 マッセンバッハ大佐の仮綴じ本とは、『一八〇五、六年の諸事件に関する考察』。

5 このドイツ精神の批判は『エディンバラ評論』第五十一号（一八一六年二月）に掲載されたシュレーゲルの『劇文学講義』に関する記事から借用された。

6 コルネイユ作『ロドギュンヌ』第一幕五場でロドギュンヌがラオニスに向って言う台詞のなかにある。

ドイツ人には、シラー一人と、ゲーテの二十巻のなかから選んだ二巻しかありはしない。ゲーテの自伝は、そのきわまりない滑稽さゆえに今後も読まれよう。この男は自分が重要人物であると思いこみ、二十才のときどんな風にして馬を調教してもらったかとか、アニヒェンという大伯母[3]がいたとかいうことを、八折判四巻でわれわれに教えてくれる。しかし、これはドイツに滑稽の感情がない証拠である。そして、この感情がないときに、是が非でも才気を衒おうとすると、まさに前代未聞の状態のなかに陥みそうになる。そして他人の才知を裁いたり、モリエールが陰気な諷刺しか作りはしなかったとそのチュートン的批判の高みから決めつけようとすると、まさに自前で全ヨーロッパを楽しませることになる。

文学では、ドイツ人にはうぬぼれしかない。彼らもまた自由になってはじめて何ものかになるだろう。しかしそれはイタリア人と反対のものだ。彼らは相当の学識をもってそれに到達しようとするので、最後にはそこに行き着くだろう。マッセンバッハ大佐の仮綴じ本[4]こそ一言語を形成する。なぜなら彼は自分が才知をもっていることを示そうと考える代わりに、強烈に自分の興味をそそる観念を、明瞭に説明しようとしか考えないからである。

わたしの気づいたことだが、ドイツ人はすることすべてが、何がしかの想像力の高揚とか常とは異った感情の自覚によってよりも、人目をひきたいという無駄な欲求によって大いに左右される。[5]趣味はもっぱら才能が役立つ事柄の方へ決まる。

秘かな結びつきが、共感があります……[6]

だがこういったことはドイツ人向きではない。彼らの関心事は才知を罵ることである。才知は一

種の独裁者として彼らから熱愛されているが、その熱愛ぶりは欺瞞にまで達する。彼らが書くのは、ある問題についての観念に悩まされるからではなく、適当な骨折りをし必要な追求をして、何かしら光彩陸離としたものを首尾よく想像できるような問題を発見したと考えるからである。したがって以上のような趣旨で、彼らは読書し冥想する。最後に、彼らは何かしら変った逆説的な観点に到達する。そして天才の作品は成る。もはや学殖と卓抜な哲学という彼らの全砲兵をもってそれを確立するだけが問題である。しかしこの勇ましい仕事では、彼らは自分たちに向けられる意見をいさかも気にする必要はない。彼らがあいかわらず徒刑囚のように働くのが見られるなら、それは彼らが光彩陸離と見なす理論体系を、立派に証明しようとするためである。そのうえ、いかなる問題も彼らには自分の手にあまるとは思われない。言うまでもないことであれば、それだけいっそう、彼らは自分たちの理論的かつ形而上的な諸原則の店を大々的に広げるのである。

実際、彼らは鈍重、緩慢、善良な国民であり、激しく頻繁に繰り返される何らかの衝動によってのみ動かされる。たとえば、著述家たちは、二巻目になると判断力や自制心をすっかりなくして、極端な非常識に陥ることをいかにしても止められない。真実はもはや彼らにとって現存するものでなく、彼らの理論体系にならってあるはずのものとなる。

悪ふざけ、これが彼らの哲学である。この哲学においては、はじめから、経験主義の名のもとに経験を追放している。この単語が出てきたからには、先へ進まずに話を次に移すことができる。わたしは先に進まないにしよう。というのもわたし自身うんざりしている。七年前からドイツに住んで集めたもの全部を使って、細かな証拠をあげたとしたらどうなるだろう。

わたしが引用した二人の偉大な詩人をのぞいて、すべてのドイツ人は、彼らのいかがわしい知名度を、彼らの書いたものの曖昧さにのみ負っている。くだくだしくないイタリア人を見つけるのは

1　バイロイト辺境伯夫人の『回想録』は一八一一年にパリで出版された。スタンダールはこの本に関する記事を『エディンバラ評論』第四十号（一八一二年十一月）で読んだにちがいない。

2　ブッチ本のマルジナリアに次のようにある。「ドイツの恋、ガシクールのなかからとること」すなわち『恋愛論』第四十八章を構成することになる。

3　『メルキュール・ド・コブレンツ』は『ライニッシャー・メルクール』のこと。これはコブレンツでヨーゼフ・フォン・ゲレス（一七七六―一八四八）によって一八一四年に創刊された。しかしゲレスはその進歩的思想のため一八一六年一月追放され、同紙は途絶した。

4　サントの祭りは六月十三日。

困難であるが、それと同じくらいに、明晰であるようなドイツ人を見つけるのはむずかしい。彼らは、文学の傑作をもつ以前に、よき習俗をもたねばならないということを理解しようとしない。ところで、フリードリヒ大王の妹のバイロイト辺境伯夫人に『回想録』がある。[1] この奥方が叙述している野蛮人たち(一)において、芸術にとっての最悪の事態は、自然さがないことである。したがって、彼らには美しい散文がない。そして散文こそ一民族の文学的進歩の尺度なのだ。シラーの『三十年戦争』は滑稽な大言壮語である。これはヒュームやヴォルテールに到るまでほど遠い。[2]

(一) 以下に述べられる詳細は正確であるが、ライン河のこちら側まで名前が届いていないドイツのさるお偉い方、『メルキュール・ド・コブレンツ』[3] の発行者が、われわれに向かって言ったたいへんふざけた言い方に、わたしがもう少し腹を立てていなければ、わたしはその詳細をことさらにしなかっただろう。

(二) 『ライニッシュ・メルクール』参照。

一八一七年六月二十日

わたしはついに、目に涙を浮べて、わが親しいパドヴァの人たちと別れる。八月のサントの祭[4]に戻ってくるとわたしは約束する。そのときには人口は二倍になる。わたしの道づれの英国人たちは、二週間前からヴェネツィアに逗留している。彼らはパドヴァが世界でいちばんさびしい町だと述べていた。彼らの言うことは正しい、その精神性を見ないものにとっては。わたしの方は、いつも次のように言うことにしよう。「昔のヴェネツィア政府の独裁政治バンザイ!」わたしは紹介されて一人のフランス人旅行者に会う。何て変った連中だ。きざ男の役柄を認めてもらうには、快楽一つ一つの享受を求める代わりに、そのことで頭をいっぱいにしなければならないだろう。フランス人たちはそんな風にして青春を過ごす。彼らには見せかけの満足が残る。反対に、イタリア人たちは

夢中になって目下の快楽に打ちこみ、わたしの隣人の熱中は、わたしの熱中を加える。おそらく神経的な影響がある。件のフランス人は三日間わたしを底の底まで干あがらせた。わたしは彼が出発するのを見て喜んだ。彼との出会いは、旅行中わたしに起こったいちばんの不幸である。わたしは天国にいた。彼は全力でわたしを引っぱり、地上へ連れ戻した。わたしはこれを郵便船の中で書いている。目の前はストラだ。わたしは手を止めて、ブォナパルテがピザーニから盗んだこの美しい宮殿を見る。[1]

(一) わたしは、なぜブォナパルテが世界でいちばん善良なヴェネツィアの貴族たちを破滅させようとし、彼を蔑んでいるピエモンテ人にあれほどの前払いをしたのかわからない。彼はさほど目が利かなかったので、きっとあの共和国という語に騙されたのだ。ヴェネツィアの貴族たちは国家の主人であり租税を免れていた。ブォナパルテはその延滞金を要求しようと考えた。ピザーニ家は巨大な額を支払う義務を負わされ、ストラの美しい宮殿をとりあげられた。

わたしはイタリア第一の地質学者、ミラノのブロッキ氏に紹介される。[2] この面白い国の姿を完全に知るために、ブロッキ氏の『化石貝殻学』とアーサー・ヤングの『旅行記』を読まねばならない。後者は悪訳。[3]

ヴェネツィア、六月二十一日[4]

わたしの心は病んでいる。オペラ・セリア、しかも冷ややかな女性歌手たちによって演じられたオペラ・セリアは、かすかにわたしの関心を掻きたてただけである。わたしの道づれの英国人たちがたわごとを言っているのを見て楽しむ。この国ではあらゆるものが彼らをぞっとさせる。わたしはピューリタンの人たちに話しかける。

1 ヴェネツィア総督ルイジ・ピザーニの別邸は一七三五年から四十一年間を要してブレンタ河左岸のストラに建設された。これは盗まれたのではなく、一八〇七年ナポレオンによってアルヴィーゼ・ピザーニから九十七万三千フランで買いあげられた。その壮麗な館と庭園、ティエッポロのフレスコ画は有名。

2 スタンダールはブロッキに会ったことはない。『エディンバラ評論』第五十一号で知ったと思われる。

3 アーサー・ヤング著『一七八七、八八、八九、九十年のフランス旅行』は一七九三年スーレによって翻訳された。優れた翻訳とされている。

4 スタンダールがヴェネツィアをはじめて訪れたのは一八一三年。スタンダールはヴェネツィアの人間に関心を示しても、町や風景には心ひかれなかった。

5 ロヴィーゴは、言い換えれば「わずらわしさから逃れられる地方の小さな町」ということになろう。★一四七—八ページ参照。

6 ＊＊＊公爵とは、有名なハープ奏者マリア・マルチェッロ・デ・マリン子爵（一七六九—一八六一頃）と言われる。

7 アル＊＊＊夫人とはヴェネツィアで有名なアルブリッツィ夫人（一七六〇—一八三七）のことか。

ヴェネツィア、六月二十二日

書くべきこと何もなし。すべてがわたしをうんざりさせる。おもいきってあれを読者に言おうか。日に何度も、わたしは全部の信用状を小包にしてベルリンへ送り返し、二百ルイだけ残して、ロヴィーゴ[5]へ飛んで行きたい気持になる。結局、わたしはイタリアで何かを失うことがあるだろうか。多少の金だ。わたしはあの危険な文句、一週間の幸福はわたしが大臣と送っているあの十年間の味気ない生活よりも値打がある、に不意をつかれる。

ヴェネツィア、六月二十三日

マルコリーニがここでは『タンクレーディ』を歌っている。彼女の美しい声や手堅い演技の名残りが称讃をひき起こす。栄光を讃える瞬間の「アルマ・グロリア」は心に滲み入る。このオペラ『タンクレーディ』は、その歌詞を修正したみるだけの価値がある。才人の新聞編集者プレヴィダーリ氏は、バルセロナとミュンヘンで同時に『タンクレーディ』が上演されていると教えてくれる。彼はかつてウィーンの社交界で、ブォナパルテは偉大な将軍だと言ったことがあった。彼は戦争中の連隊に一兵卒として三年間兵役に送られた。彼は決して脱走しようとはしなかった。

ヴェネツィア、六月二十四日、午前三時

わたしはたった今＊＊＊公爵[6]が見事にハープを演奏するのを聞いた。わたしは音楽に関する彼の意見にびっくりする。すると、アル＊＊＊夫人[7]がわたしを嘲笑する。うまく楽器を演奏すればするほど、演奏するものについて目が利かなくなるのは、イタリアではあたりまえのことなのだ。わたしは三つの理由を考える。

一、へぼ音楽家たちとの長い交際。

二、演奏される美しい作品を熱中せずに聞くのに慣れている。

三、傾注される努力が、人の心を感動させようとする努力ではない。わたしはコレの語る愚かな秘書の逸話を思い出す。その愚かさたるや、そうと知らずに、自分のことが書かれている手紙を筆記するほどなのだ。すなわちこの秘書は自分の筆蹟のことを考えていたわけだ。自分の楽器に強く頼っている人の心は、わたしの心とはちがう。彼は作曲家としての学を示し、演奏家としての手腕を示せるあの複雑なハーモニーのなかに、快楽を見出す。感官を喜ばせ、心を感動させることは、彼にとって何の値打もない。しかし彼の快楽はそれでも存在し、おそらく非常に強い。音楽について、わたしは日に日に、発熱を感じるのと同じくらいはっきりした、いくつかの相異点を感じている。

ヴェネツィア、六月二十四日

今晩、一時頃、サン＝マルコ広場のカフェ・フロリアン[1]には、上流社会の四、五十人の女性がいた。サン＝モゼー劇場でのある悲劇で、息子に剣をさし出してその妻を殺すよう命じる暴君を見た、とわたしに語ってくれる人がいる。このしあわせな国民はこの明暗のタッチの強さに耐えられなかった。客席全体が大きな叫び声をあげ、暴君に向かってすでに息子の手に渡した剣をとりあげるよう命令した。この若い王子はオーケストラ・ボックスの方へ進み出て、彼が父親と同じ気持ではないことを観客に保証して、やっとのことで観客と折りあいをつけた。もしお客様たちが自分のために十分間だけ時間をさいてくれるならば、自分が妻を救うのが見られるでしょう、と彼は名誉にかけて誓ったのだった[2]。

ヴェネツィア方言でのゴルドーニの喜劇はフランドル派の絵画である。すなわち、共和国滅亡以

1　カフェ・フロリアンは一七二〇年に開店。バイロン、ゲーテ、ワグナーなど多くの有名人がこの店に立寄った。現存。

2　ゲーテの『イタリア紀行』に次のようにある。「演劇に対する彼ら〔イタリア人〕の興味は、彼らが現実に関心を持つということを意味する。それで芝居のなかで暴君が自分の息子に剣を与え、息子と向い合って立っているその妻を殺せと迫ったとき、観客はどなりたててこの要求に不服の意を示し、すんでの事に芝居が中止されそうにすらなった。観客は剣を引込めろと老父に要求をする。が、もしそうなれば、これからつづく場面は撤回されなければならない。板挟みになった息子はとうとう決心して、舞台の前部に進み出ながら「どうかいま暫く辛抱していただきたい。これからお望みのように進展して参りますから」と謙遜に懇願した」（相良訳、岩波文庫版上巻一一一ページ）★一三〇ページ訳注2を参照。

3　『ハイドンに関する手紙』で次のように書いている（第七信）。「イタリアにはコレのようなものは一人もいないし、『ぶどう酒のなかの真実』の気持よい楽しさに近いものは何もない」

4　この部分がどういう逸話を意味しているのか不明である。「アンカ・ミ」はミラノ方言とのことだ。

前の逸楽と幸福の時代の、下層階級の風俗の真実と下品さにあふれている。上流社会の風俗もすばらしい喜劇を生み出したことであったろう。しかしそれを描く人には、『ぶどう酒のなかの真実』で示されたコレの天才[3]と、『マルタのオレンジ』で示されたデグランチーヌの崇高な力が必要であった。司教が彼の姪に意見をして、彼女にさる王侯の情人になるようすすめる、というのが後者である。

わたしが絶対に物語ることができないのは、かわいらしい女性からダイヤモンドをとり戻そうと、ベッドにひそむユダヤ人の逸話だ。彼女は不当な有罪宣告を受けたある不幸な男を救おうと長老の家から戻り、ゴンドラを降りると恋人に会う。彼女が彼に言う言訳は、どんな逸話に比べても、わたしの見たいちばん神聖なものである。それは若いドイツ人の貴族を傍に呼んで、*Anch'a mi*〔わたしにも〕と言うモチェニーゴ総督に似ている。[4] わたしはこの手のものを三十も知っている。それはきわめて常軌を逸したもので、それでいて少しも嫌悪すべき色あいがない。一介の下女（フランテスカ）から総督に至るまで、あらゆる人物のなかに、幸福を生み出す素質が定着しているのが認められる。これらの逸話ほど、才知の人である英国人を怒らせるものをわたしは知らない。言わなくても、この幸福な国民は、百年前から、実害を与えるもの以外に邪悪なものはないということを知っていた。

『キオッジャの騒動』、『ぶつぶつやのトデーロ旦那』は、詩人の心に雄大さがなくても、芝居で優れたところがありうるとすれば、見事なブルジョワ喜劇である。

ヴェネツィア、六月二十五日

わたしは四ヶ月来のパリからきた手紙を全部一度に受けとる。快い楽しさ、心底からの心気一転だ。

あの立派な選挙法はわが国王のゆるぎない天分のまったき賜であるが、それ以来、国民はアメリカ的良識に向かって駈足で進んでいるとわたしは考える。一八一六年は「フランスの教育」という欄外書きこみで歴史に記されるだろう。

フルーリーの引退[1]とともに、フランス古来の品のよさは消えるだろう。『町人学校』[2]は三十年たったら理解できないだろう。すべての古い観念のこうした総体的な破産のさなかで、芸術はどうなるだろうか。絵画は進歩するだろうし、音楽は滅びよう。絵画には理性的要素があり、そして理性はいやが応でも百倍にもなるだろう。音楽を鑑賞するためには、いくらかの魂のやすらぎ、いくらかの憂愁が必要であり、それは焼けつくような太陽がもたらすものである。

わたしは音楽を聞いて楽しくなったことが一度もない　　シェイクスピア[3]

ところが、フランスには驚くべき精神の活動があることだろう。われわれをアメリカの良識から隔てている段階の一つずつが、一つの戦争によって除去されるだろう。そして六ヶ月のあいだ、この戦いは世界でもっとも偉大な事柄と思われるだろう。生活があまりに活発になると、それが芸術を抑圧し、圧し殺してしまう。英国の思想の中心地エディンバラ[4]がそうである。活発な生活がすたれると、ローマのように、芸術は愚か者たちの手に陥る。イタリアの精神的荒地を立派にするには、二院の討議と共に、この国が芸術に喜びを感じ続けることである。サン＝カルロ劇場は、どんなに立派な憲章よりも、ナポリの人々を彼らの王に近づけた。

フランス人がいつか音楽を理解するなんてありえない。この点では、彼らはきわめて著しく誤った才能をもっている。似て非なるものに拍手喝采を送り、美しいものは平凡だと言って見逃す。こ

1　フルーリーはテアトル・フランセの俳優で、引退公演が一八一八年三月三十一日におこなわれた。

2　『町人学校』はアランヴァルの喜劇で、テアトル・フランセの演目の一つ。スタンダールは若い頃にこれを見てフルーリーの演技に感動した。

3　『ヴェニスの商人』第五幕一場で、シャイロックの娘ジェシカが恋人のロレンゾに言う言葉。『ハイドン』（第十二信）でも引用されている。

4　当時のエディンバラはロンドンをしのぐほどの文化的繁栄を誇っていた。スタンダールは『エディンバラ評論』を頭において書いている。

5　一八一七年にパリの国立アカデミーはこの二つのオペラを上演した。『エルナンド・コルテス』はスポンティーニ作曲、エスメナール台本の一八〇九年の作品。『コロノスのオイディプス』はサッキーニ作曲、ギュイヤール台本の一七八七年の作品。

6　カタラーニ夫人は一八一五年にルイ十八世からテアトル・イタリアンの監督をまかされた。彼女を偶像視していた大衆の期待はすぐ裏切られ、彼女に不満を抱く人が多かった。

れは信じられないことのようだが、わたしはそう感じる。一八一七年に国家で七十万フランかけた彼らのオペラ（『エルナンド・コルテス』、『コローノスのオイディプス』[5]、一八一七年六月）へ行ってみよ。彼らのテアトル・イタリヤンのために、どんなに彼らがカタラーニ夫人に煙に巻かれているかを見るがいい。[6] 十六万フランかけたこの劇団は、ブレッシャではやじられよう。この金額と収益をもってすれば、ミラノと同じ程度に立派なオペラをやることくらいたやすいことはない。(一) しかしわたしはやめておこう。いつも音楽のことを話しては彼らを怒らせた。それは彼らが愚かしくなる唯一の項目だ。きっと、英国人のようにピューリタンであったり、イタリア人のように衒学者である方がまだましだ。

口笛のやじがなくなってから、パリにはもう役者がいなくなった。イタリアには、文学を支配する法則が、まだ演劇にもちこまれていない。

(一) ガッリ、三万フラン。ドンツェッリ、一万五千。モネッリ、一万。レモリーニ、一万二千。パチーニ、一万。ファーブル、一万六千。マルコリーニ（フェデーレ）、一万二千。以上が十万五千フランでできる劇団だ。こんなのはフランスには決してない。もう一つお望みとあらば、ダヴィデ（息子）、二万フラン。去勢歌手ヴェッルーティ、二万五千。ペッレグリーニ、一万五千。デ・グレチス、一万五千。モンベッリ姉妹、二万五千。やっと十万フランである。

ヴェネツィア、六月二十六日、午前一時、副王によってつくられた公園の亭にて。

わたしはものを書くような気分ではない。わたしはこの静かな海と、遠くに見えるあの細長い半島を眺めている。半島はリドと呼ばれ、大海と潟とを分けているが、海がこれにぶつかって耳を聾するばかりの轟とともに砕ける。きらめく線が波がしらの一つ一つを描き出す。美しい月がこの静

かな光景のうえに穏やかな光を投げかけている。空気はたいそう澄んでいるので、わたしは大海のなか、マラモッコにある船の帆柱を認める。このたいそうロマンチックな眺めは、もっとも文明の進んだ都会にある。わたしはこの町をオーストリアにいけにえとして差し出したことで、どんなにブォナパルテを憎むことか。[1]——十二分間で、わたしのゴンドラはリーヴァ・デリ・スキャヴォーニに沿って行き、サン＝マルコのライオン[2]の下のピアツェッタにわたしを降ろした。——ヴェネツィアはロンドンやパリよりも文明への道を進んでいた。今日では、五万人の貧乏人がいる。千ルイで大運河に面したヴェンドラミン宮[3]が提供された。それを建てるのに二万五千かかったし、一七九四年にはまだ一万に相当していた。

ジャコモ・レーキのような人をヴェネツィア以外のどこで見られよう。ここの社交界はわたしの気持を捉えて離さない。わたしは不しあわせだ。パリのどんなに輝かしいサロンも、ベンゾーニ夫人の社交界に較べれば、たいへん味気なく、たいへんそっけない。これはわたしには事実だが、おそらくパリの友人の四分の三にはひどい偽りに思えよう。愛想のよい人ほど、音楽やヴェネツィアの社交界の優雅さがわからない。

わたしがペッレグリーノで一緒に食事をしたグループの陽気さは何という陽気さだろう。それぞれが自分の滑稽な癖に似合いの、カスティの『お喋りな動物』[4]から引用した滑稽で大仰な役割をつとめる。——ヴェネツィアに住むあのボローニャ青年[5]の詩。この国を決して去らずにいられたら何て幸福だろう。コルナーロ氏の庭園[6]で過ごした宵は何て甘美な宵だ。

ヴェネツィア、一八一七年六月二十七日

芝居でバイロン卿に紹介される。[7]天上的な顔つきである。これ以上美しい目をもつことは不可能

1 一七九七年カンポフォルミオの和約でナポレオンはヴェネツィア共和国をオーストリアへ譲った。

2 パラッツォ・ドゥカレわきのピアツェッタには、コンスタンチノープルからもってきたという二本の御影石の柱が立っているが、その柱の先端には、一方にサン＝マルコのライオン、一方にサン＝テオドーロの像がある。

3 ヴェンドラミン宮は一五〇九年に建てられた。ヴェネツィアでももっとも美しい建物の一つ。作曲家ワグナーは一八八三年ここで死んだ。

4 カスティの『お喋りな動物』は二十六の歌から成る諷刺詩で、一八〇二年パリで出版された。

5 ピエトロ・ブラッティ（一七七五—一八三二）のことを指すと思われる。彼の父の郷里がボローニャだが、本人はヴェネツィア生まれ。彼のヴェネツィア方言の諷刺詩は密かに流布していた。

6 サン＝マウリツィオ教会近くのパラッツォ・コルネールの庭園であろう。コルネールという名がヴェネツィアの貴族コルナーロを想い出させたものか。

7 スタンダールがバイロンに会ったのは一八一六年ミラノでのことである。

8 トム・ジョーンズとブライフィルはともにフィールディングの小説『トム・ジョー

である。ああ、麗しき天才。彼はやっと二十八才だというのに、英国一の、そしておそらく世界一の詩人である。彼が音楽に耳を傾けるとき、それはギリシャ人の理想にかなった顔つきである。

それに、偉大な詩人であるばかりか、なおかつ英国最古の家柄に属する家の長であることは、われわれの世紀では過分なことだ。したがって、わたしはバイロン卿が極悪人だという話を喜んで聞いた。彼がコペのスタール夫人のサロンに入って行くと、すべての英国女性はそこから出て行った。この哀れな天才は、結婚するという軽率をした。彼の妻はとても頭がよく、トム・ジョーンズとブライフィル[8]の古い物語の新版を自分の費用で出している。すべての天才は気ちがいであり、そのうえ軽はずみである。彼には、二ヶ月のあいだある女優と関係をもつという悪行があった。彼が単なる阿呆だったら、彼はすべての金持青年の轍を踏んでいるのだから、ほとんど気づかれなかっただろう。しかし、計算高い本屋のマレー氏が、彼から送られてくる一編の詩ごとに二ギニー支払っていることは知れわたっている。以上のようなことから、彼がミラボー伯爵とは正反対であることはまちがいない。革命前の封建領主たちは、マルセイユの鷲に対してどう応酬してよいかわからず、彼がひとすじなわでいかない人間であることを知った。

このプロヴァンス人はそんなことを意に介さなかった。ブルトン人の方は事を悲劇的に考えたようだ。英国社会の不正が彼を暗く厭世的にしていると言われる。彼にはまことに結構だ。二十八才で、すでに六巻の美しい韻文の責めを負わねばならないときに、もし世間というものを知っていれば、十九世紀の天才にとっては、阿呆かそれとも怪物かの二者択一はないと、彼はわかっていたにちがいない。

とにかく、それはこれまでにわたしの会ったいちばん好感がもてる怪物である。詩や文学談義では彼は子供のように純真である。アカデミー会員とはまるで逆だ。彼は古代ギリシャ語、現代ギリ

ンズ』（一七四九）の登場人物。スタンダールの愛読書の一つ。

シャ語、アラビア語を話す。ここではアルメニア人神父(パパ)からアルメニア語を学んでいる。[1] この神父は地上の天国がつくられたことがあるまさにその場所で、ある重要な著作を書きあげようと骨折っている。バイロン卿の陰鬱な天分は、東方の作り物語を熱愛しているが、卿はこの天国を英語に移しかえるだろう。

彼の立場にあったら、わたしは死んだつもりになって、リマの善良な貿易商スミス氏のような新しい生活をやりなおすだろう。

フジーナ、一八一七年六月二十七日

急いでヴェネツィアから出る。わたしは、もはや無味乾燥な観念だけに没入したいと思う。

ミラノ、一八一七年七月十日

わたしは、オペラ、音楽、絵画、ヴェネツィア、トレヴィーゾ、ヴィチェンツァ、ヴェローナ、ブレッシャのことを少しも書かなかった。すべてこれらは眼前を夢のように通り過ぎた。しかしながら、義務から、わたしはいくつかの観察を思い起こそうとしている。ヴェローナでは、円形闘技場の正面のカフェで、あのすばらしい俳優のヴェストリに会ったのを思い出す。彼はわたしに、ローペ・デ・ベーガがテレンティウスを封じこめるのに用いた六つの鍵に関する、ローペ・デ・ベーガの有名なソネット[2]を言い換えて言った。「わたしはブレッシャからやってきた。第一日は面白い喜劇を上演した。観客は冷ややかだった。翌日、道化役をやった。われわれは激賞された。そしてわれわれは毎日、諸経費差し引きで、六百フランの収入を得た」

夕方、ドイツ語から翻訳された恐怖劇。わが国のかつら師たちならこれに口笛をあびせかけただ

1 バイロンは実際にサン＝ラッファーロ島のアルメニア人の修道院を訪れ、そこで気晴らしにパスカル・アウケール師にアルメニア語のレッスンを受けた。

2 ローペ・デ・ベーガの詩（ソネットではない）『新喜劇作法』を指す。そこで詩人は、喜劇を書く時には諸規則を鍵かけてしまいこみ、作劇の模範とされているテレンティウスやプラウトゥスを書斎から追い出して、新しい方法にしたがうと述べている。

3 この逸話はジョヴァンニ・ゲラルド・デ・ロッシの喜劇『軽はずみに決めたため』（第一幕四場）から採られている。

ろう。しかしおそらく今だかつてこの名優がこれ以上にわたしを楽しませたことはなかった。彼は昔ながらの陳腐な役柄、絞首台上で命を断った父をもつ青年貴族に、自尊心から娘をあげようとしない父親を演じた。それはゴルドーニ風の平板な自然さに少しも堕していなかった。彼は新しい観念を示したが、自然さからはみ出していなかった。

翌日、ヴェストリは『親切すぎてのやけっぱち』に登場した。これは彼の大あたりの一つである。そこでは、『うろたえた家庭教師』や『お人好しのやかまし親爺』においてほどに、彼はうまかった。このことは、イタリア語の愚にもつかない長談義に慣れていない外国人にはわからない。わたしは英国に三ヶ月いてやっと英語の歌に慣れた。わが国の歌については、外国人は慣れることができないようだ。(一)――ブレッシャでは、お供の紳士ならびに、馬糧徴発でうまい契約をもらうために目をつぶっている亭主の流行を茶化す喜劇が上演されている。不器用で、いささかの才能もない作者は、たえず信じられないような下品に陥るが、その下品が真実であるゆえに、外国人にとってはまことに面白い。もっと面白いのは、友人の銀行家の息子が、そのまま次のような言葉でわたしに話してくれたことだ。「自分たちが物笑いになるのを見に劇場へ行くのはおかしなことと言えるでしょう。今晩、第二幕で、わたしが桟敷席に入ると、小間使役の応酬が聞えましたが、それはわたしに対してわざとやったようでした。みんながわたしを見、わたしはどんな態度をしてよいかわかりませんでした。そのうえ、こんなに拍手をしなければならないなんて。口笛を、後生だから、口笛のやじを」[3]

そんなことだけでも、死んだ言語によって風俗の描写がなされるという不幸とあいまって、喜劇の誕生を妨げるのに充分である。ヴェストリに関しては、彼はイタリア語の対話を洞察していた。芸術を愛する王侯なら、彼をすぐさまコンセルヴァトワールの教授にするだろう。こういった人は、

今日心を感動させるために美声歌手に残された唯一の手段の欠くべからざる叙唱に、このうえなく幸いな影響力をもつことだろう。これらの作品のなかだけに、あの平明な歌唱（スピアート）がまだ聞かれるが、これは美声歌手の崇高な努力の結晶であるのに、フランスでは初心者の歌唱と見なされている。

音楽は心やさしい絵画である。完全に無味乾燥な人は音楽の埒外にある。やさしさが音楽には個有なものなので、音楽は到るところにやさしさをもたらす。そしてこの過ちのせいで、音楽が描く世界の絵図は、愛情深い魂の持主を喜ばせ、そのほかのものにはあれほど嫌われるのだ。コミックの落し穴は、われわれを笑わせる登場人物が、われわれにそっけなく思えたり、魂のやさしい部分を悲しませたりすることである。これこそある人たちに、よいオペラ・ブッファの魅力を、よい喜劇の魅力よりもそんなにも勝ったものと考えさせている点である。それはもっとも驚くべき快楽の結びつきである。このうえなく気ちがいじみた笑いに較べて、想像力とやさしい気持が掻きたてられる。

ブレッシャのT＊＊＊伯爵[1]が、想像以上にイタリアには音楽愛好家が少ないとわたしに気づかせてくれる。多くの強靱な魂の持主は、これが奴隷の楽しみだと言って、喜劇や、とりわけ悲劇を好む。彼は次のようにつけ加えて言う。「あなた方は偉大な模範を知るのが早すぎます。お国では対抗心が絶望によって抑えつけられています。大部分の独創的な作家たちはほとんどまったく教育がなかったことに注目してください。どこへ行くかわからないとき以外は遠くまで行かないものです。こうしてわが国のアルフィエーリは、劇とは何かと同じくらいに詩とは何かをほとんど知らずに、劇詩のなかに飛びこみました。彼は語の綴りさえも知らずに第一作(二)を書き、それにもかかわらず、彼は称讃されることを期待していました。ひとたび彼の鉄のような性格がこうした観念に向かうと、彼はその自尊心の激しさで困難を克服しました。しかし彼がもっとよく模範を知っていたとしたら、

1　T＊＊＊伯爵とは、スタンダールが一八一一年九月にミラノで会ったテオドール・レーキのことと考えられる。

2　レイディ・モーガンはその著書『フランス』で、『タルチュフ』のマルス嬢（エルヴィール役）を「魂が欠けている」と酷評した。この本は一八一七年に仏訳されたばかりであった。

これに彼の自尊心をぶつけることも決してなかったでしょう。逆の誤りが、パリで生まれる天才たちの半分をおそらく抑えつけています」

われわれは田園詩人で知られているブレッシャの青年詩人チェザーレ・アリーチ氏に関係して、詩のことを話していた。アリーチ氏は彼が書き終えた叙事詩『破壊されたエルサレム』のなかで、新しい文体は創造しなかった。が、彼は驚くほどうまくイタリアの大詩人たちの文体を模倣している。これを読むと、「これこれの八行詩はタッソのもの、これこれはモンティのもの」とわかる。それにしても読むのはうんざり。フランスではこういった詩人はどんな成功が勝ち得られようか。

(一) そのうえ、レイディ・モーガンは、『タルチュフ』やマルス嬢を考察することによって、フランスをあんなにもよく見ているのだ。[2]

(二) 『クレオパトラ』

ヴェネツィア断想

目にはそれなりの習慣があって、その習慣は目が頻繁に眺めるものの性質をおびる。ここでは、目はいつも海の波から五ピエ〔約一メートル半〕のところにあり、たえずこれを見ている。色彩については、パリではすべてが貧弱で、ヴェネツィアではすべてが輝いている。ゴンドラ漕ぎの衣裳、海の色、水の輝きのなかで絶え間なく反射するのが見られる澄んだ空。逸楽を助長し学問を疎じている政府、美しい肖像画を持とうとする貴族の趣味、これらがヴェネツィア派の性格の別な原因である。『アンリ四世の入城』の空と、パオロ・ヴェロネーゼの『カナの結婚』の空を比較されたい。

＊
＊ ＊

夫や恋人が漁をしているあいだ、マラモッコやペッレストリーナの女たちは、岸辺でタッソやアリオストの詩節を歌う。恋人たちは海上から続きの詩節で答える。[1]

＊
＊ ＊

C＊＊＊伯爵[2]がわたしに言った。「逸楽と読書習慣のなさとに散慢の原因があるのですが、その結果、イタリアの散文では細心にすべてを説明しなければならないのです。はっきりとはわからないわずかのほのめかしにも、晦渋だと本を閉ざしてしまう。そのために妙味ある個所が成り立たない。わたしはわが国では『ペルシャ人の手紙』のような一行の文章も知りません」

この同じ伯爵がある観察をわたしに披瀝した。わたしにはこれを認めがたいものの、情熱はもっているが一人のルイ十四世ももたなかったこの国民が、いかに自然に近いかを示すので報告する。トレヴィーゾで、ついでながらこの町はシナゴーグのような様子をしているが、彼はあの見事な彩色画家のパリス・ボルドーネの絵を、わたしに讃美させようと見せてくれた。ヘロデ王が、天啓の熱情をこめて説教する聖ヨハネに冷たく耳を傾けている。しかし王の足もとに横たわる老いぼれ犬と、ヘロディアスの腕にかかえられている小さなボローニャ犬は、予言者に向かって吠えている。[3] 実際、すべての生命あるものは目の言葉によって交感している。このことは、言葉のさっぱりわからないゲルマン人にラテン語で説教して、彼らを幾千となく改心させた聖ベルナルドゥスを思い出

1　ゲーテの『イタリア紀行』に次のようにある。「彼はまた私に、リドーの女たち、マラモッコやペレストリーナの女たちの歌を聞かせたいと言った。これらの女たちも、タッソーの歌と同じような、類似の旋律で歌うということだ。彼はさらに言葉を続けて言った。――そういう女たちは、亭主が沖へ漁に出ると、夕方浜辺に坐りながら、よく透る声でこういう歌をうたいます。すると、遠くに漕ぎに出ている亭主の方でも、その声を聞きつけ、そこで掛合いで歌い合うんです」（相良訳、岩波文庫版上巻一一六ページ）★一三〇ページ訳注2参照。

2　C＊＊＊伯爵とは、一八一一年にスタンダールがミラノで近づきになったヴェネツィアの貴族アンドレア・コルネールのことか。

3　ゲーテの『イタリア紀行』に次のようにある。「その次に私の気を晴らしてくれたのは、ある画家のうまい著想である。ヘロデスとヘロディアスの眼前における洗礼者ヨハネの絵である。いつもの荒野の服装をつけているこの予言者は、激しい権幕で王妃を指さしている。彼女は自分の傍らに坐っている王を冷静に眺め、王は情熱家ヨハネを静かにかつ抜目なく見つめている。王の前には白い中ぐらいの大きさの犬が立っており、一方ヘロディアスの裾の下からは、小さなボローニャ犬が覗いているが、二匹とも予言者に向って

させる。今日では、カントがまたこの奇蹟をはじめた。[4]

＊
＊＊

わたしは、ヴェネツィアのレイディ・B＊＊＊の家で、八十万リーヴルの年金の相続人である若い英国女性に出会う。彼女はたった一人でロンドンを立ち、ここへ父親に会いにやってきた。彼女の後見人の一人はこんな奇抜な考えに反対した。もう一人の後見人は、自由を尊重して、彼女に千ギニー渡し、彼女の方はこれを流通金貨にして仕事袋に入れた。彼女はとても質素な服を着て、たった一人で、十語のフランス語も知らずに、乗合馬車に乗った。馬車を乗りついで、つねに一人ぼっちで、彼女はヴェネツィアに着いた。ところが彼女の父親は、その三日前にコンスタンチノープルに向けてヴェネツィアを旅立っていた。これほどの肉親の情にはもっとしあわせなめぐりあわせがあって然るべきだった。彼女は父親に手紙を書き、会いに行ってよいかと許可を求めた。彼女は感心するほど飾り気なく、かなりかわいらしい人だ。わたしは彼女と話をすることに心から楽しさを覚えた。こうした旅行は、男が二、三度世界一周をするよりも、もっと勇気を必要とする。わたしはこの英国の若い女性を、パリのわがしゃれ男たちに教えよう。勿論、彼女は気に入った人と結婚するだろうし、彼女はすでに八十万リーヴル以上の年金が約束されている。[5]——こういった類のおこないは、わたしに英国国民を好きにさせる。

＊
＊＊

吠えている様子だ。これは実にうまい着想だと思う。」（相良訳、岩波文庫版上巻一三六ページ）★一三〇ページ訳注2参照。
この絵がパリス・ボルドーネの作品でトレヴィーゾにあるというのは、スタンダールの創作である。

4　スタンダールがカントを知ったのはスタール夫人の『ドイツ論』によってである。

5　『エディンバラ評論』所載の書評はこの逸話の真実性を否定している。

陛下の健康と陛下に拝閲した栄誉のことを話すのがつねになっている英国上流階級の家庭くらい変ったものはない。しかもそれには、フランスではフォーブル・サン＝ジェルマンでさえも滑稽な、宗教的畏敬の調子が混じっている。英国の流行を追う人々は、デュ・バリー夫人の時代のもっとも愛すべき情人よりも女性的である。一匹の蜘蛛で気を失う。

＊＊
＊

わたしがヴェローナやヴィチェンツァで見た驚くべき量の豪華な絵画について。『アンリ四世の入城』のような豪華な絵画は喜劇を絵にしたものであり、『エネアスとディド』[1]のような理想絵画は、人間の心にこのうえなく面白くこのうえなく真実なものを絵にしたものである。

＊＊
＊

ガルダ湖を巡りながら、デゼンツァーノで二人のピエモンテの貴族とかわした途方もない会話。もしわたしが王だったら、大使は全員ピエモンテ人にする。これは世界でいちばん鋭敏な民族である。どんなくだらないことにも彼らは一瞬たりと囚われないで、ただちに急所を突く。その点、多方面を警句でちくちく刺すことに楽しみを感じるフランス人よりもずっと優れている。彼らのうちのあるものは、この古来の真理「マダガスカル島の政治[2]は、どんな小専制王国の政治とも同じくらいに、またそれ以上に、反自由主義的である。ただ、それはいっそうの偽善を余儀なくされている」を、その方言のなかで、タキトゥスよりも美しい表現で甦らせているが、それくらいにその表現は

1　スタンダールはヴィチェンツァ近郊にあるヴィッラ・ヴァルマラーナのティエポロのフレスコ画（一七五七）を考えているのかもしれないが、ここでは題材だけが問題になるのであろう。

2　マダガスカル島は一八一〇年以来ヨーロッパの関心をあつめていた。そのラダマ一世は、英国の援助を得て、若いホヴァ（土民）をロンドンへ送って教育を受けさせ、また数々の新政策を打ちだしていた。

3　ブッチ本のマルジナリアに次のようにある。「イタリア人とピエモンテ人は、フランス人とイギリス人以上にかけはなれている。ピエモンテ人には確固としたところがある。それは二院制というあの豊かな刺繍を背負いこむことのできる織物である」

4　V＊＊＊とはスタンダールの親友ジュゼッペ・ヴィスマラ（一七八六―一八五九）を指すようだ。二人は一八一七年に知りあった。

5　これは当時評判になったできごとのようである。『ディヴァン』第三〇三号（一九五七年七月―九月号）によると、問題の英国人はセント・ジョン・ミルドメイ氏で、彼は死んだ妻の妹で、ローズベリー伯爵の妻となっていたハリエット・バーヴリーを略奪した。一八一四年訴訟を起こしたローズベリー伯爵は、妻との結婚を解消して、一万五千ポンドの慰謝料を支払わせた。ミルドメイ氏と

すべてに対する失望（ディシンガーノ）をあらわしている。最後にはセー氏のあの卓抜な言葉が出る。「政府に登用される人々を見て政府を判断せよ」[3]

＊＊＊

ヴェネツィアでV＊＊＊[4]は、ドイツ人だからとモツァルトを称讃しようとしなかった。わたしのとても承認しがたい了見である。

＊＊＊

ヴェネツィアに義理の妹を奪って結婚した英国人がいる。[5] この些細な冗談で彼は英貨三万ポンドを支払った。(一) 彼は新聞紙上で、自分の愛情を示すこうした機会が与えられたことを、不幸な夫に感謝した。ヴェネツィアではどの英国女性もこの婦人を招かない。しかし彼女は好感のもてる人なので、イタリア人の社交界ではどこでも見かける。どんなによそよそしい想像力も、この二人の情熱にかられた恋人たちの内面を仔細に描いてみることは決してできないだろう。いささかの暗い影もないが、細かい点では寒々としていて明らかに味気ない。これにはフランス女性は、相手が王であっても、半日と我慢できないだろう。わたしは確かに自分が何のことを話しているかわかっている。それでいてわたしは自分の驚きを静めることができない。わたしはあの出来事を民族的尊大さのせいだと考える。もし誰かれが自分の幸福に一人の英国人が必要であると思うようなことがあるとすれば、英国人の方は自分が辱しめを受けたと思うだろう。

ハリエットは一八一五年にストゥットガルトで、ヴュッテンベルク王の特別のはからいによって結婚式をあげた。

ヴェローナで、二人のピンデモンテ侯爵のうちの一人を、遠くからわたしに教えてくれた人がいた。二人とも領地所有の貴族である。一方は教養があったが、しばらく前に亡くなった。もう一方は生来の天分をもっている。しかし二人とも、その功績が書いた言語を越えて拡がることのないあの詩人たちに属すると思われる。わたしにはイッポーリト・ピンデモンテの全悲劇を読む根気がなかった。わたしは彼の『ジネーヴラ』のなかの一、二の場面を見たのだと思う。彼らはとっても愛想がよく、婦人たちからたいへん愛された上品な人たちであった。

(一) この金をとるのはさもしい。これで病院をつくれば、病院はその名前によって、永久に復讐を続ける。

ミラノ、七月十五日、ヴィッラ・B＊＊＊[1]の英国庭園にて

わたしはパドヴァに止まらず通過した。話をしたくなかった。わたしは一週間前からミラノに帰っているが、芸術とは無縁になっている。わたしの気に入るものは、わたしの心を痛める。きわめて深刻な政治的関心がいくらかわたしを支配してからのことだ。わたしは独裁政治に対する哲学的不平で諸君をうんざりさせないことを諸君に誓った。諸君に言うべきことは何もない。わたしはスデーヌの『逃亡者[2]』を読んだ。人が逃げ出すのが、また人が「然り、わたしは逃げ出す」と好んで言うのが理解される。

ミラノ、一八一七年七月十六日

わたしは怠りなくスカラ座で宵を過ごす。そしてそこで、ボローニャで味わったあの甘美な感動が、愛惜の魔力で何倍にもなるのを見出す。

1 ヴィッラB＊＊＊とはヴィッラ・ボナパルトと解される。

2 スデーヌの『逃亡者』(一七九六)はモンシニーの音楽がついたオペラ・コミック。『ロッシーニの生涯』でスタンダールは『逃亡者』と『泥棒かささぎ』を対照させている。そこで彼は、後者の台本がスデーヌのような器用で感受性に富んだ作家によって書かれなかったことを残念がっている。

3 ロッシーニのオペラ・ブッファ『泥棒かささぎ』の題材はドービニーとケニェスの同名のドラマから採られている。台本はゲラルディ。一八一七年五月三十一日スカラ座で初演。

4 『ミルルハ』はアルフィエーリの作品にもとをおくヴィガノのバレー。音楽はガエタノ・ジョイア。一八一七年六月十一日公演。

5 ウルバノ・ガルッィアのバレー『森の魔法』は一八一七年五月二十九日上演。スタンダールは、前記二つの作品とともにこの作品も初演を見ていない。

今晩、ロッシーニの音楽『ガッツァ・ラドーラ』(泥棒かささぎ)[3]、ヴィガノの英雄ものバレー『ミルルハ』[4]別名ヴィーナスの復讐、そしてコミック・バレー『森のなかの魔法』[5]の第一回公演を見た。すべてこれらが同じ日に上演された。わたしは語彙不足で、装置がわたしに与えた楽しさを説明することができない。ペレーゴ、ランドリアーニ、フェンテス、サンクィリコの諸氏は画家だが、このなかには大画家といえる人もいる。膠に彩色した一つ一つの装置には、二百ツェッキーニ(二百四十フラン)しか支払われていない。しかし当局はこれらの諸氏の各人に毎年二十を依頼することを約束している。初日(プリマ・レチタ)の今夜、すべての女性は着飾って桟敷席に着いていた。腕や胸元をあらわにして、とてつもなく大きくたいへん美しい羽のついた大きな帽子をかぶっていた。これは必要である。さもなければ平土間から気づかれないだろう。きわめて静かだった。第一夜(プリマ・セラ)で、桟敷席を訪問しあうこともない。わたしは平土間がとても悪いつくりなのに気づいた。水平なので、踊り手の脚が見えない。パリのオペラ座の平土間を真似たにちがいない。

スカラ座では初日はいつも土曜日である。というのは金曜日は休演日だからだ。最近のオーストリアの君主たちの誕生日やら命日には、出しものはない。ひどく不愉快なことだ。

今晩の出しものはたっぷり五時間続いて、すべてが新しかった。

ロッシーニはドイツ音楽のどんちゃん騒ぎに近づこうとしている。大胆で光彩を放つ想像力と、真に独創的な天分のひらめきで、どんな様式のものを選ぼうと、自分の作品にいささかなりと心を打ちこもうとするかぎり、人に気に入ってもらえると彼は確信している。彼の作品は非常な拍手喝采を受けた。彼の詠唱の主題は高貴である。中心的観念は、音楽が理解されるために音楽にとって不可欠なものであるが、合唱曲のなかで見事に喚起されている。彼はそれらの曲を卓越した人として操る。彼が投げ捨てる小楽節も、並の作曲家なら世に出る糸口である。しかし彼はあまりに観客

に不信を抱いていて、たえず、単に合理的で至当なものを、ひきたたせようという偏執に憑かれている。かくして、彼が庭師に口にさせるこれこれの歌の小楽節は、アルマヴィーヴァ伯爵とか某という宮廷出仕の青年貴族に用いた場合は、それほどぱっとしたものではなくなるだろう。三重唱（テルツェット）、二重唱（ドゥエット）、四重唱（クインテット）は喝采につつまれた。これらの曲の出だしはすばらしい。しかし凝った様式の愛好家に気に入るには、ストレッタはもはや芝居向きではない。それはベートーヴェンから盗用したとも言える交響曲の一部分である。このうえなく不思議な音が、非常に巧みに結合され運ばれているが、確かに、登場人物の発する情熱的な言葉の表現に何ものも加えていない。

どんな国でも自然からいちばんかけ離れている人種である高貴な様式の愛好家たちから、賛同をかちえるために、ロッシーニは、たとえば、シーザーやアレキサンダーの入城のように、百姓の息子で女中に恋しているジャネットの到着を告げる。

それに、このオペラには巨匠たちの陥る欠点がある。登場人物たちが出ずっぱりなのである。ベッロック夫人が出演している。ドイツ流のすさまじい伴奏も彼女の声を圧することができない。ガッリの声はなおさらである。この偉大な俳優のすばらしいアクセントが響くや、それはオーケストラも歌手たちも、あらゆるパートをかすませる。ガッリは不幸な父親の役である。『アニェーゼ』[1]（これはリア王的な性質のもの）で、また『青銅の頭像』のハンガリー王で、あれほど涙を流させた驚くべき俳優との再会である。美しいコントラルトの声をしたガリアニス嬢は、声が五つ六つの音階音しかもたないが、驚くべき力と純粋さがあり、桁はずれの拍手喝采を受けた。彼女はその歌と同じくらい美しい。若手のアンブロージ氏はたいへん楽しませてくれた。これは社交人士である。それにしても楽しすぎた。わたしはくたくたに疲れた。そのために、わたしはここに輸入されている滑稽なフランス的習慣を笑うことができない。芝居のあと、俳優たちがひっぱり出された際、舞

1　『アニェーゼ』はパエールのオペラ・セミ＝セリア。台本はブォナヴォーリャ。初演は一八一一年パルマ。スタンダールは『ロッシーニ』で、これがリア王の狂気を連想させると述べている。『泥棒かささぎ』でテレーサ・ガリアニスはピッポ役を、アントニオ・アンブロージはゴッタルドの行政長官役を演じた。

2　ブッチ本マルジナリアに次のようにある。「驚いたことに、ヴィガノに関して書きながら、イタリア語で考えているのにわたしは気づく。わたしはわたしの考えにイタリア的色彩をまとわせる。それはフランス語の文体を損わないだろうか」（傍点部分英語）

台上でガッリとロッシーニはやさしく抱きあった。

ミラノ、七月十七日

あの偉大な無言の詩人ヴィガノは、その『ミルルハ』のなかで、少しもアルフィエーリを踏襲しなかった。話はミルルハの夫をキニュラスが品さだめすることからはじまる。少しずつ、この不幸な娘は宿命的な恋の虜になっていくようだ。そして彼女のあまりにも予期された死で話は終る。不幸が題材であるにもかかわらず、芝居が今だかつてこれ以上に活気にあふれていたことはなかった。そこから出ると、美しい絵の想い出のように、十ないし十二の群舞の全体が想像をひとりじめして、これにつきまとわれる。上演ごとに、新しい魅力的な細部が認められる。群の動きが、その目新しさ、整然とした様子、変化で、人の心を打つ。そしてすべてが意表をつくものであるが、どれも自然さからはずれているようには思えない。絵のような美のなかでもいちばん崇高なものにいくら目がなじんでいるとはいえ、そこに大画家の天分を認めずにはいられない。観客はきわめつきの楽しさを期待していたのだった。観客はこの不幸な題材が内包している感動だけを味わった。ヴィガノが愛情(コン・アモーレ)をこめて仕事をしたかどうかわかるというものだ。パッレリーニがミルルハの役をした。

彼は衣裳の色彩のとりあわせを指導した。その衣裳はすばらしい。そしてさらにいちだんと珍らしいことだが、目を楽しませる。みんなは、かつてこれほどの調和と結びついた生彩のある変化を見たことがないということで、昨日、そしてさらに今晩も意見が一致した。しかしヴィガノが衣裳の配色でどんなに立派であっても、[2] サンクィリコ氏はその崇高な装置で彼をしのいでいるようだ。それは今晩われわれが、誰もこれ以上によいものは想像さえできないと気づいたほどである。これは一つの芸術の頂点である。

この絵のような美しい作品から生じる熱狂に対して、音楽は弱々しいように思われ、踊りのパは優美さが新しさとしっくり結びついているようには思われなかった。愛好家たちはパリをなつかしく思った。それは、バレーが劇的なものをなおざりにして、間もなくうんざりさせ、一瞬たりと劇に近づくことがないとはいえ、明らかにその筋立てのためではなかった。しかし、もしポールとかアルベール、ビゴッティーニ嬢とかビアス嬢が、今晩のバレーに登場したなら、それは現代の芸術状況が生み出すことのできるもっとも魅力的なものを、完全なアンサンブルで見せてくれたことだろう。こんなにもうっとりするような芸で示されたかわいそうなミルルハの苦悩に同情して、女性たちは心をときめかせ、今晩はお世辞のやさしい言葉にも黙っていた。文字どおり、桟敷席は息をひそめていた。

おまけに、人々はロッシーニとヴィガノにひどく腹を立てていた。彼らは自分たちの楽しみにかまけて、二ヶ月前から観客を待たせていた。彼らはお人好しで、ブリアンツァ丘陵とか湖水地方でのいなかぐらし（ヴィレジアトゥーラ）を拒む決心が少しもできない。

わたしは芝居で、イタリアのドーバントンともいうべき尊敬できるモスカーティ伯爵に紹介された。よき時代のミラノには、わが国の知名人と大いに比較された何人もの知名人がいたものだった。上院議長のパラディージ伯爵はベネヴェント公というところだった。テウリエ将軍はドゥゼ。蚕の改良でたいそう有名なダンドロ伯爵はイタリア版シャプタルといったところだった。その演説の高貴かつ繊細な雄弁で著名なモンティはフォンターヌ伯爵に較べられた。[1] 宮中司祭長であったラヴェンナの大司教コドロンキは、その才知と巧みな指導からブーローニュ師を思い出させた。[2] 雄弁と様々な才能に関して、両国民のあいだではこうした楽しい対照が可能であった。それに、フランスにはメルツィと同じくらい有徳の人はいなかったし、乱暴な言い方だが、プリーナ伯爵と同じくらい

1　詩人のモンティが「演説」で有名というのは明らかに皮肉である。モンティは交代する支配者を次々とほめたので、ナポレオンのもとで文部大臣をつとめ、ルイ十八世のもとでも大臣を引受けたフォンターヌにスタンダールはなぞらえた。

2　コドロンキもトロワの司教ブーローニュも、ナポレオンの体制が崩壊すると、新しい支配者へ接近していった。

3　『マホメット』はヴィンター作曲、ロマーニ台本で、一八一七年一月二十八日にスカラ座で初演された。シーズン中に四十五回上演された。

力強い大臣はいなかった。今やミラノは世論の鎖でフランスと結ばれていて、この鎖の強さは限りない。この共感は、顕著な嫉妬心のあとにやってきただけにいっそう確固としている。わが軍のイタリアからの最後の撤退にあたって、グルニエ伯爵はわたしの友人の大佐をオーストリアの将軍のもとへつかわすことになったが、このフランス軍の大佐は、信じ難いことに、途中にあって彼を切り刻もうとする村々を通過するために、敵の軽騎兵の助けを請わねばならなかった。わたしは彼の軽四輪馬車が数多くの槍を受けて穴だらけになっているのを見た。その現場はピアチェンツァ近くのポー河の岸辺だった。

わたしはヴィンターの『マホメット』[3]の千秋楽について書くのを忘れていた。これはモツァルトの模倣である。序曲は壮大だ。オペラは歌唱を欠いてだらだらとしている。作者は七十才でドイツ人である。風変りな三重唱(テルツェット)がある。ゾピーレが寺院の奥で子供たちのために祈っていると、彼を殺すためにセイデがパルミーレとやってくる。観客は熱狂してこの三重唱をアンコールした。ミラノ人はこの歌唱を立派だと思っている。歌唱なんていうものはなく、和声にすぎない。ゾピーレ役のガッリのすばらしい声が低音部をつとめ、舞台前面でのバッシとフェスタ両夫人の澄んだ声が目立った対照をつくり出す。チェロとホルンの伴奏は魂をゆすり、見事な暗色の装置が決定的に主題に色彩を添える。

ガッリは第一幕で「祖国はずっと平穏無事であろう」を歌う。観客は熱狂して拍手喝采した。わたしは目に涙が浮ぶ。

美しい眺めにひかれて、ベルガモへ行き何時間かを過ごす。わたしはモンツァ、モンティチェッロ、モンテヴェッキアを通る道をとる。比較の及ぶものを少しも思い浮べることなく、二つの世界が漫遊できる。

ベルガモではまだ教会音楽が猛威をふるっている。わたしは一七三〇年のイタリア人たちに会ったのかと思った。

教会音楽の美しいところはほとんどすべてが常套的である。そしてフランス人であるけれども、わたしは声を限りに歌う歌唱に慣れることができない。ベルガモの人たちは彼らの情熱を満足させるために何の苦労もいらない。その情熱は二つの偶然によって恩恵を与えられている。有名なマイヤーがベルガモに住んでいるし、老ダヴィデもだ。マルケージと彼は、わたしが思うには、声楽のベルニーニともいうべき人々で、悪趣味の流行をもたらすように運命づけられた大天才であった。彼らはカタラーニ夫人や最後のローマ人パッキャロッティの先駆者であった。

マイヤーはもっと輝かしい運命をたどることができたかもしれなかったのだが、感謝の念からこの国にとどまっている。彼はバヴァリアに生まれ、偶然からベルガモにやってきた。教会参事会員のスコッティ伯爵が彼をナポリのコンセルヴァトワールに送り、何年間も援助した。ひき続いて、ベルガモの礼拝堂が提供された。それは千二百ないし千五百フランにしかならないが、どんなに立派な申し出もよそへ彼をひきぬくことはできなかった。わたしは、彼がサン＝カルロのカンタータをつくったナポリで、もう旅行はしたくないと言うのを聞いた。そうなれば、彼はもう作曲しないだろう。イタリアではつねに、作曲家は歌手の声を研究してオペラを書き、現場に出かけねばならない。数年前にスカラ座の当局がパイジェッロに一万フランを申し出た。彼は返事をして、人間は八十才になればもう野原を走れないし、自分の音楽を送ろう、と言った。彼は感謝された。

マイヤーは、知られるように、金持の愛好家の雅量に依存している。カノーヴァについても同じで、モンティについても同じだ。モンティは父親が金を送ってこなくなったので、彼は泣き泣きローマを立ち去ろうとしていた。彼はすでに御者（ヴェットゥリーノ）を雇っていた。その前々日、彼は偶然アルカデ

1　ブラスキ公の世話で枢機卿になった僧侶キャラモンティ（さらにのちには教皇ピウス七世）の話は、『ローマ散歩』（一八二八年十月二十日付）でも語られている。

2　ブッチ本マルジナリアに次のようにある。「幸福は伝染する。もし幸福でありたいなら、幸福な人のなかで暮したまえ。わたしは世界中の黄金と引き換えにしても、長くローマやトリーノにいようとは思わない。ミラノには喜んで住むだろう。幸いかつおそらく束の間のとりあわせで、この町は大部分の人の収入が支出を上まわっている。そのうえここでは貧しさが恥ではない。そこでは政治が話される（スカラ座の桟敷席で）が、それはすべてが戦争とか処刑とかの英雄的な政治であり、英国のように、数字と税金の政治ではない。つまり音楽や恋愛に調和する政治である。

「一八一八年五月十四日――わたしは副王の入市を見る。これはナポレオン的人物である。わたしはこのたいそう教養があり賢い領主、この立憲的王の鑑を楽しく見る。現下の政府が頑として無視している七、八人の貴族の愛国的な怒りを、わたしは嗤いたい。彼らは一八一四年にはナポレオンの没落を早めようとしていて（一八一四年四月十日）、おそらく唯一の機会をつぶしてしまった。今日彼らは政府の侮蔑と自由主義者たちの侮蔑に甘んじている。どんなに小さな十字勲章も彼ら

ィア学院でいくつかの詩を読んだ。ブラスキ公が彼を呼び、「ローマに残って美しい詩をつくり続けなさい。わたしはあなたのために叔父に職を求めてみましょう」と言った。モンティは公爵の補佐役となった。

彼はある家で一人の僧侶に会った。修道会の会長を務め、才知と哲学にあふれた人物だった。彼は僧侶に甥公爵を紹介しようと申し出たが、断わられた。こんな風変りな謙遜に公爵は刺激された。彼のところに僧侶を連れてくるために計略が用いられた。こうしてしばらくたって、この僧侶はキャラモンティ枢機卿となった。[1]

愛国心はイタリアではありふれている。あのかわいそうなラヴェンナのファントゥッツィ伯爵の生涯を見られよ。彼に関する話をわたしはベルガモで聞かされた。しかしこの愛国心はあらゆるやり方で歪められて、愚行のなかを這いずりまわらねばならない。

ベルガモで、マイヤーとダヴィデは教会音楽を指揮している。彼らはオーロ、すなわち金貨をもらっている。

P＊＊＊伯爵がわたしに言う。「ボローニャはいちばん沈滞が進行していない町です。この町は当然イタリアの首都になるべき町です。[2] もしこの国の復興にあたってローマが首都になれば、すべては駄目になります。もっとも卑劣な策謀が政治に癌をはびこらせるでしょう。ローマにあるわずかのエネルギーは、しばしばサルスティウスのセンプロニア[3]を思い出させる女性たちのなかにあります」

ミラノ、七月十七日

わたしは造幣局の局長モロージ氏に紹介される。M＊＊＊のようなタイプの天才である。ミラノ

の歓心を買うことができよう。しかし彼らはそうするに足りないと思われている……。ナポレオンの没落後、何と言おうと、貴族はもはや自由主義者たりえない。特権にはりあう死を賭した戦いがある。これ以上に冷い心の持主たちに、そして普通でもいかなる人に、自分の利益に反して行動することが期待できるだろうか」

3　センプロニアはローマのコンスルのデシムス・ユニウス・ブルトゥスの妻。彼女は紀元前六十三年に起こったカティリナという貴族の企てた陰謀で積極的な役割を演じた。彼女はまた、シーザーの殺害者の一人デシムス・ブルトゥス（首魁のマルクス・ブルトゥスとは別人）の母である。サルスティウスはローマの歴史家で『カティリナ陰謀史』の著者。彼はセンプロニアを大情熱家で美しく教養があるがまた大変堕落した女として描いている。

の造幣局は、パリを含むヨーロッパのどこよりも優れている。それは単に工程の単純さによってのみならず、刻印された貨幣の美しさのためにである。貨幣の縁や地がひとたび刻まれると、その刻印はわが国のより二、三世紀以上も永らえるだろう。今朝、一八一七年七月十七日、五フランと四十フランの貨幣を製造していた。前のイタリア王の像をそこに見たわたしの驚きはどんなだっただろう。[1] 皇帝フランツがツェッカ（造幣局）にきて、[2] 実物ととても似た肖像を見て、彫刻家に敬意を表した。これらの貨幣の鋳造年号は一八一四である。

コモ湖畔、ヴィッラ・メルツィ　一八一七年七月十八日

わたしの憂鬱が加わったのは、あのかわいらしいコンテッシーナ・ヴァレンツァ[3]に誘われて、湖水地方へ同行したせいだった。彼女の夫とはスモレンスク以来の知りあいである。ミラノ人たちの湖水で、枝を波に浸したあの緑の栗の木の茂みのなかで過ごした、あの焼けつくような夏の日々の魅力に比肩できるようなものは、この世に少しもない。

今朝五時に、青と白の美しい天幕をつけた小舟でコモを出発した。われわれは英国皇太子妃の別荘ヴィッラ・プリニアーナ[4]とその間歇泉を訪れた。プリニウスの文字が大理石に刻まれていた。湖はこのあたりでは暗く荒涼としている。山々はほとんど切り立って湖水に落ちこんでいる。われわれはどうにかこうにかバルビアネッロ岬を回った。婦人たちはこわがった。ここはスコットランドの湖水地方と同じくらい峻険な様相をしている。ついにわれわれはトレメッツィーナの快適な砂浜と、北を高い山に守られてローマのような気候をしているその魅力的な谷間を認めた。ミラノの寒がりたちはここにきて冬を過ごす。宮殿が丘の緑のなかあちこちにあり、それが水の上に対になって映っている。宮殿と言うのは言いすぎだが、それらを別荘と呼ぶのも充分ではない。それは三つ

1　ロンバルディーアがオーストリアの支配に戻ってからも、ミラノのツェッカはイタリア王国の硬貨を製造していた。イタリア王の肖像は一八一九年まで刻印されつづけ、新しい貨幣の流通は一八二三年以後。

2　オーストリア皇帝フランツ一世のツェッカ訪問は一八一六年一月二十三日。

3　コンテッシーナ・ヴァレンツァは、ジャンリス夫人の娘と結婚したヴァランス伯爵（一七五七―一八二二）の末娘ロズモンド。彼女は一八〇五年六月エチエンヌ＝モーリス・ジェラール（一七七三―一八五二）と結婚した。夫のジェラールはロシア遠征に加わったことがあり、この当時は百日天下のあいだの彼の行動が問われて追放されイタリアにきていた。スタンダールが彼とスモレンスクで知りあったというのは信じ難い。父親のヴァランス伯とは一八〇五年パリのデュシャノワ嬢のところで会っている。

4　ヴィッラ・プリニアーナは、大プリニウスがここの有名な間歇泉を観察したことからこの名がついた。一八一五年以来のちに英国王ジョージ四世となった英国皇太子の妃のブラウンシュヴァイクのカロリーネが住んでいた。

5　カーサ・ソンマリーヴァは昔のクレリーチ館で、今日ではヴィッラ・カルロッタの名で知られている。カーサ・ジウリアはヴィッラ・ジーナ、ヴィッラ・スフォンドラータ

の湖とブリアンツァ丘陵に独特な、優雅で、絵のような、逸楽的な建て方をしている。コモ湖を囲む山々は頂上まで栗の木に覆われている。村は山の中腹にあって、樹木の上に突き出ている鐘楼が遙かに見える。鐘の音は、遠い距離と湖のさざ波でやわらいでいたが、悩める魂の持主のなかでは鳴り響いた。どのようにこうした感動を描こうか。芸術を愛さねばならないし、恋し不幸でなければならない。

三時に、われわれの小舟は、ヴィッラ・メルツィと向かいあったカーサ・ソンマリーヴァ[5]の船着場（ダールセナ）に泊まる。婦人たちは休憩が必要であった。三人のイタリア人士官とわたしとは翳った方へ方向転換していた。われわれは残りのものをおいて、十分間で湖を横断し、ヴィッラ・メルツィの庭園、ついで湖のもう一方の支湖にのぞむカーサ・ジウリアに行く。不気味な眺めだ。われわれは切り立った岬のうえの、大木の茂った森のなかにあるヴィッラ・スフォンドラータに立ち寄る。この岬は湖を二つの枝に分けている。すなわち湖は逆さになったY字型をしている。そしてこれらの樹木は湖水に屹立する三百ピエ〔約九十メートル〕の絶壁を縁どっている。左手、われわれの足下、湖の対岸に、ソンマリーヴァの宮殿がある。右手には、オッリド・ディ・ベッラーノ。そしてわれわれの前に十リュー〔約四十キロメートル〕の湖。そよ風が時々われわれのところまで対岸の百姓たちの歌声を運んでくる。真上から照りつけるあのイタリアの太陽と、酷暑のあの静寂が支配している。ただ、東の微風（ヴェンティチェッロ）だけが時々水面を波立たせている。われわれは文学を語ったあと、少しづつ現代史を論じる。われわれがおこなったこと、しなければならなかったはずのこと、われわれを引き裂く気ちがいじみた嫉妬心。「リュッェンにいたことがあります[6]」――「僕もです」――「どうしてわたしたちは会わなかったのでしようね」等々。

会話はこうした率直な調子にまで高まり、腹蔵ない。ヴィッラ・スフォンドラータの絶壁の縁で

はヴィッラ・セルベッローニの呼称で知られている。

6　スタンダールは一八一三年のはじめに、リュッェンにいた。

過ごした束の間の三時間のあと、われわれはヴィッラ・メルツィに入る。わたしは三階の部屋に閉じこもる。そこでわたしは、ナポリ湾についでこの世に存在するもっとも美しい眺めから目を離して、メルツィの胸像の前に立ち止まり、イタリアに対する愛情と、祖国愛と、芸術に対する愛に有頂天になって、とり急ぎわれわれの会話の要約を書き記す。

われわれを巻きこんでいる大きな変革のただなかでは[1]、もはや政治のなかに陥らずに、一国民の習俗を研究することはできない。一七八九年にはじまった革命は、一八三〇年に、世界的な二院制の確立で終るだろう。ヨーロッパもアメリカと同じになる。そのときフランス人は理性の子の兄貴分と見なされるだろう。(一) みんなはフランスを妬んでいる。これこそ優越性の大きな証しであり、おそらく唯一の立派な証しである。というのはお世辞ではそれを偽造することができないであろうから。パリでは、国民のうちの平凡な部分だけが活動し目につく。遠くからは、われわれはわが国のトラシー[2]、グーヴィヨン＝サン＝シル、グレゴワール、ランジュイネ、ド・ブロイといったような人々をとおして判断される。

イタリアは精神面がいちばん知られていない国の一つである。旅行者はこれまで芸術しか見なかったし、傑作が人の心から生まれるということを感じるようには教育されていなかった。わたしは文学について語りたいが時間がない。博学のジャングネ[3]は、彼の誠意にもかかわらず、まだ昔の教育の産物であったし、自分の題材をこなす能力がない。シスモンディは二つの対立する体系にひきずりまわされている。彼はラシーヌを称讃するだろうか、それともシェイクスピアか。彼は途方にくれて、自分の心がどの派に属するか言ってくれない。おそらく、彼はいかなる派にも属していない。彼の著作[4]はイタリアの代々の政府の法の精神といったものになるはずであった。しかしこの国には法よりもずっと多くの政府があったし、政府はつねに統治者の色彩に染っていた。

1　一八一五年にナポレオンが倒れて帝国が崩壊したあと、ブールボン家が復活したが、スタンダールはさらに変革が続くことを予期している。こうした書き方は当時としてはかなり大胆と考えられる。

2　トラシーをスタンダールは崇拝していた。スタンダールが彼の『イデオロジー』（一八〇一）をはじめて手にしたのは一八〇四年十二月。

3　ジャングネは『イタリア文学史』（一八一一）の著者。スタンダールは『絵画史』を書いた折には、この本を大いに参考にしている。

4　シスモンディの『ヨーロッパ南部の文学について』のことを述べている。スタンダールはこの本をよく知っていて、大いに利用するが、またしばしば反駁をとなえている。シスモンディと関連して、スタンダールの内でロマン派と古典派の色わけがはっきり形成されているのが知らされる。ラシーヌとシェイクスピアの名前が対立的に引きあいに出されるのが、以後頻繁になる。

ブッチ本マルジナリアに次のようにある。「一八一八年三月二十七日――この著者〔シスモンディ〕はわたしをうんざりさせ、眠くさせる。ブルジョワ的観念、高徳の気取り、多少の天分そして習俗を描くには皆無の天分。わたしはピニョッティの方が好きだ」

5　ストリヤンスキー本のマルジナリア

イタリア的性格は火山の火のようであるが、それは音楽によってしか噴出することができなかった。一五五〇年から一七九六年までの、このうえなく猜疑心の強い、このうえなくお粗末な、このうえなく容赦ない専制政治の巨大な塊によって、それは圧しつぶされた。宗教が権力を助けて、とうとうそれを窒息させてしまった。その結果、疑心が生じた。イタリア的性格から出現するもの一切がそれとはちがうものであった。[5]

一七九六年五月十四日は、人間精神の歴史において特筆すべき一時期を画するだろう。総司令官ブォナパルテがミラノに入城した。[6] イタリアは目覚めた。人間精神の歴史では、イタリアはつねにヨーロッパの半分を占めるだろう。(二)

しかしここではわたしは話すことができない。わたしの原稿は押収されるかもしれない。どんな風にしてイタリアは目覚めたのだろう。どんな状況がこの若い国民の長足の進歩に影響したのだろうか。どんな人々がその運命を定めたのだろうか。

ブォナパルテがミラノに入城したとき、弱く、そして弱い人は善良であるが、その程度に善良な貴族、フェルディナンド・デステ大公は、その地で、ウィーン枢密院の気の弱い総督であった。防波堤が決壊したならウィーンへ手紙を書かねばならなかった。そして二ヶ月後、必要な金額が承認される頃には、損害が百倍にもなっていた。枢密院はそれを誰よりも知っていた。しかし奴隷はたいへん元気なので、どんなにがんじがらめにしてもしすぎるということはない。

レーナルの弟子で、狭い考えのヨーゼフ二世は、僧侶たちを抑えつけ、貴族からは彼らが自然の理法として享受していたあらゆる特権を剝奪したばかりであった。イタリア軍と呼ばれるものは、当時、ミラノで任務に着いていた九十六名の赤服を着た市内巡視隊から成り立っていた。[7]

世界でもっとも裕福な国のこの首都では、十万リーヴルの年金がある家庭は四百を数え、百万リ

に、「一六五〇年から一七九六年まで」とある。

6 『パルムの僧院』の書き出しでこの観念は敷衍される。ナポレオンのミラノ入市は五月十五日。

7 『パルム』第一章に次のようにある。「一七九六年には、ミラノ軍は赤服を着た二十四人の下種どもから成っていた」

ーヴルのは二十を数えていた。彼らは自分たちの富をどうしたらよいかわからなかった。ミラノではすべてが安価であり、イタリア人はパリの住民の四分の一の掛かりもない。こうして、オーストリアに尽して金貨をたらふく飲みこんだベルジョイオーソ将軍[1]は、毎朝化粧室に二十リーヴルのパウダーを撒かせ、顔にマスクをつけてそこを歩きまわった。それがほどよくパウダーをはたく唯一の方法だと彼は主張していた。ついで彼は彼の後宮に入る。そこではメディチ家のヴィーナスのような衣裳をした若い踊り子たちが、閣下の御前でバレーを演じるのだ。パリーニはポープに匹敵する諷刺詩『朝(マッティーノ)』で彼を嘲笑している。公はパリーニを棒たたきにさせようとしたが、総督が彼を庇護していた。パリーニと並んで、ベッカリアとヴェッリがヨーロッパに火を灯していた。夕方になると、王侯、学者、文学者、百万長者、みんなが劇場にいた。魔術師マルケージがみんなの心をうっとりさせた。女たちは一度に五つものマルケージの像を身につけていた。両腕に一つづつ、首に金の鎖でぶらさげて一つ、一足の靴の留金のうえに二つ。いかなる国の金持も、これ以上に楽しい生活を送ってはいなかった。あらゆる恨みがましい情熱が排除され、虚栄心もほとんどなく、そして、当時は貴族も善良な人々であったので、国民は幸福を分かちあっていた。

ロンバルディーアの小作地は一つ一つが、米、チーズ、絹を生産し、それらはかなりの金額で売れる。これ以外にも、これらの小作地は、わが国の小作地が生み出すどんな生産物も生み出す。ここは不滅の国であり、そこではすべてがただ同然である。

この逸楽的な静けさは、五月十四日の雷鳴が精神を目覚めさせに到来したときに、無気力へと変わりはじめた。静かなミラノ人は、日本のことを考えないくらいに、フランスのことを考えはしなかった。

この国民は、観念においてわれわれとたいそう隔りがあるが、自由を信じ、そしてわれわれより

1　ベルジョイオーソ公(将軍でなく)は、フェルディナンド大公の近衛隊の隊長。パリーニの諷刺詩『マッティーノ』(朝)の主人公のモデルと見なされている。

2　共和暦七年(一七九九)、チザルピーナ共和国政府は登記に関するこの法律を採択したが、時代的に税を徴収することが困難であった。ナポレオンは一八〇五年イタリアを訪れた際、この法律をイタリア共和国の立法府に示したが、つき返された。イタリア王国の最初の仕事は、この法律を施行することであった。なお、ミラノを中心とした地方は短日月のうちに、チザルピーナ共和国、イタリア共和国、イタリア王国と支配形態が変っている。

3　ラアブの戦い(一八〇九年六月十四日)は副王のイタリア国民軍とオーストリア軍のあいだで起こった。六万という人数は誇張で、四万五千以下というところだろう。なおラアブは現在のジエール(ハンガリー)。

も自由にふさわしかった。ミラノの立法府は権力の絶頂にいるブォナパルテ（一八〇六年、と記憶するが）に、一つの基本法案（登記）をつき返した。[2] 今後決してフランスの立法府は、こういった不作法をまともに眺めているだけの勇気はないだろう。イタリア王国の立法府はもはや召集されなかった。そしてブォナパルテはここでも、フランスにおけるように、栄光礼讃によって専制政治を隠蔽しようとした。マレンゴでは、大砲に向かって大胆にも進撃したイタリア人は一人しかいなかった（レーキ将軍）。[三] 九年後ラアブでは、[3] フランス軍と同じくらい勇敢な六万の軍隊があった。イタリアには王国年鑑があって、それはわが国で出ているものと同じくらいぶ厚く、イタリア人の名前があふれていた。

道路はフランスよりも何倍も美しかったし、今も美しい。すべてが整えられ、すべてが進行し、工場は増加して、労働が敬われていた。頭のよいものはみんな出世した。店裏で働くどんな薬屋の小僧も、一大発見をすれば十字勲章をもらって伯爵に任じられるという考えに煽り立てられていた。かくも現代にふさわしいこうした気魄は、その力強さで、かつてローマ人たちを世界制覇に向かわせたものに匹敵した。メルツィ政権下で、イタリア王国はかつてフランスが味わったことのないくらいに幸福だった。王国は一途に自由に向かって歩んだ。メルツィは心からこのすべての幸福の源泉を愛した。しかし彼には古い教育の欠点があった。精力がなかったのだ。彼は副大統領時代を利用して新しい権益をつくり出すということがなかった。それに、彼にはそれができただろうか。わたしは、できたと信ずる。というのはブォナパルテは少しも決ったプランをもっていなかったのだ。彼は当時フランスのことで頭がいっぱいだった。民衆は、経験を通じても向上せず、心の底では古い君主制から生じたあらゆる愚かな偏見を未だあたためていたが、これほどの迷妄がゆえに罪のある民衆に、ワシントンでも政治的自由をどの程度委ねたらよいか当惑したことだろう。恐怖政治時

代をつくり出したのはこの君主制の奴隷たちであった。[1]

それに、ワシントンだったら頭をいっぱいにしたはずの観念のどれ一つとして、現代のシーザーの注意をひき止めなかった。彼の考えはすべて個人的で利己的だった。はじめに、彼が我慢できる程度の自由をフランス国民に与え、それから、過激派が熱を失い、世論がいちだんと見識をもちはじめたと思われたときに、徐々に市民勢力を増大させる、といったようなことは、彼の政治の目的ではなかった。彼は、どのくらいの力を安心して民衆に委ねることができるかを考えず、どのくらいわずかの力で民衆は満足するかを見抜こうとした。民衆の方に自由を確立するために必要な力があったことは、諸々の反動を抑えることができたことで明瞭だった。

彼がこうした問題に没入しているときに、イタリアが少しでも彼を恐怖させれば、イタリアは自由になった。メルツィには、民族はみずからが強引にもぎとるだけの自由しか手に入れることができない、ということがわからなかった。

ブォナパルテは、心やすんじて、仮面をとり、専制政治へ歩んだ。彼はイタリアにおいて、フランスで実践したいと思った手段を試みた。(四)

メルツィは、わたしがこれを書いている美しい別荘(ヴィッラ)に、祖国を悲しみにやってきた。もはや一人の役者しか必要ではなかった。それでプリーナ伯爵が彼の主人のバスコンセーロス[2]役になった。このピエンテ人は傑物で、コルベールよりも偉かった。なぜなら、コルベールのように、暴君のもとであらゆるといってよいほどの偉大なことをおこなったし、しかも、副王の宮廷と参議院全体の陰謀をものともしなかった。コルベールは巨大な富を残して死んだ。一八一四年四月二十一日、プリーナが殺されたとき、彼の受けとった給料の三分の二だけが、彼のところにあった財産だった。これにはみんなが驚いた。(五)

1　恐怖政治時代（ラ・テルール）はフランス革命時代のモンターニュ派支配期を言う。ジロンド派を倒した一七九三年五月三十一日から、一七九四年テルミドール九日（七月二十七日）にロベスピエールが失脚するまでの期間である。多くの逮捕者、処刑者を出したが、最後の二ヶ月にはパリだけでおよそ千四百人が断頭台上に消えた（ラ・グランド・テルール）。

2　ミゲル・デ・バスコンセーロスはスペイン併合下（一五八〇―一六四〇）のポルトガルで、副女王サヴォイア家のマルゲリータの国務大臣。同国人に背いてスペイン宰相オリバレスの手先になった。一六四〇年十二月一日反乱によってポルトガルが独立すると最初に血祭りにあげられた。丁度プリーナがミラノで虐殺されるように。

わたしと一緒の青年士官たちは、自分たちに自由を与えてくれなかったとフランス人を厳しく非難する。しかしそれは主人の利益と一致しただろうか。国家は相互間では個人と同じである。これというわけもなく人が別な人に利益を得させるなんて、いつから見られるというのか。望みうる最善のことは、利害が一致するということだ。

わたしはといえば、ブォナパルテには少しの政治的手腕もなかったと考えている。彼はイタリアのみならずどんな所でも、自由主義的な憲法を与えて、自分のように非合法的ではあるが、権勢ある家柄から選んだ王たちを立てたらよかったのだ。最後には、諸国民はこの偉大な善行のために彼を崇拝したかもしれなかった。彼の真意を悟るまでには、彼らは完全な自由を奪いとることで力を消耗してしまい、フランスに侵入するどころではなかったろう。(六)

ウジェーヌ公は、マルメゾンのサロンではたいへん愛想のよい人だったが、イタリアの王座では小さかった。彼はいつかイソンゾ河畔の司令部で「イタリア人の短刀なんて気にしちゃいない」と言った。この話はきわまりない愚かさ加減しか示していない。まず短刀はなかった。一八〇〇年以来たった一人のフランス人が暗殺されただけだ。そして第二に、短刀が手という手に閃いていたら、いつから侮辱を加えながら一国民を支配していられようか。ウジェーヌ公は愛想がよく、婦人に対して慇懃で、このうえなく立派な勇気をもち、時には将軍らしく立派だったこともあるが、世論にはほとんど根をおろしていなかったので、彼の家が没落してからは、ミラノにきて三日過ごしただけであった。ミラノでは、彼は、ローマへ行くために町を通過する英国の貴族(ロード)と同じくらいの反応しか起こさない。

結局のところは彼の性格であった。二、三人の副官は敬意を払っていたが、これらの諸氏はフランス人であった。これらの不愉快なフランス人は、幸いなことに、決して賤しいことや不名誉なこ

とをしなかった。

ライプツィッヒの戦いのあと[1]、イタリアでは一人の天才が王座につく基礎固めをすることが可能だった。フォンテーヌブローの譲位のあとでは、王座に上ることができた。しかしこうもり傘を開いて、憲法を語らねばならなかった。副王のとりまきたちはこうした考えを抱くまでに至らなかった。副王自身は、もっとも勇敢でもっとも忠誠なフランスの騎士でしかなかった。彼は恩人にイタリア軍をさし出したが、こちらの方は盲目的にこれを拒まねばならなかった（一八一四年二月）。

譲位後になって、副王はついに王冠を考えた。彼はそれがミラノの元老院議員の手中にあると想像して、町いちばんの宝石屋マニンの店へ一つ二十五ルイの嗅ぎたばこ入れを四十二個買いにやって、四十二人の元老院議員を買収した[2]。この巧みな術策は十五分後にはミラノに知れわたり、そして……。ここでわたしの口述筆記人が笑いながらわたしを見る。「現代に触れるのは禁物です」(七)

偶然からこの若い国民の歩みは一八一四年に中断したが、天才と自由とを生み出す聖火はどうなるだろう。それは消えるだろうか。そしてイタリアは、婚礼の日のためにソネットをつくってバラ色のサテンに印刷することをまたはじめるのだろうか[3]。わたしの思考、わたしの視線は、この大問題に解答を出すために注がれている。

亡命者はまったくいなかったし、国有地の買手はほとんどいなかった。そこでは、われわれのあいだにおけるごとく、貴族の国民への融合が一八〇七年にはなかばできあがっていた。ブォナパルテこそが、貴族に、彼らが大地主たちよりも何かしらましなものだということを教えたのだった。今では宣戦が布告されて、それは上院のなかでしか終熄することがあるまい。

1　ライプツィッヒの戦いはいわゆる諸国民の戦いである。一八一三年十月十六日、フランス軍はこの戦いでドイツ、ロシアの連合軍に敗れてドイツから駆逐された。これはナポレオンの敗北への発端であり、翌年一月にはフランス戦役がはじまって、帝国は急速に滅亡に向かう。ナポレオンがフォンテーヌブローで譲位するのは四月十一日である。

2　嗅ぎたばこ入れの話はおそらく創作。町いちばんの宝石屋マニンは、ミラノのツェッカの彫刻家ルイジ・マンフレディーニの名を略したものと考えられる。

3　『パルム』に次のようにある。「中世には、共和国民のロンバルディーア人は、フランス人の勇気に匹敵する勇気を示したものだった。その報復措置として彼らの町はドイツ皇帝にすっかり破壊されてしまった。彼らが忠実なるしもべになってからは、彼らの仕事といえば、貴族とか金持の家の娘が結婚する際に、バラ色のタフタのハンカチにソネットを印刷することがすべてであった」（第一章）。

4　ナポレオンのこと。

芸術について

イタリアを栄光と幸福から遠ざけているものについては今さら言ってもはじまらない。幸福になればたちまち傑作を生み出すだろうというのがこの国民の魂であるが、だからこそこの国民が、たとえば幸福になってからドルしか生み出していないアメリカ人よりも、もっとわたしの心に近しいのだ。

一つの原因がイタリア人を完成から遠ざけ、せっかく彼らが戦火によって得たものを台なしにしている。ペダンティスムである。思想芸術においては、技法を学んだらただちに師を捨てて、自分自身であらねばならない。イタリアの作家はほとんどが司祭であるが、何としてもダンテやウェルギリウスをひき継ごうとしている。これが二つの衒学者の派閥をつくっている。観念の衒学者は、ヴェッリ、ミカーリ、など。文体の衒学者は、ボッタ、ジョルダーニ、ロズミーニ、など。

イタリアは、理工科学校をくれなかったとその父をいつまでも非難するだろう。それは、大部分が貴族の、それも一千二百フランの年金がある青年しか入学を認めないようなものだったはずである。彼らには、ジェレミー・ベンサム、アダム・スミス、セー、トラシー、カバニス、マルサス、モンテスキューが教えられたかもしれないし、シラー、ラシーヌ、ルソー、エルヴェシウス、ヴォルテール、ボッシュエ、そして国民的大詩人が読ませられたかもしれない。

メキシコとペルーの両共和国は、われわれの遅々とした文明の発展段階を一つ一つなぞって、ゆっくりと偏見から愚劣へ、そして愚劣からもっと不体裁でない錯誤へと這い進むことで、時間を浪費すると思われるだろうか。われわれの文明では、一つ一つの真実が、作家の十年間の働きと、そ

してさらに六ヶ月のバスティーユによって購われたのであったが。

いや、両共和国の学校は、ただちに学問の最前線に赴くだろう。ビヨの物理学があるのになぜノレの物理学を学ぼうか。両国の若いエネルギーは、老いたヨーロッパが疲労で息切れして、くたくたになって到達した地点から出発しよう。ところが、こういったことこそ衒学的なイタリア人の望まないことだ。彼らはイタリアに生まれたり、そこに住んでいる作家たち以外からは、何も学んではいけないと主張する。(ハ)

モンテスキューは『アンリヤッド』について、「ヴォルテールがウェルギリウスになろうとすればするほど、彼はウェルギリウスから遠ざかる」と言った。イタリア人たちを過誤へとひきずりこんでいる天才は、そのことをいちばん嫌悪した世界的な天才だった。ダンテ以上に自分自身であった人はいなかった。しかし、アルフィエーリは少し才知に欠けていたので、これを悟らず、そしてイタリアの青年全部が遅れまいと彼に続いている。[1]

イタリアは、貴族階級を自由主義的観念へと接近させたかもしれなかったあの理工科学校をもはや望めないので、みずから貴族階級の教育をやらなければならないし、しかもイタリア自体とはもっともかけ離れた人々とともに、それをやらなければならない。それは分金(ホ)のときをたやすくするだろう。

イタリアは南方にある。イタリアには北方の師匠が必要である。イタリアはカトリックの強力な国だ。イタリアにはプロテスタントの師匠が必要である。イタリアの血には三世紀にわたる専制政治が混じっている。イタリアには立憲的な師匠が必要である。このことはすべて、イタリアに対してスコットランドと英国を指し示している。フランス人はあまりにイタリア人に似すぎている。イタリアは、共感という滑稽な哲学に落ちこまないように、必要最小限の本しかとり入れてはいけな

1　ブッチ本マルジナリアに次のようにある。「アルフィエーリもバイロンのように、不満な、自尊心に無我夢中のウルトラだが、英国の上院議員のような東洋風の逸楽に対する好みはない」

い。その共感たるや、瞬間の快楽以外の別のものを、われわれの意志の深いところで生じさせるのだ。これを除けば、英国の体制がイタリア人にとって、唯一の健全なものである。なぜなら、彼らが観念を表現することを学び、また、気候や機構の相違に左右されるものの、四囲の情況から様々な思想をひき出すことを学んだあとで、ある日、彼らは自分たちの師匠を追い払って(十)、思いきって彼ら自身になるだろうからである。

しかしながら、これは、彼らがホラーティウスやウェルギリウスを研究するかぎりは決して起こらないことである。ダンテやマキアヴェッリはとりわけ危険だ。これらの不滅の人たちは共和国に生き、そしてこれはイタリアが熱望しているものなので、青年たちが、二十才では滅多にありえない独創力をやはりもっていなければ、彼らを真似するのをやめることはむずかしい。

国民は、憲法の維持に必要な利害を除いて、その内部に別の相対立する利害をもはやもっていないときに、はじめて幸福になる。国民は、適切な方式にしたがって教育されたたくさんの凡人がいる場合以外には、蒙をひらかれない。結局、国民の性格の強さと国民の理性の光が否応なくもたらす程度の自由しか、国民はもつことがない。イタリアはいちだんと自由に近づいている。というのはイタリアはこれまでよりも偽善に欺かれにくくなっているからである。イタリアはすべての権力者を邪(よこしま)と考えて、彼らに「逆のことを立証しなさい」と言う。この国は急速に文明の光を獲得することを目指すにちがいない。そのためには、まず真実を認めることからはじめねばならない。一六〇〇年以来、この美しくも不幸な国で印刷されたすべての本は、十巻にしぼることができる。

以上がイタリアの青年たちの耐えなければならない悲しい現実である。しかし彼らはまだこの最初の一歩を踏み出していない。わたしはこの言葉がさらに五十年のあいだ、怒りだけを煽るのではないかと恐れている。二十才で次のように考えるのはむずかしい。「わたしの知っていること一切

は、わたしを騙すことで今この瞬間にも得をする人々に教えられた。すべてについて、わたしの観念の一つ一つをつくりなおさねばならない」

(一) 一七四九年にピットは貴族階級を救済したが、その乱費によって、百ルイの年金もない英国人はすべて、生まれのせいでどうしても避けようもない不幸に落しめられている。一八一七年には、飢えがバーミンガムの労働者たちをなぎ倒して、われわれのために、解放都市の残酷な行為の仕返しをしてくれている(ブルーム氏の論文を見よ)。熟慮反省したとしても、国民はたちまち破産して、一貴族によって負わされた負債がその後継者にとって義務にならないことを述べたてることになるだろう。

(二) この知られざる偉大な国民が没落したあとで。彼らについては、はじめにエトルリアが存在し、芸術や知恵を涵養したということを除いて、われわれはほかのことを知らない。イタリアにはさらにアウグストゥスの時代やレオ十世の世紀がある。絵画、音楽、彫刻は、この地以外ではおそらく存在しえない。いつか南アメリカは、二世紀の代議政治のあとで、太陽と自由と富をもち、この天才の国とはりあうことができよう。一八一七年の残虐行為はペルー人にエネルギーをもたせる。[1]

(三) ヴァラッロにおけるロアンの部隊との彼の戦闘。[2]

(四) 一七九四年から一八一四年までのイタリア王国の歴史は、近代のもっとも格好な研究材料である。そこでは理想が実際と一体になっている。

(五) プリーナの暗殺に関するすべての文書は、一八一七年には、ミラノ警察の記録保管所にあるとマレスカルキ伯爵がわたしに言った。彼らの名前や動機を知ることができる。

(六) 今では民衆の幸福を保証する大原則になっている合法性ということに関しては、王位簒奪者にとって問題たりえなかったことが、この仮定から感じられる。元々悪の立場にあって、しなければならなかった最善のことが語られている。

(七) この時期(一八一四年四月)には公はまだとてもしっかりした戦線をもっていた。ここに記した事柄はありとあらゆる調子で繰り返して聞かされたばかりだ。わたしには近頃ある理由からこれが少しも信じられない。モスクワ退却後、マグデブルグの会戦を弱体な前衛をもって戦いぬき、たけり狂ったロシア人やプロイセン人の侵入を阻んだこの人は、当地で演じさせられた政治的役割以上に優秀であるにちがいない。わたしと同行している士官たちは、「われわれのあいだでは副王はフランスの一侯爵以外のも

1 ペルー人は一八一〇年以後スペインの支配に反抗して戦っていた。彼らがスペインに独立を認めさせるのは一八二一年になってである。

ブッチ本マルジナリアに次のようにある。「詳細――イタリアは唯一の奸策、どんな他の国民もまだ実行したことなく試みたことのない力ずくによって、ヨーロッパを支配することができた。これこそわたしに教皇制を称讃させているものだ。イタリアの奸策があの宗教の四分の三を創造した。これをわれわれはJ＝Cの宗教と信じているが、これは、二百年ごとに反対に方向を変え、ヨーロッパの観念や習慣にたいそう深い影響を与えてきた。要するに、ローマ人によっておこなわれた征服にはじまって、イタリアの歴史はつねに全民族の歴史であった。イタリアはグレゴリオ七世(ヒルデブランド)の栄光からパイジェッロの栄光に到るまで、あらゆる栄光をもっていた。したがってこの国には優越性がある。たとえば、フランスもスペインも英国ももっていない何かしら未知のものがある。イタリアは、ローマ人の支配下では力によって、(教皇とともに)奸策によって、(レオ十世治下では)文芸によって、(ラファエッロやチマローザとは)芸術によって、支配した。これら四つの支配の仕方は人間のあらゆる知的能力に及んでいる……」

2 レーキはイタリア国民軍を指揮して、

のでは決してなかった」と言う。

(八) パラスは彼女の建てた城砦に住み、
われわれ羊飼いは、ひたすら森だけが気に入っている。
この悪趣味の原理はウェルギリウスのなかに見られる。[3]

(九) 化学用語。

(十) これがわたしの分金作用と呼ぶものである。[4]

リーヴァ、七月二十日[5]

船中における連れのイタリア人士官たちとの別な会話。(一) ミラノはボローニャに勝っている。個人としては、たぶんボローニャ人の方が優れている。しかし

一、ミラノはボローニャより大きな町（十三万人）であり、それゆえに、そこでは多くの愚劣な事柄がいっそう軽蔑され、過去の時代の先例はいっそう力を失っている。そこでは町の利害について語るのはすでに滑稽である。

二、ミラノは十四年間広大な王国の首都であった。そこでは間近で大事件が見られ、情熱の戯れが見られた。この時代のあいだ、ボローニャは嫉妬していた。この不運な時期にボローニャがエネルギーを示し、反抗した（一八〇九）のは事実である。[6]

三、ミラノは、上流社会に書物を供給するスイスに近い。『モーニング・クロニクル』も一部入っている。これをとりよせている貴族は、少くとも三千フラン払っている。十年前だったら、新聞を読むものは二人と見られなかったであろう。現在では、使用人たちが書斉でそれを探したり、街で読んだりしているのが見受けられる。

世のなかで恐れるものといえば教育だけだった暴君の治政下で、はからずも施行された十四年間

一八〇〇年五月八日、ピエモンテのヴァラッロで、フランスの亡命貴族ロアン公にひきいられたオーストリア軍を破った。

3 ウェルギリウス『田園詩』（前三七）からの引用。

4 分金とは、いくつかの金属、特に金や銀を、ある種の酸を用いて他の金属物質と分けることである。

5 リーヴァとは、コモ湖北端の町コリコのさらに北十五キロメートルにあるリーヴァ・ディ・キャヴェンナのことであろうか。

6 ミラノは一八〇五年イタリア王国の首都となった。一八〇九年のボローニャの反抗とは、一団の叛徒がボローニャの町を襲撃した事件（一八〇九年七月七日）で、スタンダールの述べているようなものとはちがう。

（一八〇〇年から一八一四年）の教育は、当地で英雄を生み出した。啓蒙主義者の王侯によって施行された教育だったらどうだったろうか。偉大なことはすべて、この国民の心に特別な権利を獲得する。フランス人よりもずっと不信感の強いこの国民は、自分たちの王侯の偉さ加減をもっと見事に嗅ぎわける。半世紀の事態が十四年間で彼らをこんなにも急速に成長させたが、もう一方の国民を動かそうともしなかった。民衆の自由度ではロンバルディーアはフランスのおこぼれを頂載していると考えられている。当地では、非常な関心をもってわが国の議会の討論が注目されている。

不満の熱が、他のあらゆる国と同じようにこの国を焦がしている。しかしながら、わたしは彼らに次の三つのささやかな事柄を考えてみるようにたのんだ。

一、イタリア王国全体で一八一四年以来二十三人の逮捕者しか出していない。

二、反動の影、一滴の流血もなかった。ベルガルド総督はいくつかの告発を火に投じた。

三、総督にヨーゼフ二世の流れを汲む才人[1]、すなわち、司祭や貴族に少しも欺されない人を迎えている。ミラノのある司祭が一人の青年を使って奇蹟を企てた。奇蹟の目的を知った総督は彼らを二人とも監獄に送った。彼は公衆の前で彼らにこう言った。「思うに、明日まで君たちは拘束されよう。それ以上この小奇蹟のために君たちがひどい目にあうことはなかろうし、これは不信心者を懲らしめるのにとても有効だろう。わたしはもう君たちを逮捕させないよう約束する」

二ヶ月おきに、金を積んだ八十五台の荷車が、しっかり護衛されてウィーンに向かって出発していること、そしてロンバルディーアがもはやマリア・テレジアから与えられた憲法の類をもっていないことは、真実である。

(一) 二十年前からのイタリアの歴史に関しては、出版法違反が、一人あたり三万リーヴルの年金をもつ十二

1 ロンバルド＝ヴェーネト王国で一八一五年から四年間総督をつとめたザウラウ伯爵を指す。

2 『著作物の押収と作家出版者の責任に関しての、フランスにおける現行出版法ならびに検察官の主義の問題』（一八一七）のこと。スタンダールは一八一七年七月十九日、八月二日、九日の『メルキュール・ド・フランス』でこの小冊子に関する記事を読むことができた。

3 コンテッシーナ・A＊＊＊とはアントワネッタ・アレーゼ（一七七八―一八四七）のことか。美貌で有名だった。

人の陪審員によって裁かれるようになる日に、はっきりした観念を与えねばならない。それまでは雲をつかむような状態であり続けるだろう。一八一七年の判決についてのバンジャマン・コンスタン氏の著作を見られよ。[2]

プリニアーナ、七月二十一日

われわれは再びプリニアーナを見たいと思う。あそこはとっても涼しいのだ。コンテッシーナ・A＊＊＊[3]がわたしに芸術を語る。わたしの注意はとてもそれに奪われていたので、「今君はどこにいるのか」とたずねられたら、どう答えてよいかわからなかったろう。――フランスでは、四人の恋人がいて情熱的に愛している女性は、誰も言ってくれないので、自分の近くに芸術があることや、アカデミーの連中が印刷するすべての衒学的論文をできるだけ早く火中に投じなければならないということを知らない。――しかしわたしは克服しがたい異議を予想している。フランスでは四人の恋人がいる女性とは何だろう。

フランスは滑稽と一大首都との専制的な支配によって、独創性を失っている。ここ、ミラノから二十リュー〔約八十キロ〕のブレッシャは、フィラデルフィアを真似ようと思わないくらいにミラノを真似ようとしない。すべての家庭、すべての情事は町から町へとつつぬけである。しかしいささかの模倣もない。

モンティチェッロ、七月二十三日

コモからわれわれはレッコへ行く。ひどい旅だ。景色は何の意味もない。われわれはモンティチェッロにくる。カーサ・カヴァレッティのすばらしい眺め。わたしはこれまでに類似のものにぶつかったことがない。地平線にミラノの大聖堂を、そしてさらに遠くに、パルマとボローニャの山々

によって空に描かれた青い線を認める。われわれは丘のうえにいる。右手に肥沃な平野と岩山、二、三の湖の見事な眺め。左手には別の壮大な展望。これはあらゆる細かな点で右手の眺望とは反対である。山なみ、マドンナ・ディ・モンテヴェッキア修道院。前方に、贅沢な緑と豊饒な土地のあの美しいロンバルディーアがあり、地平線は果てしない。そしてそこから三十リュー〔約百二十キロ〕、ヴェネツィアの霧に視界は途絶える。それはサン＝ミケーレ・イン・ボスコからの眺めの反対側にあたる。しばしばこの果てしない空の五、六リュー離れた一角に、黒い嵐が発生し、雷鳴が轟くのが認められる。しかし、その一点をのぞいて天気は晴朗だ。嵐は一進一退して、消滅したり、あるいはたちまちに諸君をとりまいてしまう。雨が急流のように落ち、恐ろしい雷鳴が大建造物をゆする。そのうち驚くほど清澄な空気が生じて楽しさを倍加する。以上はすべて二時間前からわれわれに生起したばかりのことである。今われわれは、ここから八リューのところにある家の窓が弁別できる。――元イタリア王の扈従騎士だった地主の気品のある丁重さ。われわれは彼のところに思いがけなくやってきた。それは丁度子供たちが絵に近づくみたいであった。

七月二十四日

われわれはモンツァで宿泊する。ひどい建築の宮殿、無意味な庭園。われわれは小さな町ヴァレーゼに行く。十年前から町のすべての家が館に建て換えられている。

カジノへ出かける。ヴァレーゼの住民のこのうえない親切。彼らはグラッシーニ夫人[1]がその同胞に開いているアッカデーミアにわれわれを連れていく。彼女は「いとしの魂よ、待って下さい」と『ホラーティイ兄弟の最後』のデュエットとを歌う。聴衆は泣き、心から称讃した。そこにはミラノでいちばん美しい女性たちがいたが、そのなかには、ジェノヴァ生まれで、十三世紀にはB＊＊

1　グラッシーニ夫人はヴァレーゼ出身。彼女がこの日コンサートを開いたかどうかは明らかではない。

2　ブォナパルテと解される。

3　イタリアでは、デスチュット・ド・トラシーの『イデオロジー』はコンパニョーリ、アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルの『劇文学講義』はジョヴァンニ・ゲラルディーニの訳と注によって、一八一七年に刊行された。『コリンヌ』は一八〇八年、『ドイツ論』は一八一四年にすでに翻訳されていた。

4　二つの文学新聞とはおそらく『ビブリオテカ・イタリアーナ』（★四十六ページ訳注1参照）と、アントニオ・ステッラ主宰の『スペッタトーレ』（一八一四―一八一八）。これらに対比された『百科雑誌』は、アントワーヌ＝ルイ・ミランの編集で一七九二年から一八一六年まで刊行され、続く二年間『百科記録』として出た雑誌である。

5　一八一一年十月二十三日、スタンダールは恋人のアンジェラ・ピエトラグルアに逢いにマドンナ・デル・モンテにやってきた。この折、彼の馬は舗石の上で滑った。その記憶がここに記されている。

*2 家と姻戚関係にあった家柄のリッタ夫人もいた。イタリア人士官たちの堂々たる姿。きわめて青白い顔、大きな黒い目、栗色の口ひげと髪、黒いネクタイ、古代人的容貌、態度の飾り気なさと温厚さ、こういったものはフランスでは思いもよらない。彼らはほとんど皆、非常に表現に富んだ土地の言葉で言えば、奴隷状態(イン・セルヴィトゥ)にあると思われる。それぞれが恋人と一緒である。――わたしはあの勇敢なセヴェローリ将軍に紹介される。彼は自分の恩人が攻撃を受けたとき、あの憎むべきミュラに反抗して脚を失った。わたしはスペインでたいそう名をはせたベルトレッティ将軍、イタリア最大の詩人モンティ(一)、偉大な家名の後継者で、その叔父と同じくらい立派だといわれているメルツィ青年に会う。

イタリアではミラノが文学の首都である。しかし十九世紀において、自由なき文学とは何か。そこでは多くの医学書、そして時々フランス語の翻訳が印刷される。トラシー、シュレーゲル、『コリンヌ』、『ドイツ論』をあえて世に出すこともできたが、相当数の弁解じみた注釈をつけてのことであった。[3] 二つの文学新聞がある。[4]『百科雑誌』と同じ程度に面白い。人間が本よりもずっと勝っているのだ。

夕方、われわれはマドンナ・デル・モンテに登る。[5] この聖殿は何百万もかかったにちがいない。わたしはこれをベリネッティの宿で書いている。われわれはたいへん元気である。登りながら、何頭かのロバがあの滑べる舗石のうえに倒れ、そしてわれわれと一緒の婦人たちが転んだが、これは冗談ですんだ。われわれは十五だか二十の礼拝堂のどれかでたえず止まって、振り返っては眺望を楽しんだ。全体が見事だ。日暮にはわれわれは七つの湖を認めた。わたしを信じたまえ、フランスやドイツを旅してまわってもこうした感動を抱くことはない。われわれのなかには二人のフランス人がいて、彼らは退屈している。というのも誰も彼らの機知に耳を傾けないからだ。一人の英国人

はたえず手帖を出して、百姓を留めては地名の正確な綴字をたずねている。五、六人の半給士官は寡黙である。そして五人の女性がいたが、そのうち少くとも二人は、気高く、飾らない、感動的な美しさである。わたしは彼女たちのいずれにも恋する時間がなかったが、イタリアに恋をしている。この国を離れるわびしさをわたしは克服しがたい。ここからマッジョーレ湖が見える。その岸辺でわたしの四輪馬車がわたしを待っている。――楽しい遊山だ。というのは、愛すべきわが同国人たちを除いて、われわれは共にうちくつろいでいるからである。

今晩、ベリネッティが、修道院の修道士の一人がパイプオルガンを弾くとわれわれに伝えた。われわれは教会で二時間を過ごす。われわれはモツァルトのいくつかの曲目をリクエストする。それらにはわたしがナポリで求めようとした感動があり、そのために一週間のあいだものも言えないくらいだ。

(一) 『バスヴィユに捧ぐ』に加えて[1]、現存する『イーリアス』の最良の翻訳と、四巻の美しい韻文（これはいつか全体が公刊されたら人々を瞠目させるにちがいない）が彼の手になるものだ。――ウェルギリウスが死に臨んで、自分の『アイネーイス』を焼却してくれるように望んだのは、謙遜からではない。そのもっとも美しい部分はすでに有名であった。もし欠点のある部分がすべてなければ、彼の栄光は何と変わることだろう。――イタリア語をうまく書くためには、ラテン語を完全に覚えることからはじめなければならない。この偉大な詩人に紹介してもらったために、わたしは二つの観念を獲得した。彼はロマンチック様式に対して旧来の憎しみを抱いているようにわたしには思われた。しかし彼が偉大であったときには、彼はロマンチックであった。彼は一八一三年の戦役の敗北に関するソネットをわれわれに聞かせる。その作品で彼は十三人目の使徒ユダの考えを甦らせている[2]。作家がローマで育ったことが明らかだ。ずっと豊かな国で生まれたなら、彼は時として自分の魂に語らせたであろうに。

1 『バスヴィユに捧ぐ』は四つの歌から成る詩で一七九三年刊。『イーリアス』の翻訳は一八一〇年に出た。

2 モンティはユダを「十三人目の使徒」と呼んでいるのではなく、十三年を「ユダの年」と呼んでいる。その上、これはソネットではなく八行の韻文の小品である。

3 すなわちナポレオンとともに没落して外国に逃れた人である。

4 「アローナ――絶壁のふもとにある古い町。アローナのストレーザ方面への出口で、左手へ、《サン＝カルロの巨像》まで登って行く道が別れる。これはサン＝カルロ・ボッロメオの銅と青銅でできた巨大な立像である。二十三メートル以上の高さで、十二メートル近い高さの御影石の台上にある。一五三八年アローナに生まれ、十二才で僧侶になり、二十二才でミラノの枢機卿兼司教になった人物、教会の規律と風俗の再建で示した権威と、一五七六年のペストの際に示したその勇気で異彩を放った人物、この人物に敬意をあらわすためにこの像は建てられた。彼はジェズイットの守護聖人の一人である。この像の上には登ることができる」（ミシュラン案内書、『イタリア』より）

スタンダールは『絵画史』第一四八章でこの像の与える強い印象について記している。

5 言い換えれば、「子供のように眠って」ジュネーヴに着いてやっと「目覚める」とい

七月二十五日

われわれはこのぽつんと立つ岩山のうえにある気高い修道院のなかへ入る。修道女、と思うが、スタウレンギ夫人の親切。修道院内の階段は黒大理石でできている。わたしはそれらが、このかわいそうな修道女たちの繊維の靴でほとんどすっかりすり減っているのに気づく。どれくらいの美しい目が、この壮麗な牢獄のなかで虚しく輝いてはその光を失っていったことだろう。――われわれはヴァレーゼ湖へすずき（ペッシェ・ペルシコ）を釣りに行き、そこからパッランツァへ行く。われわれは舟に乗り、今はボッロメオ島にいる。

マッジョーレ湖畔のパッランツァで、わたしは一亡命者に会う。[3] 彼の観念の驚くべき穏健さ。国の連中の方が彼より二十倍も誇大である。――フランスでは、支払う税金の額によって市民を重要視するような法律をつくるべきだろう。こうすれば、千フラン払うものは、陪審の裁定以外のものに従うことなく、年に一つの政治諷刺の本を出版することができよう。この考えに従えば、訴訟件数を首尾よく減らすことができよう。市民を市民独自の怒りから救えるであろう。外国語で出版される新聞を陪審にだけ委ねることもできる。

ボッロメオ島、一八一七年八月二日

われわれは二日前からここにいる。たとえわたしが、このうえなく立派な地位を与えられたと知らされようとも、その手紙を開けてみようとさえしなかっただろう、ということ以外何と言ってよいかわからない。

われわれはアローナの近くのサン＝カルロの巨像を見に行く。[4] 帰りに舟に乗って、わたしは島から十五分のベルジラーテへ行く。わたしはそこでわたしの四輪馬車を拾って、子供のように、[5] シンうわけなのだろう。

プロンを越える。

ジュネーヴ、一八一七年八月二日

ジュネーヴで、自由のなせる滑稽なことごとに、わたしは目を覚まさせられた。フランスの新聞がたっぷり浴している出版の自由を社交界で論議していた英国議会の著名な議員ルーム氏に[1]、それらの滑稽事がこう言わせやしなかっただろうか。「節度を守るがよかろう。」お墨付きの警世家の表現法は、亡きタルチュフの言葉以来、わたしが見たいちばん見事なものであった。

ジュネーヴ、一八一七年八月三日

女性たちの淑女ぶりは滑稽さといやらしさがゆえに前代未聞の事柄だ。はじめて紹介される外国人の一人一人に彼女らがぴったり同じことを言うのに気づいた。女中たちに教わったご愛嬌のきまり文句を繰り返すことが、彼女らにとって愛想がよいことなのだ。どんなものも彼女らをこの堂々めぐりからひき出すことができない。彼女らは貞節を失うと思っているのだろう。こうして、活気、自然さ、一見しての新味、気さくな様子といった社交界の魅力となっているものが、すべてジュネーヴでは凍てついている。わたしはたった今、これが英国女性の下手な模倣であることに気づいた。味気なさにかてて加えて、会話はつねに自由とか、恋愛とか、家庭の幸福とか、諸々の情熱の姿とかの大問題についておこなわれ、そのうえ、これらの婦人たちはレッスンをおさらいし、暗記していて、それを諸君に小出しにするから、いつも同じものだ。これらの際限ない会話で諸君が自然であろうと思うと、諸君に示される不満の色にぶつからなければならない。先日、P＊＊＊家の夜会で、わたしが結婚ぬきの恋愛の可能性を認めたために、わたしを紹介してくれたC＊＊＊夫人は目

1　ルーム氏すなわちブルーム氏。

2　これらは旧体制下で用いられていた呼称で、参事院、代議院に代っている。

3　一八一六年から一七年にかけてヨーロッパの大部分は食糧不足に陥ったといわれる。ジュネーヴの議会は外国産小麦の入手に専念しなければならなかった。

4　一八〇九年にマルサスの『人口論』を訳したのはピエール・プレヴォ（一七五一―一八三九）。スタンダールはこの版をもっていて、それに注釈を施したりしていた。

をむいた。すべての令嬢たちが赤面した。わたしは愚かなことを言ったと思い、これを最善を尽してとり繕ったが、かなりまずかった。しかしそれにしても、婚外恋愛を認めるのは、実際、言語道断なことなのだ。

つねに人生の大問題を論じなければならないし、討論ではずっと偽善者でいなければならない。そのうえわたしはこう言おう。地位や権力を獲得できる宮廷で気兼ねするのは結構、だがジュネーヴくんだりで気兼ねするのは。

ここでは女たちは美しい。しかしこの前代未聞の淑女ぶりについては、誰も語っていないように思うが、その顔の様子にまで見られる。それは顔だちに、共感を寄せつけない徹底した冷たさと無関心を添えている。わたしはジュネーヴのこうしたすべての美徳をよいと考える。欺かれる夫がいちばんいない町である。わたしは世界のすべての黄金とひき換えにしても、ジュネーヴでは結婚したくない。ナポリの精神面の生活にはぞっとさせられるものがあるが、わたしはジュネーヴよりこちらを好むだろう。少くとも自然さがある。

八月四日

共和国の大小両議院[2]が、食糧不足に起因する災禍を考察するために召集された[3]、とたった今わたしに語ってくれた人がいる。この問題はあの沈着かつ慎重な心と、共和国以外では滅多に見られない思想の自由をもって、両院で別々に審議された。称讃すべき議会は当代の学問を少しもおろそかにしなかった。かの有名な著作（マルサス）が参考にされた。これはジュネーヴの教授たちからたいへん尊重されている団体のなかに翻訳の適任者[4]がいた。両院では特に、隣国であれほどの不幸を誘発した軽率な考えを避けようとしたのだ。(一) 三週間の熱心な討論ののち、大議院は飢饉に備えるの

は急務であると考えて、本日以後は劇場を閉館すると宣言した。[1](二)

そのうえ、穀物の着荷を保証するだけでは充分でなく、不幸な労働者階級に、推測される資力をうわまわらない代価で、穀物を獲得してもらうために、その手だてを与えねばならないと考えた。両議院は、ジャン＝ジャック・ルソーの生まれた街に彼を記念して建つレンガの豪奢な碑を、ただちに破壊することに決定した。[2]

どうして占領時代のあいだジャン＝ジャック・ルソー街と名づけられていたこの街に、「シュヴリュ街」[3]というかくも尊敬すべき昔の名前を復活させたのだろう。

(一) これは、共和国に合併されているジェス地方の一部住民に出された布告のそのままの表現である。[4]

(二) 史実。

ジュネーヴ、八月五日

スイスには自由があると最初に言った旅行者がどんな人かわたしは知りたい。ジュネーヴやベルンでは諸君を監視するものが四百人もいて、その一人一人が自分の権力を鼻にかけたがっている。もし諸君がネクタイの着け方で彼らに逆らおうものなら、彼らは諸君を迫害する。言うのも莫迦らしいことだ。パリはもっと自由だと思う（一八一七年八月）。だが地方については言わずにおく。わが国の哲学者たちは、泥と煙のこの都会[5]を相当にけなしている。大都会というものは人間と政治に若干の徳を強制するということを証明するために、何て雄弁な声があがるものだろうか。(一) 芸術における真の美はそこでしか生まれえない。わたしはジュネーヴの音楽を決して忘れないだろう。わたしが旅行中に見たもっとも奇妙な見ものの一つである。あの若い女性たちが編物を置くとピア

1　一八一六年八月十九日の参事院決定。「小麦の高騰および労働者階級の仕事不足による苦しい状態を見、来年は難事と貧窮が加わるかもしれないことを考えると、議会はこうした事態でジュネーヴにおいて喜劇が上演されるのは好ましからぬと認める」

2　政府が住民に小麦を確保させるために金融的な手だてを与えようとしていたことは確かだが、一八一七年二月にルソーの貧弱な記念碑を壊したのは、新しい植物園をつくるためであった。

3　シュヴリュ街は一八一七年七月二十三日にルソー街に復している。しかしながらルソーが生まれたのは、ルソー街（あるいはシュヴリュ街）ではなくグラン＝リュではないかと推測されている。

4　一八一六年十月九日、ジュネーヴ当局がジェス地方の新しく合併した村へ出した布告。「閣下らは、諸君のあいだに公共の安寧と個人の幸福を維持するためには、何事もいとわない。彼らは、諸君がいかなる時にも、諸君の以前の祖国、その堂々たる君主の父のような慈悲深い統治を惜しむことのないように、あらゆる努力を払うであろう」

5　「さらば、パリよ。高名な都会、騒音と煙と泥の都会……」（ルソー『エミール』第四巻）

6　R＊＊＊とは、王、ROIの略だろうか。王さえもコペのスタール夫人のもとを訪れた

ノの傍へ行き、巨匠たちの熱情的な二重唱を歌いはじめたのである。

(一) 人物評価方法がその町の住民の投票による。ルームのような目立たない立派な人物は一万人の町では消えてしまう。逆にうわべを飾った阿呆がこういう町を求めるにちがいない。彼の衣裳は彼にお似合いだ。

八月六日

昨秋、湖畔で驚くべき集いがあったとのことだ。それはヨーロッパ言論界の三部会ともいうべきものであった。万端遺漏なきようにと、そこにはR＊＊＊[6]のようなものまで見られた。彼はそこでいくらかの処世の勉強をしたのだろう。この大集会の中心だった人物の名をあげる必要があるだろうか。わたしの目には、この事態は政治問題にまで高まるように思える。もしこれが数年続けば、ヨーロッパの全アカデミーの決定はかすんでしまう。(一) デュモン、ボンステッタン、プレヴォ、ピクテ、ロミリー、ド・ブロイ、ブルーム、ディ・ブレーメ、シュレーゲル、バイロンといった人々が、ネッケル＝ソシュール、ド・ブロイ、ド・スタールの各夫人たちの前で、精神や芸術の大問題を討論するサロンに、アカデミーは対抗しうる何をもっているか、わたしにはわからない。[7]

作家たちはコペのサロンで評価してもらうために書くだろう。ヴォルテールは決して同様の集まりを開きはしなかった。ヨーロッパでもっとも優れた六百人の人が湖畔にいた。才知、富、位階、こういったものをもったすべての人が、今やフランスがその死を悲しんでいる高名な夫人[8]のサロンに、楽しみを求めてやってきたのだった。(二) 王を揶揄することもあった。[9]

(一) フランス・アカデミーは、出版の自由に逆らう権力である。

(二) 人は灯を消すことができないとき、それを照らしたままにしておく。

のは事実。ロシア人 RUSSE とも考えられる。一八一六年には、ロシア人たちが足繁くコペに出入りしていた。

7 ブッチ本マルジナリアに次のようにある。「〔一八一八年〕六月一日――スタール夫人の最後の著作の長い断片を読んだ。貴族は、人民を毒するためには変節者の言葉以上によいものはないと思っている」

スタール夫人の最後の著作は『フランス革命の主要事件に関する考察』。スタンダールはこの著作を読んだ際、自分の書いたこの文章を思い出して、書きこみを加えたのだろう。

8 スタール夫人は一八一七年七月十三日に死んだ。

9 コペの社交界が会話においても、手紙のやりとりにおいても、必ずしもルイ十八世をはばからなかったことを示すいくつかの証拠がある。

八月八日

わたしはジュネーヴでイタリアと同じ控え室の愛国心にぶつかった。ここの湖について、序列をつけて、ミラノ人の湖やトゥーン湖よりもずっと下位に置こうとすると、彼らは怒るのだ。

ローザンヌ、八月十日

わたしはフランスの八折判の本一冊よりも、英国の本の一ページにずっと新しい観念を見出す。英国の文学に対するわたしの愛情は並ぶものがないが、英国人に対するわたしの嫌悪とは別のことだ。もし諸君がある英国人に親切にすれば、彼はそれを利用して高慢な態度をとる。社交界では、自分より優れていると見なされるものに対しては小心だが、自分の力に屈すると思われるものに対しては傲慢に近い。公正でなければならない。すなわち、これらの人たちには根源的な不幸がある。彼らはいちばん無関心なものごとに悪意を感じる。もっとも非社交的であり、おそらくもっとも不幸な人たちである。イタリアではジェノヴァの事件[1]から彼らを嫌いはじめた。彼らの前代未聞の吝嗇がついには彼らに対する軽蔑をひき起こしている。宿屋の小僧までが莫迦にしている。(一) わたしがくだらない詳細にまで及べば、それは多彩である。ナポリでは、食後にもったいぶって一、二スーを与えるので、レストラン・ヴィッラ[2]のボーイたちが公然と侮辱的な言葉を口にしていた。モンツァでは、彼らは鉄の王冠[3]を見せてもらっていた。これにはちょっとしたしきたりが必要で、二人の守衛を半時間のあいだ煩わすことになるのだが、彼らは二十五サンチームを与えた。わたしの言葉の真実性に反証をあげてくれるようにと、たった今上流階級(ハイ・ライフ)の四人の英国人に、わたしの手紙のこの一節を読んで聞かせたばかりだ。しかし彼らはどうすることもできなかった。英国人に重く見られるには、きわめて冷静に立ちまわらねばならない。ラヴァーターだけがこうした態度を指摘して

1 ★一一六ページ訳注1参照。

2 おそらくラルゴ・パラッツォにあったヴィッラ・ディ・ナーポリ。これはナポリの有名レストランの一つであった。

3 鉄の王冠はロンバルディーアの王位につく者が戴いた。

4 ジョン・スコット著『一八一四年のパリ訪問』と『一八一五年のパリ再訪』、ブレーニー卿著『一八一〇年から一四年にかけての俘虜としてのスペイン、フランス強制旅行見聞記』などを指す。ジョン・チェットウォード・ユースタスについては、悪口にあふれたイタリア旅行記の著者として知られている。

5 エルギン卿はトルコ駐在英国大使。トルコ政府と取引きして、ギリシャで発見された古代彫刻やパルテノン神殿の大理石を買いとり、一八一六年英国政府に譲渡した。

6 ブッチ本マルジナリアに次のようにある。「次のことは明白な事実のように思われる。精神性に対して盲目である英国人が、ヨーロッパ中を駈けまわっている。たいそう立派な観察家であるイタリア人は、決して自分の国から出ない」

いる。それは彼らの木偶のような顔に読みとれる。英国人はフランスの地方人に似ている。何を言われても少しも動じる様子がない。(二)

人口五万人以下の町のどれもこれもが、わたしの注意に価しないというのではない。その町に真価があったとして、それに到達するためには、三ヶ月をそこで過ごさなければならないだろう。数々の習慣が旅行者を締め出している。小さな町の人々のあののんびりしたものごしに案内されて、わたしは馬をたのむために宿駅に行く。彼らには急いで行動する理由がない。ローザンヌはわたしにとって唯一の例外である。

(一) 丁寧であるのが義務にしても、無礼者たちを容赦するのは愚かしい。スコット、ブレーニー卿、ユースタス司祭はフランス人について、もっと強烈な、事実に立脚していないことを言った。[4] ユースタスはルーヴル美術館を馬舎だと呼ぶ。それは、エルギンの貧弱な石ころを納屋に収めた連中にふさわしい言いぐさだ。[5]

(二) 彼らは運動をしすぎて、あまり精神をもつことができない。

ローザンヌ、一八一七年八月二十日

天才の土地を、少くともわたしの備忘録のうえでは立ち去って、暗い北国へ入る前に、わたしは二つの観念連合を書かねばならない。一、ナポリ地方の盗賊団にもとづいておこなわれた研究、二、イタリア音楽高踏派の事情、である。わたしには時間がないので、ローマでのブォンコンパーニ公夫人の葬儀と、真夜中頃、使徒教会で、紅をさして葬龕(そうがん)に横たわり、七、八人の司祭（半分は居眠りしていた）に囲まれたこの十九才の若く気高い女性を見た際の、恐怖の混じった驚きは書かない。[6]

教会はあらゆる手を尽して死の恐怖を増そうとしている。少くともわたしについては、教会は成

功を収めた。死は戦場では、開いているか閉まっている扉、それが閉まっていないかぎりは開いている扉、これ以外のものとは決して思われなかったが、紅をさしたあの天上的な顔を見てから、死は恐ろしい姿でわたしを追いまわしている。翌日、黄昏に、彼女があいかわらず顔を被われずに休息の床に横たわって、街に運び出されたが、そのときの恐怖をわたしはどう言ったらよいだろうか。若いブォンコンパーニ公は彼女と恋愛結婚をした。家ではそれを認めたがらなかった。そしてしばらく前にやっと赦しを与えたばかりだ。彼女は長いこと修道院に身を寄せていた。二人の恋愛はずっと不幸だった。これはわたしがイタリアからもち帰ったいちばん暗い思い出の一つである。

ナポリ地方にいたわたしは、一八一七年三月にアクィラの近くへ一人の友人と狩に行った。友人の小作人たちのところで、独立党の一団[1]によっておこなわれている無数の盗みの話を聞いた。その行為には才能とトルコ人的な勇気があった。こういった一切にはわたしは少しも注意を払わなかった。それがつねである。わたしはここの人々の風俗を注意して見ていた。軍人の未亡人である貧しい妊婦にわたしは施しをした。すると、こんな風に言われた。「ねえ旦那、あれに同情することなんかないんですよ。あの女は山賊連中とつながってるんで。」わたしに話してくれた物語を、勇気と大胆不敵を伝える細部は省略して、以下に書き写しておく。

「このあたりには、三十人の男と四人の女から成る一味がいて、みんな巧みに競走馬を乗りこなします。頭目はジャッキーノの（ジョアシャン王の）軍曹だった奴で、独立党の首領と自称してます。奴は地主たちや農場主（マッサーリ）たちに、これこれの日に、これこれの木の根方に、これこれの金額を置くように命令します。そうしないと、恐ろしい死を迎えるか、家を焼かれます。この一味が通るとき、前々日に道筋のすべての農家は、これこれの時間に、これだけの人数の食事を、奴らのやり方

1　独立党はミュラの軍隊の脱走兵ガエタノ・メオマルティーノ、通称ヴァルダレッリ（一七八〇―一八一七）に率いられた一団である。彼らの山賊行為はこの頭目とナポリ政府のあいだの取引きによって終息した。ヴァルダレッリと彼の手下は警察に入隊した。しかし、その少しあと彼らは待伏せをくらって全員が虐殺された。

2　一八二六年版では次のようになっている。「ナポリ軍の兵士がたまたま発した銃声に気づいて」

に従って用意するよう知らされます。この役目は王への糧食糧秣供給の賦役よりも定期的なんです」

こうした仔細を聞いたときに先立つこと一ヶ月前に、一人の農夫が、食事を強制的に命令するやり方に怒って、将軍の元へ人をやって密告した。騎兵と歩兵の大軍が独立党を包囲した。銃声で気づいて[2]、連中は血路を開き、土地を敵の死骸で埋め尽したが、彼らの方は一人たりと倒れなかった。彼らは農夫の裏切りを知ると、彼のひき起こした事件の決着をつけると彼に通告した。三日後、彼らはその農夫の家を占領して、裁判を開いた。農夫は、フランス軍がやってくる以前の土地の習慣によって拷問にかけられ、すべてを白状した。裁判官たちは傍聴禁止で討議したのち、農夫の方へ歩みより、彼をチーズづくりのために牛乳を煮る大釜へ投げこんだ。農夫が煮えたあとで、彼らはその農家のすべての使用人に、この恐ろしい料理をむりやり食べさせた。

頭目は仲間を千人にふやすこともたやすくできたろう。しかし彼は、自分の指揮能力は三十人以上には及ばないと言う。自分の集団を一定人数に抑えておくことに満足している。彼は毎日仕事の依頼を受ける。彼が求めるのは肩書だが、それはつまり戦場の傷であって、おざなりの書付ではない。以上は彼自身の話だ（一八一七年七月二日）。

今年の春、飢饉がプーリャ地方の百姓たちを苦しめた。山賊の頭目は不運なものたちに、金持に対する手形を配った。割当ては男には一リーヴル半のパン、女には一リーヴル、妊婦には二リーヴルであった。わたしの好奇心を動かした女は、一ケ月前から二リーヴルのパンの手形を週に六枚ずつ受けていた。

それにしても、独立党はどこにいるのか皆目わからない。すべての密偵が彼らに味方している。ローマ人の時代には、この山賊はさしずめマルケルスというところだったであろう。

一八一七年のイタリア音楽高踏派

カタラーニ夫人　ヴェテラン
ガッリ　パッキャロッティ
クリヴェッリ　マルケージ
タッキナルディ　クレッシェンティーニ
ヴェッルーティ、去勢歌手。　ビリントン夫人
ダヴィデ息子

喜歌劇歌手　テノール
デ・グレチス　ノッツァーリ
ザンボーニ　ロンコーニ
パチーニ　ドンツェッリ
バッシ　モネッリ
カザッチェッロ　ボノルディ
リッパリーニ　クリオーニ
パスタ
アンブロジェッティ

バス　中堅

ペッレグリーニ
レモリーニ

コントラルト

グラッシーニ
ガッフォリーニ
マラノッテ
マルコリーニ
ザンボーニ
ジョルジ　各夫人

女性歌手

コッレア
フェスタ
ファーブル
コルブラン
カブラン
バッシ（伯爵夫人）
バッシ（エレオノーラ）
マンフレディーニ
パスタ
クレスピ＝ビアンキ

エステル・モンベッリ
アンナ・モンベッリ
ヘイゼル
ボニーニ
ナポッロン
リッパリーニ
モランディ
カンポレージ
パエール
マルコリーニ（フェデーレ）

注（ノータ）――舞台人の本拠地はミラノとボローニャである。数多くの二流の名前をわたしは書き写さなかったが、彼らはカーニバルの折にだけ雇われる。称讃すべきクリヴェッリとカンポレージ夫人はロンドンにいる。一八一七年には、ロンドンのオペラは、パリのオペラが悪いのに反比例して良好だった。そこではミラノと並んで『アニェーゼ』、『ドン・ジョヴァンニ』、『ティトゥスの仁慈』が上演された。その人気はたいへんなもので、この出しものは評判になった。客席はミラノの劇場の古くさい模倣である。桟敷席は六十二回の公演について二百五十ギニー、平土間の切符は十二フランである。オーケストラはかなりよいが、舞台装置はほぼフランスと同じくらいにまずく、衣裳は粗末である。来年はフェンテスとかサンクィリコといったミラノの画家を呼ぶと言われる。音楽についてはロンドンはパリより道が開けている。英国人は無能ではない。彼らは歌を聞くのに熱烈な嗜好をもっている。しかし彼らはよいものも悪いものも等しく好きである。フランスではわれわれはまだそこまでになっていない。[1]

作曲家たち

ロッシーニ　一七九三年頃ペーザロに生まれる。[2]『タンクレーディ』『アルジェリアのイタリア女』『イタリアのトルコ人』『オセロ』『コーヴァ・チェーネレ』[3]（シンデレラ）『ガッツァ・ラドーラ』（泥棒かささぎ）、等々。

パヴェージ　モスカ

ツィンガレッリ　J[h]・モスカ

フィオラヴァンティ　ジェネラーリ

マイヤー　ファリネッリ

1　『ロッシーニ』第二十七章でスタンダールはこう書いている。「熱烈にまずい音楽を愛するような人々は、良識や理性や節度をもってもっとも完全な音楽を愛する賢明な人々よりも、良い趣味に近づくことになろう」賢明な人々とは明らかにフランス人のことである。

2　ロッシーニは一七九二年に生まれた。

3　『チェネレントラ』（シンデレラ）のことである。このオペラは一八一七年一月二十五日にローマのヴァッレ座で初演された。

4　スタンダールが、一八一一年にイタリアから帰国した折の自分の状況を思い出しているのは明白である。彼の庇護者ダリュ伯爵は彼の面倒を見るのにうんざりしていたようであり、彼の新しい上司の大臣カドール公爵は彼に対して冷やかだった。彼は青十字勲章をもらえなかった。

ヴィンター　　ナゾリーニ
ヴァイグル　　コッチャ
シュヴァリエ・カラファ　　オルランディ
パチーニ息子
ニェッコ　ピエモンテ人ですでに亡き人。若干の天才の片鱗を示した。
パガニーニ　ジェノヴァのヴァイオリニスト。技倆においてフランス人に匹敵し、閃きと独創性においてひときわ優れている。

フランクフルト・アム・マイン　一八一七年八月二十六日

わたしの休暇はもともと四ヶ月だった。しかしわたしの立場では何もすることがないので、それを二ヶ月半延長してもらった。そんなわけで、わたしは自分の帰任が遅れていることを百も承知していた。しかし、わたしは希望を抱いていた。なぜなら人間はしあわせなときには希望を抱くものだから。一週間前から、北方の醜悪さに心がふさぎ、わたしはものごとをいちだんと悲観的に見るようになった。今朝、到着すると、大臣たちから手紙がきていた。これ以上不幸なことはない。わたしを指揮下に置いている大臣たちが腹を立てているだけでなく、わたしに好意的な大臣までがわたしの弁護に嫌気をさしているらしい。こういう次第で、わたしは勲章を逃した。あらゆる点でわたしにはそれを受ける権利があったし、それだけが三年前からわたしの強い野心を支えていた。[4]

わたしはフランクフルト中を巡り歩いた。二階が通りに二ピエ〔約六十センチ〕突き出したあの木造の小さな家々、店構えの木部に粗雑に刻まれたあの動物たち、建造物の貧相なゴチック様式、翳った太陽、すべてがわたしに、イタリアのよき日々が終ってしまったことを告げている。芸術の代

わりに、再びあのヴェストファーレン永久条約について話すのを聞かざるをえないだろう。[1]——率直に告白しなければならないが、これはわたしの生涯でもっとも不幸な瞬間の一つである。数々のくだらないことがある。たとえば、わたしの軽蔑する同僚たちは、わたしがこれまでにも増して遠ざかってしまった勲章を手に入れている。わたしの反抗的な人間という評判は高まるだろうし、わたしのなかにあるかもしれないよいものをどれも、わたしはまちがいのように見なしてしまうだろう。わたしの軽挙妄動を忘れてもらうためには、綬を帯びた阿呆どもと、絹靴下を履いて、何回となく食事をし、老女たちと何回となくホイストの会をやらねばならないだろう。そして、きわめて不幸なことに、これらの連中が阿呆であり、十年後には大声で侮蔑されるということを、はっきりと感じねばならないだろう。それにしても、連中と一緒にいることでわたしは自分の人生を失うのだ。わたしはとても不幸だ。(一)——わたしは以下のことをよく考えた。もし再びする必要があれば、また旅行をはじめるだろう。わたしが精神面で何かを獲得したからでなく、獲得したのは魂だからだ。精神的な老いが、わたしにあっては十年後退した。わたしはあらたな幸福の可能性を感じた。わたしの魂のすべてのバネが滋養を与えられて強くなった。わたしは若返るのを感じる。無味乾燥な人々はもはやわたしに何の力も及ぼせない。わたしは彼らが存在を否定するあの天上的な空気を呼吸できる土地を知っている。わたしは彼らに対して鉄のように堅固だ。

(一) 一八一四年以来もはやフランス人ではない著者は、外国で仕事についている。[2]

1 ヴェストファーレン条約は三十年戦争を終息させるために一六四八年に結ばれたが、その結果ドイツは分割されることとなった。スタンダール氏は、任地へ戻ればドイツ人たちからこの条約に対するうらみがましい言葉を聞かされると考え、そうした環境に舞い戻ることを嘆いているわけだ。ただし、これも自分をドイツで任務に着いているフランス人と設定してのことである。

2 スタンダールという名前はフランス名ではない。著者はこの名によって、ミラノを支配していたオーストリア政府や、さらにはブールボン家の政府の目から隠れようとした。

付録

アルフィエーリ伯爵は、一七四九年アスティに生まれ、一八〇三年フィレンツェに死す。二十二の悲劇を残した。

フィリッポ　一七八九、場面　マドリッドの宮殿。
ポリュニーケス　一七八九、テーバイの王宮。
アンティゴネー　一七八二年ローマで上演。テーバイの王宮。
ヴィルギーニア　フォロ・ロマーノ。
アガメムノン　アルゴスの宮殿。
オレステース　右に同じ。
ロズムンダ　パヴィアのロンバルディーア王の宮殿。
オクタヴィア　ローマのネロの宮殿。
ティモレオン　舞台、コリントスのティモファーネス家。
メロペ　メッシーナの宮殿。
メアリ・スチュアート　エディンバラの宮殿。
パッツィ家の陰謀　フィレンツェ政庁。

ドン・ガルツィア　ピサのコジモ一世の宮殿。
サウル　ギルボアムのイスラエル人のキャンプ。音楽入り悲劇。
アギス　フォロ、ついでスパルタの獄舎。
ソフォニスバ　アフリカのスキピオのキャンプ。
老ブルートゥス　フォロ。
ミルルハ　キプロスのキニュラスの宮殿。
ブルートゥス第二部　ローマのコンコルド寺院とポンペイウスの元老院。
アルケースティス第一部　ギリシャ語の翻訳。
アルケースティス第二部
クレオパトラ　作家の最初の悲劇、死後発見。

大コルネイユのように、アルフィエーリは自分の作品の一つ一つを吟味した。彼の著作の全集は、パドヴァのベットーニ書店発行、八折版で三十九巻である。

わたしは、パリで発売されているフランス語訳[1]でこれらの作品が評価されないことを願っている。あれは横丁のかつら師がタキトゥスを訳したようなものだ。

わたしは一ダースほどのダンテの心酔者と宵を過ごしたが、彼らは狭い了簡でダンテをすっかり台なしにした。彼らはダンテをすべてと見なしている。たとえば、シェイクスピアにおけるよりももっと多様な人間像があると考える。彼らは声をかぎりに、しかもみんなが一緒になって叫んでいた。ここでは、何ものかでいられるものはどれもこれもダンテの模倣者である。かつてなかったほどのばかばかしい心酔ぶりだ。だがダンテの崇高な文体のせいで、全イタリアを堕落させている過

1　アルフィエーリの劇作品は、一八〇二年C＝B・プティトによってフランス語に訳された（全四巻）。スタンダールはつねにこの訳者をうぬぼれやで無知だと考えていた。

ち、「思想のみじめで空疎な誇張」が助長されている。

アルプス山脈の両側をほとんど等しく同じ頽廃の原因が支配しているのが見られる。わが国においては、ゴチック時代の名残りの甘やかで阿呆くさい誇張、イタリアではローマ時代の名残りの精力的で共和国的な誇張。わたしは豊熟祈願日の儀式とその感動的な行列について滔々と喋りまくられる。イタリアでは、野蛮人どもに服従するのは恥辱である。

さらに、わがイタリア人たちは、悲劇の様式として、ダンテがしばしばラシーヌよりもずっと優れていることを証明して見せた。――「何ですって、一六六〇年のルイ十四世の宮廷よりも、一三〇〇年のフィレンツェの方がよい趣味をもっていたとでもおっしゃるのですか」――「そうです。フィレンツェが高潔で、共和国だったことと、大王の宮廷が精神的に低級だったにちがいないという単純な理由からです」(一)

(一) 「奥様、わたくしが参りましたどんな集いでも、神様のご加護で、わたくしは福音書にも王様にも忸怩たる気持を抱いたことはございません」(ラシーヌのマントノン夫人宛書簡)。カッポーニの『回想録』とこれを較べてみよ。

わたしにとって明白なことだが、音楽を感じる人々は、深淵によってわが国の文人パリ大学学生と遮断されている。

＊＊＊

フランス人は愛想がよければよいほど芸術を感じない。

＊＊
＊

熱情と愛情の欠如、これがイタリアを離れるとぶつかるものだ。

イタリア兵（習作）

わたしはオジモの近くで、畑で働く一人の男を見かけた。彼はぼろをまとっていたが、堂々たる身の丈だった。誇りにみちた力強い彼の動作は、彼が軍人であることを物語っていた。事実、彼は、ほとんど全部がローマ出身者から成る歩兵第八連隊の擲弾兵軍曹であった。彼は彫刻を修業していた。彼は脱走して捕えられ、鉄丸につなぐ刑に処せられようとしているとき、ローマで、フランス人の名前に親しみを覚えさせる最適の人物の監督官[1]に救われた。わたしはこの擲弾兵と一緒に五時間を過ごす。迷信の申し子とはいえ、栄光というものを体験したイタリア人たちの頭脳の内部を見たいと思った。彼はその茅屋のなかで一揃の制服を見せてくれる。彼は日曜日ごとに革帯をつけて白い服を着る。彼は制服を少しでも痛めるよりは、すべてのイタリアの百姓と同じく、ぼろを着け、むき出しの脚を陽に焼かれている方がよいのだ。わたしは彼が参加したあらゆる戦闘を言いあてて彼の信用を得た。――フランス人の勇気は虚栄心の変形である。こうした動機から成る勇気はイタリアには存在せず、動機の大部分は怒りに置き換えられる。そして、戦いのあと、しばしば上官が

1　この人物はスタンダールの遠縁にあたるマルシャル・ダリュ（一七七四―一八二七）と考えられる。

目の前にいても、兵士たちは捕虜の喉をかき切ろうとする。彼らが咎められるだろうか。否。彼らにはルイ十四世もいなかったし、騎士道もなかったということを、わたしは考える。それに、不運は、彼らを落胆させずに、彼らの怒りを掻きたてている。――わたしは先の擲弾兵に一人の知りあいの英国人を紹介する機会を得た。われわれ〔フランス人〕に対する英国人たちの感情が、人も知る劣等感から出た妬みであることは、とてもはっきりとわかっている。彼らはドイツ人、イタリア人、スペイン人をこのうえなく軽蔑する。反対に、フランス人にまつわるほんの些細なことが、彼らには貴重なのである。彼らが偽善だと激しい怒りをもって非難する同じものを、一般的なかたちで示すと、一瞬後には激賞する。たとえば、わが英国人は、このうえない侮辱的な蔑視でイタリア人を踏みにじるが、それは精神的にイタリア人がフランス人の血をひいているからである。彼はイタリア人の迷信についてこう言う。「ロンドンでは週に二十冊もの神学の本が出ることをご存知ないのですか。これはイタリア全土で出るよりも多いのです」――イタリアはフランスに注目している。そして、このしあわせな国の活動に、その活動の歩調をあわせるのをやめさせることは、たいそうむずかしいだろう。先の兵士はわが国の将軍たちについて、微に入り細にわたってわたしに質問した。

ローマの社交界

わたしは木曜の夕をC・N＊＊＊と一緒に過ごした。たいへん信心深く、きわめて才知のある男だ。彼はわたしに、もう自分の若い頃のローマは見つからないと言う。

残忍さを別にすれば、(一)この国のルイ十四世ともいうべき人物であったピウス六世治下では、みんなは大いに楽しんでいたようだ。そのダイヤモンドでパリでは知られていたサンタ＝クローチェ公妃の座談（コンベルサツィオーネ）と、われらの愛すべきベルニ枢機卿のものが、活動の中心となっていた。[1] ローマの人たちはこうした幸福な時代からずっと遠くへきてしまった。

社交界は、革命の嵐に濁った泉の水が、党派精神の泥土を沈澱させて、少しずつはじめの清澄さをとり戻したときにだけ生じることができる快楽の花である。教皇はN＊＊＊[2]の優れた軍隊を受けついだ。士官たちは、自分たちが体験した偉大な事柄を誇りにして、最低なモンシニョーレに対してもはや卑屈な尊敬など抱いていない。ローマの奥方たちは枢機卿よりも大佐の方に好意を寄せている。哲学者たちの嘲罵が彼らに道徳観念を与えた。彼らの情人たちはもはや手にする新聞紙上で引用されはしない。[3](二) もはや奢侈を見せびらかすこともないので、国民はあの盲目的な服従をもうもっていない。赤い車体受けの馬車につながれた二頭の駄馬、これが枢機卿の贅沢である。(三) かつては彼らの家たるや王侯の家を圧倒していた。

N＊＊＊枢機卿がわたしをある儀式に招いてくれたが、それはとても面白かった。元ジョアシャンの副官だった二十二才の若いR＊＊＊公が、神の恩寵に感動して司祭になり、わたしは彼の最初のミサに参列したのだ。ミサのあと、彼の父親と母親が彼の手に接吻する名誉を与えられた。この日の出来事は人々を驚かした。ローマではまだ風俗の変革が続いている。どうなるか先の見通しがたたない。(四) さしあたり、不信からすべての家々は門を閉ざし、社交界は少なく、パドヴァよりもずっと少ない。ミレディ＊＊＊[4]の楽しい舞踏会がなかったら、外国人は仲間どおしでホイストをするはめになったことだろう。ブラッチャーノ公爵である銀行家のトルローニャが何度かお祭り騒ぎを催した。しかし何人かの英国人には銀行手形の割引が大切のようだったし、これ以上ベルニ枢機卿の

1 カザノヴァが『回想録』のなかで語っているベルニ枢機卿とサンタクローチェ妃の恋愛を、スタンダールは思い起こしているのだろうか。

2 ナポレオン。

3 ド・ブロスの『イタリア書簡』によると、『ローマ日々新聞』は恐れずにアレッサンドロ・アルバーニ枢機卿とその情婦の名を並べて、二人のあいだに生じた訴訟事件を報じた。

4 ミレディ＊＊＊とはデヴォンシャー公爵夫人エリザベス・ハーヴェイ（一七五九―一八二四）と考えられる。彼女は一八一一年にやもめとなってから、ローマにずっと住んでいた。彼女は文学、芸術を擁護し、彼女のサロンは土地の貴族や有名外国人を多く集めていた。

5 『ローマ日々新聞』の発行元のクラカスは出版物閲覧所を設け、一八一四年以来それはシャルラ広場にあった。

6 サン＝ジャコモ通りは、今世紀はじめのナポリ中心部改造以前に、トレド街をのぼった左手にあった。出版物閲覧所の所有者はペッロという人だったようだ。

7 リュリエールは一七八八年に次のような表題をもつ二巻の本を出版している。『ナントの勅令廃止の原因とフランスにおけるプロテスタントの立場に関する歴史的解明』

座談（コンベルサッイオーニ）に似ていないものはなかった。ブルジョワ階級のなかでは、ある種の密告志願者がいて、みんなを縮みあがらせている。コルソに出版屋のクラカスの出版物閲覧所がある。[5] そこでわれわれは待ちあわせをしたものだった。しかし友人のローマの人たちは、『ルガーノ新聞』や『立憲新聞』を読みたくてうずうずしているのに、思いきって読んでみることはしなかった。政府はこの施設を許可している。政府がこれを勧めたとさえ言われている。しかし、教えられて気がついたのだが、ある連中はせっせとやってきては、好機が到来したら公表しようと、ここにくる人物を書きとめている。わたしは夕方あるローマ市民が新聞をとりにやっているのを見た。召使が遠い街にとりに行き、そしてファビウスの子孫は自分の計略が露見しないように細心の注意を払っていた。

ナポリにもサン＝ジャコモ通り出版物閲覧所がある。[6] しかし、タッデーイ神父が地方新聞を発行していて、月に三度、われわれフランス人が皆マラやロベスピエールの徒であることを証明している。彼は『論争新聞』をそしっているが、この新聞に彼があまりに自由主義的だと週に四回も圧力をかけられ、この抗議に気を悪くしたと言われている。

前述の神父が『ローザンヌ新聞』の入ってくるのを見すごしていることは事実だ。わたしが本屋でどんな本を見たかは言う必要がない。そこには『死にそなえて』が山積みになっている。ナポリの三十四万の住民のなかには、ガリアーニ神父と同じくらい力強い三十人の思想家がいるかもしれない。しかし彼らにはチリッロの最期が忘れられないのだ。

(一) リュリエール著『ナントの勅令廃止の歴史』を見られたし。[7]

(二) 一七四〇年、ド・ブロスやアルバーニ枢機卿の時代のもののような。

(三) 英国人が自由で金持なのは、彼らが莫大な献納金を払っているからではない。彼らがある程度まで自由であるから、彼らは金持であり、彼らが金持だから、莫大な献納金を払うことができる。彼らが莫大な

額を支払うのは、彼らが充分に自由ではないからであり、莫大な額を支払うから、彼らはまもなく自由でも金持でもなくなる。（『モンテスキューの「法の精神」註解』二十六ページ。一八一七年リエージュ刊）[1]

(四) ギナン＝ローランス氏の『一八一四年末頃のローマ風景』一八一六年ブリュッセル刊、参照。[2]

わたしにはもう二つの考えしかない。――わたしはイタリアに対する厳しい表現を削除しよう。このとき、わたしは『フランス人嫌い』と、文芸新聞がシミオティグレの国民に対し惜しげもなく繰り出す罵言を思い出した。[3]

この小冊子のなかでは、すべての名前は変えられ、日付は誰も捲きぞえにしないようにでたらめにしてある。

機械が壊されたトロワのテセール氏の工場は、以前にもまして立派に再建され、今では八百人の労働者に仕事を与えていることを知る。こうして、この美しいフランスの土地は、王たちのなかでももっとも賢明な方の保護のもとに、専制政治の数々の気ちがい沙汰を呼吸しながら、幸福への道を突っ走っている。フランスは近隣諸国を驚かしている。まもなく繁栄では英国を追い越すだろう。三十年前から、われわれは栄誉と憲法を手に入れている。英国は負債を背負い、その人身保護令（ハベアス・コルパス）を失った。わが国の君主のゆるぎなさに由来する数々の法律のうちの、たった一つでも、英国の転落を止めることになるだろう。英国は革命の深淵に向かって急速に進んでいる。[4]

1　トラシーの『モンテスキューの「法の精神」注解』は、一八〇六年から書きはじめられた。トラシーはこれを第三代アメリカ大統領トマス・ジェファーソンに贈り、大統領は一八一一年英語の翻訳を出版した。フランス語本は一八一七年に出版された。トラシーは一八一七年九月四日、本（『絵画史』）をもらった返礼にスタンダールを滞在のホテルにたずねるが、その二日後再び来て出版されたばかりのこの本をスタンダールに贈った。スタンダールはこの本に自分の政治的信条を発見した。

2　ギナン・ローランスはオランダの大臣ユーハン・ゴットハルド・ラインホルッドの筆名。スタンダールはこの当時にはまだこの本について何も知らなかったと思われる。

3　アルフィエーリの『自伝』によると、一七九二年八月彼がパリを出ようとした時それを邪魔した連中を、彼は「シミオティグレ」と呼んだ。シミオティグレとは半虎半猿の意味である。この混合した動物は大いに流行した。

4　スタンダールはブッチ本でこの最後の一節に斜線を引いて、欄外に「パスポート」と書いている。すなわち、検閲でひっかからないための手だてに書いた文章だというのである。